北欧文化圏に伝承される超自然的存在“トロル”像の変遷
――ノルウェーとアイスランドの民間説話を中心に――

国際地域文化論専攻（ヨーロッパ文化論講座）
B0KM1002　粉川　光葉

伝承文芸は常に変化しながら生成しており、物語の語られている各時代あるいは各地域の社会的、地理的、経済的、宗教的背景などの影響を受けながら、それらの積み重なりによって形成されてきたものである。これらの伝承文芸の性質を考慮するなら、伝承文芸、特に民間説話を研究することで、物語が育まれてきた地域の世界観・自然観を浮かび上がらせることができると考えられる。そのために本論文では、北欧文化圏に伝承される超自然的存在の中でも、最も中心的な役割を担い続けてきた「トロル (troll)」を定点とし、その変遷を検討していくことにする。まずノルウェーとアイスランドの民間説話を資料体としてトロル像の記述的分析をし、次いで、その変遷を両国における宗教、社会制度、自然観といった観点から明らかにすることを目的とする。

「北欧諸国」（本論文ではノルウェー、アイスランド、デンマーク、スウェーデンの 4 カ国を「北欧諸国」と総称する）には、「トロル」という名を持つ超自然的存在が登場する昔話、伝説などが多く残されているが、その詳細は起源や語源も含め、明らかにされていない。本来「トロル」という語は、北欧神話（『古エッダ』 ca.800-1300,『新エッダ』 ca.1220-40）において、一般的に巨人族の名称の一つとして用いられていた。しかし、現在のトロル像は、巨人、小人、妖精など様々な姿かたち・属性を有しており、必ずしも一つのイメージに還元されず、北欧諸国間でもトロル像の差異がみられ、その統一的な全体像を捉えることは容易ではない。

曖昧な点が多くみられるトロルだが、北欧諸国の法典 (ca. 800-1300) の中にも「トロル」という名が見られ、他方では、雪崩を引き起こす原因としても考えられており、アニミズム的な側面も持っている。このように、トロルは、北欧神話の登場人物としての「トロル」という狭義の地位にとどまらず、北欧の世界観を構成する主要な要素の一つとして、時間・空間を超えて北欧各地域の伝承文芸に遍在している。したがって、トロル像の変遷を検討することは、北欧の世界観・自然観とその変化を考察する重要な手掛かりの一つとなりえるだろう。

トロルの伝承範囲は、北欧諸国と、そこにスウェーデン＝フィンランド、オークニー諸島、シェトランド諸島を加えた「北欧文化圏」である。その北欧文化圏の中でも、歴史的観点から、ノルウェー、アイスランドの 2 カ国は古来から共通のトロル像を持っていたと判断でき、比較を行う前提条件が揃えられる。したがって、本論文では、その中でも歴史的に密接な関係を有し、北欧文化圏の古来の人々が有していた世界観の共通性の度合いが高いと考えられるノルウェーとアイスランドの 2 カ国に研究対象地域を限定する。

先行研究として、北欧神話の時代から民間説話に至るノルウェーのトロル像変遷の問題を扱ったヴィルジニー・アミリアン Virginie Amilien の研究 (1996) を主として参照するが、アミリアンが研究対象から除外した魔法昔話に分類される物語以外のものも分析対象にいれると同時に、先行研究で扱われてこなかったアイスランドを研究対象地域に加える。

本論文では、19世紀に収集されたノルウェーとアイスランドの民間説話、即ち昔話と伝説を研究対象として、トロル像の変遷を両国の民間説話に基づいて跡付けていく。その記述的研究の後、トロル像の通時的変遷の様態と、ノルウェー、アイスランドの宗教的背景、社会制度、自然観などとの関連が見出されるのかどうかを検討していく。

本論文は 2 章構成であり、第 1 章は 4 節、第 2 章は 3 節からなる。

＜第 1 章　民間説話にあらわれるトロル像＞では、ノルウェー、アイスランド民間説話において、トロルがどのように描かれているのかを記述的分析に基づき検討する。**第 1 節「民間説話におけるトロル像の同定とその分析方法」**では、民間説話におけるトロル像の同定とその分析方法を定める。本論文では、民間説話に登場するトロルを研究対象としているため、「トロル」であるとする判断基準を統一し、明確にする必要がある。そのため、この節では、はじめに民間説話に登場する超自然的存在を「トロル」とみなす判断基準を設定する。また、それらの基準で選別した物語に現れるトロル像を、 (a) 名称と外形、 (b) 出現の仕方、 (c) 住居、の 3 つの観点から分析を行う。さらに、これら 3 項目に加え、トロル像をみるさいに重要となる、トロルの「性別 」、「主人公との関係 (属性) 」、「死に方・追い払われ方」にも注目し、分析・分類を行う。

以上の分析方法を用い、**第 2 節「ノルウェー民間説話におけるトロル像の特性とその分類 」**、**第 3 節「アイスランド民間説話におけるトロル像の特性とその分類」**にてノルウェー、アイスランド民間説話に登場するトロル像の特性とその分類をそれぞれの節で行う。各節では、まず物語内で、語り手によって付与されるトロルの呼称 (「トロル」という固有名称以外) に注目する。ノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロルへの呼称の

付与は、どちらの民間説話にみられる現象であるが、その呼称の付与が如何なる要因に由来するのかを確認する。次いで、第 1 節で設定したトロルと「主人公との関係 (属性) 」に焦点を当て、トロルの属性を「敵対者」と「助力者」の 2 つに大別し、それぞれのトロルが物語のなかでどのように描写されているのかに留意しながら分析を行っていくことにする。この分析によって、ノルウェー、アイスランド民間説話のそれぞれにみられるトロル像の差異を明確化する。また、**第 4 節「ノルウェー、アイスランド民間説話でのトロル像の進展」**では、アウルマン・ヤーコブスソン Ármann Jakobsson が論文 (2004) において提示している、アイスランドの12，13世紀以降に独特の発達を見た散文物語であるサガおける「トロル」という語の13の使用法を参照し、民間説話におけるトロル像の変貌を確認する。トロルを含めた超自然的存在は、神話やサガといった古ノルド語のテクストの本質的要素を担っている。したがって、神話やサガにおけるトロル像と民間説話におけるトロル像を比較し、共通点と差異を見いだすことで、古来より伝わるトロル像の様相がより明確になると推測できる。その作業仮説にたち、この節では、このアウルマンが分類した「トロル」という語の13の使用法を参照し、それに基づき、第 2 節、第 3 節でみたノルウェー、アイスランド民間説話に登場するトロル像の展望を行う。

以上のトロル像の記述的分析に基づき、**< 第 2 章　ノルウェー、アイスランド民間説話にみられる世界観―宗教・社会制度・自然― >** では、ノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像の変遷を検討していく。多くの研究者はノルウェー、アイスランド双方の民間説話に登場するトロルに古来の信仰の内包を指摘する。とはいえ、それらトロルに残存する古来の信仰とは、ノルウェーとアイスランドに共通のものであるか否か、それが両国のトロル像にどのように現れているかについて詳細な議論はなされていない。その点を明確にすることで、ノルウェーとアイスランドにおいて展開してきたそれぞれの世界観の重要な諸側面を把握することができると考えられる。そこで、**第 1 節「ノルウェー、アイスランドの宗教的背景とトロル像変遷の関係」**では、民間説話におけるトロル像の描写を通じて、ノルウェー、アイスランド両国の世界観を展望するために、はじめに、両国におけるキリスト教への改宗の過程を確認し、民間説話において、古来から伝えられているトロルと、後から流入してきたキリスト教信仰との間にどのような関係が見られるのかを検討する。宗教的背景から、一方でトロルと他の超自然的存在との混同を跡づけ、他方でトロル像における古来の信仰とキリスト教の要素の併存を明らかにする。次いで、**第 2 節「ノルウェー、アイスランドの社会制度とトロル像変遷の関係」**では、第 1 章の記述的分

析より明らかにした、アイスランド民間説話における人間とトロルとの境界線の問題に注目し、“追放制度” skoggang という社会制度の観点から考察を行う。追放者が人間ならざるものとなり、人間の住んでいない場所、主として洞窟に向かっていくという空想的および社会的事象と、トロル像形成との関係性について論じていく。最後に、**第 3 節「ノルウェー、アイスランド民間説話に見られる世界観－自然が形作るトロル像－」**では、この章の第 1 節、第 2 節で行う分析を基に、ノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像に、両国の民衆が培うことになる各々の自然観がどのように作用し、変遷に関わってくるのかを検討する。この節では、北欧諸国で展開されていた、世界を「内側」 Ásgarðr / Miðgarðr 「外側」Útgarðrの二つの部分に分ける世界観に注目し、ノルウェー、アイスランド民間説話においても、その北欧に共通する世界観がどのように反映されているのかを、トロルの住処に注目しながら検討していく。

本論文では、以上の分析方法で、トロル像の変遷を明らかにしていくことで、次のことを示すことができたと考える。

まずノルウェー、アイスランド民間説話の双方に登場するトロル像は、ノルウェーでは民衆の純粋に想像力に基づく進展の側面が大きいのに対し、アイスランドではごく日常的な経験的な事象に基づいて形成されている側面が大きいと言えるだろう。ノルウェーとアイスランドにおいては古来の信仰からキリスト教への改宗の過程は非常に異なり、土着的な形でキリスト教および教会を発展させていくことになったアイスランドは、改宗が宣言された後も古来の信仰に基づく慣行が法によって約束された。他方、王による圧制が行われ、新たな信仰への急激で強制的な転換を求められたノルウェーではキリスト教という宗教の下では維持しえなかった古来の慣行が持続され、それらの事象に起因する特徴がトロル像の中に取り込まれていったと考えられる。したがって、ノルウェー民間説話のトロル像からは払拭されてしまった、古来の信仰にみられる“伝統的”な特徴がアイスランド民間説話のトロル像には保持されている。しかしその一方で、もともと無人島であったアイスランドは植民 (ca. 870-930) によって成立した共同体であり、植民をした人々が自ら切り開いていった場所である。そのため、北欧諸国で展開されていた「内側」 / 「外側」の世界観は維持されにくく、ノルウェーではキリスト教への改宗が行われた後でさえも存在しえた「内側」 / 「外側」の地理的・精神的概念も、アイスランド民間説話においては不明瞭になってしまったこと、またそれに伴い人間とトロルの区別に曖昧性が見られるようになったことが結論付けられる。

平成 24 年度（2012 年）修士論文

北欧文化圏に伝承される超自然的存在“トロル”像の変遷

――ノルウェーとアイスランドの民間説話を中心に――

国際文化研究科

国際地域文化論専攻　（ヨーロッパ文化論講座）

B0KM1002　粉川　光葉

目次

序論 1

第 1 節　研究の目的 1

第 2 節　用語の定義と先行研究 3

第 3 節　諸前提：研究対象とする地域・資料・時代 9

第 1 章　民間説話にあらわれるトロル像 19

第 1 節　民間説話におけるトロル像の同定とその分析方法 19

第 2 節　ノルウェー民間説話におけるトロル像の特性とその分類 21

第 3 節　アイスランド民間説話におけるトロル像の特性とその分類 36

第 4 節　ノルウェー、アイスランド民間説話でのトロル像の進展 52

小括 63

第 2 章　ノルウェー、アイスランド民間説話にみられる世界観
— 宗教・社会制度・自然 — 66

第 1 節　ノルウェー、アイスランドの宗教的背景とトロル像変遷の関係 66

第 2 節　ノルウェー、アイスランドの社会制度とトロル像変遷の関係 77

第 3 節　ノルウェー、アイスランド民間説話に見られる世界観
－自然が形作るトロル像－ 83

小括 91

結論 94

書誌 97

補遺 105

資料 1 (ノルウェー) 107
AM 107-152, FN 153-161, SL 162-168, SS 169-170.

資料 2 (アイスランド) 171
J 171-201, TH 202-205, F 206-209, MI 210-212.

序　論

第 1 節　研究の目的

伝承文芸は、古くから現在まで神話、昔話、伝説、民謡など様々な形で伝えられている。伝承文芸の多くは、今でこそ文字化され、一つの読み物として親しまれているが、実際は、身分の違いに関係なく人間の生活に密着し、人々が口から口へ語り継いできた生きた文学である[1]。それゆえ、伝承文芸は常に変化に富んでおり、物語の語られている各時代あるいは各地域の社会的、地理的、経済的、宗教的背景などの影響を受けながら積み重なりによって形成されてきたものである。こうした伝承文芸の性質から、伝承文芸、特に民間説話を研究することで、物語が育まれてきた地域の世界観を浮かび上がらせることができると考えられる。そこで本論文では、北欧文化圏[2]の世界観を展望するため、北欧文化圏で伝承されており、民間説話に遍在している超自然的存在である「トロル」を研究対象とし、トロル像が変遷してきた要因を考察する。また、その変遷を、歴史的に密接に関係しあっているノルウェーとアイスランドの民間説話を通じて観察する。

「北欧諸国[3]」には、「トロル (troll[4])」という名を持つ超自然的存在が登場する昔話、伝説などが多く残されているが、その詳細は起源や語源も含め、明らかにされていない[5]。本来「トロル」という語は、北欧神話において、一般的に巨人族の名称の一つとし

---

[1] 一方で、伝承文芸は口承と書承を厳密に区別することは不可能である。なぜなら、互いは密接に絡み合っており、書から派生し口で語られ始めた物語もあれば、他方で、口で語られていた物語が文字として書き下ろされ読み継がれるなどお互いに影響し合っているからである。スティス・トンプソン Stith Thompson によれば、口承と書承はその機能するところは相異なるが、筋立ての独創性、及び作者あるいは語り手であることの栄光を全く顧みないという点において共通しており、双方が密接に関係している事実を了解しているならば、区別することは必要ないとしている(Cf. Stith Thompson, *The Folktale* [1946], University of California Press, 1977 (Reprinted), pp. 3-10)。

[2] 「北欧文化圏」および「北欧諸国」の詳しい地域設定については、序論第 3 節を参照。

[3] ここでは、ノルウェー、アイスランド、スウェーデン、デンマークの 4 か国を指す。(脚注 2 を参照)

[4] 原語である古ノルド語では troll / trǫll だが、ノルウェー語 (bokmål) ・新ノルウェー語 (nynorsk): troll 、ラップランド語： triölla 、アイスランド語： tröll 、古アイスランド語： trøll 、スウェーデン語： troll 、古スウェーデン語： trull 、デンマーク語： trold 、オークニー諸島： trow 、シェトランド諸島： troll とそれぞれ表記されている(Cf. Jan De Vries, *Altnordisches Etymologisches Wörterbuch* [1957-60], E. J. Brill, Leiden, Netherlands, 1977, s. 598-599)。

[5] トロルの原義は、「太った男」とする説がある一方で、他方で「廻転する」というがあることから「毬のように転がってくる魔物」とする説も存在する (山室静、「イギリ

て用いられていた[6]。しかし、現在のトロル像は、巨人、小人、妖精など様々な姿かたち・属性を有しており、必ずしも一つのイメージに還元されえない[7]。さらに、北欧諸国間でもトロル像の差異がみられ、その統一的な全体像を捉えることは容易ではない。この歴史的・宗教的背景に由来すると考えられるトロル像の地域差は、それに加え、トロルの住処や登場する場所は、各国の地理的条件と密接に関係しているだろう。

曖昧な点が多くみられるトロルだが、13世紀のノルウェーの法典の中には、ラップランドに住む少数民族であるサーミの女性を女トロルとみなしていたことを明示しているものが存在している[8]。また、他方でトロルは、雪崩を引き起こす原因としても考えられており、アニミズム的な側面も持っている。このように、トロルは、北欧神話の登場人物としての「トロル」という狭義の地位にとどまらず、北欧の世界観を構成する主要な要素の一つとして、時間・空間を超えて北欧各地域の伝承文芸に遍在している。したがって、トロル像の変遷を検討することは、北欧の世界観とその変化を考察する重要な手掛かりの一つとなりえるだろう。

以上の推測に基づき、本論文では、トロル像の変遷を、ノルウェーとアイスランドの民間説話を資料体とすることで跡付けていき、次いで、そのトロル像の変遷がいかに両国における宗教的背景、社会制度、自然観と関連しているのかについて明らかにし、世界観を展望することを目的とする。確かに、民間説話に登場する超自然的存在のトロル像に着目することで、それらトロル像の変遷に関係する要素を導き出せるのかという反論が出る可能性がある。しかしながら、超自然的存在であるトロルのイメージは、他の物語、そして歴史的、地理的、経済的、社会的なさまざまな変化に影響されて、大幅に進展したもので

ス・ドイツ・北欧諸国の妖怪・精霊・魔神」、『四次元の幻境にキミを誘う　妖怪魔神精霊の世界』、自由国民社、1979年、176-177頁参照）。

[6] 北欧神話において、巨人族は「ヨゥトゥン (jötunn)」、「スルス (þurs)」、「トロル」などの呼称を持っている。「ヨゥトゥン」の語源は、グリムの古典的解釈によれば、アングロサクソン語の「eoton」あるいは「eten」であり、「食べる」という動詞を意味する古ノルド語の「eta」に見ることができ、「大食漢」という意である。また他方で、「スルス」は「飢え乾いた」と「酩酊した」という意である。さらに、この二者の根源的意味をカニバリズムと指摘する研究者もいる。しかしながら、ヤン・デ・フリースは、彼らが持つ大食漢およびカニバリズム的な特性は後付されたものであると反論している。それに加えて、デ・フリースは「ヨゥトゥン」は原存在者としての巨人族であり、「スルス」と「トロル」は特別悪魔的存在としての巨人族であると三者を区別している（尾崎和彦、『北欧神話・宇宙論の基礎構造―『巫女の予言』の秘文を解く』、明治大学人文科学研究所叢書、白凰社、1994年、512-513頁参照）。

[7] Virginie Amilien, *Le Troll et autres créatures surnaturelles*, Berg International Éditeurs, 1996, pp.18-19.

[8] Cf. John Mckinnell, *Meeting the other in Norse myth and legend*, D. S. Brewer, Cambridge, 2005, p. 45（ジョン・マッキネル、「原典資料」、伊藤盡訳（山本充編、『ユリイカ』10月号第39巻第12号（通巻 541 号）、青土社、2007年所収）、115 頁参照).

あるため[9]、トロルが保持するいくつかの性格の層を分析することで変遷の要因を遡ることは可能であると考えられる。加えて、ノルウェーとアイスランドの民間説話の内容それ自体を分析するのではなく、民間説話に登場する超自然的存在に着目する妥当性として、先に述べたようにその遍在性があげられる。ヨーロッパの北に位置するノルウェーとアイスランドは、他のヨーロッパ諸国に比べて物語の輸入および輸出の頻度は比較的低いことは確かであるが、少なからず他国(地域)の物語の影響を受けている。そのため、ノルウェーとアイスランドで採集された話の中にも、他国で採集された話と酷似するもの、即ち「類話」が存在する。しかし、伝播してきた多くの物語の影響を受けながらも、あるいはそれぞれの国で伝承される物語が相互に影響を与えながらも、ノルウェーとアイスランドにおいて「トロル」という存在は、新たなイメージを蓄積しつつも現在まで保存され得た。つまり、語り継がれてきた背景にある世界観が、トロルの持つイメージそれ自体の上に幾層にも積み重ねられていると考えられる。よって本論文では、北欧文化圏の中でも、密接な歴史的関係を持ち、さらに分析する際の前提条件[10]を揃えることができるノルウェーとアイスランドを研究対象とし、超自然的存在トロル像をノルウェーとアイスランドの民間説話双方から観ることで、トロル像が変遷した要因を探っていく。

第 2 節　用語の定義と先行研究

1.　用語の定義

本論文では、ノルウェーとアイスランドの民間説話を通してトロル像の変遷を見ていくため、その際に使用するいくつかの用語の定義をここで行う[11]。

はじめに「民間説話 folktale[12]」とは口承 oral tradition で語り継がれてきた物語、つまり口

---

[9] Cf. Amilien1996, p. 264.

[10] 序論第 3 節 1. を参照。

[11] 用語の定義については、Thompson1946, pp. 7-10、稲田浩二編代、『日本昔話事典』、弘文堂、1972 年、稲田浩二編代、『世界昔話ハンドブック』、三省堂、2004 年、290-294 頁を主として参照した。またサガについては、谷口幸男、『エッダとサガ　－北欧古典への案内－』、新潮選書、1976 年を参照した。

[12] 現代ノルウェー語：folkeventyr(しばしばeventyr)、現代アイスランド語: þjóðsaga / ævintýr に相当する。しかしながら、英語 folktale あるいは fairy tale に相当する言葉は、ノルウェー語、アイスランド語も含む他の言語(例：ドイツ語 Märchen、フランス語 conte populaire、

承文芸 oral literature の 1 部門である[13]。この語は、民間において長年にわたって口承、書承で伝承されたあらゆる形式の散文体のことを指し、特に“話の伝承性”が重視される。そのため、口承文芸の一部門である民間説話には、昔話、伝説 legend、世間話 gossip などが分類される。

「昔話」の英訳として、しばしばfolktaleが用いられるが、folktaleは「昔話」が意味する範囲よりも広く、完全には一致しない。昔話は、主に口承を基本的な伝承の様式として持ち[14]、一定の型を備えた散文の物語であり、発端句や結末句を用いるなど、話の様式性や架空のもの、不思議な出来事を物語るなどの虚構性[15]を重視する特徴を有する。次に、伝説について定義する。「伝説」は、昔話と同様に民間で伝承されてきた散文形式の物語という点で共通するが、伝説は虚構性を排除し、具体的な(歴史的)事物に直接結びついて、真実と信じられてきた言い伝えである。そのため、伝説は特定の時代、人物、地域と結合しており、昔話の一般的、不確定な時代、人物、地域を擁する性格とは異なる。しかしながら、伝説は語り継がれる間に誇張され、虚構性を含有することもあるため、昔話と伝説を厳密に区別することは困難である[16]。そのため、本論文では「昔話」と「伝説」を指す語として「民間説話」を使用する。

他方で、天地の創造、生命や人類、民俗の起源などを説明する話や、神々の活躍する話の総称[17]として用いられる「神話 myth /mythology[18]」は、韻文(詩)形式と散文形式、ま

スウェーデン語 saga、ロシア語 skazka など)にも存在するが、全て漠然とした意味で使用されており、状況に応じて示す意味が異なる (Cf. Thompson1946, pp.21-23)。

[13] 他にも、例えば、民謡、ことわざ、なぞなぞも口承文芸に分類される部門である。

[14] 脚注 1 で述べたように、口承と書承の区別は困難であるため、日本語の「昔話」という学術語として定義をある程度確立させた柳田国男によれば、口承が基本的な様式を持つという説明に次のような補足をしている。昔話は、たとえ、話が文献記録に発し、またはそれを経由して伝承されたものであっても、文芸としては口承によって最終的に成立しているものを指す(「昔話」、稲田浩二執筆、稲田1972、917-918頁参照)。

[15] 虚構性を含む物語の場合は、folktale ではなく wonder tale あるいは fairy tale という語が用いられる。

[16] 例えば、ノルウェーの民間説話の中に、実際に存在していた人物、出来事、地域が舞台となり、物語の途中に虚構性をもつ“挿話(小話)”が見られる場合がある(例として、資料 1: Asbjørnsen og Moe 36, 65 番参照)。即ち、物語の中に伝説と昔話の両性格を含有している。

[17] 神話の定義は大きく分けて広義のものと狭義のものの二つある。広義の意は、宇宙・自然・人事などの起源・由来を、超自然的霊格によるものと説明した信仰的な物語であり、また口承が原則であるが、半ば信仰性を失い、半ば文芸化した記録も含める、というものである。他方、狭義の意は、超自然的霊格が主役となり、その原古における神聖な行為とともに、その行為によって現在の存在や秩序が始まったことが語られる物語であり、口承の物語であるが、しばしば儀礼を伴う、というものである。本論文では、どちらの定義の

た文字に記録されて伝えられた書承と、文字によらない口承のものに大別される。従って、民間において口承で伝えられてきた散文形式をとる神話は、昔話として認められるものも存在する。しかしながら、散文形式をとり、書承・口承を厳密に区別できない「口承文芸」と異なるため、口承文芸に分類され得ない。これらの事情から、本論文では、民間説話を主として扱うが、トロルが神話においても、昔話および伝説においても存在するという事実を鑑み、「口承文芸」という語ではなく、神話、昔話、伝説を全て包括する「伝承文芸」という語を使用する。

最後に、アイスランド[19] の「サガ saga 」という語であるが、サガは厳密な意味での歴史的な記録ではなく、書き手の創意からなる虚構性が含まれており、歴史的な作品として捉えられ[20] 、12，13世紀以降に独特の発達を見た散文物語である。サガは大きく「宗教的学問的サガ」「王のサガ」「アイスランド人のサガ」「伝説的サガ」の四つに分類される。ノルウェーとアイスランドの多くの民間説話とは異なり、早い時期に文字にされたが、サガの中には物語が文字化される前の歴史的出来事について語っているものもあり、さらにサガの内容を含む民間説話がみられ、伝承性が含まれているという理由から、本論文では、サガも「伝承文芸」の中に含め、資料体として使用する。

2. 先行研究

北欧文学、とりわけ北欧神話が研究の対象として扱われ始めたのは、18世紀頃からである。その時代において、特に重要な研究者として、ドイツのメルヒェン研究者としても知られる、グリム兄弟ーヤーコプ・グリムJacob Grimm (1785-1863)、ヴィルヘルム・グリム Wilhelm Grimm (1786-1859) が挙げられる。

グリム兄弟の間には、研究方向には相違がみられたが、彼らは共にゲルマン民族の原郷

立場をとるのかは直接論に関係しないため、両定義をまたぐ「天地の創造、生命や人類、民族の起源などを説明する話や、神々の活躍する話の総称」とした (「神話」、松前健執筆、稲田1972、475-477頁参照)。

[18] 現代ノルウェー語:myte / mytologi、現代アイスランド語 :goðsögn / goðsagnir.

[19] サガ文学はアイスランドで花開いたが、その内容はノルウェーをはじめ、その他スウェーデンやデンマークなど、舞台はアイスランドに留まらない。

[20] サガの中には、歴史 History か作品 fiction かどうかについて議論されているものが存在する (Cf. Ármann Jakobsson, ‘History of the trolls? Bárðar saga as an historical narrative’, *Saga-book*, 25/1, The Viking society for northern research, 1998, pp.53-60) 。

を探るべく北欧文学の研究を行っていた[21]。彼らはトロルという存在について、研究のなかで大きく取り上げていないが、ヤーコプは『ドイツ神話』 *Deutsche Mythologie* (1835年)[22]の第14章「巨人 riesen」に、「トロルTröll」という項目を設け、「トロル」という語が持つ意味について簡単に述べている。その項においてヤーコプは、「トロル」という語は、確かに頻繁に巨人として用いられるが、それは一般的な表現法であって、「トロル」という語は妖精、魔法使いの性質を有しており、また怪物に相当する、と述べている[23]。ヤーコプによるこの説明は、現在用いられているトロルの概要と大差ないものとなっている[24]。例として、日本における北欧文学、特に神話、昔話研究の代表者の一人である山室静は、「トロル」を次のように説明している。「トロルは巨人の一種で、しかも巨人よりも醜怪な姿に想像されている。しかし、キリスト教が支配的になって以来、巨人がめっきり矮小化され、図体は大きくとも子どもに容易にだまされる愚か者となったように、トロルも矮小化されて小人に近いものとなり、巨人、トロル、小人、妖精などが、しばしば混同される。」[25] この山室の説明は1979年のものであるが、1835年にヤーコプによってされた説明から大きく変化していない[26]。

またアウルマン・ヤーコブスソン Ármann Jakobsson が14世紀において人間とトロルとの境界線は決して明確なものではなかったと論文 (1998)[27] の中で指摘している。また、他の論文[28] において、アウルマンはサガにおける“トロル”という語の使用法を分析し、分類

---

[21] ヤーコプは言葉の研究と並行し、神話、古代文学、民俗などの史的研究を専門とし、ヴィルヘルムは文学、とくに中世文学と民衆文学の研究を中心としていた(谷口幸男、「ヴィルヘルム・グリムの北欧研究について」、『広島大学文学部紀要』第45巻、1986年、351頁参照)。

[22] Jacob Grimm, *Deutsche Mythologie* [1835], Keip Verlag frankfurt / Main, 1985.

[23] Cf. Grimm1985, s. 302.

[24] 他方で、神話における図肖論、記号論を専門にしているドイツのマンフレッド・ルーカー Manfred Lurker (1928-1990) の『神々と悪魔(魔)の事典』 *Lexikon der Götter und Dämonen* (1984年)によれば、(古来北欧の“怪物”Unhold である)トロルは、スカンディナビアの民間信仰において、男あるいは女悪魔 Dämon で、また巨人化、小人化し得る、さらに彼らの魔術的な力は夜にのみ発揮されるため、昼間を恐れている存在であるとしている(Cf. Manfred Lurker, *Lexikon der Götter und Dämonen : Namen, Funktionen, Symbole / Attribute*, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1984, S. 321)。

[25] 山室1979年、163-212頁参照。

[26] ヤーコプのこの記述を引用して、ハル大学 University of Hull のマーティン・アーノルド Martin Arnold が ‘Hvat er troll nema þat? : The Cultural History of the Troll’ という論文を出している(Tom Shippey, *The Shadow-Walkers: JACOB GRIMM'S MYTHOLOGY Of THE MONSTROUS*, Arizona Board of Regents for Arizona State University and Brepols Publishers, n.v., Turnhout,Belgium, 2005 所収)。

[27] Ármann Jakobsson, ‘History of the trolls? Bárðar saga as an historical narrative’, *Saga-book*, 25/1, The Viking society for northern research, 1998, pp.53-71.

[28] Ármann Jakobsson, ‘The Trollish Acts of Þorgrímr the Witch: The Meanings of *Troll* and *Ergi* in Medieval Iceland’, *Saga-book*, 32, The Viking society for northern research, 2008, pp. 39-67.

を行っている。しかし、アウルマンは、サガにおけるトロル像に焦点を当てているため、民間説話におけるトロルは研究対象から外している。

北欧神話の時代から、伝承されているトロルを研究対象とした最初の論文は、エリザベート・ハルトマン Elisabeth Hartmann の『スカンディナヴィアの伝説と昔話におけるトロル像』 *Die Trollvorstellungen in den Sagen und Märchen der skandinavischen Völker* (1936 年) [29] である。ハルトマンは、研究地域をデンマーク、スウェーデン (東北欧[30]) 、ノルウェー (西北欧) に設定しており、アイスランド、フェロー諸島、フィンランドは研究地域から除外している。ハルトマンは、資料体に伝説と昔話を取り上げ、伝説に登場するトロル、昔話に登場するトロルを区別し、それぞれの特徴を考察した。その際に、東北欧の伝説において、トロルが深く関係している「取り換え子」と 「(子どもの）誘拐」の類話に注目している。他方、昔話に登場するトロルを敵対者と助力者としての題材とみなしている。ハルトマンは、伝説と昔話に登場するトロルは、「巨大な図体 」、 「山に住んでいる 」、 「人と敵対している」という共通点はあるが、スカンディナヴィアのトロルによる「取り換え子」・「誘拐」の伝説は昔話とは異なり、実際の感情的な実体験に由来していると結論付けている[31] 。しかしながら、ハルトマンはトロル像の分析を西北欧と東北欧で異なった視点から考察し、特に東北欧にみられるトロル像分析に重点を置いている。このようにハルトマンは特定のテーマを設定し、その中でみられるトロル像の考察を行っており、北欧神話の時代から民間説話にかけてのトロル像変遷の問題を扱うまでには至っていない。

この問題に初めて取り組んだのが、ヴィルジニー・アミリアン Virginie Amilien の『トロルと他の超自然的存在』 *Le Troll et autres créatures surnaturelles* (1996 年) [32] である。アミリアンはこの中で、ノルウェーにおけるトロル像の構造・通観史、トロルの容姿の象徴的意味と連想について論じており、主として 4 つの視点からトロル像を考察している。一つ目に、トロルの世界とキリスト教の死者の世界の関係を、トロルの世界と死者の世界の両領域の共通点をあげ分析を行っている。二つ目に、「キリスト教改宗」[33] によって、トロル

---

[29] Elisabeth Hartmann, *Die Trollvorstellungen in den Sagen und Märchen der skandinavischen Völker*, Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart & Berlin, 1936, (Tübinger germanistische Arbeiten 22).

[30] ハルトマンは論文の中ではこの 2 国を東北欧、ノルウェーを西北欧と称し、東北欧のトロル像 OstnordischeTrollvorstellung 、西北欧 (ノルウェー) のトロル像 Westnordische (norwegische) Trollvorstellungと区別して論じている。

[31] Cf. Hartmann1936, S. 143-144.

[32] Virginie Amilien , *Le Troll et autres créatures surnaturelles*, Berg International Éditeurs, 1996.

[33] キリスト教への改宗は、アイスランドは1000年に行われた全島民会でキリスト教への改宗が宣言されている。しかしながら、その宣言は同時にそれまで信仰されてきた古来北

が悪魔のイメージと同化した問題をあげ、民間説話における聖書、特に聖ヨハネの黙示録からの影響を論じている。三つ目に、古代北欧の死、魂、運命の概念の関係から、超自然的存在のイメージを分析することによって、トロルの象徴的特性を考察し、トロルは運命の具現化であると述べている。四つ目に、トロル独特の特性を特定することが可能かどうか考察している[34]。

しかしながら、アミリアンは、論文の序論で述べているように、研究対象として取り上げた資料体は“魔法昔話”のみであり[35]、魔法昔話以外に登場するトロルを除外している。確かに、トロルが登場する物語は、トロルが魔法的な力を保持し、敵対者あるいは助力者という属性を持っていることに起因し、魔法昔話に分類されることが最も多い。とはいえ、魔法昔話に分類される話型以外にもトロルが登場する事実は無視できない。さらに言えば、魔法昔話という枠組みを作成し、物語を分類したのは後代の研究者であり[36]、物語の語り

欧の信仰を続けても構わないというものである。他方ノルウェーは、アイスランドのようにキリスト教への改宗の宣言は行われておらず、ノルウェーにおけるキリスト教への改宗はもっぱら 890 年からの歴代ノルウェー国王の圧制によるものであり、1000 年ごろにはキリスト教が定着したと考えられている（谷口幸男、「北欧のキリスト教改宗について」、『大阪学院大学　国際学論集〈論説〉』第 9 巻第 2 号、1998 年、52-61 頁参照）。詳しくは第 2 章第 1 節で論じる。

[34] アミリアンの後、クヌート・アウクルスト Knut Aukrust は『トロル、教会と聖オーラヴ』«Troll, kirker og St. Olav» (1997 年）という論文において、トロル、教会とノルウェー民間説話において特別な地位を占めている聖オーラヴ（ノルウェーの守護聖人）の関係について研究を行った。アウクルストによれば、聖オーラヴによってもたらされたノルウェーのキリスト教化は反対なしに成し遂げられたものではなく、その際にトロルは最も重要なキリスト教化の対抗者として台頭したと言及している。また、民間説話において、聖オーラヴとトロルとの戦闘は、教会の建築に関連付けられ、最終的にトロルは単なる敵対者ではなく、同様に教会の実際の建築者として語られるという物語の筋を考察し、アウクルストは神聖な空間の創造と悪を覆う善の勝利を結びつける、聖オーラヴとトロルの物語の象徴的意味について吟味している。また、2004 年には Camilla Asplund Ingemark がスウェーデン系フィンランドにおけるトロル像について論じている (Camilla Asplund Ingemark, *The Genre of Trolls*, Åbo Akademi University Press, Åbo, 2004)。

[35] アミリアンは、AT 分類を使用し、資料体として取り上げるのは、「最も代表的な魔法昔話」les plus représentatif des contes merveilleux の中から選んだ約 500 話としており、魔法昔話に限定している(Cf. Amilien1996, p. 15)。AT 分類とは、アンティ・アールネ Antti Aarne (1867-1925, Finland) とスティス・トンプソン Stith Thompson (1885–1976, US)によって作成された、各昔話をさまざまな話型（タイプ）によって分類し、番号を定めていったものである。現在、伝承文芸研究で最も代表的な AT 分類は、アールネが、各昔話に独自の「原郷」（発生地）があるという一元発生説派に立ち、可能な限り数多くの昔話を国際的に収集し、話型とモティーフを基準にこれらを比較・分類することによって個々の話型の原型を復元するとともに、その発生地・発生時期・伝播経路を明らかにしていることを昔話研究の方法論として提唱したことに由来する。アールネは、その方法論に基づき、1920 年にフィンランド周辺の昔話を対象に話型表を作成した。その後、1927 年にトンプソンが他国の資料も取り入れ拡大し、1961 年にさらに増補した。2004 年に改訂版が出版されている。（詳しい AT 分類の振り分けについては、補遺を参照）

[36] 初めて行われた昔話分類は、フィンランド学派のアンティ・アールネ Antti Aarne が 1920 年に作成した話型表であり、後の AT 分類表である。その話型表は、研究が進むごと

手は自らが語る物語のジャンルについては意識していない。つまり言い換えれば、トロル像の変遷を見出す際に、魔法昔話の話型以外に属する物語を排除するための妥当な理由が見当たらないのである。どの話型に分類されているにしても、民間においてトロルという超自然的存在が語り継がれてきたという前提は同じであることから、本論文では魔法昔話に分類される物語以外も分析対象に含めることにする。

以上より、本論文では、アミリアンの論文を主として参照しながらも、アミリアンの論文も含めてこれまでの先行研究で扱われてこなかったアイスランドを研究対象地域に加え、また魔法昔話およびそれ以外の話型分類に属する物語も研究対象とする。よって、本論文ではトロル像の変遷を、ノルウェーとアイスランドの民間説話、特に伝説、昔話に基づいて跡付けていく。その記述的研究の後、トロル像の通時的変遷の様態と、ノルウェー、アイスランドの社会制度、自然などとの関連が見出されるのかどうかを検討してみる。

第 3 節　諸前提：研究対象とする地域・資料・時代

1.　取り扱う地域について

本論文では、研究対象地域をノルウェーとアイスランドに限定する。しかし確かにトロルの存在は、ノルウェーとアイスランドのみならず、他の北欧諸国、つまりデンマークとスウェーデンの民間説話などにおいても確認できる (本論文では、この 4 カ国を「北欧諸国」と総称する) 。「北欧諸国」とは異なりカレワラの神々[37] を信仰していたフィンラン

に他の研究者たちによって改訂され、現在ではヨーロッパの民間説話を研究する際には無視しがたい準拠枠となっている。例えば、 AT 分類に批判を呈している昔話の構造論的アプローチを行ったロシアのウラジミール・プロップも、しかしながら、 AT 分類で「魔法昔話」に属するロシアの昔話のみを自らの研究対象にしている。ノルウェーでは、 AT 分類を使用した、オェルヌルフ・ホーデネØrnulf Hodneによる話型表が作成されており、アミリアンもこれを参照している。

[37]　『カレワラ』とはフィンランドの民族叙事詩であり、全50章から成る。『カレワラ』は、カレリア地方 (ロシア領カレリア、通称東カレリア) を中心に口承で歌われてきた叙事詩を、1835年に医師エリアス・ロンレートElias Lönnrotが採集、編集したものである。ロンレートは1835年に第 1 版を、1849年に第 2 版を出版している。そのため、第 2 版は『新カレワラ』と呼ばれている。『カレワラ』第 1 章では、天地創成が宇宙卵をモティーフに美しく描かれている。それに対して、『エッダ』では、氷の国 Niflheimr の氷が火の国 Muspellzheimr の熱風によって溶け、その滴から原初の巨人ユミルが生まれ、その後ユミルの 3 人の子がユミルを殺し、その遺骸から天地創造が行われる。世界各地域に伝わる神話において、宇宙卵のモティーフが分布している地域は限られており、北欧文化圏のいずれ

ドについては、文化的、民族的背景を異にするため、「北欧諸国」という枠組みから原則的に除くことにする。しかし、他方でフィンランドの中でもスウェーデン＝フィンランドにおいては、トロルが伝えられていることを忘れてはならない。フィンランドは、1155年から1809年までスウェーデンの統治下にあり、その際にスウェーデンからフィンランドに移住した人々が、トロルをその地に移入し、伝承している。さらに、北欧諸国以外にも、イギリス領のオークニー諸島とシェトランド諸島にもトロルが伝えられている。両諸島は、北欧のヴァイキング時代（8世紀末 -11 世紀末）にヴァイキングが入植地とするとともに、「トロル」が伝えられた地域である。そしてヴァイキング時代後も、両諸島で独自の形成過程を辿り、そして現在、「トロウ (trow)」としてなお伝承されている[38]。このように超自然的存在“トロル”が伝えられている3つの主要地域を本論文では、「北欧文化圏」と総称することにする。

なぜ研究対象地域を北欧文化圏の中からノルウェーとアイスランドの2カ国に絞り込むのかという問題があげられるが、トロル像の変遷をたどる際に、前提条件と考えられるものをできるだけ同一なものに揃える必要があったためである。

この研究における前提条件とは、北欧文化圏の古来の人々が有していた世界観の共通性の度合いである。この問題には、現在トロルという存在を確認できる初期の参照物、つまり神話とサガの起源に関係している。北欧神話の原典とされる『古エッダ』*Den Elder Edda* (ca. 800-1300) および『新エッダ』*Den yngre Edda* (1220-40)、サガなどの資料体の起源は北欧西部、即ちアイスランドとノルウェーにあるため、ノルウェー、アイスランドにおける時代状況を色濃く反映して描かれていると考えられている[39]。このことから、これらの神話群・サガ群といった資料体の内容がどの程度まで、他の北欧文化圏にとって典型的と見なすことができるのかが疑問点としてあげられる。特にスウェーデンのキリスト教改宗以前の時代に関する完全な史料は多く残されておらず、スウェーデンの宗教史・民間

の地域も属しておらず、フィンランドと北欧文化圏の神話は系統を異にしている。(小泉保、『カレワラ神話と日本神話』、日本放送出版会、1999年、1-25頁、石野裕子、「『レワラ』に見るフィンランド性の形成」、『北欧世界のことばと文化』、岡澤憲芙編、成文堂、2007年、121-142頁、アーサー・コッテル、『世界神話事典』[1976 / 1986]、左近司祥子他訳、柏書房、1993年、191-192頁参照)

[38] オークニー諸島とシェトランド諸島で伝承されているトロウTrowは、海あるいは丘に住んでいると考えられており、狩人や漁師の恐れの対象となっている。(Cf. Gertrude Jobes, *Dictionary of Mythology Folklore and Symbols*, Part 2, The Scarecrow Press, New Mythology Folklore and Symbols, Part 2, The Scarecrow Press, New York, 1962, p. 1600.)

[39] Cf. Folke Ström, *Nordisk hedendom. Tro och sed i förkristen tid*, Akademiförlaget, Göteborg, 1967 (フォルケ・ストレム、『古代北欧の宗教と神話』、菅原邦城訳、人文書院、1982年、7-16頁).

信仰の専門家であるフォルケ・ストレム Folke Ström は、少なくとも部分的には、エッダに見るのとは異なる色合いをした北欧東部 (スウェーデン、デンマーク) の神話財宝があったことは、大いに考えられると述べている[40] 。よって、北欧文化圏でどの程度、神話とサガに描かれている世界を共有していたかという問題をあきらかにすることは困難な状態になっている。そのため、北欧文化圏のトロル像の変遷を見る際に、共通のトロル像変遷の出発点を持っていない地域同士を同列に比較することはできない。それに対し、以下に詳しく述べるように、ノルウェー、アイスランドの 2 カ国は古来から共通のトロル像を持っていたと推測することが十分可能である。このことが本論文で研究対象地域をノルウェー、アイスランドに限定する理由である[41] 。

さて、なぜノルウェー、アイスランドの 2 カ国が古来から共通のトロル像を持っていたと推測できるのかは、エッダ群とサガ群発祥に関することでもあるが、ノルウェーとアイスランドの歴史的関係性を検討すれば納得されることだろう。

アイスランドは、成立した起源が明確に分かっている希少な国の一つである[42] 。アイスランドは、ノルウェー人が植民を行った地であり、それ以前は事実上無人の島であった[43] 。ノルウェー人が植民を開始する以前、アイスランドの存在は、ベーダの年代学の本において、夏の間、太陽が一晩中輝く島ティーレとして記録され知られていた。アイスランドの史料によれば、ノルウェー人が初めてアイスランドに訪れたのは 9 世紀半ばである。ノルウェー人が本格的に植民を開始したのは870 (ないし 874 年[44]) から 930 年にかけての60年

---

[40] ストレム 1982 、15 頁参照。

[41] エッダ群がアイスランドで、あるいはノルウェーで成立したのか否かについては、確かに現在も論争の的となっている。そうではあるが、エッダの一部はノルウェー、他の一部はアイスランドで成立したという見解が有力なこと、次いでアイスランドという地域が、主にノルウェー人の植民によって成立したという事実、アイスランド成立後もノルウェーとアイスランド間で交流があったことから、本論文ではエッダ群にまつわるこの問題を特に重要視しないこととする。

[42] ノルウェー人のアイスランド入植およびアイスランド成立に関しては、グンナー・カールソン、『アイスランド小史』 [2000] 、岡沢憲芙監訳、早稲田大学出版部、2002 年、1-4 頁、 Haakon Shetelig, *Det Norske Folks Liv og Historie -Gjennem Tidene*, Bind I, H. Aschehoug & Co. Oslo, 1930, s.205-218 、清水誠、『北欧アイスランド文学の歩みー白夜と氷河の国の六世紀ー』、現代図書、2009 年、 1-10 頁参照。

[43] 研究者の間では、広大な土地をもつアイスランドが無人の地であったかどうかが議論の的とされ、ノルウェー人が入植するよりはるか以前にアイスランドには定住民がいたという仮説も出されていた。しかし、後の考古学的調査 (地層調査) により、定住民がいたという仮説は一蹴され、植民以前は (やや先んじて住みついていたごく少数のアイルランド人修道士を別とすれば) 無人の地であったことが証明された。 (引用元は脚注42を参照)

[44] アイスランド最初の歴史家アリ・ソルギルスソン (1068-1184) が、アイスランド植民か

間であり、この間に 1 万人以上がアイスランドに入植した。アイスランドは、ノルウェー人（主として農民）[45] が、 870 年から 930 年にかけての60年間[46] に入植した地である。他地域からも多少の入植者[47] はいたものの、当時のノルウェーと共通の埋葬方法・墓の副葬品・建築物を有し、さらに古ノルド語が使われていたことから、基本的にはノルウェーの当時の習慣が保たれていた可能性が高い。北欧史の研究者である熊野聰によれば、ノルウェー人のアイスランド植民の理由[48] を、 9 世紀末のノルウェーの「統一[49] 」に始まる王権の成立と展開にともなうノルウェー国内の内包的発展、社会の質的転化から逃れるためとし、その本国を逃れアイスランドへ植民した人々が建設した社会は、ノルウェーの統一以前の古い社会形態、つまり散居的定住様式および非国家的な社会機構を再現し保存したと思われる[50] 。それに加え、トロル由来の地名もアイスランド各地にみられることから、ト

ら 200 年の1122-32年の間に『アイスランド人の書』 *Íslendingabók* (アイスランドの 870-1120 年における略史) を著した。そのなかで、アリは「アイスランドの移住は、およそ 870 年から 930 年にかけての60年間に行われた」としており、特定の年を記していない。他方で、後代の歴史家たちによって書かれた『植民の書』 *Landnámabók* 全 5 部にはアイスランドの移住開始の年を 874 年と記している。後の考古学調査によって、アイスランド最古の遺跡の多くが発見された地層の年代が、 871 年前後の可能性が高いという結果が出されている。

[45] 他方で、『植民の書』によれば、移住者の多くはノルウェー王の圧制を逃れてきたノルウェーの大豪族たちであると記されているが、ノルウェーの豪族は、熊野聰によれば、“豪族的農民”であり、大農的農場世帯と豪族的従士団扶養を結合しており、多くの農民を伴っていたことから、植民者の多くは農民であると判断される。

[46] 熊野聰は著作の中で、ノルウェー人の移植開始を 974 年から60年間としているが、アイスランド人が新たな土地を求めてグリーンランドへ移住を開始したのが 985 年ごろであることと他の資料の多くが 870 年ごろを入植開始時期とみていることを考慮し、誤植であると判断した。 (熊野聰、『北欧初期社会の研究』、未來社、 1986 年、96 頁参照) また、この60年間は「植民の時代」 Iandnámsöld と呼ばれている (清水 2009 、 1 頁参照) 。

[47] 入植者の大部分はノルウェー人 (とりわけノルウェー南西部出身者) であったが、ノルウェー人の中には長い間ブリテン諸島の入植地に居住していたものも含まれており、それに伴いケルト系の解放奴隷も含まれていたと考えられている。またスカンディナビアの他の地域出身者が含まれていた。

[48] 入植者がなぜ、またどのようにしてアイスランドへ植民したのかは明らかにされていないが、アイスランドとノルウェーの農場地名の比較分析から、おそらくノルウェー西部地方から北部にかけての定住地が限界に達しつつあったことが原因だと考えられている (熊野 1986 、 104-107 頁参照) 。

[49] 9 世紀末に統一を果たしたハーラル美髪王の支配領域は、東部山間部ではなく、サーミ人が住む北地域を除く、沿岸部に対するものであり、主として南西部地方に限定されていたと考えられている (熊野 1986 、 45 頁参照) 。

[50] ノルウェーの定住形態は自然条件と結びついた散居性であり、農場がきわめて高い程度で牧畜に依存していた。散居性をとっていたため、農業をおこなう土地の所有者は地主であり領主にはならず、また農民も農奴には成り得なかった。そのためノルウェーがハーラル美髪王によって国家統一される以前は、王による一般租税と公的執行権力を欠いた非国家的な社会機構であり、散居農民の同盟と集会という社会形態をとっていた。その形態が、ノルウェーからの植民者によってアイスランドで再現される (熊野 1986 、 7-13 頁参照) 。

ロルという超自然的存在も入植者とともに運び込まれていたと考えられる。つまり、アイスランドとノルウェーは当初、共通のトロル像をもっていたと推測することができるのであり、その共通性から出発してそれぞれの相異なった自然・社会制度のもと、トロル像はそれぞれ独自の展開を遂げたのであろう。こういった理由で、両国の民間説話における相違点を見出し比較することは、トロル像の変遷の要因を探る上で妥当である。

最後に、ノルウェーとアイスランドの民間説話におけるトロルという超自然的存在の重要性があげられる。アミリアンによれば、デンマークとスウェーデンの昔話に登場するトロルは、ノルウェーにおけるトロルよりも超自然的存在として重視されていないのに反して、ノルド語に浸透されたアイスランドの昔話と伝説において、トロルは頻出しており、アイスランドの昔話と伝説に出てくるトロルの外見は、ノルウェーのトロルと相似的である[51]。このことから、アイスランドとノルウェーにおけるトロルは共通点がみられ、デンマークとスウェーデンのトロルとは区別されると考えられる。以上が北欧文化圏の中でも、とりわけノルウェーとアイスランド両国のトロル像を比較することが有効であると思われる理由である。

2. 取り扱う資料について

本論文では、ノルウェーとアイスランドの民間説話、即ち昔話と伝説を資料体として用いる。先に述べたように、昔話は話型分類にとらわれることなく、“トロルが登場する物語”および“「トロル」という語が出てくる物語”という観点から選別し、研究対象とする。

本論文では、ノルウェーの民間説話93話とアイスランドの民間説話51話を資料体に用い、その物語にみられる“トロル”像の分析を行う。出典は主に19世紀に入ってから収集が行われた版を使用している。その際に、編集者による物語の内容変更(改変的編集)が行われていないことに注意した[52]。以下に本論文で使用したノルウェーとアイスランドの民間

[51] また、アミリアンは、ノルウェーとアイスランドでは昔話の形態と敵対者の役割が異なっていると指摘している (Cf. Amilien1996, p. 265)。

[52] グリム兄弟による民間説話集は、後の版においてグリム兄弟の手によって物語の内容の変更が成されているなど、民間説話集によっては編集者の意向によって物語の内容自体が変更されている場合がある。

説話集の代表的な資料を紹介する[53]。

ノルウェーの民間説話では、ペーター C. アスビョルンセン Peter Christen Asbjørnsen (1812-85) とヨルゲン・モー Jørgen Moe (1813-82) が編み、 1841-44 年に刊行されたノルウェーの代表的かつ最初の民間説話集『ノルウェーの民間説話』*Norske Folkeeventyr*[54] を主に使用した。彼らは、グリム兄弟が刊行した『子どもと家庭のためのメルヒェン』 *Kinder- und Hausmärchen* (1812-22) から刺激を受け、ノルウェー東部に伝承され保存されている田舎の物語を教養ある都会の読者に紹介するため、収集・編集を行った。彼らが民間説話の収集を行った背景に、当時の書き言葉であったデンマーク語ではなく、ノルウェー語の書き言葉確立への国民ロマン主義の動きがある[55]。ノルウェーには大きく 5 種類の方言[56] があり、それぞれの方言に特有の語彙、語形、発音が存在するため、アスビョルンセンとモーは各地の方言によって語り継がれていた物語を、多くのノルウェー人が読める形で書き言葉に記す努力をし、一部はデンマーク語化された形で、また一部はノルウェー独特の語形、語彙を用い、口語の形に近づけ、ノルウェー語の特徴が強い一定の書き言葉 (デンマーク語ノルウェー語 Dansk-Norsk) によって文字にした。このようなノルウェー語による書き言葉が形成過程にあったという事情から、語り手の言葉を忠実に再現することは不可能であった。そのため彼らは口語であったノルウェー語を、書き言葉であったデンマーク語に部分的にやむなく変更したが、内容自体の変更は行っていないため、本論文ではこれを問題視しないこととする。また、語り手については、アスビョルンセンが収集したものは女性の

---

53 民間説話の資料については、ノルウェーは、 Harald Beyer, *Norsk Litteratur Historie*, H. Aschehoug & CO., Oslo, 1939, s. 115-119、森信嘉、「ノルウェー語の書き言葉の確立へ 1830-1900 」、『北欧世界のことばと文化 』、 岡澤憲芙編、成文堂、 2007 年、 73-76 頁、アイヴィン・フィエル・ハルヴォシェン、森信嘉訳、「ノルウェー語 」、 『北欧のことば 』、アラン・カーカー編、東海大学出版、 2001 年、 60-62 頁、 Kvideland, Reimund and Sehmsdorf, Henning K.(eds.), *All the World's Reward: Folktales Told by Five Scandinavian Storytellers*, University of Washington Press, 1999, p. 13 、 Elias Bredsdorff (edd.), *An Introduction to Scandinavian Literature from the earliest time to our day*, Ejnar Munksgaard, Copenhagen, 1951, pp.135-136 、 Anne Lene Berge, *Impuls 2, Teoribok*, J. W. Cappelens forlag, Oslo, 1995, s. 75-76 参照。アイスランドは、清水 2009 、 43-44 頁、ヨウーン・アウトナソン編、『アイスランドの昔話』世界民間文芸叢書第 9 巻、菅原邦城訳、三弥井書店、 1979 年、391-401 頁参照。

54 Asbjørnsen, Peter Christen og Moe, Jørgen (saml.), *Norske Folkeeventyr*, Bind I-II., Johan Dahls Forlagsboghandel,Christiania, 1841 bis 1844.

55 その結果、ノルウェーにおいてはデンマーク語の書き言葉に近いブークモール bokmål と地方の話し言葉を基にしたニーノスク nynorsk の 2 つが現在公用語として使われている。

56 北ノルウェー語方言、トロンネラーグ方言、西ノルウェー語方言、東ノルウェー語方言、中部ノルウェー語方言の 5 種類。ノルウェーには山岳地帯やフィヨルドが多く存在することから、地理的に隔離されたそれぞれの地において独特の方言が豊富に保たれている (森 2007 、 62-79 頁参照) 。

語り手によるものが多いが、彼らは語り手の職業などに対する関心が薄かったため、収集場所と名前の記録のみが残されているものが多い。本論文では、アスビョルンセンとモーが収集した物語を主に使用しているが、彼らの主要収集地域が東ノルウェーにあったのに対し、アイスランドに植民した人々の多くが西ノルウェー出身であったという事情を鑑み、分析の際には当該の昔話が西ノルウェーにも分布していることを確認した。また、西ノルウェーの物語を他の資料から補填し、偏りがでないよう努めた[57]。

他方アイスランドにおいては、17世紀に学者が民間説話の採集を行っていたが[58]、本格的な口承文芸の採集の試みの成果は、グリム兄弟の業績とデンマークのティーレ Just Mathisan Thiele (1795-1874) の『デンマークの民間伝説』 *Danske Folkesagn*, I-IV (1818-23) に刺激を受けた、ヨウーン・アウトナソン Jón Árnason (1819-88) とマグヌス・グリムソン Magnús Grímsson (1825-60) による1852年刊行の『アイスランドの民間説話』*Íslenzk ævintýri* である。収録資料提供者の多くは農業主、沿岸業者の漁師であったが、牧師などの知識階級が語り部となったものも含まれている。これが反響を呼び、ドイツのライプツィヒで拡大され『アイスランドの伝説と昔話』 *Íslenzkar þjóðsögur og æfintýri*, I- II [59] (1862-64) として出版された。この1852年の拡大版とヨウーンが出版後に収集した資料を収録したものが、1954-61 年に全 6 巻組で『アイスランドの伝説と昔話』*Ísleszkar þjóðsögur og ævintýri* [60] が出版され、世界最大最良のコレクションと称されている。多くの物語の、語り手と収集地域、収集年代を詳細に記録し、語り手の言葉を忠実に再現しており[61]、編集者による変更もないため、信頼できる資料である。よって、本論文では、この1852年版と 1954-61 年版の 2 シリーズを主として使用する。

---

[57] ノルウェーの民間説話の収集は、ノルウェー中部にある山間部や、東部で盛んに行われたが、西部では前者に比べ収集が劣っているのが現状である。

[58] アウルトニ・マグヌソン Árni Magnússon (1663-1730) は古語の文献学的研究、古写本の収集を行い、古語研究の礎を築いた（清水2009、 18-19 頁参照）。

[59] Jón Árnason, *Íslenzkar þjóðsögur og æfintýri*, Leipzig, 1862-64.

[60] Jón Árnason (safnað hefur), Árni Böðvarsson og Bjarni Vilhjálmsson (önnuðust útgáfuna), *Ísleszkar þjóðsögur og ævintýri*, I-VI., Bókaútgáfan Þjóðsaga, Reykjavík, 1954-61.

[61] ノルウェーとは異なり、現代アイスランド語では文語と口語の間に大きな相違がない。さらに、村落が非常に分散し孤立しているが、アイスランド語は方言に分裂していないため、伝承が伝播する際に変化しにくく、文字にする際に語り手の使用した言葉を、編集者が変更を入れずに再現することができる（熊野1986、41頁参照）。

3.　研究対象とする伝承文芸の範囲について

本論文では、上述したようにノルウェーとアイスランドの民間説話を扱う。この伝承文芸の範囲設定について、なぜ北欧神話やサガといった伝承文芸を含めないのかという疑問が出る可能性があるが、その理由は以下に述べてみよう。

本論文では、トロル像を資料体から抽出するため、ノルウェー語、アイスランド語による原典に当たることに努めた。それはなぜかというと、「トロル」という超自然的存在は、北欧文化圏以外の地域においても、さまざまなイメージを含んでいるため、原典において「トロル」という語が使用されていない場合も、翻訳書で「トロル」と訳されていることがあるからである[62]。そのため、本論文では、翻訳書を使用する際には、翻訳者が正確に訳しているかどうかを確認し、そのうえで研究対象として妥当な資料を厳選した[63]。他方で、北欧神話とサガであるが、翻訳書は多く出版されているものの、現時点では原典を入手するのが困難であったため、十分な資料を入手できなかった。そのため、本論文では北欧神話とサガを主要研究対象から除外せざるを得なかった。しかしながら、神話あるいはサガの原典を入手できた物語に関しては、考察する際の参考にした。以上の理由から、本論文では研究対象とする伝承文芸を民間説話に限定した。

本論文は 2 章構成で、第 1 章は 4 節構成、第 2 章は 3 節構成をとる。第 1 章では、ノルウェー、アイスランド民間説話において、トロルがどのように描かれているのかを記述的分析に基づき検討する。上述したように、ヤーコプ・グリムや山室が述べているように、北欧諸国で語られているトロルは、妖精・魔法使い・巨人などの要素をもち多様性をみせている。しかしながら、各国で語り継がれているトロル像の詳細を見た際に、その説明が当てはまるのであろうか。少なくとも、本論文で研究対象地域とするノルウェー、アイスランドでは、これらの説明が十全にあてはまらない[64]。アイスランドの昔話の翻訳を行っ

---

[62]　例えば、アイスランド語の巨人の一種である「スケッサ skessa 」を、翻訳では「トロル」と訳す。

[63]　日本語の翻訳書であれば、ルビの部分に原語がふってあるもの、英語の翻訳書であれば巻頭か巻末に原語一覧が載っているものに限って選択した。

[64]　例えば、ノルウェーの昔話の翻訳 (抄訳) を行った大塚勇三によれば、トロルは魔物、妖怪として一般的には考えられており、おそろしい巨人、小人、人間と親しくする紳士、人と結婚する美女、人食い、親切なトロルと多様化しており、その原因は、トロルは北欧神話の神々や巨人、それに魔女や小さな妖精、お化け、自然の力の象徴などの全ての要素が流れ込んだ存在であると述べている。他方で、アイスランドの昔話の翻訳 (抄訳) を行

た菅原邦城のアイスランドのトロル像についての説明は、ヤーコプ・グリムと山室がまとめた北欧諸国のトロル像とはやはり異なっている。これらの各国にみられるトロル像の曖昧性をなくすため、本論文で研究対象とするノルウェー、アイスランド民間説話のそれぞれにみられるトロル像の差異を明確にし、特性とその分類を行う。また、その際に、いくつかの項目を設け分類をする。アミリアンは、確かに、民間説話に登場する超自然的存在であるオーグル、ドラゴンとの比較を通じて、ノルウェー魔法昔話におけるトロル独自の特徴、他の超自然的存在と共通の特徴の分類をおこなっている[65]。しかし、アミリアンが行ったトロルの特徴による分類では、魔法昔話におけるトロルを特に属性等を区別せずに行ったものであった。そこで、本分析では、アミリアンが行った分類にアイスランド民間説話を加え、トロル像の特性とその分類を、さらに詳細に明確化する。

アミリアンによれば、(現在まで伝承されている)トロルを含めた超自然的存在は、神話やサガといった古ノルド語のテクストにおいては本質的なものである。確かに、時代が下るにつれて、歴史的、宗教的事件によって様々な要素を「つめこまれ」、ある程度変形を被ったかもしれないが、それでもなお、古来の特徴を保有していた。したがって、民間説話に登場するトロルはサガに登場するトロルと多くの共通点を持っていると指摘している[66]。つまり、神話やサガにおけるトロル像と民間説話におけるトロル像を比較し、共通点と差異を見出すことで、古来より伝わるトロル像の様相がより明確になると推測できる。その推測にたち、ノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像の特性を抽出し、分類をしたのち、それらをアウルマンが分析を行ったサガにおける「トロル」という語の使用法を参照しながら、両国の民間説話に登場するトロル像の展望を第1章の最後に行う。

第1章で行うトロル像の記述的分析に基づき、第2章ではノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像の変遷を検討していく。ノルウェー魔法昔話のトロル像の分析を行ったアミリアンは、トロル像の変遷を他の超自然的存在(オーグル、ドラゴン)との比較だけではなく、キリスト教の聖書やギリシアおよびローマ神話の影響を検討することで論じている。また他方で、アミリアンや他多くの研究者はノルウェー、アイスランド双方

った菅原邦城は、アイスランド民間説話においてトロルを含む巨人は、(近代の民間口承では滅亡の危機に瀕している存在ではあるが)洞穴、溶岩原、火山の中などに孤立して住んでおり、山羊皮を着て、手には鉄棒や小刀をもつ荒野の野蛮人であると言及している。(ペテル・クリステン・アスビョルンセン、ヨルゲン・モー編、『ノルウェーの昔話』、大塚勇三訳、福音館書店、2003年、397頁、アウトナソン1979、402-403頁参照.)

[65] Cf. Amilien1996, pp. 252-256.

[66] Cf. Amilien1996, pp. 136-137.

の民間説話に登場するトロルに古来の信仰の内包を指摘する[67]。とはいえ、それらトロルに残存する古来の信仰とは、ノルウェーとアイスランドに共通のものであるか否か、それが両国のトロル像にどのように現れているかについて詳細な議論はなされていない。しかしながら、その点を明確にすることで、ノルウェーとアイスランドにおいて展開してきたそれぞれの世界観の重要な諸側面を把握することができるのではないだろうか。民間説話を通じてそれぞれの世界観を展望するためには、両国のトロル像を比較検討することが必要である。そこで、第 2 章ではノルウェー、アイスランド両国の社会制度および宗教、また自然といったものがトロル像変遷にどう関わってくるのかを検討する。

以上、本論文では、トロル像の変遷を、ノルウェーとアイスランドの民間説話を資料体として記述的分析をし、次いで、そのトロル像の変遷を両国における宗教、社会制度、自然といった観点に立ちながら明らかにしていく。

[67] Cf. Amilien1996, p. 18.

第 1 章　民間説話にあらわれるトロル像

本章では、ノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像の記述的分析を行い、その抽出した分析結果をトロルの特性別に分類を行う [第 2 節、第 3 節] 。その分類した結果をもとに、ノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像の進展をみる。その際に、アウルマン・ヤーコブスソン Ármann Jakobsson が分類を行った、サガにおける“トロル”という語の使用法[1] を参照しながら、民間説話でのトロル像を展望する [第 4 節] 。まず、トロル像の同定とその分析方法について述べる [第 1 節] 。

第 1 節　民間説話におけるトロル像の同定とその分析方法

これから行う分析においては、ノルウェー、アイスランド民間説話に登場する超自然的存在を「トロル」であるとする判断基準を、「トロル」という語が使われているか否かによって統一する。確かに、物語中に「トロル」という語はみられないが、トロル独自の特徴[2] を保有する超自然的存在が登場する場合があるが、語り手によってトロルが所有する特徴の認識が異なっている可能性を排除できないという理由から[3] 、本分析ではそれを除外することにする。また、それと同じ理由で、物語の収集者および編集者が、収録本において“トロルの物語”として分類している物語で、「トロル」という語が当てられていない超自然的存在が登場する物語も分析対象から除外する。他方で、実際には超自然的存在トロルではない登場人物[4] に、「トロル」というあだ名が付けられている場合は、例外として分析対象にいれる。なぜならば、比喩として「トロル」という語が使用されている文脈からも、トロルの特徴を確認することができるからである。また、この使用法はサガにおいてもみられるため、トロル像の変遷を考察する際の一つの分析項目として扱えるであ

---

[1] 序論第 2 節2. 先行研究を参照。

[2] 例えば、“日光によって石化し死に至る”という特徴は、トロルが持つ特徴的な性質として挙げられる(Cf. Amilien1996, pp. 254-255.)が、北欧神話に登場する小人 Dvergr をはじめ、アイスランド民間説話に登場するスケッサ skessa などにおいても見られる特徴である。

[3] 民間説話が本として出版される以前は、語り手の中で、超自然的存在の姿形、性格は明確なものではなく、またイメージをもっていた場合も語り手同士がそのイメージを共有していたわけではない(Cf. Thompson1946, p. 42) 。またアミリアンによれば、現在のトロルのイメージは、語り手それぞれが持っていたトロルのイメージを凝縮した昔話集・伝説集に入れられた挿絵からの視覚的影響が強いと考えられる (Cf. Amilien1996, pp. 259-262.) 。

[4] 登場人物に対して「…はトロルのようだ」…..som trollene という表現が使われている場合、「トロルではない」と見なす。

ろう。

ノルウェー、アイスランド民間説話において、「トロル」という語の表記は大きく二つにわけられる。一つは、単独で「トロル」と表記される場合 (例 : troll, tröll) 、他方は、複合語で表記される場合 (例 : trollkjerringa, bergtroll, tröllkarl) である。それに加えて、「トロル」という語の綴り字は、アイスランド民間説話においては特に問題にならないが、それに反して、ノルウェー民間説話では、ノルウェー語による綴り字 (troll) の他に、デンマーク語による綴り字(trold)や古アイスランド語の綴り字 (trøll) などが使用されており、多少の綴り字の揺らぎが見られる[5] 。しかしながら、民間説話の収集が行われた時期がノルウェー語の形成過程にあったことを考慮し、綴り字の揺らぎは問題視せず、綴り字のある程度の異同とは関係なく「トロル」と同定し分析を行う。以上の基準で民間説話からトロルの登場する物語を選別する。

次に、それらの基準で選別した物語に現れるトロル像を、 (a) 名称と外形、 (b) 出現の仕方、 (c) 住居、の 3 つの観点から分析を行う[6] 。 (a) 名称と外形では、物語に登場するこの超自然的存在が、「トロル」という固有名詞以外にいかなる呼称をもっているか否か、および物語内で描写されるトロルの外形がいかなるものなのかを引きだす。トロルが他の呼称をもたない場合は、物語内で表記される名称 (例 : vasstroll) に注目する。次いで、 (b) 出現の仕方は、主人公の視点から観察されたトロルの最初の状態を「出現」とし、分類する。確かに、それが主人公に認識されようがされまいが、トロルが物語の中に初めて語り手によって導入された際、トロルが主人公たちを認識し、主人公たちの前に現れる時点で取る行為・状態を「出現」時の様態と捉えることも可能であるが、その場合、トロルが主人公たちを認識する前に殺される物語には適用できないことになるという支障が生じるため、上記のような同定基準を設定する。最後に、 (c) 住居としては、語り手が言及したトロルの住んでいる場所を抽出する。

さらに、以上の 3 項目に加え、トロル像をみるさいに重要となる、トロルの「性別 」、「主人公との関係 (属性) 」、 「死に方・追い払われ方」にも注目し、観察を行う。トロルの「性別」は次のように判断する。性別の記載がない場合、あるいは妻がいる場合は「トロル (男) 」、 女性と判断できる語句 (例: -kjerring, -kona)や描写がある場合、夫がい

---

5 綴り字の揺らぎの原因について、詳しくは序論第 3 節 2. を参照。

6 この 3 項目を用い分析を行った結果をまととめた一覧表は、資料1 (ノルウェー) および資料2 (アイスランド) 参照。

る場合は「女トロル」にそれぞれ分類する。「妃」や「継母」、「美しい女性」などの描写があり、物語中で“実はトロルだった”という種明かしがある場合は、「人間の姿をした(女)トロル」と判断する。トロルの「主人公との関係」は、「敵対者」、「助力者」、「敵対者にも助力者にも該当しない者」という三つに分類する。最後に、トロルの「死に方・追い払われ方」は語り手がその詳細について言及している場合に注目し、考察の対象とする。

以上の分析方法を用い、第2節、第3節にてノルウェー、アイスランド民間説話に登場するトロル像の特性とその分類を行う。

第2節　ノルウェー民間説話におけるトロル像の特性とその分類

ノルウェー民間説話は、他の北欧諸国の民間説話に比べ、美しさと洗練さに劣るが、他方で力強く、時に粗野なほどのユーモアを凝らしており、際立った特色をもっていると評価されている[7]。そのような評価を受けているノルウェー民間説話において、トロルはどのように描かれているのだろうか。第1節で述べたトロル像の同定と分析方法に従って、ノルウェー民間説話にあらわれる超自然的存在トロルを展望していく。しかしながら、ノルウェー民間説話にあらわれるトロルの外形の特徴は、語り手によって描写が異なり、一つのまとまりを見ない。そのため、いくつか観点を設け、トロル像の特性とその分類を試みることにしよう。まず、名称と外形において、呼称をもつトロルが登場する数が少ないため、個別的に見ていきながら、ノルウェー民間説話におけるトロルを見ていく。

1.　さまざまな呼称をもつトロル

はじめに、ノルウェー民間説話において、「トロル」という固有名詞以外に呼称を持つトロルから抽出していく。今回、分析対象とした民間説話93話中7話に登場するトロルが呼称を持っていた。本論文で研究対象とした物語において、呼称をもつトロルは少なく、トロルの呼称については、アミリアンも研究の中で言及していないため、トロルの呼称が何に基づいて付けられているのかは明らかになっていない。他方で、ウラジミール・プロ

[7]　山室静編、『北欧の昔話』、岩崎美術社、1970年、304-307頁参照。

ップ Владимир Яковлевич Пропп によれば、昔話では登場人物に名前がないのが一般的であり、また、たとえ名前があっても、それは登場人物のタイプの名称であって、人の名前ではないと述べているなど、民間説話における登場人物・超自然的存在がもつ呼称に特に大きな意味はないという指摘もある[8]。しかしながら、「トロル」という固有名詞をもっているにも関わらず、語り手が「トロル」という超自然的存在に敢て他のさまざまな呼称を持たせている事実は無視し難く、その指摘がノルウェー民間説話に該当するのかを確かめるためにも、したがって、物語において、どのような状況で語り手がトロルに呼称を持たせるのかを見ていく必要がある。

まず、*Kvernsagn*[9]「粉ひき器の話」(資料 1: Asbjørnsen og Jørgen Moe 36 番、以下 AM) に呼称をもつトロルが登場する。この物語では、トロル自らが次のように自分の名を名乗る。

> [老人が男の子に自らの祖母が語っていた「粉ひき器」の話を語りだす] 誰も近づくことのできない魔術 (trollskap) が立ち込めている場所に、夜に、ある貧しい女が粉ひき器を引かせて欲しいと訪れる。粉ひき器の所有者は女の頼みを一度断るが、女が自分の子どもに食べさせるために粉ひき器を引かせてほしいと懇願し、粉ひき器を引かせてもらう。女は暖炉のそばに腰かけ、粉ひき器を引いていると、そこに一人の女がやってきて貧しい女に挨拶をし、名前を尋ねる。貧しい女は「私の名前は自分自身です」 « Å, je heter *Sjøl* je, » と答える。(中略) 自分自身はその女を焼こうとするが、女は走って逃げる。(中略) [老人が男の子に「粉ひき器」の物語を語り終わった後に] 「粉ひき器の女は女トロル *trollkjerringa* だったのか?」と男の子が老人に尋ねると、老人は「そうだろうね」と答える。[10]

この物語 *Kvernsagn* において、女トロルの外形、および住居についての描写はみられな

---

[8] Cf. Владимир Яковлевич Пропп, *Фольклор и действительность*, Hayka, Москва́, 1976 (ウラジミール・プロップ、『魔法昔話の研究　口承文芸学とは何か』、齋藤君子訳、講談社学術文庫、2009 年、298 頁).

[9] 登場人物の一人が語る物語 (挿話) の一つにトロルが登場する。

[10] 要約、訳文・原文の強調は論者による。以下、同様。

いが[11]、女トロルが粉ひき器と関連付けられ[12]、また女トロルの呼称は「自分自身」“Sjøl” となっている。この呼称にはどのような意味があるのだろうか。おそらく、この呼称はこの物語（挿話）が属する AT 番号を参照することで解明できるであろう。この物語はAT1137「鬼の眼つぶし（ポリュペーモス）」“The ogre blinded (Polyphemus)”[13] に分類されており、このAT1137では『オデュッセイア』の中の巨人ポリュペーモスに関する話から派生した文学起源のモティーフ (K602) が使われている[14]。そのモティーフとは、オデュッセウスが巨人に捕われたときに自分の名は「誰でもない」“Noman,” と答え、またポリュペーモスがオデュッセウスに傷つけられて仲間に助けを求め、犯人の名をきかれると「誰でもない」と答えるというものである。ノルウェーのこの物語では、女トロルが名を尋ねられる立場に立っているが、クラーラ・ストロェーベ Klara Stroebe も指摘しているように、明らかにトロルの「自分自身」“Sjøl” という名は、この『オデュッセイア』のモティーフに起因する[15]。『オデュッセイア』がノルウェー語 (nynork) に最初に翻訳されたのは1918年であり、この話が採集された後であるが、このモティーフがそれ以前から世界的に広く分布していることから、語り手がこのモティーフを取り入れたとしても不思議ではない。言い換えれば、この物語に登場するトロルの名は、モティーフから話型に由来したものであり、語り手がトロルの呼称の命名に特別な意味を持たせていないということがわかる。

よって、この物語では、トロルの呼称が世界的に広く分布しているモティーフに由来しており、トロルに付けられた特別な名前ではないことが判明した。この点に留意しながら引き続き、呼称をもつトロルが登場する物語をみてみよう。

先に挙げた *Kvernsagn* 「粉ひき器の話」でトロルの名前が、物語が属する話型に組み込まれているのと同様に、「トロンハイム大聖堂の建築者、オーラヴ王」 *King Olav, Master*

---

[11] 女トロル「自分自身」の外形についての描写はみられないが、物語中で他の登場人物と会話をしていること、および少年が老人に「彼女は女トロルだったのか」と問うていることを鑑みると、人間の女性の姿を取っていたと判断することが可能性である。

[12] 粉ひき器とトロルとの関係は、他の物語（資料1: Scandinavian Folk Belief and Legend 49.1. 番参照）でも見られる。これは、ノルウェーおよびノルウェー国境沿いのスウェーデンに存在する民間信仰、「粉ひき器のうなり」 *kvernknurren* に由来する。その民間信仰では超自然的存在は、夜に、あるいは祝日に粉ひき器が動いていると、それを止めにくると考えられていた。 (Cf. Reimund Kvidland and Henning K. Sehmsdorf (eds.), *Scandinavian Folk Belief and Legend*, Norwegian University Press, Oslo, 1991, pp. 248-249.)

[13] オェルヌルフ・ホーデネØrnulf Hodneの『ノルウェーの民話タイプ』 *The type of the Norwegian folktale*（以下、Hodne) においては、AT1137: Troll blindes. (Ørnulf Hodne, *The type of the Norwegian folktale*, Instituttet for sammenlignende kulturforskning, Oslo, 1984)

[14] Cf. Thompson1946, pp. 200-201.

[15] Cf. Klara Stroebe und Reidar Th. Christiansen (edd.), *Nordischen Volksmärchen*, Eugen Diederichs Verlag, Köln, 1967, S. 321.

Builder of Trondheim Cathedral (資料 1: Folktales of Norway 2b 番、以下 FN 、 AT500[16]) と「聖オーラヴと建築家」 *Saint Olav and the Master Builder* (資料 1: Scandinavian Folk Belief and Legend59.5 番、以下 SL 、 AT500) において登場するトロルがもつ名前も話型に組み込まれているものだと言えるだろう。この 2 つは、トロルがオーラヴ王 (聖オーラヴ)[17] に彼が行き詰っている教会建築に手を貸すと持ちかけ、教会が建築し終わるまでに自分の名前を知ることができなければオーラヴ王から報酬 (主にオーラヴ王、太陽、月) をもらう約束をするという物語である。『新エッダ』第42節[18] の話に基づいたこの話型は、ノルウェーにおいて地域の偏りなく広い分布をもっており[19] 、各地域の教会と関連付けた類話が多く報告されている。どちらに登場するトロルも妻子を持っており、彼らが会話の中でトロルの名前を言っているのをオーラヴ王が聞き、教会が完成したと同時にトロルに名前を告げる。トロルがそれを聞き、それが原因で死ぬという終結をもつ[20] 。そのため、物語において、トロルの名前が言及されることは必要事項であり、トロルの呼称に言及することは

---

[16] Hodne, AT500:「ルンペルシュティルツヒェン」 Rumleskaft (「援助者の名前」 The name of the helper).

[17] 聖オーラヴ、オーラヴ・ハラルソン(995-1030)は、1015 年から 1028 年にノルウェー王の座についていた。オーラヴ王は当時ノルウェーにとって新しい宗教であるキリスト教を民衆に浸透させるために、宗教的権威を教会へと移行させる特別教会法を民会で採択させた。またオーラヴ王は古来の信仰に基づく様々な神聖な行為 (儀式) を行っていた神殿と偶像を破壊した。代わりに教会を建設し、自らを最上位においた聖職者制度を導入し、抵抗する者の命を奪う、あるいはその者の農場を焼き払うなどの圧制を行った。1030 年にオーラヴは亡くなるが、その 1 年後彼の遺体を発掘してみると死体は埋葬時のままで、さらに髪と髭が伸びていたことから、このことは奇跡として謳われ、聖人としての地位を与えられた。その後、オーラヴはノルウェーの守護聖人として伝えられるようになった。 (Ø. ステーネシェン、I. リーベグ、『ノルウェーの歴史』[2003] 、岡沢憲芙監訳、早稲田大学出版部、2005 年、 24-28 頁参照)

[18] 第42節では、一人の鍛冶屋 (実は山の巨人) が、神々に (人間が住む国) ミズガルズに山の巨人や霜の巨人が攻め入っても、彼らに対して安全で信頼できる立派な砦を一年半で造ると申し出る。その報酬として、フレイヤ (豊穣の女神) 、太陽、月を求める。神々は、鍛冶屋は仕事を達成できないと考え、また万が一達成した場合は、彼を騙そうと考え、彼の申し出を了承した。鍛冶屋は驚異的な速さで頑丈な砦を建築していったため、神々はロキに頼み、鍛冶屋の妨害をさせる。妨害に気づいた鍛冶屋は、怒り狂い、本性である山の巨人をあらわした。そのため、遠征に出ていたミズガルズの守護神である雷神トールを呼び、トールによって山の巨人は頭蓋骨を粉々に砕かれ、 (死者の支配者ヘルが住んでいる) ニヴルヘルに投げ入れられる。

[19] 少なくとも 28 の類話が報告されている。

[20] この話型は、大きな建造物の建築に関する伝説として、工事に援助してくれたものの名前を当てるという、 AT500 に分類されている (Cf. Thompson1946, pp.47-49, Johannes Bolte und Georg Polívka, *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*, I, Georg Olms, Hildesheim, 1963, S. 495-497) 。

この話型のモティーフに組み込まれている。オーラヴ王が建築した教会[21] のそれぞれに「建築家」であるトロルがおり、その各々が異なった呼称をもつ[22] 。そのトロルの呼称が地域に各地域で定まっているか否かは現時点では定かではないが[23] 、トロルの呼称が話型の必須事項になっていることは明らかである[24] 。

反対に、採集された地域、語り手は異なるが同じ呼称をもつトロルがいる。それが、「トロン」 *Trond* (資料 1: Sogur frå Sætesdal 27 番、以下 SS 、AT1161[25]) と「ロンダーネでのトナカイ狩り」 *Rensdyrjakt ved Rondane* (AM64 、 AT 番号該当なし) に登場するトロルである。どちらの物語にも「トロン」 Trond という名を持つトロルが登場する。先に採集された物語は「ロンダーネでのトナカイ狩り」[26] である。この物語にはいくつかの挿話が入れられており、その中の一つの挿話「ペール・ギュント」 *Per Gynt* に呼称をもつトロルが登場する。

> (チーズ作りをするための) 小屋には四人の男がいてチーズ作りの女たちを狙っていた。彼らは丘のトロル (haugtrøll) で、それぞれ、「グスト・イ・ヴェーレ」 “Gust i Væré” 、「トロン・ヴァルフィヤーレ」“ *Trond Valfjellé*” 、「シェストル・オゥバッカ」“Tjøstol Åbakka” 、「ロルヴ・エルドフェルプンゲン」“ Rolv Eldførpungjé”といった。(その後、トロン・ヴァルフィヤーレは主人公ペール・ギュントに撃ち殺される。)

トロルたちのそれぞれの名前はヴァルセーテル Valseter (セーテル seter とは夏場の放牧地、主として山・丘) の地名に由来している。つまり、先に挙げたトロルの呼称が話型およびモティーフに由来するのに対し、この物語に登場するトロルの名前はノルウェーのセーテ

---

[21] 伝道師の王であるオーラヴ王は、ノルウェー各地に多くの教会を建設したことは間違いないが、民間説話において、彼が実際に建築した教会よりも多くの教会が彼の手によるものだと伝えられている (Cf. Kvidland1991, p. 343) 。

[22] *King Olav, Master Builder of Trondheim Cathedral* に登場するトロルの名前は Tvester 、 *Saint Olav and the Master Builder* のトロルの名前は Sigg である。

[23] 資料 1: FN 2a 、34 番は、話型は異なるが、両者ともセールヨー Seljord 教会の建築を手伝ったトロル Skaane 「スコーネ」が登場する。しかし、両物語が同じ語り手によるもののため、判断がし難い。

[24] 他方で、トロルの妻子の名前、また詳細について描写されていない。

[25] Hodne, AT1161: 「ドヴレの猫」 Kjetta på Dovre (「熊使いとその熊」 The bear trainer and his bear).

[26] 1845 年収集。また、この物語の題材となっているロンダーネ Rondane はヘードマルク Hedmark 県、オップラン Oppland 県に跨る 10 の峠を含む地域一帯を指し、この地域にまつわる、いくつかの小話 (挿話) を語り手が物語内で話している。

ルの丘に由来していることがわかる。他方、後に採集された *Trond* 「トロン」 (1913 年採集、1927年出版) に登場するトロルの呼称の由来はどうだろうか。「ロンダーネでのトナカイ狩り」と同様、「トロン」に登場するトロルもベルフィヤル *Berrfjell* [27] という山の親分として登場し、地名と結びついている[28] 。

> [クリスマスイヴに、少年がある家の主人に一晩の宿を求め、その家に泊まる。すると、大勢のトロルがその家にやってくる。] そのトロルたちは、大きいのもいれば小さいのもいた。そのうちの一人は、ひときわ大きく怖そうな面持ちをしていて、テーブルにつきそうなほどの長い鼻を持っていた。そのトロルは親分で、子分 (のトロル) たちは親分のもとへ行き、「さあビールをどうぞ、トロン *Trond* !」と言う。少年は鉄砲を構え、トロンの長い鼻を打ち抜く。 (中略) 近くの山から、「何を騒いでいるのだ ? 」という声が聞こえ、「兄貴のベルフィヤル *Berrfjell* が鼻を無くしたのです」と子分が答える。

つまり、トロルの呼称は語り手の意思で物語に描写されるのではなく、話型あるいは地名と密接に結びつき、物語の中で言及される。

よって、いくつかのノルウェー民間説話において、呼称をもつトロルが登場するが、その呼称が描写される場面は、話型に依存しているか、あるいは地名と結びついているということができるだろう。他方で、呼称をもつトロルが登場する物語では、「トロン」を例外として、トロルの外形についての描写がみられない。これらのトロルは、外形よりも呼

---

[27] フィヤル fjell とは、でこぼこで、たいていは木の生えていない高地湿原を指す (小沢俊夫編、『世界の民話 3　北欧』 [1967] 、櫛田照夫 (抄) 訳、ぎょうせい、 1999 年、 248 頁参照) 。

[28] 「ロンダーネでのトナカイ狩り」の挿話の一つである「ペール・ギュント」は口承だけではなく、書承でも16世紀から伝えられてきた物語で、ノルウェーに広く知られている。また、「トロン」という物語は、「ペール・ギュント」の物語の後半部に類似しているため、「ペール・ギュント」からの派生話である可能性がある。あるいは、 1867 年に公演された、ヘンリック・イプセン Henrik Ibsen による戯曲『ペール・ギュント』 *Peer Gynt* はアスビョルンセンとモーが編集した「ロンダーネでのトナカイ狩り」からの借用を行っており、 Trond i Valfjellet という名のトロルが登場する (Cf. Henrik Ibsen, *Peer Gynt* [1867], Gyldendal Norsk Forlag, Oslo, 2005 (2. utgave), s. 38) 。そのため、戯曲『ペール・ギュント』に登場するトロルの呼称からの伝播の可能性もある。また、西ノルウェーにおいて、「トロン」という呼称を持つ、巨大な図体、長い鼻、怖い面持ちのトロルが登場する「トロンの伝説群」 Trondsegneneが分布しているため、西ノルウェーにおいてはある程度トロルの名前が決まっていたと推測できる。 (「トロンの伝説群」については、 Cf. Brynjulf Alver, *Jomfru Marias Gudmorsgåve: Eventyr frå Hordaland*, Norsk Eventyrbibliotek Band 4, Det norske samlaget, Bergen, 1972, s. 182.)

称の付与に語り手の重点が置かれ、外形の描写は重要性がないため省かれているのではないだろうか。トロルの呼称を物語内で言及することが物語の結末を導く一部になっている場合および、地名との結びつきを示す場合の 2 つが、トロルが呼称をもつ条件と言えるだろう。

2. トロルと主人公との関係 (属性)

ノルウェー民間説話のみに限らず、民間説話に登場する超自然的存在は、確かに、必ずしもいずれかに分類されるわけではないが、そのいくらかは (主人公に対して) 「敵対者」と「助力者」の 2 つに大別される場合がある。トロルもその例外ではなく、「敵対者」としてのトロルと「助力者」としてのトロルが物語のなかに登場する。これから行う分析において、「敵対者」と「助力者」のトロルを区別し、分析を行っていくことにする。

2-1. 「敵対者」としてのトロル

ノルウェー民間説話において、多くの場合、トロルは敵対者として登場する。では、トロルが敵対者として登場する場合、トロルは主人公に対してどのような行動をとるのであろうか。敵対者としてのトロルがとる行動は大きく 3 つに分類することができるであろう。

一つ目は、トロルの「人間を攫う」という行為である。ノルウェー民間説話において、トロルは、性別を問わず男トロル、女トロル両者ともに人間を誘拐する[29] 、あるいは攫おうとするが主人公によって失敗に追い込まれる。トロルが人間を攫っている瞬間が、語り手によって言及されている物語と[30] 、その場面の描写がない物語があるが、いずれにしても、トロルが人間を攫う理由は、 1) 自らのまたは親族の結婚相手にするか、自分の住処に連れ帰り一緒に暮らす場合、あるいは、 2) 人間を食材として扱っている場合の 2 通りである。そのため、男トロルは女の人間を、女トロルは男の人間を攫うという法則性が見られる。そしてそういったトロルは、人間を攫うために自ら人間社会に足を踏み入れるこ

---

[29] 今回研究対象とした資料では、圧倒的に男トロルによるものが多かった。

[30] 資料1: AM 2、 7 、 9 、12、13、14、24、25、31、33、34、35、40、53番。16番、40番および53番は、自ら人間を攫わないが、人間の女と結婚するために罠を仕掛けている。また、28番と60番は、人間に親族を差し出させる。32番は父親である王に売られた王子がトロルの家にいる。

とになる。アミリアンによれば、「人間の世界と直接接触する」という行為は、トロル固有の特徴であると指摘している[31]。トロルと多くの特徴を共有するドラゴンやオーグルには、「人間の世界と直接接触する」という行為は見られず、自ら人間を攫いに行くのではなく、自分のもとに人間が来るのを待っている点で、トロルのこの特徴は他の超自然的存在と異にしている。そのため、このトロルの「人間を攫う」という行為は、人間社会に直接トロルが訪れるという点で、特徴的なものだと言える。

二つ目は、「人間に魔法をかける」という行為である。トロルは何らかの理由で、人間に魔法をかけ、その多くの場合、人間を別の姿 (石、白熊、トロルなど) に全身あるいは身体の一部を変身させる[32]。このトロルの「人間に魔法をかける」という行為の理由は、物語の中で語られず、例えば次のような描写が語られるのみである。

> [女主人公が夫である白熊に与えられた禁止事項を破る。] 「さぁ今おまえは僕ら二人とも不幸になってしまう行いをしたんだ。あと一カ月足らずで、僕は助かったのに。僕は、ある女トロル *trollkjerring* に魔法をかけられて、昼間は白熊になってしまうんだ。しかし、もうおしまいだ、僕はお前のもとを離れ、その女トロルのもとへ行かなければならない 」。
>
> (*Kvitebjørn kong Valemon*「白熊王ヴァレモン」 (AM13 、 AT425A) より)

このように、トロルに魔法をかけられた、という事実は、登場人物たちのセリフや会話から判明することが多く、そこに魔法をかけられた場所や理由までは語られていない。しかしながら、トロルが魔法を媒体として、人間に干渉し、影響を与えている様子がみてとれ、「人間に魔法をかける」という行為は、敵対者としてのトロルが人間社会に接する際の特徴的な行為の一つとしてあげられるだろう。

最後は、トロルの「自分の住処にやって来た主人公を襲う」という行為である。民間説話に登場する主人公はしばしば自宅を離れ、森や山へ向かう。ノルウェー民間説話の主人公も例にもれず、物語の発端で山や森に旅に出る。多くの場合、主人公はその旅先でトロルと出会い、トロルに襲われる[33]。主人公がトロルに襲われる切っ掛けは、主人公がトロ

---

31 Cf. Amilien1996, pp. 252-256.

32 資料1: AM 2、 6 、 8 、11、 13、 20、 26、 32、 39番参照。

33 資料1: AM 1、 3 、 7 、11、 14、 18、 21、 27、 31、 35、 64、番、 FN 1b 、33、 72番参照。

ルの住処のものを傷つける、あるいは主人公がキリスト教徒であるなどさまざまであるが、主人公が襲われる切っ掛けはいずれの場合も、主人公がトロルの住居、つまり縄張りを侵害しているという点に集約できる。したがって、トロルが主人公を襲う行為は、自らの住処にとって異質なもの、また損害を与えるものを排除する行為としてとらえることができるのではないだろうか。

以上の「人間を攫う」「人間に魔法をかける」「自分の住処にやって来た主人公を襲う」の 3 つの行為がノルウェー民間説話に登場するトロルに特徴的なものである。しかし、ここで例外として、もう 1 つの別の行為を加えたい。それは、トロルの「祝祭日に人間社会にご馳走を食べにやってくる」という行為である。

ノルウェー民間説話には祝祭日、主にクリスマス (イヴ) に人間社会にやってくるトロルが多く描かれている。本節 1. で取り上げた「トロン」 *Trond* もその話の一つで、AT1161 に分類されている。今回研究対象とした民間説話において、「トロン」の他に 4 類話がみられた[34] 。その話のすべては、クリスマスイヴあるいはクリスマスに、トロルが人間社会にやって来て、人間が用意したご馳走と飲み物で宴を催すというものである。いずれのトロルもドヴレ山 Dovrefjell に住居をおいている。ドヴレ Dovre はノルウェー中部の山岳地帯の地名であり、その中央に横たわるドヴレ山脈には多くのトロルが住むと考えられていた。ホーデネ Hodne のまとめによると、AT1161に分類される類話は64話報告されており、さまざまな地域から報告されているにも関わらず、トロルたちの住居はドヴレにおかれている[35] 。つまり、ノルウェーの各地域で「ドヴレ山」はトロルの巣窟であると考えられており、超自然的存在の力が最も強まるとされていたクリスマスイヴ (冬至祭前日) の夕方と夜に姿を現す様子がうかがえる[36] 。現在のクリスマス (jul) は、キリスト教の「現地化」[37] の際に、古来北欧で行われてきた冬至祭 (jul) に取って替えられたものである。古来の冬至は、

---

[34] 資料 1: AM 23 、64 番、 SS 26 番、 FN 53a 番参照。これらの物語には、複数のトロルが同時に登場するため、大まかなトロルの外形の描写しかされていないが、共通してみられる外形的特徴は長い鼻である。

[35] Cf. Hodne1984, pp.219-222.

[36] Kirsten Hastrup, *Den nordiske verden*, I-II, Nordisk Forlag A.S., Copenhagen, 1992 (ハストロプ , キアステン編、『北欧社会の基層と構造 1 － 北欧の世界観 』、 菅原邦城・新谷俊裕訳、東海大学出版会、1996 年、76 頁参照).

[37] キリスト教会側が北欧諸国に宣教を行っていた時代は、彼ら北欧諸国に住む人々は代替的な宗教的共同体に対する需要も、魂の救いへの需要もほとんど持たなかったため、キリスト教の側も変質を余儀なくされた。その結果として、宣教を受ける側の文化 (北欧諸国) が、その必要に合わせてキリスト教を適応させ変化させるという「現地化」が行われた。 (阪西紀子、「異教からキリスト教へ：北欧人の改宗を考える」、『一橋論叢』 第 131 巻第 4 号、2004 年、 310 頁参照)

夜が最も長くなる日であり、超自然的存在が力を持ち、活発に飛び交う日として考えられてきた。そのため、AT1161に分類される類話以外にもクリスマス、クリスマスイヴにトロルが登場する話が5 話[38] みられる。例えば、「もじゃもじゃ頭」 *Lurvehette* (AM20 、AT711[39]) では、クリスマスイヴに王宮のなかで遊んでいる女トロルたち trollkjerringene が見出され、人間たちはそれを容認している姿が描かれている。本来、キリスト教の祝祭日であるクリスマスイヴ、クリスマスに、トロルは人間社会に容易に入り込んでおり、人間はそれを (好意的ではないが) 受け入れている姿がみられ、一種の矛盾性が描かれている。しかしながら、物語の終結部で、主人公に民家から追払われ、その矛盾性を解消している。このトロルと人間との関係は、祝祭日のみにみられる特殊な行為として区別して考えるべきであろう。

2-1-1. 「敵対者」としてのトロルの外形の特徴

ノルウェー民間説話に登場するトロルの外形の特徴として、これはアミリアンも指摘しているが[40] 、巨大な図体、 (長い鼻を含め) 醜く恐ろしい容姿があげられる。それに加えて、男トロルは、複数の頭を持っている場合が多くみられる。頭の数は、例外はあるものの、高い確率で 3 の倍数である。この複数の頭の所有は、男トロルにのみ見られる特徴であり、頭の数は力の強さによって多くなる。他方で、女トロルは、醜く恐ろしい容姿に加え、年老いた容姿という身体的様相もみられる。そのため、「年老いた女トロル」 gamletrollkerrunga という複合語名称で描写されたり (AM6) 、あるいは「老婆」gammel kerring といった後に、「トロル」 troll と言い直す語りがみられる (AM19) 。このような身体の様相と「トロル」という固有名詞が結びついた複合語が、いくつかの物語において確認できる。図体の大きさを表現している、「大きなトロル」 stortroll (AM60, 64) 、「小さなトロル」 småtroll (AM6, 59) がその例である。「小さなトロル」は、集団で姿を現すことが多く、他のトロルの仲間あるいは子分として登場する頻度が高い。力が強ければ強いほど、頭の数が多くなるのと同様に、図体の大きさは、力の強さに比例していると言えるだろう。

---

38 資料 1: AM 20 、53、65番、 FN 33 、 1) 番参照。

39 Hodne, AT711:「もじゃもじゃ頭」 Lurvehette (「美女と醜女の双子」 The beautiful and the ugly twins).

40 Cf. Amilien1996, pp. 250-251.

物語において、トロルの外形が描写される場合は、図体の大きさ、容姿の醜さに対する言及が多いが、1話にのみに確認される様相の特徴があるなど、物語に描写されるトロルの外形の特徴は、語り手が持っているトロルのイメージに依るところが大きい。また、尻尾のあるトロルがいくつかの物語において登場するが、トロルの尻尾という特徴は、挿絵が入れられた後に、他の超自然的存在フルドラ huldre から借用されたものであると指摘されている[41]。トロルのイメージは挿絵に起因する部分が多いため、挿絵が入れられる以前(1837年以前)に、語り手を含めた民衆が抱いていたトロルのイメージは一つの形象を取り得ない。しかし、トロルを描いた大部分の挿絵がそうであるように、図体が大きく、醜く恐ろしい容姿がトロルの主要な特徴と言って間違いないだろう。

最後に、トロルの外形と殺され方に注目してみよう。主人公は、しばしば攫われた人間を探し求め、トロルの住処にたどり着く。そこで、トロルを何らかの方法で殺すという展開が多くみられるが、トロルの殺され方は物語によって異なり、一つのまとまりを見ない。しかしながら、男トロルの場合、巨大な図体と醜い容姿を持ち、加えて複数の頭を持っていることが多く、斬首という形で殺され、また、トロルが別の場所に自らの体の外に魂を保管しているという＜外在魂のモティーフ＞が使われている場合は、主人公が外在魂を潰し、トロルに死を与えるといったように、トロルの外形的特徴に応じてトロルを殺している。つまり、殺され方は物語が属する話型に依存しているだけではなく、またトロルの外的特徴にある程度依存していると言えるだろう。

2-1-2. 「敵対者」としてのトロルの出現の仕方の特徴

本節 2-1. では、トロルの行為の特徴を「人間を攫う」「人間に魔法をかける」「自分の住処にやって来た主人公を襲う」の3つに大別した。先に述べたように、「人間に魔法をかける」という行為は、登場人物たちの会話あるいはセリフから事実として明らかになるものであり、その行為を主人公が目撃しないため、「人間に魔法をかける」トロルの出現の仕方を抽出することはできない。しかし、他方で、「自分の住処にやって来た主人公を襲う」および、主人公自らがトロルに連れ去られる物語は少ないが「人間を攫う」トロルの出現の仕方が確認できる。特に、主人公がトロルの住処に侵入した際のトロルの出現の仕方が特徴的である。

[41] Cf. Amilien1996, p. 262.

そのトロルの出現の仕方とは、「キリスト教徒 (の血) の臭いがする」というセリフを伴いながらの登場である[42] 。このセリフは、多少の言葉の違いはみられるが、決まり文句として定型化されている。カミラ・インゲマルク Camilla Ingemark によれば、トロルはキリスト教に関係する事物に嫌悪感を示すが、トロルはその嫌悪感を「キリスト教徒 (の血) の臭いがする」というセリフに凝縮していると指摘する[43] 。確かに、キリスト教に関係する事物に対する嫌悪感を示す役割をこのセリフは担っているであろう。しかしながら、それは一側面であり、上でも述べたように、キリスト教に対する嫌悪感よりも、まず自分の住処に侵入する者への嫌悪感が先立っているのではないだろうか。それは、他の特徴的なトロルの出現の仕方によって裏付けられるであろう。例えば、「トロルと大食い大会をした灰つつき」 *Askeladden som kappåt med trollet* (AM27 、 AT1088 [44]) 、「山の草地 (セーテル) へ行って太ろうとしている三匹の雄山羊」 *De tre bukkene Bruse som skulle gå til seters og gjøre seg fete* (AM3 、 AT122E [45]) に登場するトロルの出現の仕方を見てみよう。

> [主人公が森に入り木を切ろうとすると、] トロルが主人公のもとへやって来て、「オレの森で木を切るやつは、殺すぞ！」と言う。
> (AM27)

> [主人公の山羊が橋を渡ろうとすると、] 橋の下から、「誰だ！オレの橋を渡っているやつは！」と怒鳴りつけてくる。
> (AM3)

また、「黄金の鳥」 *Gullfuglen* (AM26 、 AT550 [46]) でも、主人公が森に入り、ほんのわずかな木の枝に触った瞬間に、憤慨したトロルが叫びながらやってくるという描写が見られる。いずれも、主人公がトロルの縄張りを侵害した際に、トロルの出現が見出される。つ

---

[42] 資料1: AM 1、 7 、24、31、33、35番参照。

[43] Cf. Ingemark2004, pp. 118-120. 他方で、アミリアンは、トロルの人間の血の臭いに対する極端な敏感さは、カニバリズムの古い形態の名残であると指摘している (Cf. Amilien1996, p. 54) 。

[44] Hodne, AT1088 (AT1060+1049+1088): 「大食い大会」 Kappspising (「食べくらべ」 Eating contest).

[45] Hodne, AT122E: 「三匹の雄山羊」 De tre bukkene Bruse (「三匹の雄羊」 Wait for the fat goat).

[46] Hodne, AT550:「黄金の鳥」 Gullfuglen (「黄金の鳥の捜索」 Search for the golden bird).

まり、ここでは主人公がキリスト教徒か否かが問題なのではなく、主人公がトロルの縄張りに侵入したか否かが重要なのである。したがって、第一条件として、主人公がトロルの住居に足を踏み入れるという行為があり、それに従属してトロルの出現の際に、「キリスト教徒 (の血) の臭いがする」というセリフが伴われると考えられる。

2-1-3. 「敵対者」としてのトロルの住居の特徴

次に、トロルの住居の特徴であるが、住居とされている場所として、山、森、岩、丘、城が主として挙げられる。本節 1. で取り上げたように、研究対象とした民間説話において、呼称をもつトロルは少数派であったが、他方で、場所と「トロル」という語が組み合わさった複合語が多くみられた。その多くは、山のトロル(bergtroll [47] , hifjell troll [48]) 、森のトロル (skogtroll [49]) 、丘のトロル (hangatroll [50])、海 / 水のトロル (sjøtroll [51] / vasstroll [52]) の 4 種類である[53] 。これらの名称は、彼らが住んでいる場所に由来していることは明らかである。哲学・神話学者である尾崎和彦によれば、北欧神話を含むゲルマン民族の思想において、「巨人[54] 」は自然現象と結びつき、またそれぞれの独自の力に応じて、「山の巨人」「森の巨人」「水の巨人」「雷の巨人」「雲の巨人」の 5 つに分類されると述べている[55] 。また、尾崎は巨人を “ 冥界 ” の典型的な代表者であると捉えている。他方で、イギリスの神話学者ブライアン・ブランストン Brian Branston は、北欧神話における「巨人」は、「山の巨人」「霧の巨人」「火の巨人」の大きく三種類に分類している[56] 。ブランストンも尾崎と同様に、巨人を冥界の代表者であると指摘し、特に「山の巨人」は冥界

---

47 資料1: AM 7、 8 、17、16、35、39、63番参照。
48 資料 1: FN 52c 番参照。
49 資料1: AM 1番参照。
50 資料 1: AM 48 、64番参照。
51 資料 1: AM 60 番参照。
52 資料 1: AM 44 番参照。
53 「山のトロル」 bergtroll は複数の頭を持つ、巨大な図体、醜い容姿という特徴をもち、いずれも男トロルであり、女トロルが bergtroll という名称をもつことはなかった。さらに、複数の頭を持つ bergtroll は全て敵対者として登場し、斬首によって殺されるという結末をもっている。「森のトロル」 skogtroll が登場する該当物語では 3 人で 1 つの目玉しか持っていないという外形的特徴を持っている。しかしながら、「山のトロル」「森のトロル」以外の場所と関係する複合語名称をもつトロルへの外形への描写は見られない。
54 ここで尾崎は、ヨウトゥン、スルス、トロルを「巨人」と総称している。
55 尾崎和彦、『北欧神話・宇宙論の基礎構造—『巫女の予言』の秘文を解く』、明治大学人文科学研究所叢書、白鳳社、1994年、 511 頁参照。
56 尾崎 1994 、513-514頁参照。

の住人として扱っている。アミリアンも、トロルの住んでいる場所、特に山に焦点を当て、特定の山に位置していると考えられている死の世界と、トロルの属する世界との考察を行っている[57]。アミリアンは、ノルウェー民間説話において描写される、トロルが属する世界に広がる肥沃な大地と、死の世界に存在する楽園のイメージを重ね合わせている。その論の中でアミリアンも指摘していることであるが、トロルは民間説話において、人間社会とは異なったある空想の「別世界」に住んでいる場合が多くみられる[58]。先ほどトロルの主な住居として挙げた「城」もそこに建てられているものである。トロルの住んでいる世界は、人間が住んでいる場所よりも豊かで、肥沃な場所であり、金銀財宝にあふれている。別世界への入り口は、岩の下、高い岩山の上、山の中、何千マイルも離れた場所などさまざまであるが、共通して言えることは、トロルの住む別世界は人間社会から隔離されており、人間が決して感知できない場所にあるという点であろう。

2-2. 「助力者」としてのトロル

ノルウェー民間説話において、トロルが助力者として登場することは、トロルが敵対者として登場することに比べ頻度が低い。今回、研究対象とした資料の中からは 4 話に、助力者の役割を担ったトロルが登場していることがわかる[59]。「母鳥」*Fugl Dam* (AM14、AT301[60])に登場する助力者トロルは、敵対者として登場するトロルと同様に、巨大な図体、醜い容姿を持ち、さらに聞くと恐ろしくなるような声を持っている。この物語に登場する助力者トロルは、他の 3 話は見返りなく主人公に助言を与えているのとは異なり、自らの計画を達成させるために主人公に助力する[61]。他方、他 3 話は、自分の子どもを主人公に助けてもらったお礼に助言を与えるなど、「小人」の役割と類似している[62]。助力者としてトロルが登場している物語が 4 話と少ないため、判断し難いが、小人もトロルと同

---

57 Cf. Amilien1996, pp. 108-117.

58 Cf. Amilien1996, pp. 252-256.

59 資料 1: AM 14 、35、49番、 FN 33 番参照。

60 Hodne, AT301:「三人の盗まれた王女」 De tre røvede prinsesser (「盗まれた三人の王女」 The three stolen princesses).

61 この物語に登場するトロルは、自分の仕えている (主人公にとって敵対者として登場する) トロルを殺し、トロルの王になることを目論んでいる。そのため、主人公に助言を与え、自分が仕えているトロルを殺させるのである。

62 ノルウェー民間説話のドイツ語への翻訳を行ったクラーラ・ストロェーベKlara Stroebeは、 AM 49 番 (Tre sitroner 「 3 つのレモン」) に登場する助力者トロル (小さなトロル småtroll) を「小人」 (Zwergen) と訳している。

様に敵対者・助力者の二重の性格をもっているため、小人とトロル (特に小さいトロル) が混同している可能性は否めないだろう[63] 。

3. 比喩としての「トロル」という語の使用について

本章第 1 節で述べたように、実際には超自然的存在トロルではない登場人物に、「トロル」というあだ名が付けられている場合がある[64] 。その使用方法には 3 つのタイプがあり、比喩としての「トロル」という語の使用法を参照すると、トロルのいくつかの側面を観察することができる。一つ目は、内面的性格に対する使用である。例えば、「愚かな夫たちとトロルの妻たち」 *Dumme men og troll til kjerringer* (AM4 、 AT1460 [65]) では、主人公の夫の「愚かで騙されやすい性格」の喩として「トロル」という語が使用されている。他にも、主人公の妻の頑固で強情な性格を例える際や (AM47) 、せっかちな気質を揶揄する際に使用されている (SL47.4)。二つ目は、外形的特徴に対する使用が挙げられる。登場人物が、例えば、くる病などの身体的に奇形である場合に用いられる。三つ目は、登場人物の行為に対する使用である。例えば、美しい主人公 (男) が一言も話さないでいるとトロルだと疑われるという描写や (AM29) 、女王が継娘に対して酷いいじめをしたことに対する描写に使用されている (AM50) 。

他方で、「トロル」という語は、人間以外に対するあだ名としても用いられる[66] 。人間の愚かな性格を「トロル」という語を使用し、表現していたのと同様に、熊も愚かな性格を持つ動物であるとして「トロル」と呼ばれている場面がある (AM38) 。また、狩人たちがなかなか仕留めることのできない動物 (雷鳥・兎) に対して、「トロル」という語を使用している (AM 45)。

ここまで、ノルウェー民間説話におけるトロル像の特徴を、呼称をもつトロル、「敵対者」「助力者」としてのトロル、および「トロル」という語の比喩的な役割について、総括的に述べてきた。民間説話において、いくつかの物語で呼称をもつトロルが見られたが、

---

63 Cf. Thompson1946, pp. 248-250.

64 資料1: AM 4、29、43、47、50、55番、SL 47.4番参照。

65 Hodne, AT1406: 「愚かな夫たちとトロルの妻たち」 Dumme men og troll til kjerringer (「陽気な女房たちの賭け」 The merry wives wager.).

66 資料 1: AM 38 、45番参照。

その呼称は話型、あるいは地名に由来するものであることが明らかとなった。また、「敵対者」としてのトロルの行為の特徴を 3 つに大別し、それぞれ「名称と外形」「出現の仕方の特徴」「住処」の 3 つの項目と結びつけながら、トロル像の特徴の分類を行った。本節で分類したトロル像の特徴を踏まえながら、次節でアイスランド民間説話におけるトロル像の特徴を総括し、その分類を行っていく。

第 3 節　アイスランド民間説話におけるトロル像の特性とその分類

本節では、アイスランド民間説話に登場するトロル像を展望していく。アイスランド民間説話は、他の北欧諸国に伝わる民間説話の話型と比較すると、多数の話型が欠けており、例えば動物説話に属する物語は、アイスランドからは報告されていない[67]。他方で、民間説話において、トロルだけでなく、幽霊・妖精・人魚・水妖・水馬など、多種多様な超自然的存在が登場する物語が多く報告されている。前節でノルウェー民間説話に登場するトロル像をみた際と同様の分析方法で、アイスランド民間説話にあらわれる超自然的存在トロルがどのように語られているのかを見てみる。まず、ノルウェー民間説話におけるのと同様に、アイスランド民間説話においても多様な呼称をもつトロルが確認できるため、はじめに名称と外形において、呼称をもつトロルについて検討してみよう。

1.　さまざまな呼称をもつトロル

はじめに、アイスランド民間説話において、「トロル」という固有名詞以外に呼称を持つトロルから分析していく。今回、研究対象としたアイスランド民間説話51話中14話にその種の呼称をもつトロルが登場している[68]。この数字は、ノルウェーの93話中 4 話という数と比較すると、割合からみて圧倒的に多い。ノルウェー民間説話において言及されるトロルの呼称は、前節で検討した結果、物語が属する話型、あるいは地名に由来することが

67　アウトナソン 1979、349-351 頁参照。

68　資料 2: Íslenzkar þjóðsögur og æfintýri (以下、編集者 Jón の頭文字をとり J と略す) 2、6、8、14、16、24、25、28 番、Flateyjarbók (以下、F) 1、2、3、4、5 番、Tales from Húsafell (以下、TH) 88 番参照。また、物語の発端部では人間として登場し、後にトロルと化す人物にも呼称がついている (J 7、9)。他方で、トロルに魔法をかけられ、トロルの姿を取っている王子にも呼称が見られた (J 34)。

分かった。それでは、アイスランド民間説話に登場するトロルの呼称はどうだろうか。いくつかの話をみながら、物語中のどのような状況で語り手がトロルに呼称を与えているのかを検討してみよう。

まず、「ギーリトルット」 *Gilitrutt* (J6 、 AT500) に登場するトロルの呼称を見てみよう。この物語は、第 2 節 2. で取りあげたノルウェー民間説話「トロンハイム大聖堂の建築者、オーラヴ王」と「聖オーラヴと建築家」の 2 話と同じ AT 番号に属している。ノルウェーのこの 2 話とは異なり、「ギーリトルット」に登場する女トロルは、教会建設ではなく、百姓の妻の仕事を代行している。他方で、女トロルは、自分の名前 (呼称) を約束の期限までに見抜いて当てることができなければ、報酬をもらうという申し出をしており、また物語の終結部で名前 (呼称) を言い当てられ、賭けに負けるという点で、ノルウェーの物語で用いられているモティーフと同じであると考えられる。したがって、「ギーリトルット」において言及されるトロルの呼称は、ノルウェーのものと同様に話型それ自体に有機的に組み込まれていることがわかる。他の13話も、ノルウェー民間説話に登場するトロルと同じ条件で呼称をもっているのであろうか。それをまず「女トロル、クラウーカ」 *Kráka tröllskessa* (J 8 、 AT 番号該当なし) で、検討してみよう。

> 昔々、ブラウフィヤルの側にあるブラウーヴァムに、クラウーカ *Kráka* という女トロルが住んでいた。彼女は、現在でも見ることができるが、そこにある洞窟に住んでおり、そこは人間が決してたどり着くことのできない険しい岩山に囲まれた高い場所にある。

この物語では、一般的な他の物語の冒頭で行われる主人公の紹介と同じように[69] 、物語の冒頭でトロルの呼称が提示される。その後、語り手は、物語内で「女トロル」 tröllskessa や「女巨人」 skessa という名称は用いず、「クラウーカ」という呼称を最後まで使用する。このトロルの呼称への言及は、先ほど挙げた、「ギーリトルット」やノルウェー民間説話で確認したような、呼称が話型に組み込まれている、あるいは地名に由来するものではない。他方、この物語は AT 番号に分類できないアイスランド独自の物語のため、他の類話との比較は叶わない。 *Kráka* とは、古アイスランド語で「カラス」 *crow* (女

[69] ここでいう一般的な物語とは、日本の民間説話においても多く見られるが、「昔々、あるところに (名前) という者がいました」という発句をもつ物語を指す。

性名詞) の意である。ジャクリーン・シンプソン Jacqueline Simpson も、注釈において *Kráka* をカラスと結び付けている[70] 。しかしながら、少なくともこの物語において、語り手は、話型や地名に関係なくトロルに呼称を与えていることは明らかである。この点に注目しながら、次に AT 分類によって類話が確認できる物語を取りあげ、そこでトロルの呼称がどのように使用されているかをみてみよう。

ここで取りあげる物語は、 AT327[71] に分類されている、「シグルズル、インギビョルグ、クロウクネヴィヤ」 *Sigurður, Ingibörg, and Króknefja* (TH88) 、「ブラウランド島のスルトラ」 *Sagan af Surtlu í Blálandseyjum* (J25) の 2 話である。両話において、語り手はそれぞれ次のような場面で、トロルの呼称に言及している。

> [人間の姿に変身をした女トロル troll woman が妃の座につき、継子たちを自分の妹のもとへ食料として送る。その妹が、子どもたちが自分のもとへ届くのを待っている際に、] 「姉のブルーノーズ *Blue Nose* のところにいる王様の子どもたちはいつ来るのだろうか? 姉のブルーノーズ *Blue Nose* のところにいる王様の子どもたちは来そうにないなぁ」とつぶやいていました。[72]
>
> (TH88)

> [ある国の妃が亡くなり、墓の前で王様が悲しんでいると、ひとりの男と女が王のもとにやってくる。] 二人は王様に丁寧にあいさつし、王様はその挨拶に応え、王様は二人の名を聞く。女はゴズルン *Goðrún* 、男はラウズ *Rauður* と名乗る (二人とも正体はトロル) 。
>
> (J25)

両話に登場するトロル (たち) は、物語の発端部では人間の姿に変身をして、人間の姿で登場する。そのため、確かに、人間として登場しているために呼称をもっているのでは

---

[70] 注釈の意図は不透明であるが、物語中にクラウーカの (Mývatn から Siglunes までの) 移動距離は " カラス " が飛ぶ距離の 70 マイルを超えていると述べている (Cf. Jacqueline Simpson, *Icelandic folktales and Legends*, Tempus, UK, 2004, p. 91) 。

[71] AT 327: 「子供たちとオーグル」 The children and the ogre (TH88) / AT327A: 「ヘンゼルとグレーテル」 Hansel and Gretel [Brother and sister triumph over witch (ogress)].

[72] *Tales from Húsafell* に収録されている物語は、すべて保存されていたテープを文字 (英文) に起こしたものである。そのため、原書は英語文献である。

ないか、という推測がなされるかもしれないが、ノルウェーから報告されている AT327 に属する類話や、他のヨーロッパの AT327 に属する類話を参照してみる限り、登場する巨人 gygra や魔女に呼称はつけられていなかった[73]。さらに、AT870[74] に分類されている、「リーネイクとレウーヴェイの物語」 *Sagan af Líneik og Laufey* (J24) とノルウェー民間説話の「フィン王の娘」*The Finn King's daughter* (FN67)には、両話とも人間の姿に変身をした女トロルが登場するが、アイスランド民間説話の「リーネイクとレウーヴェイの物語」に登場する女トロルは呼称をもっているのに対し、ノルウェーの「フィン王の娘」に登場する女トロルには呼称はみられなかった[75]。しかし他方で、何れの物語もトロルの呼称の重要性は低く、物語の流れそれ自体に呼称の有無が影響することはない。また、呼称をもつトロルが登場する他12話に関しても同じことが言える。したがって、最初に取り上げた「ギーリトルット」 (AT500) 以外の物語に描写されるトロルの呼称は語り手の意思によって言及されているものであると言えるだろう。

よって、アイスランド民間説話にみられるトロルの呼称は、語り手の意思によるものが大半であり、話型や地名に関係なく、物語の中で言及されるものであると言えるだろう。しかしながら、他方で、語り手の意思によってトロルに呼称が与えられていたとしても、必ずしもその呼称に重点が置かれるわけではなく、昔話で主人公に呼称が付与されているのと同様に、トロルの呼称は意味を持たない可能性が高い。今回は、研究対象を民間説話に焦点を当てているため、サガに見られるトロルの呼称とアイスランド民間説話にみられるトロルの呼称が類似しているか否かについての検討はできないが、サガが物語の登場人物全員に名前を与える傾向があるという指摘も存在しているため[76]、その系統はアイスランド民間説話でも保たれていると捉えられるであろう。

---

[73] ノルウェー：「二人の子どもと巨人」 Dei to borna og gygra (採集地 Hordaland 県 Kvam) 、ドイツ：「ヘンゼルとグレーテル」を参照した (稲田 2004 、122-124 頁参照) 。

[74] AT870 「塚に閉じ込められた王女」 The princess confined in the mound.

[75] スウェーデンから報告されている類話にも超自然的存在に呼称は与えられていない。「洞穴の中の王女」 (ローン・ブレッチャー、ジョージ・ブレッチャー編、『スウェーデンの民話』 [1993] 、米原まり子訳、青土社、1996 年、212-221 頁参照 .)

[76] アウトナソン 1979 、360-361 頁参照。

2. 主人公としてのトロル

アイスランド民間説話ではトロルが主人公として登場する話が 6 話みられるが[77] 、これは、ノルウェー民間説話では一切見られなかったタイプの話である。アイスランド民間説話は、ノルウェー民間説話に比べ、伝説譚の性格をもつ民間説話が比較的多くみられるため[78] 、実在した人間とトロルとの関係や、地形の由来などを語る物語が確認できる。例えば、「女巨人の石」 *Skessusteinn* (J2 、 AT 番号該当なし) では、トロルの夫婦しか登場せず、そのトロルの夫婦の死ぬまでの過程が描写されている[79] 。この話のように、トロルが主人公として登場する話のいずれもが、トロルがどのように死んでいったかが物語られている。語り手は、トロルが住んでいた場所の具体的な地名を挙げるなど、身近な存在として捉えられていることが窺える。ノルウェー民間説話では、トロルの住んでいる場所に対する詳細な言及は確認できない。それに対して、アイスランドでは、トロルが主人公として登場する話以外でも、トロルの住んでいる具体的な地名が語り手によって言及される。すなわち、ノルウェー民間説話のトロルに比べ、アイスランド民間説話に登場するトロルは、身近に住んでいる、あるいは住んでいたと考えられており、実在の具体的な場所と結び付けられていたと推測されるだろう。

3. トロルと主人公との関係 (属性)

次に、アイスランド民間説話に登場するトロルと主人公の関係に注目する。ノルウェー民間説話で確認したのと同様に、「敵対者」としてのトロルと「助力者」としてのトロルを区別し、分析を行っていくことにする。

---

77 資料2: J 2、 9 、15、16、17、18番参照。また、 J 7 番は最終的にトロルと化す人間が主人公として登場する。

78 アウトナソン1979 、349-350頁参照。

79 【物語の概略】そのトロルの夫婦は、魔術を使い、毎年村から一人ずつ聖職者あるいは羊飼いを食料として自分たちの住処である洞窟に引き込んでいたが、村の教会の司祭としてエイリークがやって来てからは、食料を確保できなくなる。 (「ソーリル」 Þórir という呼称をもつ) 夫のトロルtröllkarlは食べ物が無くなったため、魚を釣りに行くが、そのまま死んでしまう。その後、妻のトロルtröllkerlingも日光と教会の鐘の音によって岩と化してしまい、死んでしまう。(J2) このように、物語の中でトロルしか登場しない話は他にもみられる。

3-1.　「敵対者」としてのトロル

アイスランド民間説話においても、ノルウェー民間説話同様、トロルは敵対者として登場する頻度が高い。ノルウェー民間説話では、トロルが敵対者として主人公に対してとる行動を「人間を攫う」「人間に魔法をかける」「自分の住処にやって来た主人公を襲う」の 3 つに分類し、この 3 つをノルウェー民間説話におけるトロルの特徴的な行動であるとした[80]。それでは、アイスランド民間説話に登場する敵対者としてのトロルは、主人公に対してどのような行動をとるのであろうか。

アイスランド民間説話においても、トロルが敵対者として主人公にとる行動は次の 3 つに大別することができるだろう。

一つ目は、「人間を攫う」という行為である。これは、ノルウェー民間説話に登場する敵対者トロルと同じく、トロルの特徴的な行動であると言える。しかしながら、アイスランド民間説話で敵対者トロルがとる行動は、ノルウェーのものとはいくつかの部分で異なっている。では、ノルウェーにみられる敵対者トロルとアイスランドの敵対者トロルとの類似点からあげていこう。アイスランド民間説話でも、トロルは、性別を問わず男トロル、女トロル両者ともに人間を誘拐し、または攫おうとするが主人公によって失敗に追い込まれるという点は共通している。しかし、ここからが異なる点であるが、ノルウェー民間説話では、人間を攫うのは圧倒的に男トロルによるものが多かったが、アイスランド民間説話では女トロルによる人攫いが目立っている。今回、研究対象とした物語において、トロルの「人間を攫う」という行為は、53話中14話にみられたが、そのうち10話が女トロルによるものである。さらに、トロルが人間を攫う理由が部分的に異なっており、アイスランド民間説話に敵対者として登場するトロルが人間を攫う理由は、 1) 自らのまたは親族の結婚相手にするか、自分の住処に連れ帰り一緒に暮らすため、 2) 人間を食材にするため、 3) 人間をトロルに変化させるため、 4) 攫った人間を自分の利益のために利用するため、の 4 つが挙げられる[81]。最初の 2 つはノルウェーと共通するものであるが、後者の 2 つはノルウェーには見られないものである。さらに、ノルウェー民間説話に登場する敵対者トロルには、男トロルは女の人間を、女トロルは男の人間を攫うという法則性が見られたが、アイスランドにはその法則性は見られず、物語によってまちまちである。ただし前節でも

80　第 1 章第 2 節 2-1. 参照。

81　1) J8, J33, J35, J37, MI2, TH87. 2) J2, J3, J4, J14. 3) J9, J11. 4) J24, TH96.

述べたが、ノルウェー民間説話と同様にアイスランドのものでも、トロルが人間を攫っている瞬間が語り手によって言及されている物語と、その場面の描写がない物語があるという点で共通点はある。しかしながら、ノルウェー民間説話に登場するトロルは自ら人間の世界に直接赴くが、それに対して、本節2. で挙げた「女巨人の石」(J2)のように、アイスランド民間説話のトロルは、魔法を用いて人間を人間の世界から自分の住処に引き込む場合もあるため、必ずしも人間の世界と直接接触するとは限らない。他方で、アイスランド民間説話に登場する敵対者トロルの特徴的な行動は、「人間をトロルにするために攫う」「攫った人間を自分の利益のために利用する」の二つであるが、これについては後程この説で取り扱うことにする。

二つ目は、「人間に魔法をかける」という行為である。アイスランド民間説話においても、トロルは人間に魔法をかけ、人間を何らかの理由で別の姿 (巨人、犬、牛など) に変身させる[82] 。ノルウェー民間説話と同様に、人間がトロルに魔法をかけられる瞬間は言及されてないが、他方で、ノルウェー民間説話とは異なり、なぜトロルが人間に魔法をかけたのかについて、次のように説明される場合がある。

> [主人公の恋人となるハルブルダン王子は女トロル*tröllskessa*に魔法をかけられ、巨人 jötunn / risa の姿にさせられる。主人公によって魔法が解かれ、元の姿に戻る。魔法をかけられた理由を語り手は次のように説明する。] 女トロルが王子を自分のものにしようとしたのだが、王子が抵抗したため、醜い、恐ろしい姿に変えたのである。
> (「人の好い継母ヒルドルと王女インギビョルグ」 *Hildur góða stjúpa og Ingbjörg kónigstochter Ingibörg* (J30) より)

このように、物語内で、語り手によってトロルが人間になぜ魔法をかけたのかが説明される。また、この物語でもそうであるように、アイスランド民間説話では、人間に魔法をかけているのは全て女トロルの仕業である。それに加えて「人間を攫う」という行為も女トロルに因るものであることが多く、女トロルは、男トロルに比べ能動的に行動していると言えるだろう。

最後は、トロルの「人間の姿に変身し人間社会に入り込む」という行為である。アイス

---

[82] 資料 2: J29, 30, 32, 34 番、 TH 89, 90 番参照。 J21 番に登場する男たちも魔法にかけられトロルのような外見に変身させられているが、「誰が」魔法をかけたのかは不明。

ランド民間説話では、人間の姿に変身をしたトロル (主として女トロル) が多くの物語に登場する[83] 。その大部分が、王の家来たちが難破した船が流れ着いた無人島、あるいは森で、金髪の美しい女 (女トロル) と遭遇し、王の後妻にするために女トロルを城に連れて帰るという導入部をもっている[84] 。つまり、人間の手によってトロルが人間社会の内部に運び込まれているのである。自分の住処に人間を連れ去るノルウェーのトロルとは異なり、アイスランドのトロルは自分の住処を捨て、人間の世界に入り込むのである。この行動は、アイスランド民間説話に登場するトロルの特徴的な行動であることは間違いないだろう。

以上見てきたように、「人間を攫う」「人間に魔法をかける」「人間の姿に変身し人間社会に入り込む」の 3 つの行為がアイスランド民間説話に登場するトロルに特徴的なものとして分類できるであろう。それ以外にノルウェー民間説話では、例外として「祝祭日に人間社会にご馳走を食べにやってくる」という行為を付け加えていたが、アイスランドのトロルにはこの行動は見られない[85] 。そのため、前節 2-1. で取りあげた、トロルの「祝祭日に人間社会にご馳走を食べにやってくる」という行為はノルウェー独自のものだと言えるだろう。

3-1-1. 「敵対者」としてのトロルの名称と外形の特徴

アイスランド民間説話に登場するトロルの外形は、巨大な図体、年老いている、醜い容姿、毛むくじゃら、という特徴が挙げられ、ノルウェーのトロルと類似性がみられる。しかしながら、先に述べたように、アイスランド民間説話に登場するトロルは、女トロルであることが多いため、男トロルの特徴である複数の頭をもつトロルが少数であった[86] 。さらに、アイスランドでは、人間の姿に変身しているトロルの登場が多いため、ノルウェーのものよりも、トロルの外形に対する描写が少ないことは否めない。そのため、トロルの外形に対する描写は、アイスランド民間説話よりも、ノルウェー民間説話のほうが詳細に語られていると言えるだろう。また、ノルウェー民間説話で多く用いられていた複合語名称は、アイスランド民間説話において、「夜のトロル」nátttröllを除いて皆無である。確認

---

83 資料 2: J 23, 24, 25, 26, 27, 29, 31, 33 番、 TH 88, 90, 92, 96 番参照。

84 妃の座に就いた女トロルは、「王の子どもたちを国から追い出す」、「贅沢をする」、「人の肉を食べる」などさまざまな行動を人間社会で行う。

85 クリスマスイヴに人間を襲いに来るという話は見られる。 (J3, J14, J37)

86 第 1 章第 2 節 2-1-1. 参照。

できた名称は、「女トロル」 tröllkona / tröllkerling / tröllskessa、「（男）トロル」 tröllkarl / tröll であったが、ノルウェー民間説話では見られなかった用法が、アイスランド民間説話で確認できている。それは、troll / tröll という語が使用される対象のトロルの性別についてである。ノルウェー民間説話では、 troll という語を男トロルに対してのみ使用するが、アイスランド民間説話では、しばしば女トロルに対しても tröll という語を当てている[87]。言い換えれば、「トロル」という語に対する性別への感覚が、ノルウェーとアイスランドでは異なっていると言えるだろう。マーティン・アーノルド Martin Arnold によれば、神話に登場するトロルは、特に性別に対する記述がない場合、常に女性であると指摘している[88]。アーノルドは、『新エッダ』の編者であるスノッリ・ストルルソンの『詩語法』 *skáldskaparmál* に記載されている叙事詩に登場する「トロル」 *troll* という語にあてられた呼称に注目している。そこにみられる「トロル」という語に対する呼称は、例外なく女トロルの呼称を包含していることが明らかであることから、エッダ群において、「トロル」という語は、特に記載がなければ、女トロルを指すという事実を導き出している。つまり、アーノルドの指摘に従うのであれば、アイスランドの「トロル」という語に対する性別への感覚は、古来からの用法に基づくものであると考えられる。それに反して、ノルウェー民間説話では、 troll という語を男トロルに対してのみ使用しており、エッダ群が書かれた時代の用法ではなく、「トロル」という語に対する性別への感覚はノルウェー独自のものであると言えるであろう。

前節で、ノルウェーのトロルにみられる外形の特徴の一つである、尻尾のイメージは、挿絵が入れられた後に、他の超自然的存在フルドラ huldre から借用されたものであるという指摘に注目したが[89]、アイスランド民間説話に登場する尻尾をもったトロルは登場せず、確認できなかった。また、ノルウェーでみられた、鼻が長いという外形をもつトロルもアイスランド民間説話においてはみられなかった。つまり、ノルウェーとアイスランドの民間説話に登場するトロルの外形の特徴は、巨大な図体、醜い容姿という点では共通するも

---

[87] ノルウェー語、（古）アイスランド語の双方において、「トロル」という語は中性名詞である。

[88] Cf. Martin Arnold, ‘Hvat er troll nema þat? : The Cultural History of the Troll’, Tom Shippey (eds.) , *The Shadow-Walkers: JACOB GRIMM’S MYTHOLOGY Of THE MONSTROUS*, Arizona Board of Regents for Arizona State University and Brepols Publishers, n.v., Turnhout,Belgium, 2005, p. 122.

[89] Cf. Amilien1996, p. 262.

のの、詳細な部分に関しては相違がみられることが明らかである[90]。

最後に、トロルの外形と殺され方に注目してみよう。前節で、ノルウェー民間説話に登場するトロルの殺され方は、物語が属する話型に依存しているだけではなく、またトロルの外的特徴にある程度依存していると指摘した。この論は、アイスランド民間説話におけるトロルにも当てはまるのであろうか。確かに、アイスランド民間説話においてトロルに身体の外に魂 (命) を保管しているという＜外在魂のモティーフ＞が用いられている場合は、主人公に魂を潰されることによって死に至るという、モティーフに準じた方法で殺されている。しかしながら、他方で、ノルウェー民間説話で確認したように、トロルが複数の頭を持っている場合は斬首で殺されるという法則性は見当たらず、アイスランド民間説話において複数の頭をもったトロルは、焼き殺される、あるいは打ち殺されるなどされるのであり、殺され方に一つのまとまりを見ない。その一方で、アイスランド民間説話でも、トロルの殺され方と人間の姿に扮しているという外形やトロルの種類という他の要素との間に一定の法則性が見られる場合がある。それは「夜のトロル」と「人間の姿に扮したトロル」であり、まず「夜のトロル」nátttröllは日光を浴びると石化し、死んでしまうという性質をもつ[91]。そのため、物語では彼らは必ず日光によって死ぬ様子が描かれている。もう一方の「人間の姿に扮したトロル」は、今回分析を行った結果、身体をばらばらに引き裂かれる、あるいは火にかけられるという末路が圧倒的に多くみられた。この点については、第 2 章で詳しく述べるが、ノルウェー民間説話ではみられないものであり、アイスランド民間説話に登場するトロルの特徴的な死に方 (殺され方) と言えるであろう。

3-1-2. 「敵対者」としてのトロルの出現の仕方の特徴

本節 3-1. で、敵対者として登場するトロルの行動の特徴を「人間を攫う」「人間に魔法

---

90 アイスランド民間説話において人間の姿をして登場するトロルは、物語の最後に正体であるトロルの姿を主人公の前に曝すが、語り手によって細かい外形への注釈が入ることは少ない。

91 ここではノルウェー、アイスランド民間説話という範囲限定を行い、トロルの“性質”を述べている。例えば、スコットランドのシェットランド諸島に伝わる、巨人トロウTrowは、ここで挙げている「夜のトロル」と同様に、日光を嫌っているが、生命までは左右されない。トロウは日光を浴びると、その場に縛り付けられた形になり、日没になると地下の住処に帰れるとされており、必ずしもここで挙げるトロルの性質が、他の北欧文化圏の民間説話に登場するトロルに当てはまらない。 (トロウの性質については、キャサリン・ブリッグズ編、『妖精事典』 [1976] 、平野敬一他訳、富山房、1992 年、218-220 頁参照 .)

をかける」「人間の姿に変身し人間社会に入り込む」の 3 つに分類した。ノルウェー民間説話と同様に、トロルの「人間に魔法をかける」という行為は、主人公に目撃されていないため、「人間に魔法をかける」トロルの出現の仕方を確認することは不可能である。そのため、他の「人間を攫う」トロルおよび、「人間の姿に変身し人間社会に入り込む」トロルの出現の仕方についてみていこう。

ノルウェー民間説話では、「キリスト教徒 (の血) の臭いがする」というセリフを伴いながらの登場の仕方に注目したが、アイスランド民間説話にもそれと類似した特徴的な出現の仕方が確認できる。アイスランド民間説話では、「人間の臭いがする」と言いながら自分の住処 (洞窟) に入ってくるという出現の仕方である[92] 。このセリフにおいて、アイスランドとノルウェーの相違点は、トロルが示す嫌悪の対象である。ノルウェーのトロルが「キリスト教徒」に嫌悪感を示しているのに対し、アイスランドのトロルは「人間」一般に嫌悪感を示しているのである。確かに、他の話でみられるトロルは教会の鐘の音を恐れている描写もあり、さらに、具体的な割合は定かではないが、アイスランドの多くの民衆は「キリスト教徒」である可能性が高いため、「キリスト教徒」を「人間」と言い換えても同じことを意味するのかもしれない。しかし、ノルウェーのトロルの定型化された文句が、「キリスト教徒 (の血) の臭い」という極めて限定されたものであるのに対し、アイスランドの「人間の臭い」というセリフはより広い範囲を扱っている点は留意しておくべきであろう。

他方で、先で簡単に触れたが、「人間の姿に変身し人間社会に入り込む」トロルの出現の仕方は、次のような登場の仕方に固定化されている。

> [王の家来たちの船が難破し、無人島に流れ着き、その島に上陸すると、] 彼らは、これまでに聞いたことがない程の、とてもきれいな竪琴の音色を聞いた。彼らは、音色が聞こえてくる方向に向かうと、見るも美しい女がハープを奏でているのが目に入った。
>
> (「バングシーモンと女トロル」 *Bangsimon og tröllkonan* (J31, AT308 [93]) より)

---

[92] 資料2: J 13, 33, 34番、 TH87 番参照。今回、アイスランド民間説話では、このトロルの出現の仕方が 4 話において見られたが、 J13 番に登場するトロルは「助力者」として登場するため、敵対者としてこのセリフをいうトロルが登場する話は 3 話である。また、 J 34 番に登場するトロルは、女トロルに魔法をかけられている王子である。

[93] Thompson1946には AT308 についての記載がない。

語り手によって多少の描写の詳細は異なるが、登場人物たちが美しい女に変身したトロルと出会うまでの描写の仕方は差異が少なく、定型化されていると言っていいだろう。また、この出現の際に、しばしば、自分の子どもの役として、攫ってきた人間の娘を使う。これは、 3.1 で取りあげた、「攫った人間を自分の利益のために利用する」の事例に該当する。女トロルは、人間の娘を自分の娘であると偽り、妃の座に就いたのちに、他の国の王とその娘を結婚させ、利益を得ようとするのである。そのため、ノルウェー民間説話に見られた男トロルは人間の女を、女トロルは人間の男を攫うという法則性は成り立たないのである。

3-1-3. 「敵対者」としてのトロルの住居の特徴

次に、アイスランド民間説話に登場するトロルの住居の特徴であるが、彼らは、主として、洞窟、島、山、岩などに住んでいる。上で言及したように、アイスランド民間説話では、複合語名称をもつトロルが見られないため、ノルウェー民間説話のように、住む場所に由来する名称でトロルの種類が分類されていない。また、他方で、ノルウェー民間説話でみられたような、トロルの住んでいる煌びやかで、人間社会とは異なったある空想の「別世界」の描写は一切見られない。「人間の姿に変身し人間社会に入り込む」トロルの出現の仕方で例に挙げたように、「無人島」がトロルの住処としてあげられ、人間が簡単にたどり着けない場所という点では、ノルウェー民間説話に語られる「別世界」と共通するが、そこに肥沃な大地のイメージは見出され得ない。また、ノルウェーのトロルが住んでいる住処が、人間に感知されない場所にあるのに対し、アイスランド民間説話では、実在する地名とトロルの住処を結び付ける傾向があり、アイスランドのトロルの住処は人間世界からより身近で、人々が、トロルがどこに住んでいるのかを知っているという点でノルウェーとは大きく異なっている。

このアイスランド民間説話でトロルの最も頻出度が高い住処は洞窟であるが、それは、超自然的存在が登場する場所・住処が定まっている話型においても、登場する場所・住処の変更は見られず、洞窟という場所を住処として維持している。例えば、 AT301: 「熊息子」 Bear’s Son / 「盗まれた三人の王女」 The three stolen princesses に属する話に注目してみよう。 AT301 は、世界各地で最も広く分布している話の一つであり、ヨーロッパ全土で見

られるが、トンプソンによれば、この話型の話はヨーロッパで形成された話型であると考えられている[94]。この話型では、＜主人公が超自然的な敵対者である怪物を追って地下へ入り、怪物達を倒す＞というモティーフが使用されており、AT301 に属するノルウェーの類話「青い山の三人の王女」*De tre kongsdøttre i berget det blå* (AM7)ではそのモティーフに習い、トロルは地下の世界で見出される。しかし、それに反してアイスランドの類話「毛皮を着た若者」*Sagan af loðna stráknum* (MI2)では、主人公は、確かに平らな緑の大地が広がっている地下の世界へ赴くが、そこにトロルは住んでおらず、トロルが住処としているのは、その地下世界の入り口としての機能を持つ「洞窟」である。「青い山の三人の王女」でトロルが登場する煌びやかな地下の別世界が、アイスランドの「毛皮を着た若者」でも同じく展開されているのにもかかわらず、トロルはそこに居を構えていないのである。

したがってアイスランド民間説話においては、話型によって超自然的敵対者が住んでいる場所が決まっている場合でも、トロルの住処として適応されない場合が多く、語り手があらかじめ考えているトロルの住処 (最も多くの場合は「洞窟」) に置き換えられていると言えるだろう。

3-2. 「助力者」としてのトロル

アイスランド民間説話において、トロルと人間が友好的な関係を築いている話は少なからず見受けられるが、他方で、トロルが明確に「助力者」としての役割を担って登場する話は 3 話と少ない[95]。また、ウィリアム・クルーギーによれば、3 話ともサガや『ヘイムスクリングラ』 *Heimskringla* [96] に残されている話と関係を持っており[97]、いずれも歴史的人物・事件に関連付けられており伝説譚としての色合いが強い物語である。3 話に共通して見出され得ることは、奇跡的な勝利を収めた戦いなど歴史的事件と関連付けられており、どのように主人公がそれらの事件に勝利を収めたのかを、トロルという助力者が (天候を

---

[94] Cf. Thompson1946, p. 33.

[95] 資料 2: F 1, 3, 5 番参照。また F1 番と F5 番に登場する主人公とトロルは同じ名前を持っており、内容は異なるが、同じ物語群に属していると考えられる。

[96] アイスランド人のスノッリ・ストルルソン Snorri Sturluson (1178-1241) が書いたノルウェー王朝史で 1230 年ころに成立した。16 編のサガによって構成されており、歴史的に実在した王と、架空の王の話とが混在している。

[97] Cf. William A. Craigie, *Scandinavian Folk-lore – Illustrations of the traditional beliefs of the Northern peoples* [1896], Biblio Bazaar, Amazon Japan, 2009, (Reprinted), pp. 421-422, 424, 445-446.

操作するなど) 超自然的な力を用いたことが鍵であると説明しているという点である。

アイスランド民間説話においても、助力者として登場するトロルは 3 話にしか見られなかったため、はっきりとした判断は下せないが、少なくとも、歴史的事件がどのように収束していったのかを説明するために、魔術などの超自然的な力を保持しているトロルが引き合いに出されているといえるであろう。

3-3. その他に分類されるトロル

ここまで、トロルを物語に登場する主人公を含めた人間との関係に注目し、「敵対者」「助力者」に二つに大別しトロルの特徴を見てきた。しかしながら、「敵対者」「助力者」にも属しておらず、分類できないトロルが登場する話がアイスランド民間説話では見られる。一つ目が、人間がトロルと化す物語である。アイスランド民間説話には、トロルの魔法によってではなく、人間がトロルに変化していく物語があり、 1) 人間自らがトロルと化す場合と、 2) トロル / 巨人が人間をトロルに変化させていく場合の 2 つが確認できる。まずは、一つ目の「人間自らがトロルと化す」物語を見てみよう。

> [主人公のヨウーラは彼女の父親と暮らしており、勤勉に働いていた。ある日、自分のお気に入りの馬が、闘馬の大会に出たが負けてしまい、それに憤慨する。] ヨウーラは、怒り狂い、他の馬に飛び掛かり、馬の脚を引き裂くなどした。ヨウーラは、走りだし、ヘンギルにある洞窟にたどり着き、そこに住むことを決める。そこで彼女は、人間や動物を襲う邪悪なトロル *versta tröll* になり人々を脅かし始める。
> (「ヨウーラ崖にすむヨウーラ」 *Jóra í jórukleif* (J7) より)

以上のように、細かい描写は省略されているが、自らトロルと化していく様子が描写されている。なぜ、またどのように主人公がトロルと化したのかは語られていないため、細部まで論じることには限界があるが、まず精神的な激昂があり、その後、人肉食になるなどのトロルにみられるような性質への変化がみられている。

次に、トロル / 巨人が人間をトロルに変化させていく場合はどうであろうか。例えば、「ロッパとロッパの養い子ヨウーン」 *Loppa og Jón Loppufóstri* (J9 、 AT 番号該当なし) ではどのようにトロルが人間をトロルに変化させようとしているのかをみてみよう。

[キリスト教がアイスランドに入って来てから、トロル tröll が滅びかけていたため、一族を増やすために、ロッパ Loppa という女巨人 flagðkona[98] は妹とともに若い男ヨウーンを自分たちの洞窟へ攫う。] 二人の女トロル *trölla* は、ヨウーンに沢山食べ物を与え、また一種の香油または脂肪を塗りこみ、両方から彼を〔縦方向に〕引き伸ばした。 (中略：ヨウーンは女トロルたちの隙を突き逃げ出し、村に戻る .) ヨウーンの背丈は大きく途方もなくなっており、彼が教会堂の中でまっすぐ立つと、頭がその塔に届いた。ヨウーンは村に着いた 3 日後に死ぬ。 (後略)

このように、トロルは攫った人間に力をつけさせるため、また体を大きくさせるため食べ物を惜しまず与えている描写がみられる。このような描写は、「トロル、ラウーファについて」 *Um trölla-láfa* (J11) でも見られるものだし、さらに「トルント、トルントそして山のトロル」*Trunt, trunt og tröllin í fjöllunum* (J10) では、女巨人 skessa に連れ去られた男が、年々、身体的様相も精神的にもトロルと化していく様子が描かれている。シンプソンのまとめによると、人間はトロルと共に生活をし、またトロルの作った食事を食べる、あるいは、香油を人間に塗りこみ、体を引き伸ばし、耳元で叫ぶことで、人間は少しずつトロルに転じていく[99] 。確かに、“ トロルが出した食事を食べてはいけない ” という考え方は他の話でもみられ (J12) 、またトロルに魔法にかけられトロルの姿になった人間が「人間の臭いがする」と言いながら、女トロルと一緒に暮らしている洞窟に入ってくる姿も見受けられる (J34) 。この後者の例は、ノルウェーでは見られないものである。即ちノルウェー民間説話においては、人間はたとえトロルによって別の姿に変えられていても、人間としての理性は保っており、内面までは影響されない。それに対してアイスランドでは、体の内側と外側の両方から体を作り変えられていき、トロルの生活に馴染まされることで、人間がトロルになることは不可能ではないという事態が見受けられ、人間とトロルとの境界線は絶対的なものではないという考えが背景になっていると言えるだろう。

最後に、トロルと人間が友好的な関係を築いている物語である。アイスランド民間説話では、キリスト教に嫌悪感を抱いているトロルもノルウェー同様に見受けられるが、必ずしもそうでないトロルも確認できるのは注目に値する。例えば、「ブラウフィヤルに住む

---

98 物語内で、トロル tröll という語と女巨人 flagðkona という語の二語が用いられている。
99 Cf. Simpson2004, pp. 90-91.

ベルグゾウル」 *Bergþór í Bláfelli* (J16) では、語り手によって、物語に登場するトロルは特にキリスト教に嫌悪感を覚えなかったと説明がされており、最終的に人間たちの手によって教会の傍に埋葬されている。また、最初こそ「人間の臭いがする」と嫌悪感を示すが、すぐに人間と仲良くなり、最終的に人間に自分の死後の埋葬を依頼するトロルが登場する話も見られる (J13) [100]。これは、ノルウェー民間説話には一切見られないトロルと人間の関係であり、また管見の限り他の北欧諸国の民間説話でも該当する話は確認できない。このトロルと人間との関係は、アイスランド独自のものであると言えるだろう。後程、この点を第 2 章で取りあげる。

4. 比喩としての「トロル」という語の使用について

最後に、実際には超自然的存在トロルではない登場人物に、「トロル」というあだ名が付けられている場合を観察する。ノルウェー民間説話では、動物も含め、登場人物の 1) 内面的性格に対する比喩、 2) 外形的特徴に対する比喩、 3) 行為に対する比喩として、「トロル」という語が使用されていることを確認した[101]。アイスランド民間説話ではどうだろうか。アイスランド民間説話では「トロル」という語が比喩として用いられている話は、 3 話確認でき、人間と、人間の姿をした女巨人 Riesenwieb に対して使用されており、動物に対する使用は見られなかった。さらに、アイスランド民間説話では、内面的性格に対する「トロル」という語の使用は見られず、「外形的特徴に対する」使用と、「行為に対する」使用のみが見受けられるだろう。

はじめに、登場人物のどのような様相に「トロル」語が使用されているのだろうか。 1 話目は、醜い容姿、そして酒に酔っ払いひどい振る舞いをしている様子に、「トロル」という語が使用されている (J21) 。もう 1 話は、女主人の腫れて黒い顔と女主人が前世から所有している額に刻まれた洗礼の十字架の印をもった容貌に、「トロル」という語を使用している (J20) 。これはこの物語独自の特殊な例として捉えるべきである。なぜなら、洗礼の十字架の印をもった人物が登場する話は、今回の研究対象資料において、 1 話のみであり、トロルにそのような特徴が見られたことがそれ以外は皆無であるためである。

最後に、女巨人 Riesenwieb が行った「行為に対する」比喩として「トロル」という語が

---

100 いずれの話も、語り手は農夫や老女であり、聖職者の手によるものではない。

101 第 1 章第 2 節 3. 参照。

使用される物語を見てみよう (MI1)。女巨人は、本節 3-1-2. でみた人間の姿をした「敵対者」としてのトロルと同じように、王の家来たちの船が難破し、無人島に流れ着いた無人島で黄金の竪琴を弾いている姿が見出されるという出現の仕方で言及される。しかし、この女巨人は主人公 (王子) に対し「助力者」として働くが、王子が国を離れている間に、王様は妃 (女巨人) が王子を殺したと勘違いし、その行為に対し「トロル」という言葉を使用している[102]。女巨人に対して、「トロル」という語を比喩として使用している特殊な例であるが、ノルウェー民間説話でも確認できたように、人間の残虐な行いに対する比喩的な使用例であると言えるだろう。

以上、本節ではアイスランド民間説話におけるトロル像の特徴を、第 2 節で展望したノルウェー民間説話におけるトロル像の特徴を引き合いに出しながら、呼称をもつトロル、主人公としてのトロル、「敵対者」「助力者」としてのトロル、いずれの属性も担っていないトロル、および「トロル」という語の比喩的な役割について、検討し、分類を試みた。その結果に基づきながら、ノルウェー、アイスランド両国に共通してみられるトロル像、および片方の国にのみにみられるトロル像を浮かび上がらせることができた。双方の民間説話に登場するトロル像の総括を行った結果に基づき、アウルマン・ヤーコブスソン Ármann Jakobsson が分類を行った、サガにおける“トロル”という語の使用法を参照し、民間説話でのトロル像を別の観点から分析を行うことにする。

第 4 節　ノルウェー、アイスランド民間説話でのトロル像の進展

本節では、サガにおける“トロル”という語の使用法を参照しながら、第 2 節、第 3 節で分析・分類を行った、ノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像の特徴の進展を検討する。序論でも述べたが、アミリアンによれば、民間説話に登場するトロルと、サガに登場するトロルは多くの特徴を共有している[103]。したがって、サガに登場するトロル像と、第 2 節、第 3 節で展望したノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像を比較し、共通点と差異を確認することで、古来より伝わるトロル像の側面がより明確になると推測できる。また、他方で、ノルウェー、アイスランド民間説話に見られるトロル

[102] 王様は妃の正体が女巨人であるという事実は知らない。
[103] Cf. Amilien1996, pp. 136-137.

像が、その古来より伝わるトロル像の系統を継いでいるのか否か、およびどのようなイメージが新しく付け加えられたものなのかを見出すことができるであろう。

確かに、序論第 3 節3. 研究対象とする伝承文芸の範囲について述べたように、現時点では、サガの原典を入手できなかったため、サガを主要研究対象から除外したが、本節では、アウルマン・ヤーコブスソン Ármann Jakobsson の論文、「ソルグリムの魔女のトロル的な行動 ― 中世アイスランドにおける“トロル”と“エルギ”の意味」‘The Trollish Acts of Þorgrímr the Witch: The Meanings of *Troll* and *Ergi* in Medieval Iceland’ において、アウルマンは、13世紀から14世紀にサガにおいて、どのように「トロル」 troll という語が使用されていたのかについて論じている[104]。アウルマンは、「トロル」という語が、「アイスランド人のサガ」において72例、「伝説的サガ」において96例、スカルド詩において16例みられることを確認し、それらを13のカテゴリーに分類している[105]。

本節では、このアウルマンが分類を行った、サガにおける「トロル」という語の13の使用法を参照し、それに基づき、両国の民間説話に登場するトロル像の展望を行う。では、アウルマンの「トロル」という語の13カテゴリーを個々に確認しながら、ノルウェー、アイスランド民間説話のトロル像の特徴をみていこう。

1. ＜巨大な図体、醜い容姿をもつ超自然的存在＞を指す「トロル」

アウルマンによれば、中世アイスランドにおける「トロル」という語は、中世後のアイスランドの民間説話 the post-medieval Icelandic folktales における意味と同じ意味で使用されて

---

104 Ármann Jakobsson, ‘The Trollish Acts of Þorgrímr the Witch: The Meanings of *Troll* and *Ergi* in Medieval Iceland’, *Saga-book*, 32, The Viking society for northern research, 2008, pp. 39-67.

105 現在およそ 200 のサガが確認されているが、サガには大きく分けて、「宗教的、学問的サガ」「王のサガ」「アイスランド人のサガ」「伝説的サガ」の 4 つのジャンルが存在する。「宗教的、学問的サガ」は、文字通り、宗教的、学問的記録を目的としたサガであり、アイスランドへの植民や、キリスト教への改宗の歴史的資料として取り扱われることも多い。「王のサガ」は、主に 9-13 世紀までのノルウェー、デンマークの王族を中心に描いたサガであり、『ヘイムスクリングラ』もこれに分類される。「アイスランド人のサガ」は、歴史的事実や虚構を交え、アイスランド人の生活を描いたサガであり、文学としての側面も目立つ。「伝説的サガ」は、古来の神々が信仰されていた時代の英雄たちの姿を描いたものであり、成立年代は比較的新しく、歴史的に正確な記述も少ないため、「嘘のサガ」の異名をもつ。他方で、スカルド詩とは、北欧諸国で 8 世紀頃から表れた詩の形式であり、複雑な技法が用いられている。 (谷口 1976、 91-98 頁参照 .)

おり、ヨトゥン jǫtunn 、あるいは山の住人などと同意語である[106]。また、大雑把に、荒野に住んでおり、人間にそっくりであるが、巨大な図体と醜い容姿という外形をした超自然的存在を指す。他方で、伝説のサガでは、「トロル」という語は、洞窟に座っている存在であるリーザ risa 、ヨトゥン jǫtunn 、岩の住人 bergbúsar を示す語であると考えられると指摘している[107]。

ノルウェー、アイスランド民間説話双方で、この「トロル」の語義と同じ意味で使用されていることが確認できる。例えば、ノルウェー民間説話では、物語の中で、「トロル」という語と、山の住人 bergmann / jutul という語の言い換えがみられ、同義語として使用されている (AM16, SL59.5)。この言い換えについてはアミリアンも、トロル troll とリーゼ rise は、同一のテクストの中に、交互に同義語として使用されると述べている[108]。また、他方で、アイスランドでも、女トロル tröllkerlingu の兄弟がリーゼ rise であったり、女トロルtröllskessaに魔法をかけられた王子が、 jötunn / risa の姿になったりと、同じ種類の超自然的存在として扱われていることが窺える (例えば J29, 30) 。前節で述べた通り、ノルウェーのトロルも、アイスランドのトロルも、巨大な図体と醜い容姿を持つという点で共通しており、この要素はアウルマンが述べているようにサガでも同様に見られるものである。

他方で、荒野に住んでいる超自然的存在を「トロル」とみなすという考えは、アイスランド民間説話にのみにみられるものである。例えば、「百姓娘キューティルリーズルの物語」 *Sagan af Ketilríði Bóndadóttur* (J22) では、「トロルか妖怪、強盗のいずれかが荒野に巣くっている」という描写があり、トロルを荒野に住む超自然的存在として捉えている。他方ノルウェー民間説話では、荒野に住む超自然的存在というイメージは見られず、それとは反対に肥沃な大地を持つ別世界に住んでいる超自然的存在であるというイメージが見られている。そのため、サガみられる＜荒野に住む超自然的存在＞というイメージの含有が、アイスランド民間説話のトロル像には残されていると言えるだろう。

106　アウルマンは、“中世”をサガが編まれた 13-14 世紀に設定している。第 1 の使用法については、Ármann2008, p. 44 参照。

107　さらにアウルマンは、トロルの描写、定義がみられないことがしばしばあると指摘し、次のように続けている。トロルは超自然的存在のなかでも特殊な種類に属し、人類とは必ずしも一致しないにも関わらず、トロルの本質を完全に捉えることができない。民間説話のトロル、あるいはオオカミや魔女に類似している存在であるとも考えられる。

108　Cf. Amilien1996, pp. 244-247.

2. 魔術的な力を保有している人間の姿をした者を指す「トロル」

アウルマンによれば、「トロル」という語は、しばしば魔術的な力をもっている見た目が人間 an apparently normal person である者に対して使用されると指摘する[109]。また、王と司教の両者の権力下で、法典で犯罪とみなされていることを行った人間、例えば、トロルを夕食に招き、トロルと夕食をとった人間を示すとしている。

アイスランド民間説話では、人間の姿に扮したトロルが多く登場するため、多数の物語がこの第 2 の用法に該当するのに対し、ノルウェー民間説話では、人間の姿に扮したトロルが登場する物語は稀であり、この用法には当てはまらない。しかし他方で、アイスランド民間説話でみられる、人間がトロルに転じていく物語では、人間はトロルと化していく過程でトロルと共に暮らし、食べ物を提供してもらっている。そのため、アウルマンが説明の中で取りあげている、トロルと夕食をとることを禁じている法典に従うのであれば、その人間は「トロル」として見なされることになる。この法典の文言はノルウェーにおいてもみられたが、ノルウェー民間説話に登場する人間は、トロルと食事を共にする前に、トロルを打ち負かすため、人間が「トロル」と呼ばれる描写がなく（AM40）、この用法がノルウェーで用いられていたのか否かについては判断できない。したがって、民間説話においては、アイスランドにのみに見られる使用法であると考えられるであろう。

3. 倒すことが困難な敵対者あるいは奇妙な人間を指す「トロル」

アウルマンは、サガの中に「トロル」という語は、記述的にあるいは比喩的に、強大な腕力、体力、大きさを示す際に頻繁に用いられることを確認している[110]。強さや魔力といった特性、あるいは巨大な図体に対して、「トロル」という語が使用され、「人間というよりもトロルのようだ」というフレーズで表現される。他方で、この比喩的な使用法は、奇妙、特異、あるいは異例であると通常思われる様相をした人物にも用いられる[111]。

この用法は、ノルウェー、アイスランド双方の民間説話に同じように見られる。ノルウ

---

109 第 2 の使用法については、 Ármann2008, pp. 44-45 参照。

110 第 3 の使用法については、 Ármann2008, pp. 45-46 参照。

111 例えば、『バルダルのサガ』 *Bárðar saga* において、流氷に乗って、奇妙な服装を身にまといグリーンランドにたどり着いた女が、トロルであると考えられていた、という描写がみられる (Cf. Jakobsson2008, pp. 45-46) 。

ェー民間説話では、登場人物が、例えば、くる病などの身体的に奇形である場合や、他者と異なる外形的特徴を持つ場合に「トロル」という語が比喩的に使われている。他方で、アイスランド民間説話でも、先に述べた際には例外として取り上げたが、女主人の腫れて黒い顔と女主人が前世から所有している額に刻まれた洗礼の十字架の印をもった容貌に、「トロル」という語を使用が、この第 3 の用法に該当するであろう (J20) 。超自然的存在として登場するトロルにそのような特徴は見られないが、「トロル」という語は、この女主人の奇妙で特異な様相に対して比喩的に使用されていると考えて差し支えないであろう。

よって以上のことを考慮するなら、第 3 の用法即ち、「トロル」の記述的・比喩的用法は、ノルウェー、アイスランド双方の民間説話の共通点の一つであることが確認できる。

4. 悪霊と幽霊を指す「トロル」

サガにおける、「トロル」という語の対象は、その大部分は巨人と魔女に限定されているが、悪霊と幽霊も同様に「トロル」という語で示される場合もあり、この使用法が、「トロル」が全ての超自然的な力を示す転機となったと考えられるとアウルマンは指摘する[112]。

この使用法は、ノルウェー、アイスランド民間説話では確認されなかった。しかし、例えば、アイスランド民間説話の「ギェトリヴェル」 *Gellivör* (J3) では、語り手が物語の冒頭部分で、カトリック教時代の終わりに、山に女トロルが住んでいると噂になっていたが、悪霊 meinvættur ではないと言われていた、と説明しているのが見受けられる。そのため、語り手が、「トロル」という語に、悪霊という意味が含有していると認識していることが窺えるであろう。

5. 「青い男たち」*bláumenn* を指す「トロル」

アウルマンはサガに実際に登場する人物をあげ、その人物が「トロル」という異名を持っていた事例を扱っている[113]。その人物は、いくつかのサガの英雄であり、戦うことを強いられている「青い男たち」 bláumenn である。彼らのどなり声をあげる、また戦いにおい

---

112 第 4 の使用法については、 Ármann2008, pp. 46-47 参照。
113 第 5 の使用法については、Ármann2008, p. 47参照。

て、無制御あるいは取り乱しているという性質が、＜トロル的な行動＞と捉えられ、「トロル」と称されていたと考えられている。それに対しノルウェー、アイスランド民間説話では、「青い男たち」 bláumenn という具体的なサガの登場人物は登場しない。だが、怒鳴り声をあげるという性質は、双方の民間説話に登場するトロルももっている性質であるため、「怒鳴り声をあげる」という性格は、トロルが古来から持つ特徴を引き継いだ結果であると言えるであろう。

6. 魔術師や邪悪な存在と関係をもつ動物を指す「トロル」

アウルマンは、動物たちも「トロル」という語に関連付けられるという興味深い指摘をしている[114]。そしてそのほとんどは、魔術師あるいは邪悪な存在によって、口寄せされる、能力を与えられる、所有されている動物たちに対して使用されている。

ノルウェー民間説話では、“ トロル猫 ”trollkatt と呼ばれる猫が登場する。トロル猫は、人の髪や爪、木屑などから魔女によって作り出されると信じられていた超自然的存在である[115]。例えば、「トロル猫」*The Troll Cat* (SL39.1)では、トロル猫がどのように創造されるのかが描写されている。「トロル猫」という物語では、魔女と考えられる女が、箒用の刷毛に自分の血を 3 滴たらし、トロル猫を創造している。つまり、アウルマンが指摘しているように、トロル猫は、まさしく魔術師あるいは邪悪な存在によって、口寄せされ能力を与えられる超自然的な動物である。レイムン・キビードラン Reimund Kvidland は、トロル猫への信仰は、人間の髪などのある種の物体の蓄積の観察に関連付けられており、その物体が地面の上で乾いたのちに、風によって畑や地面を転がっていく様子が、走る動物として印象を人々に与えたことから来ていると言及している。また、食べ物あるいは生ものの腐敗は、しばしばトロル猫の落とした物体 (嘔吐物) として考えられており、また魔女は、自身のトロル猫の嘔吐物が焼かれると、のどの渇きを覚え、その嘔吐物が焼かれている場所への出現を強いられると考えられていた。

このノルウェー民間説話でみられるトロル猫は、アイスランド民間説話では見られない超自然的存在であり、またアイスランドでは、この魔術師や邪悪な存在と関係をもつ動物

---

114 第 6 の使用法については、Ármann2008, p. 47 参照。

115 トロル猫については、 Reimund Kvidland, Henning K. Sehmsdorf (eds.), *Scandinavian Folk Belief and Legend*, Norwegian University Press, Oslo, 1991, pp. 175-178 参照。

を指す第 6 の用法に該当するものは確認できなかった。よって、民間説話におけるこの用法は、ノルウェー民間説話にのみにみられると言えるだろう。

7. 古来に信仰されていた霊を指す「トロル」

アウルマンによれば、古来の信仰における霊がキリスト教徒によって「トロル」と呼ばれていたと考えられており、儀式や生贄によって活動している古来の信仰の霊に、「トロル」という語が当てられている[116]。

確かに、ノルウェー、アイスランド民間説話において「トロル」という語が古来に信仰されていた霊を指している例は明確に顕れていない。しかしながら、双方の民間説話に登場するトロルはキリスト教の教えと相反する存在として描かれている。そのため、民間説話に登場するトロルがサガにおいて「トロル」という語が当てられていた古来の信仰における霊から由来している可能性は否めない。この第 7 の使用法は、今後の研究において、サガを見ていく際に留意したい項目である。

8. キリスト教と相反する者たちを指す「トロル」

アウルマンは、第 8 の用法として、「トロル」とは何かは明記されていない例になるという断りを入れながら、キリスト教の敵対者である、悪魔 (悪霊) 、魔術師、そして古来の神々を信仰している者たちに対して「トロル」という語が用いられていると指摘している[117]。サガにおいて、彼らは聖水によって追払われる。トロルは王と司教に対して不満の言葉を投げつけるなど、キリスト教への対抗者として明確に描かれている。トロルが魔女であるのか、山の住人たちであるのか、あるいは幽霊であるのかは定かではないにせよ、サガの物語において、トロルはこのように物事の秩序、そして社会規律を乱す敵対者として描かれている。

ノルウェー民間説話では、トロルはキリスト教と相容れない存在として描かれているものの、アイスランド民間説話でみられるような、トロルと司教などとの直接的な力の行使による対立はみられない。確かに、ノルウェー民間説話でも、キリスト教への改宗をノル

---

116 第 7 の使用法については、Ármann2008, p. 47 参照。
117 第 8 の使用法については、 Ármann2008, pp. 47-48 参照。

ウェーに推し進めたオーラフヴとトロルの対決 (AT500) は見られるが、アイスランド民間説話ではトロルたちが司教を恐れ、自分たちの住処が清められることを恐れている (J1)。ノルウェー民間説話に登場するトロルが「キリスト教徒 (の血) の臭いがする」と叫びながら出現するが、アイスランド民間説話に登場するトロルは、「司教たちが聖水で自分たちの住処を清めにくる」と言うなど、より明確なキリスト教との拮抗関係が見られると言えるだろう。

9. 「ブルンミギー」 *brunnmigi* を指す「トロル」

アウルマンは、サガに登場する「ブルンミギー」*brunnmigi*を指す言葉として「トロル」を使用していることを確認している[118]。ブルンミギーは、井戸に小便をしている存在であるが、その奇妙で反社会的な行動から、ブルンミギーが超自然的存在であるのか、あるいは人間であるのか明らかにすることは困難である。しかしながら、ブルンミギーは、明らかに追放者である。また、『ジァルネシンガのサガ』 *Kjalnesinga saga* に登場するブウイ・アンドリットソン Búi Andríðsson は、土着の宗教的儀式を行うことに反抗したため追放された際に、彼が「トロル」と言われていることは興味深いとしている。

確かに、ノルウェー、アイスランド民間説話において、サガに登場する「ブルンミギー」という人物は登場しないが、それに対して、アイスランド民間説話ではトロルは追放者と関連付けられていることが指摘されている。北欧文学者である山室静は、 M. リーチの妖精の起源の研究の「少数の者 (ここでは原住民) は山や洞窟に潜って、夜間に出てきて民に仇をなし、それが想像の中で誇張され妖精になった」という論を引き合いに出しながら、アイスランドのトロルは、逃亡した奴隷や、何らかの罪を犯して追放された人間がトロル化したものであると述べている[119]。この指摘はノルウェー民間説話に対しては見られないものである。人間と超自然的存在トロルとの境界線の問題に通じるであろうこの問題は、第 2 章で詳しく取り上げる。

---

118 第 9 の使用法については、Ármann2008, p. 48 参照。
119 山室 1977 、 235 頁参照 。

10.　ある特質や行動を指す「トロル」

アウルマンによれば、サガにおいて、ある特質や行動を指す言葉として、「トロル」という語が使用されている[120]。その「トロル」という語が用いられる特質・行動は、人の肉を食べるという行為であり、サガにおいて、トロルは人肉食と明確に結び付けられている。他方で、『グレッティスのサガ』 *Grettis saga* では、トロルの習慣への情報が一切与えられていないにも関わらず、中世以降の民間説話では彼らの本質的な行動であると考えられているものがある。それは、トロルは日光と太陽を避けているという行為が見られる。しかし、アウルマンは、この『グレッティスのサガ』でみられるトロルの例は、注目を集めている行動ではあるが、亜種として考えるべきであると述べている。

第 2 節、第 3 節で指摘したように、ノルウェー、アイスランド民間説話双方において、トロルには人肉食という側面がみられたが、それはこの第10の使用法に該当するだろう。他方で、日光と太陽を避けるという行為は、ノルウェー、アイスランド民間説話に登場するトロルに共通するものであるが、それはどちらかというとアイスランドのトロルの方に、より顕著にみられる行為であると言える。なぜならば、トロルに対し、複合語名称をほとんど用いず、さらに呼称を与えている傾向がみられるアイスランドにあって唯一名称によって分類されている「夜のトロル」nátttröll という語の存在である。サガにおいて日光を避けるというトロルの行動は少数派であるにもかかわらず、このトロルの名称から、アイスランド民間説話ではそれがトロルの特筆する性質であると判断できるだろう。

11.　生き物・物体を変形させる能力、またそれを保有する者を指す「トロル」

アウルマンは、「トロル」という語は、時たま、ベルセルク (狂戦士) と、戦いにおいて身体的な変形 (変身) をする者に対して使用されることを確認している[121]。さらに、サガでは、身体の形を変化させる能力を示す語として trollskapr が使用され、他方で、trolldómr という語は、地形を作り変える能力を指しており、二種類の変形に関する魔力が存在し、言葉によっても区別されている。また、“ トロルになる ” という変化は、 trylldr という語が使用される。これらのトロルの外見の変化 (変形魔法) は、巨人、エルフや小

[120] 第10の使用法については、Ármann2008, p. 48参照。
[121] 第11の使用法については、 Ármann2008, pp. 48-50 参照。

人といった他の超自然的存在には見られないものである。そして、それらの超自然的な力は、人間をトロルに変化させ、トロル化した人間 (trylla menn) を作ることも可能である。つまり、トロルに生まれなくとも、トロルになることは可能であることがサガでは示されている。

この第11の使用法において、前半部分の使用法はノルウェー、アイスランド双方の民間説話に見られる。ノルウェーではトロルは自らの姿を変身させる例は、アイスランドに比べ少ないが、両国のトロルは人間に魔法 (trollskapr) をかけ別の姿に変身させる行為が見られることを先に確認している。また、 trolldómr という語は見られなかったが、ノルウェー民間説話に登場するトロルは“山の中”にしばしば住んでおり、出入りをする際に“山の扉”を開け閉めするという描写が見られる。他方で、アイスランド民間説話でもトロルの死後、トロルが住んでいた洞窟が消失するという描写もみられるため、ノルウェー、アイスランドの両国の民間説話に登場するトロルも、地形を作り変える能力を保有していたと判断できるであろう。また、アイスランド民間説話で、ベルセルク (狂戦士) が登場した際には、“トロルのような出で立ち”と描写がされている (J28) 。

しかしながら、第11の使用法の後半部分、即ち人間をトロルに変化させ、トロル化した人間 (trylla menn) を作る超自然的な力は、アイスランドにのみ見られるものである。前節でもふれたが、人間がトロルになるという現象はノルウェー民間説話では見られず、アイスランド民間説話独自のトロルと人間の関係性を示すものである。ここで、サガにおいても、人間がトロルと化す描写がみられる例が見られることが確認できたのだが、それは 13-14 世紀以降にアイスランド民間説話に引き継がれている特徴であると言えるだろう。

12. ネガティブな意味で比喩的に使用される「トロル」

「トロル」という語は、一般的にネガティブな意味合いを含有しており、罵りの言葉あるいは悪口、また悪態をつく際に使用されるとアウルマンは言及している[122]。サガにおいては、原則として人々は「トロル」という語を自分たちの敵対者を指す際に軽蔑的に使用する[123]。実際、多くの人間がトロルという語を他者に使用している。なぜならば、トロル

[122] 第12の使用法については、 Ármann2008, pp. 50-51 参照。

[123] また、他方で、「アイスランド人のサガ」では、主人公が自分自身に対して「トロル」という語を使用する (Cf. Ármann2008, p. 50) 。

は決してサガの主人公 (英雄) には成り得ないからである。トロルたちは、柵の外側にある外界にいるのであるから、「トロル」という語のこのような使用法が見られるということは、古アイスランド語ではその語を、人間の世界に属するある種の者たちを表す比喩として使用されているのである。

この第12の使用法は、第 2 節、第 3 節で確認した、比喩表現としての「トロル」という語の使用とほぼ同じ用法である。しかしながら、ノルウェー民間説話では、サガでの使用法とは異なり、敵対者ではない人物、例えば妻が夫に対して使用することもあり、サガに比べると使用対象人物の範囲が広くなっていることが窺える。他方で、ノルウェー、アイスランド双方の民間説話において、自分に対して「トロル」という語を使用している人物はやはり見られなかった。

しかしながら、英雄としては描かれていないものの、トロルが、あるいはトロルと化す人間が主人公として登場する物語がアイスランドでは見られるため、トロルが決して主人公の属性を得ることのできないサガとアイスランド民間説話では物語の登場人物への属性の割り振りが異なっていることがわかる。このことは、次の第13の用法でも同じことが言えるだろう。

13. 友好的な存在に対して使用する「トロル」

最後の用法としてアウルマンは、「トロル」という語は、友好的で敵意がない存在に対して使用される場合があることを確認しているが、しかしそれは例外であり、『北欧の古代のサガ集』*Fornaldar sögur Nordrlanda* によれば、友好的で敵意がない存在は、トロルになり得ず、あくまでトロルはよそ者であると述べている[124]。

確かに、ノルウェー民間説話に登場する「助力者」としてのトロルは、自分の利益のために主人公に助言や呪物を与えるなど、なんらかの条件の上に成り立つ友好的な関係である。しかしながら、アイスランド民間説話では、「助力者」としての役割を担っていないトロルと人間が親密な友好関係を結んでいる例がみられ、またトロルを教会の傍に埋葬するという描写も見られる。すなわち、もちろんアイスランド民間説話においても、友好的なトロルは少数派であるが、サガでは例外として扱われていたトロルの友好的側面が、民

[124] 第12の使用法については、 Ármann2008, pp. 51-52 参照。

間説話においても保持されていたと考えられるだろう。

以上、アウルマンは「トロル」という語の使用法を13に分類した。ここで、確認できたことは、第４、５及び７の使用法を除き[125]、ノルウェー、アイスランド民間説話に登場するトロル像とサガにおけるトロル像が共通点を持つことが明らかとなった。しかしながら、ノルウェーあるいはアイスランド民間説話のトロル像のみに見られる側面もあるなど、差異も浮き彫りにできた。これらの共通点と相違点を参照しながら、第２章でノルウェー、アイスランド両国の社会制度および宗教、また自然といったものがトロル像変遷にどう関わってくるのかを検討する。

第１章・小括

第１章では、ノルウェー、アイスランド民間説話に登場するトロル像に関する記述を分析し、展望を行った。また、その結果を基にサガにおける「トロル」という語の使用法を参照し、民間説話のトロル像を検討した。これによって明らかとなったことは次のことである。

ノルウェー、アイスランド民間説話において見られるトロルへの呼称の付与は、ノルウェーとアイスランドでは条件が異なる。ノルウェーでは、トロルの呼称は話型および地名と結びついている場合に行われ、それに対して、アイスランドでは、話型および地名とは関係なく、語り手の意思によって行われている。このトロルへの呼称の付与における両国の差異から、アイスランドでは民間説話においてもサガの語りの手法を踏んでいると考えられる。この手法はエッダ群においてもみられ、登場人物の一人一人に呼称の付与を行っていることが確認できる[126]。したがって、アイスランドのトロルへの呼称の付与は、エッダ群、サガ群にみられる、呼称の付与に関する“伝統”を踏んでいると言えるであろう。また、トロルの名称にも相違点が見られる。ノルウェーのトロルには、複合語名称が多く

[125] 第４、５の使用法は、完全に使用法に一致する例が民間説話から確認できなかったが、「トロル」という語の対象となる人物、存在が保有しているイメージと、民間説話に登場するトロルが保有するイメージが共有している部分がみられ、完全に該当しなかったわけではない。

[126] 例えば、『巫女の予言』*Vǫluspá*の第10節から第16節まで、数十人の小人の呼称を列挙している。しかし、『巫女の予言』において、その呼称が再び言及されることはない。（ネッケル1973、9-10頁参照）.

用いられているが、それに反しアイスランドではそれはほぼ見られない。この差異から、「トロル」troll / tröll という語への性別の感覚が異なることが明らかとなった。ノルウェーでは一般的に複合語名称が用いられていない場合は、「トロル」は男を示すが、アイスランドではそうとは限らず、女トロルを示すことが確認できる。アーノルドが、エッダ群に登場するトロルは特に性別に対する記述がない場合、常に女性であると指摘しているように[127]、エッダ群で一般的に用いられていた手法である。即ち、ノルウェーではその手法が民間説話では既に用いられていないのに対し、アイスランド民間説話においてはその手法が維持されていると言える。このことが、「トロル」が対象とする性別の差異につながったと考えられる。

また、「敵対者」として登場するトロルの行為を、ノルウェーでは「人間を攫う」「人間に魔法をかける」「自分の住処にやって来た主人公を襲う」の 3 つに、アイスランドでは「人間を攫う」「人間に魔法をかける」「人間の姿に変身し人間社会に入り込む」の 3 つに分類した。前の 2 つの行為は両国に共通しているが、その行為をするトロルの性別および行動を起こす理由がいくらか異なっている。特にアイスランドでは、トロルが「人間をトロルにするために攫う」という極めて特徴的な行為が見出せる。このトロルの側面から、アイスランド民間説話におけるトロルと人間の境界線の曖昧性を導き出すことができる。このことについては、第 2 章で詳しく扱うことにする。ノルウェーのトロルが「自分の住処にやって来た主人公を襲う」という行為と、アイスランドの「人間の姿に変身し人間社会に入り込む」という行為からは両国のトロルの明確な差異がみられる。ノルウェーのトロルは自分の住処への縄張り意識が強く、主人公による縄張りの侵害を容認しないのに対し、アイスランドのトロルは自分の住処を捨て、人間社会に入り込むのである。

また、トロルが人間の姿に変身するという行為はアイスランドのトロルに特徴的なものであり、ノルウェーのトロルでは稀である。この点は、ノルウェーとアイスランドの語り手が提示するトロルという存在が含有するイメージの範囲の差異を示していると考えられ、重要な観点であると言える。トロルの外形にも関係することであるが、ノルウェー民間説話に登場するトロルの多くが、巨大な図体、醜い容姿、複数の頭を所有するなどの奇怪な外形をもっており、人間と区別された存在として登場する。しかし、その一方で、アイスランド民間説話のトロルは、ノルウェーのものと同様に奇怪な外形を保持しつつも、他方

[127] Cf. Shippey 2005, p. 122.

で人間の姿に変身し登場する、あるいは人間がトロルに変化するなど、上で述べたように、人間との間に確固とした区別が見られない場合がある。つまり言い換えれば、アイスランドのトロルは 2 つの様相を備えているように思われるのである。その 2 つの様相とは、1 つはノルウェーのトロルと同様の怪物的要素が強い超自然的存在という様相、他方は、超自然的存在と人間の間を移行可能な存在である。ノルウェーに見られないものであるこの 2 つ目の様相は、アイスランドのトロル像が後代に身に着けたものか、あるいはノルウェーのトロル像から消滅したものかのどちらかが考えられる。したがって、この相違を注目することは、トロル像の変遷を検討する重要な項目であると言え、両国のトロルの住居にみられる差異とともに、第 2 章で取りあげる、両国の宗教的背景、社会制度、自然観の問題にも関わってくるであろう。

第 2 章　ノルウェー、アイスランド民間説話にみられる世界観
― 宗教・社会制度・自然 ―

本章では、第 1 章で行った、ノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像の記述的分析に基づき、ノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像の変遷を検討していく。民間説話におけるトロル像の描写を通じて、ノルウェー、アイスランド両国の世界観を展望するために、はじめに、両国におけるキリスト教への改宗の過程を確認し、民間説話において、古来から伝えられている超自然的存在トロルとキリスト教 (徒) との間にどのような関係が見られるのかを検討する [第 1 節] 。次いで、第 1 章で確認した人間とトロルとの境界線の問題に注目し、追放制度という社会制度の観点からトロル像と追放者との混合について考察を行う [第 2 節] 。最後に、本章第 1 節、第 2 節で行う分析を基に、ノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像に、両国の住民が保有する自然観といったものがどのように作用し、変遷に関わってくるのかを検討する [第 3 節] 。

第 1 節　ノルウェー、アイスランドの宗教的背景とトロル像変遷の関係

1.　宗教的背景とトロル変遷の関係に着目する妥当性について

トロルは、エッダ群が成立した時代 (『古エッダ』 ca. 800-1300, 『新エッダ』 ca. 1220 -1240) から存在しており、現在まで語り継がれている存在である。このようにキリスト教への改宗以前から存在してきたトロルであるが、北欧諸国がそれぞれキリスト教への改宗を行った後 (11-12 世紀末) 、キリスト教の神と敵対するような怪物的あるいは悪魔的性質を取り入れるなどすることで、トロルの性格が変容したと考えられている[1] 。山室によれば、北欧諸国へのキリスト教の流入 (紀元1000年前後) 以降、巨人は古来の神々ともに力を失い、卑小化されていったが、その代わりにトロルという存在が出現しその地位にとって代わったと指摘している。北欧神話において、主神オーディンをはじめとする神々が巨人から生まれた存在であり、神々と巨人との間で婚姻関係が結ばれることもある。そのよ

[1] 『古エッダ』によると、この世界に最初に生まれた存在であり、神々よりも早く誕生したため、知識が豊富で賢い存在であったと伝えられている。巨人は魔法が巧みで、また姿かたちは巨大ではあるが神々や人間に近いもの、あるいは奇怪な姿をしたものもいた (山室 1977 、198-208 頁参照) 。

うな背景から、その代替は、北欧諸国の古来の信仰において神と巨人の間の区別が根本的なものではなかったために可能であったと考えられる[2]。他方で、ノルウェー、アイスランド民間説話で確認したように、トロルはキリスト教(徒)に嫌悪感を示すなど、間接的あるいは直接的な対立が見られる[3]。これらのことから、トロル像の変遷の過程において、キリスト教への改宗およびキリスト教の現地化の時代が一つの重要な転換期をなすことは明白である。しかしながら、ノルウェーとアイスランド、あるいは北欧文化圏のすべての古来の神々への信仰からキリスト教への信仰が変化していく過程は、それぞれの国あるいは地域で異なりを見せている[4]。言い換えれば、その差異が、北欧文化圏でみられるトロル像の差異の一側面を築き上げたと推測できるだろう。

2. ノルウェー、アイスランドにおける土着の宗教からキリスト教への改宗について

キリスト教への改宗以前のノルウェー人とキリスト教の接触はヴァイキング活動によるものであり、その主な活動地は英国、スコットランド、アイルランドであった[5]。9世紀から10世紀には、ノルウェーの首長とアイルランドの王女との政治的結婚が増え、それがノルウェーの首長の間にキリスト教が受け入れられる下地になったと谷口は指摘する。しかしながら、ノルウェーのキリスト教への改宗は、王たちの圧力によるところが大きい。ノルウェーの最初の専制君主となるハーラル美髪王 Harald Hårfogre (890-940 / 45) は、ノルウェー国内にキリスト教を取り込もうとした最初の一人でもある。しかし、ハーラル美髪王が民会でキリスト教への改宗を発案した際に、農民から激しい反発を受け、ハーラル美髪王の計画は失敗に終わっている。ノルウェーのキリスト教への改宗を決定的にしたのは、

---

[2] 堀哲、「妖怪伝承の背景」、『中京英文学』第2巻、1982年、76頁参照。

[3] 第1章第2節 2-1-2.、第3節 3-1-2. および第4節8.参照。

[4] 谷口幸男によれば、デンマークは、国土の南にフランク王国と北方の伝道に熱心なハンブルク・ブレーメン大司教区があったため、デンマークにおけるキリスト教へ改宗は南方からの影響が強かった。デンマークでは、934年頃、ハーラル青歯王が、ハンブルク・ブレーメンの大司教に、デンマークでのキリスト教徒の集会やデンマーク領の島々への布教を容認したため、980年頃にデンマークのキリスト教への改宗が行き渡ったとされている。他方でノルウェーはキリスト教への改宗を推し進めた代々の王たちは英国で洗礼を受けているため、英国との関係が深いと述べている。キリスト教徒との接触がデンマークやノルウェーと比べ少なかったスウェーデンは、他の2国よりもキリスト教への改宗が遅れた。また、地方によってキリスト教への改宗を受け入れる態度が異なっていたため、最終的にスウェーデン全土に改宗がいきわたったのは12世紀の終わりと考えられている。(谷口1998、46-58頁参照.)

[5] ノルウェーのキリスト教への改宗については、谷口1998、52-55頁参照。

英国より洗礼を受けノルウェーに帰国した二人の王、オーラヴ・トリュグヴァソン Olav Tryggvason とオーラヴ・ハラルソン Olav Haraldsson である。それまでは、ノルウェーのほぼ全体が古来の神々への信仰を持続させていたと考えられている。オーラヴ・トリュグヴァソン王 (在位 995-1000) はキリスト教を基礎づけるため、統一王権を通じ政教一致を図った。ノルウェー南部はデンマークからの影響を既に受けていたため、改宗への抵抗は少なかったとされているが、他方で抵抗する農民に対しては洗礼の強制には拷問や殺害をためらわなかったと伝えられている[6]。その後、オーラヴ・トリュグヴァソン王がスウェーデンの連合軍との海戦で戦死した後、15年の空位時代を経て、オーラヴ・ハラルソン (995-1030)、後の聖オーラヴ Olav den hellige が、1015年から1028年にノルウェー王の座についた。オーラヴ王は、古来の信仰に基づく様々な神聖な行為 (儀式) を行っていた神殿と偶像を破壊し、民間説話 (AT 500) でも見られるように[7]、教会の建設を推し進めた。1030年に農民軍との戦いに敗れ、戦死するが、その 1 年後彼の遺体を発掘してみると死体は埋葬時のままで、さらに髪と髭が伸びていたことから、このことが奇跡として謳われ始める。その結果、オーラヴ王はノルウェーの守護聖人になり、国民的統一とキリスト教への改宗の象徴となった。11世紀末に、次々とノルウェー各地に司教区がおかれ、1152年に独自の大司教区がニザルロス (現在のトロンハイム) におかれたことで、フェロー諸島、オークニー諸島、アイスランド、グリーンランドもすべてこれに属することとなった。

よって、ノルウェーでは政治的変革と並び、キリスト教への改宗が王によって半ば強制的に行われた。そのため、民衆自らがキリスト教へ歩み寄ったのではなく、外面的にはキリスト教への改宗を余儀なくされた立場にあったと言えるであろう。それに対して、王を持たないアイスランドでは、キリスト教への改宗がどのように行われたのであろうか。次は、アイスランドの事例を確認してみよう。

アイスランドは、序論でも述べたように、9 世紀に植民によって成立した国であるため、他の北欧諸国におけるキリスト教への改宗とは事情が異なる[8]。まず第一点目として、植民の時点から、植民者の中にキリスト教徒が混じっていたことが例として挙げられる。な

---

6 『新エッダ』の編者であるスノッリ・ストルルソンが、ノルウェー王朝史について描いた『ヘイムスクリングラ』*Heimskringla* (ca. 1230) において、その詳しい拷問および殺害の方法が記載されている (谷口 1998、54頁参照)。

7 第 1 章第 2 節 1. 参照。

8 アイスランドのキリスト教への改宗については、谷口 1998、 58-61 頁、阪西 2004、304-315頁参照。

ぜならば、アイスランドへの植民者中ノルウェー出身者の中には長い間ブリテン諸島の入植地に居住していたものがいたのと同時に、彼らと共に植民したケルト系の解放奴隷も含まれており、その中には多数のキリスト教徒が含まれていたと考えられているためである[9]。第 2 点目は、地理的に孤島であり、さらにキリスト教への改宗を推し進める王がいなかったため、アイスランドへの布教は断続的に行われたことがあげられる。実際、アイスランドへの布教は 4 回にわたり行われている。第 1 回目は 981 年にソルヴァルド・コーズランソン Þorvaldur Koðránsson によって布教が行われた。その際には、北地区の若干の人々が新しい信仰を受け入れたとされているが、 985 年の全島民会で彼がキリスト教を布教すると、民衆の中で敵意が生じ国外追放を言い渡されている。第 2 回目は、 996 年にステヴニル・ソルギルソン Stefnir Þórgilsson が布教のためにアイスランドに派遣されたが、神殿や神像を破壊したため、 997 年の全島民会で彼も国外追放を言い渡される。記録によれば、 996 年ないし 997 年の全島民会でキリスト教徒の親族は、キリスト教徒であることは「一族に対する恥」であるという前提で、その者がもしも古来の神々を侮辱した場合訴えなければいけないという定めを下している。第 3 回目の布教は、サウグブランド Þangbrandr によるもので 997 年に行われ、多くの島民をキリスト教へと改宗させたが、殺害事件を起こしたため、 999 年に島から追放されている。第 4 回目の布教は、1000年に行われた。そのときアイスランドに派遣されたギツル Gissur とヒャルティ Hjalti は、布教のために全島民会に向かった。それを阻止すべく、古来の信仰を支持する人々は武装をし、 2 人を止めようとしたが失敗に終わった。しかし、これを切っ掛けに島の住民がキリスト教徒と古来の信仰を支持する人々に分かれ、互いに共同体の解散を宣言したため緊迫した状況になった。それを受けて、当時の島の立法布告者が、次の日に全島民会で次のような掟を出す。それは、アイスランドの平和を守るために、全てのアイスランド人は洗礼を受け、唯一の神を信じるべきある、しかし古来の信仰を支持している者には引き続き捨て子の権利と馬肉を食べることが認められ、供犠は秘密裏に行う分には差し支えないというものであった[10]。

---

[9] しかしながら、彼らの中には、キリストと古来の神々を同時に信仰していたものいたとされている (阪西 2004 、 310 頁参照) 。

[10] 北欧には嬰児遺棄の慣行があったが、1000年にアイスランドがキリスト教へ改宗したとき、差当り容認された古来の信仰の慣行の中に嬰児遺棄も含まれた。遺棄される嬰児は奴隷の子どもだという意見があり、しかし他方で自由人の遺棄の例も見られている。アイスランドにおいて、嬰児遺棄は広く行われた慣行であった可能性が高い。しかし、その一方で、ノルウェーはキリスト教への改宗が行われた後に公布されたノルウェー古法は、いかなる子供も育てられるべきであると記載し、嬰児遺棄を禁止している。これは他の北欧諸国の法には見られない禁止規定である。ノルウェーの『グラシング法』「教会法」は新

この1000年に行われた全島民会によってアイスランドのキリスト教への改宗の宣言がなされた。歴史的には1000年に、アイスランドがキリスト教国に成ったことが確認できるが、しかし、宣言を見ても分かるように、アイスランドのキリスト教への改宗は、ノルウェーと同様に外面的なものであったが、実際はキリスト教徒と古来の信仰を支持する人々が共存した状況をもたらした。また阪西紀子は、最初はドイツ、後に北欧諸国の大司教座から、孤島であるがゆえに、遠く隔たっていたことが起因し、アイスランドでは、極めて土着的な形でキリスト教および教会を発展させていくことになったと指摘している[11]。それとは反対に、王などの権力者による圧制によってキリスト教が推し進められたノルウェーは、信仰と生活様式の急な変換を強いられたため、土着的な形ではなく、新しい信仰を古来の信仰とは異質のものとして受け入れる形となったと考えられる。つまり、アティーアス・V. サイムソズソン Matthías Viðar Sæmundsson が述べているように、キリスト教を正式の宗教とする社会に暮らしながらも、ノルウェー民衆の精神の中では依然として古来の信仰は引き継がれていったのである[12]。すなわち、ある程度キリスト教の「現地化」に伴う社会あるいは生活の様式の変化と精神的な変化が並行していったアイスランドに対し[13]、ノルウェーではキリスト教の現地化に伴う社会の変化があくまで表面的なものにとどまり、民衆の内面部分は古来の信仰に留まっていたと言えるであろう。

3. 宗教的背景のトロル像変遷の関係について

ここまで、ノルウェー、アイスランドの両国における土着の信仰からキリスト教への改宗の過程に見られる差異を確認した。それでは、民間説話において、山室の言葉に習うな

生児に対する洗礼を強制している。他方で、『フロストゥシング法』「教会法」でも嬰児遺棄を禁止しているが、育ちそうもない弱い子供、あるいは肢体不自由児はその例外とされた。しかし、キリスト教への改宗前は、ノルウェーにおいても、嬰児遺棄は不法行為ではなかったことがサガにおいて確認することができる（熊野聰、『サガから歴史へ』、未來社、1994年、222-225, 246-247 頁参照）。また、馬肉食も容認された古来の信仰の慣行の中に含まれていた。熊野によれば、アイスランドにおいて、馬肉食は宗教的な意味もあったが、同時に広く行われていた食習慣であったと述べている（熊野1986、128 頁参照）。

[11] 阪西2004、312 頁参照。

[12] アーティスによれば、18世紀の終わりまで古来の信仰に基づく文化は存在し、絶えず威圧的な存在であったと指摘している。また、北欧諸国では社会構造の基盤としてのキリスト教の原理は長い間脆弱なものだったと述べている。(Cf. Ludvig Holm-Olsen, *Vikingenes visdomsord*, Gudrun, Oslo, 1994, s. 13-15.)

[13] 「現地化」については、第 1 章第 2 節 2-1. 脚注37参照。

らば、古来の神々・巨人に「とって代わり」登場しているトロルとキリスト教との間に、どのような対比がみられるのであろうか[14]。アミリアンは、ノルウェー民間説話における聖書の影響を次のように論じている[15]。

アミリアンは、キリスト教の伝道とともに、ノルウェーにおけるすべての超自然的存在は価値下落させられたが、トロルだけは悪魔のイメージと同化したと推測している。その例として、 AT300-303 「竜退治」 (The Dragon Slayer) に分類されるノルウェー民間説話を挙げている。アミリアンによれば、「竜退治」に属する類話における敵対者として登場するドラゴン、獣、トロルあるいは巨人 *rise* の属性は、聖ヨハネ黙示録から引き出されたものである。複数の頭を持つトロルは、黙示録 13:1 にみられる獣の描写の中に見られ、そして一度に頭を切り落とさない限り、頭を再生させるトロルの能力は、黙示録 13:3 にみられる獣の驚くべき蘇生と類似していると指摘している。確かに、第 1 章第 2 節で確認したように、ノルウェー民間説話に登場する複数の頭を持つトロルは、一度にすべての頭を切り落とさなければ死に至ることはなく、主人公はトロルを殺すためにはそのようにすることが要求されている。それに反し、第 1 章第 3 節で指摘したように、アイスランド民間説話に登場する複数の頭をもつトロルは、ノルウェー民間説話の複数の頭を所有するトロルとは異なり、斬首で殺されるという描写はみられず、焼き殺される、あるいは打ち殺されるなどと一定しない。ここで、アミリアンの論の妥当性を決定的な仕方で検証することはできないが、アミリアンの説に従うのであれば、少なくとも、アイスランド民間説話に登場する複数の頭を所有するトロルには、聖書からの影響はみられないといえるだろう。他方で、アイスランド民間説話に登場するトロルは、複数の頭を持つトロルと同じように、火にかけられる、あるいは身体をばらばらに引き裂かれるという殺され方が多くみられた。このトロルの死に方は、ノルウェーでは見られないものである。これらのトロルの死に方における差異はどのような要因があるのであろうか。この点について、宗教的観点から検討してみよう。

上で述べたように、アイスランド民間説話に登場するトロルで、火にかけら死亡するものは51話 (内、敵対者としてトロルが登場する話は32話) の中で 9 話[16]、身体をばらばら

---

[14] 山室 1977 、198-208 頁参照。

[15] Cf. Amilien1996, pp. 141-144.

[16] 資料 2: J22, 23, 24, 31, 33,34, 36 番、 F 2, 4 番参照。 MI1 番の話は、火にかけられようとしていた。

に引き裂かれ死亡するものは 3 話[17] 、日光の光によって死ぬものは 4 話[18] みられた。やはり、火にかけられて死亡する敵対者としてのトロルの数は圧倒的に多い。では具体的にどのように描写されているのかを見てみよう。

[女トロル *tröll* 「ブラウーヴェル」 *Blávör* は人間の姿に変身し妃の座についていたが、最後に民衆を食べて国を滅ぼそうとしているのが知られてしまい、] 王子たちは、女トロルの命を救わず、石で打って殺し、それから赤々と燃える焔で焼いた。
(「リーネイクとレウーヴェイの物語」 *Sagan af Líneik og Laufey* (J24, AT870B [19]) より)

[女トロル *tröllkona / tröllskessa* は、人間の姿に変身し、小さな国で王女に成りすましていたが、城に火をつけようとしているのが見出される。そこに王様と家来たちは城へ馬を走らせ、] 女トロルの頭に袋をかぶせ、燃え上がる薪の上で焼き殺す。
(「バングシーモンと女の妖怪」 *Bangsimon og tröllkonan* (J31, AT308 [20]) より)

[12 人の女トロル *tólf tröllskessur* は、卵に自分たちの命を保管しており、その卵を主人公ソルステイトンが見つける。] ソルステイトンは、洞窟に入ってきた女トロルの眼にすばやく卵をぶつける。すると彼女らは残らず、すぐに倒れて死んだ。ソルステイトンは、彼女らの死骸に火をつけて女トロルたちを残らず焼却した。
(「ソルステイトン・カールストンと十二人の女巨人たち」 *Þorstrinn karlsson og skessurnar tólf* (J33, AT 556B [21]) より)

このように、トロルは火にかけられ死亡する例が多く、また「リーネイクとレウーヴェイの物語」と「ソルステイトン・カールストンと十二人の女巨人たち」に登場する主人公は、殺してから死骸を火にかけるという念入りな行動をとっている。この行動は、ノルウ

[17] 資料2: J 25, 26, 27番参照。
[18] 資料 2: J2, 14, 15, 32 番参照。
[19] AT870「塚に閉じ込められた王女」The princess confined in the mound.
[20] AT308は Thompson1946 には記載なし。
[21] AT556B は Thompson1946 には記載なし。

ェーには見られないものである[22]。そもそもアイスランドでは土葬が主流であり、火葬の慣習は、ノルウェーからの植民者たちが持っていた初期のものである。ストレムによれば、火葬の慣習は、火葬が死者の霊魂を肉体の被いから解き放ち、遥かなる死の国への旅を容易にすることを目的とするという、古来の死者の肉体に対する信仰であるとしている[23]。しかしながら、死の国とは、古来の神々の世界にある戦死した英雄たちの館「ワルハラ」Valhǫll を指しており、この信仰は決してトロルや超自然的存在に対して行われていたものではない。それでは、このアイスランド民間説話に登場するトロルにみられる特徴的な死に方は何に起因しているのであろうか。

この問題に対する、第 1 章第 4 節で扱った、アウルマンが提出した、サガにおける「トロル」という語の使用法に、その解決への糸口があるように思われる。それは、「トロル」という語が、悪霊と幽霊 *draugur* を意味するという第 4 の使用法である。このことについてはアーノルドも指摘しており、エッダ群の中ではトロルとは別に存在していた悪霊・幽霊は、サガにおいてトロルの中に入り込み混合が起きたと述べている[24]。

キリスト教の伝道が北欧諸国において行われる以前は、悪霊や幽霊は、生前のままの血肉をそなえた、大きな災いをなす存在であると考えられており[25]、ストレムは、民衆の幽霊・悪霊に対する恐れは根が深く、全般的に普及を見ていたと言及している[26]。ここで、アイスランド民間説話に登場するトロルとの関係性を指摘するうえで重要になってくるのは、両者の外形と殺され方である。第 1 章第 3 節と先で確認したように、物語の最後に火にかけられるという末路を迎える敵対者トロルは、「人間の姿に扮したトロル」である。他方で、幽霊・悪霊の方も、物語において人間と同じ姿をとり登場するのである。

それでは、彼らの殺され方はどうであろうか。幽霊が登場するアイスランド民間説話を参照すると、殺される描写がないものが多く、確認できない。しかしながら、アウルマンが、トロルと悪霊・幽霊の混合が見られると指摘しているサガにおいてはどうであろう。ストレムは、サガにおける災いを成す幽霊を無害にする方法を次のようにまとめている。人々は、 1) 死体に杭を打ち通し、死者の頭を切り落とし、それを再び定着し甦らないよ

---

22 例えば、「リーネイクとレウーヴェイの物語」のノルウェーの類話「フィン王の娘」*The Finn King's daughter* (FN67) に登場する、人間の姿に変身した女トロルは川に流され死亡する。

23 ストレム 1982 、 27-29 頁参照。

24 Cf. Arnold2005, pp. 124-125.

25 山室 1977 、229-235 頁参照。

26 ストレム 1982 、 234 頁参照。

うに臀部あるいは両足の傍に置いた、あるいは 2) 死体を灰なるまで焼いた[27]。この幽霊・悪霊に対する無害化の方法と、人間の姿に扮して登場するトロルの身を引き裂く、死骸を火で残らず焼却するという殺し方との間に一定の共通点が見られる。つまり、アイスランド民間説話に登場する「人間の姿に扮したトロル」とサガにおける幽霊・悪霊は、外形および殺され方の点で共通しているといえる。

この両者の間にみられる共通要素は、偶然の一致であると見做すことは適切ではない。なぜなら、キリスト教への改宗の後、民間説話においてもトロルに幽霊が結びついたという論も存在しており[28]、この共通要素を単なる偶然の一致として無視することはできないからである。アウルマンおよびアーノルドが、以前は区別されていたトロルと悪霊・幽霊が、サガにおいて混同されたことによって、「トロル」という語が全ての超自然的存在あるいは力を示す転機となったと指摘するように、アイスランド民間説話において、トロル、特に人間の姿に扮したトロルが、悪霊・幽霊のもつ様相と結びついていてもおかしくないだろう。13世紀から14世紀に描かれたサガにおいて、トロルが他の超自然的存在、つまり幽霊・悪霊を吸収し、アイスランド民間説話に登場する「人間の姿に扮したトロル」がその古層の一側面を展開しているのではないだろうか。

さらにストレムは、アイスランドにおいて幽霊を無害化するやり方は、実際にキリスト教への改宗が宣言された後にも行われており、極めて非キリスト教的な行いであると指摘している[29]。このストレムの指摘に着目するのならば、例えキリスト教への改宗以前にノルウェーでも幽霊・悪霊に対する無害化のための行為が行われていたとしても、この行いは土着の信仰とキリスト教への信仰の二重性を認めたアイスランドだからこそ容認されるものであり、権力者による圧制によってキリスト教への改宗を迫られたノルウェーではその慣行の存続は困難であったと考えられる。さらに、「人間の姿に扮したトロル」が見られないノルウェーでは、したがって、サガでみられたような、トロルと幽霊・悪霊との混合は容易ではなかったと推測できる。

ここまで、トロルの殺され方から、トロル像に見られる非キリスト教的、土着の信仰に由来する要素を確認したが、次に、ノルウェー、アイスランド民間説話に登場するトロル

---

27 ストレム 1982、234-236頁参照。

28 しかし、その推測に対する、実際の詳しい検証は記載されていない(山室静、『北欧文学の世界』、東海大学出版会、1969年、155-156頁参照)。

29 ストレム 1982、234-236頁参照。

におけるキリスト教的要素の検討を行う。例えば、ノルウェー民間説話では、トロルが讃美歌の本 salmeboken を持っている（AM51）、処女マリア Jomfru Marie は超自然的存在のフルドラ族の出であり、彼女にはトロルの血 trollblod が流れているという物語が見られ（AM56）、超自然的存在トロルに間接的にキリスト教の要素を含有させている。ここで、「間接的」とした理由はそれぞれの物語に登場するトロルと人間との関係にある。一つ目の物語では、トロルは確かに讃美歌の本を持っているが、決してトロルがキリスト教徒と友好的な関係にあるわけではない。教会に通う人々から孤立した主人公に、トロルが彼に助けてもらったお礼として讃美歌の本を与えるということに過ぎないのであり、トロルが賛美歌を歌う、あるいは教会に赴くなどの描写は見られない。他方で、二つ目の物語では、処女マリアにトロルの血が流れているという描写は、むしろ処女マリアを超自然的一族の出身として描くことで、超自然的存在の側の存在として扱っているのである。そのため、トロルがキリスト教の側に組み込まれたのではないとの見方が可能である。また、実際に物語の中でトロルと処女マリアの接触はみられないため、語り手がトロルに「間接的」にキリスト教の要素を含有させているということができるであろう。

他方で、アイスランド民間説話に登場するトロル像にはどのようにキリスト教的要素がみられるのかみてみよう。先の第 1 章第 3 節 3. で取りあげたが、助力者としての役割を持っていないトロルと人間の間に見られる友好的な関係は、アイスランド民間説話独自のものであると指摘した。その代表例として、「ブラウフィヤルに住むベルグソウル」*Bergþór í Bláfelli*（J16）が挙げられる。

> 古来の神々が信じられていたころ、洞窟にトロルの夫婦（夫ベルグソウル Bergþór 、妻ヘレフナ Hrefna）が住んでいた。しかし、アイスランドがキリスト教国に成った後、妻のヘレフナはキリスト教に嫌悪感を抱き、洞窟を出ていく。それに反して、夫ベルグソウルは新しい信仰に嫌悪感を示さなかった。そしてベルグソウルはある農場主に出会い、自分が死んだら、自分を教会の鐘の音と祈りの声が聞こえる場所に埋葬してほしいと頼む。農場主はそれを約束し、ベルグソウルの亡くなった報せを受け、ベルグソウルを教会の傍に埋葬した。

以上が、「ブラウフィヤルに住むベルグソウル」の概要であるが、極めて特徴的な要素がいくつか見られる。まず、教会の鐘の音についてである。アイスランド民間説話におい

て、教会の鐘の音はいくつかの物語 (J2, 4, 9) でみられるように、トロルを死に至らせる、あるいは追払う結界的な役割を担っている。そのため、トロルは教会の音を嫌うという特徴を有している。しかしながら、この物語に登場するトロルは、教会の鐘の音に恐怖心を抱いておらず、他のトロルとは性質を異にしている。また、他方で、トロルは教会の傍に埋葬してほしいと人間に依頼している描写がある。人間に埋葬を依頼するトロルはもう一話みられるが (J13) 、教会の敷地内への埋葬は見られない。そして、農場主もトロルが教会の傍に埋葬されることを容認し、また彼の持ち物である指輪などを教会のドアなどに取り入れているのである。この物語を参照すると、トロルは、一見すると埋葬を通じてキリスト教の支配下にはいった、あるいはキリスト教徒になったという捉え方ができるかもしれない。しかしながら、他方で物語に登場するブラウフィヤルの妻 (女トロル) はキリスト教に嫌悪感を示し、抵抗の意思を表しており、キリスト教への対立も示されている。すなわち、トロルという超自然的存在の中にあっても、アイスランドのキリスト教への改宗の際にみられた、古来の信仰とキリスト教との両立を認める二重性が存在し、トロルにもその様相が流れ込んだと推測できるだろう。

以上の分析から、ノルウェーではキリスト教という宗教の下では持続しえなかった、幽霊を無害化するために遺体を破壊するなどの慣行がキリスト教への改宗後も持続されていたアイスランドでは、民間説話において、それらの事象に起因する層がトロル像の中に取り込まれていったと考えられるだろう。また、王による圧制が行われ、新たな信仰への急な転換を求められたノルウェーは、民間説話において、間接的にのみしかトロルとキリスト教との関係を描くことができなかった。それに対して、阪西が土着的な形でキリスト教および教会を発展させていくことになったと指摘するように、アイスランドは古来の信仰からキリスト教への緩やかな移行が展開されたと考えられる。即ち、アイスランドにおいて、古来の信仰とキリスト教という二つの信仰が併存する期間が存在し得た。そのため、超自然的存在トロルのなかにも、その二重性が直接的に民間説話の中で再現されているのではないだろうか。

次節では、以上の点を留意しながら、社会制度の観点に立ちトロルを展望する。

第 2 節　ノルウェー、アイスランドの社会制度とトロル像変遷の関係

本章第 1 節では、宗教的背景からトロルと他の超自然的存在と混同と、トロル像における古来の信仰とキリスト教の要素を検討した。本節では、前節で確認した人間とトロルとの関係に注目し、それに関して社会制度の観点から考察を行う。

前節で述べたように、アイスランド民間説話に登場するトロルは幽霊・悪霊 *draugur* と共通する独特な殺され方をする。さらに民間説話において、両存在の共通点は、双方とも人間の姿をして登場するという側面がある。幽霊・悪霊が人間の世界に登場するのに対し、トロルは人間の姿に変身をして人間の世界に入り込んでおり、出現する場所は異なるが、二者とも物語の中で活躍する場所は人間の世界である。このアイスランド民間説話にみられるトロルが人間の姿を取り、人間の世界に入り込むという描写は、先にも述べたが、ノルウェー民間説話では見られないものである[30]。ノルウェーのトロルは、人間に魔法をかけ、別の姿に変身させることはあっても、自身の姿を人間に変身させることは稀である。また、ノルウェーのトロルは、人間を攫いに人間の世界に直接やってくることはあるが、そこに留まることはせず、自分の住処に戻るという特徴を持っている[31]。

このように、ノルウェーとアイスランド民間説話に登場するトロルは、人間の世界との接触方法が異なるが、その一方で、人間の世界と接する理由にも差異がみられる。確かに、両国のトロルは、人間を食料にするために人間を攫うという点では一致するが、それに対して、人間を結婚相手として捉えている場合はもっている理由が異なる。アミリアンは、ノルウェー民間説話に登場するトロル固有の性質に、「美しさを愛でる」という点を挙げている[32]。つまり、ノルウェーのトロルは、特に王女や人間の美しさに惹かれる傾向があり、その美しさを手に入れるために、人間を攫うのである。しかしながら、アイスランド民間説話に登場するトロルには、そのような特徴はみられない。アイスランドのトロルは、人間を攫う場合、自分たちの種族を増やすために人間をトロルに変化させるという考えが窺えるのである。このトロルの人間をトロルに変化させるという行為は、アウルマンが分類した「トロル」という語の第11の使用法に見られる。アウルマンによれば、トロルは人間をトロルに変化させ、トロル化した人間 (trylla menn) を作る能力をもっているのである

30　第 1 章第 3 節 3-1. 参照。

31　アミリアンによれば、この＜人間の世界に直接接触をもつ＞という特徴は、ノルウェーのトロル固有のものとして分類している (Cf. Amilien1996, p. 255.) 。

32　Cf. Amilien1996, pp. 252-256.

[33] 。それでは、トロルと人間の境界線とはなんであろうか。また、なぜアイスランド民間説話に登場するトロルと人間との間に、ノルウェー民間説話のトロルにはない移行が見られるのであろうか。

1. 超自然的存在トロルと人間の境界線の曖昧性について

アイスランド民間説話に登場するトロルは、ノルウェー民間説話のトロルと比べ、トロルと人間との間に両方向の移行が多くみられ、超自然的存在トロルと人間との境界線に曖昧さがみられると言えるだろう。アウルマンは、サガにおいてトロルと人間の明確な区別は存在せず、トロルと人間の両者が14世紀において現実の一部であったと述べている[34] 。確かに、アウルマンが提出した「トロル」という語の全13の使用法を参照すると、「トロル」という語が人間を対象としている例がいくつか確認できる[35] 。

また、アイスランド民間説話を参照するならば、第 1 章第 3 節 3-2. で取りあげた、「ロッパとロッパの養い子ヨウーン」 *Loppa og Jón Loppufóstri* (J9) では、女トロルが主人公ヨウーンを村から攫い、女トロルの住処である洞窟で、ヨウーンをトロルに変化させようとする描写がみられる。また他方で、「ヨウーラ崖にすむヨウーラ」 *Jóra í jórukleif* (J7) では、主人公のヨウーラ (女) が怒り狂い、馬の脚を引き裂くなど残虐な行いをしており、その後、ヨウーラは村から離れた洞窟でトロルと化したという話が展開されている。この物語は、「ロッパとロッパの養い子ヨウーン」とは異なり、主人公の女はトロルの手を借りずにトロルへと変身している[36] 。この話の展開は、“ 人間社会を去った人間は大きな洞窟に住むと考えられた[37] ” という民衆の思想傾向に基づいていると考えられるのではないだろうか。ここでみられる “人間社会を去った人間 ” とは、追放者のことである。そこで、ア

---

[33] Cf. Ármann2008, pp. 48-50.

[34] Cf. Ármann Jakobsson, ‘History of the trolls? Bárðar saga as an historical narrative’, *Saga-book*, 25/1, The Viking society for northern research, 1998, p. 69.

[35] 第 1 章第 4 節に挙げた第 2, 3, 5, 8, 9, 12 の使用法を参照。

[36] トロルに変化したヨウーラは、その後人間や家畜を襲い人々を脅かし始めるが、このような話はサガにもみられる。『グレティル・アースムンダルソンのサガ』では、人を殺したために追放になった男を主人公にしている。物語の中で、男は追放された後、人間や家畜を殺したりし始める。しかし、その後消息を聞かないでいるうちに、山の洞窟で死んでいるのが発見されるのである。谷口によれば、この話は、民衆の空想を掻き立て、他に類を見ないほどの多くの伝説のモティーフになった。 (谷口幸男訳、『アイスランドサガ』、新潮社、1979 年、 155-308, 848-849 頁参照 .)

[37] Cf. Ármann1998, pp. 58-60. 他方で、ノルウェーでは、人がいなくなった場合は山へ行ったと考えられていたという思想が、 AM14 番において見られる。

ウルマンが分類した第 9 の用法に注目してみよう。第 9 の用法は、「トロル」という語を「ブルンミギー」*brunnmigi* というサガの登場人物に使用している例であるが、そこでアウルマンは、「トロル」という語と“追放者”を関連付けている。

第 1 章で既に述べたが、山室は、アイスランドのトロルは、逃亡した奴隷や、何らかの罪を犯して村を追放された人間が山や森に入りトロルと化したものであると述べている[38]。それでは、アイスランドで行われていた“追放”とはどのように行われていたのかを確認していこう。

2. 北欧諸国にみられる追放制度について

北欧諸国において、追放は法律によって大きく二つに区別されていた。追放に至る犯罪の一つに「神聖な場所での殺害」がある。神聖な場所で殺害を犯した者は、神聖な場所を穢した罪として追放の罰 vargr í véum (wolf in holy places) が与えられる[39]。

他方で、罰金では償うことが出来ない罪、または罰金を支払うことが出来ない場合にも追放が執行された。なおその追放は二つに区別されている。一つ目の追放制度は、人間社会からの退去を求められるスコーグガング skoggang (forest-going) である。特に、死刑が存在しなかったアイスランドにおいて skoggang は極刑であった。しかし、skoggang を受けた者の首には賞金がかけられ、彼らを殺害しても一切の処罰が与えられないという決まりがあったため、skoggang は“死刑の宣告 a death sentence”と捉えられていた[40]。追放者同士が群れをなさないようにするため、追放者が殺されることが確認されるまで、他の犯罪者に対しては処罰の軽減や追放までの執行猶予が与えられていたとされている。二つ目は、特定の地域、地方からの限定的な追放である。スウェーデンの地域の法典では、サガの中で示されている地区追放 heradssekt (district outlawry)、fjordungsutlegd (quarter outlawry) と同様のものが言及されている。また、アイスランドの法典 *Grágás* では、アイスランドからの 3 年間の追放が命じられ、その 3 年後はアイスランドに戻り、すべての社会的権利の回復が約束されている追放 fjörbaugsgarð (lesser outlawry)[41] についても述べている[42]。

---

38 第 1 章第 4 節9. 参照。(山室 1977、235 頁、山室 1970、313-314頁参照 .)

39 Cf. William Craigie, *The Religion of Ancient Scandinavia*, Constable, London, 1914, pp. 46-47.

40 もし追放者 (skoggangsmann) がアイスランド国外への逃走に成功した場合は、アイスランドに再入国できないことになっていた。

41 アイスランドからの 3 年間の追放を厳守しなかった場合は、skoggang の罰が与えられる。

後者の skoggang および地区追放については、北欧諸国 4 ヶ国の法のなかにみられるものである。デンマークの法学者オーレ・フェンガー Ole Fenger によれば、人身不可侵性[43] の剥奪 (追放) は最古の現象に違いなく、中央権力が存在しないか、あっても遠く弱い間は、北欧諸法の効果的な強制手段として考えられた[44] 。つまり、北欧諸国では追放の制度は社会のなかで重要な地位を占めていたことは明らかである。

3. アイスランドにおける追放制度 skoggang について

ここでは、アイスランドで極刑として強力な効力を発揮していたと考えられる追放制度 skoggang に注目したい。“ 強力な効力を発揮していた ” と述べたのは次のような背景があるためである。植民の時代 (870-930 年) が幕を下ろした直後、アイスランド人は、ノルウェーでみられていたような散居定住様式をとり、必要に応じて個別的に他者との社会的関係を結んでいたが、立法・司法の集会機構、つまり全島民会 (アルシング) を成立させるに至った[45] 。古アイスランドの社会形態を研究している熊野聰は、このアイスランドで展開された社会を、「法によって結ばれた社会」と称している[46] 。しかし、この法的機関である全島民会は、立法と裁判の機能はもっているが、執行上の機能をもたず、また全島民会以外に執行公権力も存在していなかった。したがって、全島民会の一側面である裁判集会で有罪判決を下された被告は、どの機関からも直接罰を下されることなく、社会から追放されることとなる。しかし、言い換えれば、「法によって結ばれた社会」から追放されるということは、法の保護を受けられなくなるという意味に直結する。そのため、追放制度 skoggang に処された人、即ちスコーグガングスマドゥル skóggangsmaðr (「森を歩く人」) は、法律上、非保護対象となり、原告をはじめとする島民誰でもが、追放者を打ち殺してもよいとされていた。ここで、追放者は「森を歩く人」と呼ばれているが、森の少なかったアイスランドでは、「森」とは人の住んでいない場所を意味していたと考えられ

---

42 Cf. Kirsten Wolf, *Daily Life of The Vikings*, Greenwood Press, 2004, pp. 117-119.

43 自由人男子の人身上の不可侵性 (法の保障する人身、名誉、財産に対する安全) と平和は、北欧諸法において「人身不可侵性」と表現されている。

44 Cf. Hastrup, Kirsten, *Den nordiske verden*, I-II, Nordisk Forlag A.S., Copenhagen, 1992 (キアステン・ハストロプ編、『 北欧社会の基層と構造 3 －北欧のアイデンティティ 』、菅原邦城 、熊野聰訳 、東海大学出版会 、1996 年 、 85-88 頁参照).

45 熊野 1994 、 43-44 頁参照。

46 熊野 1994 、44 頁参照。

ている[47]。

ここまで、追放制度 skoggang について確認してきた。ここでまでで明らかなことは、アイスランドでは島民は有罪の判決を受けた場合、「森を歩く人」となり人間の住んでいない場所に移り住み、また誰でも彼らを殺すことができたという事実である。ここで重要になるのが、彼らが住むことになった“人間の住んでいない場所”という点である。サガにおいて、追放者が移り住んだ場所の多くは“洞窟”である[48]。即ち、追放者が村を去り、住処とする場所は“洞窟”であると考えられてきたのである。先ほど挙げた「ヨウーラ崖にすむヨウーラ」(J7) でも見られるように、アイスランド民間説話で多くのトロルが住処としているのは“洞窟”であり、住処という項目で共通点が見られる。レジス・ボアイエ Régis Boyer は、追放者は“狼”に等しく[49]、人から人間としてのあらゆる特権を剥奪し、野獣の地位にまでおとしめるものであると述べている[50]。さらに、ボアイエは、追放の宣言を受けることは、即ち、人間でないものとされることを意味すると指摘している。確かに、アウルマンが指摘するように、14世紀アイスランドにおいて、人間とトロルとの明確な区別はなかったかもしれないが、民間説話において、非人間であるものは全てトロルをはじめとする超自然的存在に分類されるのである。したがって、人間とトロルの境界線が曖昧であった時代に成立したサガにおいて、「トロル」という語を“追放者”に対して使用した際には、比喩的な意味合いも込めていた可能性の有無は定かではないが、民間説話において、＜追放者 = 人間ならざる者＞と判断される構図の下で、追放者は超自然的存在に成らざるを得なかったのではないだろうか。つまり、サガでは追放者として描かれていた人物が、民間説話では“洞窟”という住処を同じくするトロルという存在と混合されたと推測することができるであろう。

しかしなぜ、このようなトロルと“追放者”との混合がアイスランド民間説話においてのみ見られるのであろうか。それは、キリスト教への改宗後の社会制度の変容が要因とし

---

47 ハストロプ 1996 (3)、87 頁参照。

48 例えば、谷口 1976、186 頁参照。また、スウェーデンの民族学者である O. レーヴレーン Orvar Löfgren によれば、実際に北欧の森には、盗賊の巣窟、盗賊の洞窟、盗賊の峠が多くみられ、森に対する恐怖が存在したことと述べている。そのため、実際に洞窟で生活をしていた人々がいたことは確認されている。(キアステン・ハストロプ編、『北欧社会の基層と構造 1 －北欧の世界観』[1992]、菅原邦城、新谷俊裕訳、東海大学出版会、1996 年、85-88 頁参照).

49 ボアイエによれば、「狼」は北欧語のなかでは最悪の蔑称である。

50 Cf. Régis Boyer, *La vie quotidienne des Vikings (800-1050)*, Hachette, Paris, 1992 (レジス・ボワイエ、『ヴァイキングの暮らしと文化』、熊野聰監修、持田智子訳、白水社、2001 年、188-189 頁).

て考えられる。熊野は、キリスト教へ改宗後二世紀を経た13世紀の法律書によれば、有罪の判決が出されたものは人間社会から追放させるというアイスランドの生活上の基本的特質は、改宗以前のものと同じであると指摘している[51]。他方、ノルウェーではマグヌス法改正王 Magnus Håkonsson Lagabøte [在位 1264-1280 年] が、1274年に公布した『マグヌス法改正王の全国法』 *Magnus Lagabøtes landslov* では、王権が強化されており、刑は公的なものとなり、(以前であれば追放の罰にあたる) 殺人罪、身体致傷罪、または罰金を支払うことが出来ない場合でも、王の役人以外のものは被告を殺したり苦しめたりすることが禁止された[52]。つまり、無条件の追放は多くの場合、死刑もしくは体刑によって置き換えられたのである。

ノルウェーとアイスランドでは、このような法律上の明確な差異がみられる。確かに、ノルウェーにおいても追放制度 skoggang は存在していたものの、立法の権限をもっている国王が存在していたノルウェーでは、アイスランドよりも先に追放制度が廃止され、追放以外の刑が執行されるようなった。また、サガ群はノルウェーの歴史的事象やノルウェーを舞台とした物語を描いているが、サガ群はアイスランド人の手によるものであり、ノルウェーの思想が必ずしも反映されているわけではない。そのため、サガにおいて、「トロル」という語が追放者と結びついていたとしても、ノルウェーでその混合が起きていたか否かは定かではない。しかしながら、サガを参照する、あるいは朗唱する機会がなかったノルウェー人にとって、追放の記憶は遠い上に、トロルと追放者を混合するような伝承文芸は存在しなかったのではないだろうか。

以上、本節では、社会制度である追放制度という一側面からノルウェーとアイスランド民間説話に登場するトロル像の変遷を検討した。前節でも同様のことがいえたが、サガにおいてみられるトロルと他の超自然的存在や、追放者といった存在との混合がアイスランド民間説話にはみられ、ノルウェー民間説話では見られないことが明らかとなった。その原因は、サガの発祥地に依るものなのだろうか。ノルウェーとアイスランドは共に、サガ文学の衰退とともに、文学的暗黒時代を迎えるが、アイスランドでは古詩やサガを朗唱する習慣があり、古い伝承を維持し保存し、それは貧しい農民の間でも行われていたとされ

---

51 熊野 1994、 pp. 106-107 参照。

52 ハストロプ 1996 (3) 、 98-112 頁参照。

ている[53]。しかしながら、ノルウェー民間説話においてトロルが存在しているように、脈々と語り継がれているのも事実である。このノルウェー、アイスランド民間説話のトロル像にみられる相違点を踏まえながら、第 3 節では、ノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像を、トロルの住処の場所の差異からの考察していく。

第 3 節　ノルウェー、アイスランド民間説話に見られる世界観－自然が形作るトロル像－

本節では、第 1 節、第 2 節で行ったノルウェー、アイスランド双方の宗教的背景と、社会制度を観点とした分析に並行して、ノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像に両国が保有するそれぞれの自然条件および自然観といったものがどのように作用し、変遷に関わってくるのかを検討していく。

前節では、追放者が人間ならざるものとなり、人間の住んでいない場所、主として洞窟に向かっていくという空想的および歴史的事象と、超自然的存在であるトロルとの関係性について注目した。サガにおいて、追放者は人間とトロルのどちらとも区別がつかない存在として描かれていたが、民間説話では、追放者は超自然的存在に成らざるを得なかった。熊野によれば、追放者が人間の住んでいる場所からの退去を余儀なくされ向かう場所は、人間が住んでいる世界から区別された「荒々しい自然」を象徴しており、人と神々が住むべき「こちら側」に対置された、野獣や巨人や非人間的存在が徘徊する「向こう側」を示していると言及している[54]。　この「こちら側」と「向こう側」という世界観は、アウルマンも指摘しているところである。このサガ研究者は、サガにおいて、トロルは、「向こう側」にいる存在であり、「こちら側」の存在ではないという思想を民衆が有していたと述べている[55]。この「こちら側」つまり「内側」と、「向こう側」つまり「外側」の概念は、古来北欧諸国で成立し、定着していたものであり、アイスランドだけでなく、そもそもノルウェーにも存在していたのである[56]。

よって本節では、まず北欧諸国に展開していた世界観がどのようなものであったのかを確認し、その「内側」 / 「外側」の世界観がノルウェー、アイスランド民間説話において

53　山室静、『サガとエッダの世界』、現代教養文庫、1992 年、 217 頁参照。また、ノルウェーでは一部の作家がデンマーク語による作品を生み出すものの、19 世紀まで文学的展開は見られず、民衆の間ではもっぱら口承による作品だけであった。

54　熊野 1994、 pp. 104-105 参照。

55　Cf. Ármann2008, p. 51.

56　ハストロプ 1996 (1) 、 13-19 頁参照。

どのような進展をしているのかを検討する。

1. 北欧諸国における世界観について —「内側」 / 「外側」の概念

北欧諸国では、世界を「内側」 Ásgarðr / Miðgarðr 「外側」Útgarðrの二つの部分に分ける世界観が展開されていたことをエッダなどの資料が証明している[57]。この世界観によれば世界は同心円状に構造化されており、神々と人間が住んでいる世界を「内側」、巨人や他の人間ならざる種族が住んでいる世界を「外側」とを明確に区別していたのである。この世界構造は、キリスト教への改宗以前において、北欧諸国の民衆にとって根本的なものであったと考えられている。特に、ヴァイキング時代 Vikingtiden (ca. 790 – ca. 1100) と中世初期において、この区別は確固としたものであった。なぜなら、第 2 章第 2 節で述べたように、「内側」は法と平和の支配が及ぶ範囲および神々の世界として文明化と秩序を意味し、「外側」は法の支配が及ばない範囲および混沌と未開性の代表として考えられていたからである[58]。キアステン・ハストロプ Kirsten Hastrup は、社会的な意味で「内側」にいる者は誰か、そして「外側」にいるものは誰かを決定していたのは法であると指摘している。例えば前節で検討した“追放者”とトロルの混合が含意しているのは、＜追放された人間は、人間ならざる者でなくなっただけでなく、トロルが住むと考えられている世界の住人になり、「内側」の世界の法秩序から全く無縁の存在となり果てた＞という事態である。

また、この「内側」 / 「外側」の概念は、日常的な領域にも浸透していたと考えられている。とりわけノルウェーを中心とする北欧西部諸地域では、「屋敷内」 innsngarðs と「屋敷外」 útangarðr と対比が見られ、「内側」と「外側」の対立が日常生活 (主として農場生活) において展開されていた。ハストロプは、「屋敷内」と「屋敷外」の対比を次のように言い換えをしている。「屋敷内」 = 「内側」は統制され耕作された空間であり、他方で「屋敷外」 = 「外側」は統制されず人手の入っていない空間を意味している[59]。また、ハストロプによれば、この二分化された世界観は、北欧諸国にとって恒久不変の概念を成しており、キリスト教による本来は異質な世界観との並立が可能であったと主張している

---

57 北欧諸国における世界観については、ハストロプ 1996 (1) 、 13-34 頁参照。
58 ハストロプ 1996 (1) 、16 頁参照。
59 ハストロプ 1996 (1) 、18 頁参照。

[60] 。つまり、ハストロプは、キリスト教への改宗が行われた後も、北欧諸国において、この世界観が展開されていたという見解を示しているのである。

2. ノルウェー、アイスランド民間説話に展開される世界観

ここまで、北欧諸国においてどのような世界観が展開していたのかをみてきた。それでは、ノルウェー、アイスランド民間説話においても、その世界観は反映されているのだろうか。また、反映されているのならば、民間説話ではどのように展開されているのであろうか。この問題に取り組むために、ノルウェー、アイスランド民間説話に登場するトロルの住処について注目し、検討してみたい。もし、「内側」 / 「外側」の概念が民間説話においても存在しているのであれば、超自然的存在であるトロルは「外側」に配置されるはずである。既に確認したように、トロルが住処の主な場所は、ノルウェーでは山、森、岩、丘であり、アイスランドでは、洞窟、島、山、岩である[61] 。そのなかでも、ノルウェーは山や森あるいは「別世界 」、 アイスランドでは洞窟および島が、それぞれ頻出度の高い住処としてあげられる。

2-1. ノルウェー民間説話に展開される世界観

ノルウェー民間説話において、トロルの特徴的な住処として、山や森、あるいはそこを入り口とする「別世界」の描写がみられる。アミリアンは、トロルの属する世界に広がる肥沃な大地、即ち別世界と、死の世界に存在する楽園のイメージを重ね合わせて論じている。ノルウェー民間説話において、主人公は、別世界へたどり着くまでに様々な難題に直面するが、アミリアンの見解によれば、その主人公が辿る過程は地獄、あいは煉獄のイメージに関連付けられている[62] 。またアミリアンは、民間説話にみられるトロルが住む別世界は、 5 世紀に渡るカトリック教会による布教活動によって粉々にされた古来の信仰の残

---

[60] ハストロプはその凡例として、本章第 1 節で挙げた、アイスランドにおけるキリスト教への改宗について言及している。アイスランドは、法を二つに (キリスト教あるいは古来の信仰に基づく法に) 区別すれば、平和も真っ二つに分かれてしまうという懸念から、キリスト教への改宗を宣言するが、その一方で古来の信仰への権利を与えている。 (ハストロプ 1996 (1) 、 27-33 頁参照 .)

[61] 第 1 章第 2 節 2-1-3. および第 3 節 3-1-3. を参照。

[62] Cf. Amilien1996, pp. 108-117.

骸であると同時に、プロテスタントによって否定されたカトリック教会の煉獄の観念が流れ着いた場所であると論じている[63]。現段階で、アミリアンの指摘の妥当性を吟味するための材料がないため、ここでは一定の留保をつけた上で取り上げるが、この古来の信仰に由来する別世界とカトリック教会の煉獄の観念との統合は、ハストロプ指摘する、古来の世界観とキリスト教との並立であると捉えることが可能である。すなわち、「外側」の概念はキリスト教への改宗に関わらず、民間説話において保持され続けたと言えるだろう。この＜人間の世界＞＝「内側」から遠く離れ感知できない別世界への入り口は、山の中、岩の下、高い岩山の上あるいは森などに設定されているのである。

それではなぜ、トロルの住む別世界への入り口として、彼らの住処として、あるいは彼らと遭遇する場所として山や森などが選ばれるのであろうか。ノルウェーにおいて、「屋敷内」と「屋敷外」の概念が存在していたことは既に確認をした。その概念に従うのであれば、トロルの住処は全て「屋敷外」、即ち「外側」に分類される。しかしながら、人口の多くが農民であったノルウェーにおいて、人々は日常的に山や森と接する機会があった[64]。そのため、農場と「外側」の明確な境界線は存在し得ず、「内側」と「外側」が接触する領域が存在していたのである。なぜならば、人間にとって山や森は生活するうえの資源であり、人間の生活圏の一部分であるが、他方で、超自然的存在にとっても、同じく山や森は生活するうえでの資源であり、彼らの生活空間でもあったからである[65]。したがって、民衆にとって山や森は、「内側」と「外側」が交わる場所といえども、踏み入っていかなければならない場所であり、また超自然的存在と接する可能性のある場所でもあったのである。実際に、「ヘーダルの森でトロルに出会った小さな男の子たち」 *Småguttene som traff trollene på Hedalsskogen* (AM1、AT303[66]) では、主人公の男の子たちは食べるもの

---

[63] Cf. Amilien1996, pp. 228-230. また、クヌート・アウクルスト Knut Aukrust もノルウェーに展開されていた世界観と、キリスト教会との対立を民間説話の中に見出している。アウクルストは、AT500 に分類される話に注目し、トロルによる教会建設とその後のトロルの完全敗北の描写は、キリスト教会の超自然的な力への勝利であり、教会の建設は地理的、宇宙論的勝利の証拠であると指摘している。(Cf. Ingermark2004, pp. 19-21.)

[64] 17 世紀頃の記録では、農民は人口の 9 割を占めていた（ステーネシェン 2005、57 頁）。

[65] Cf. Ingemark2004, pp. 86-88. また、ハストロプによれば、北欧諸国で展開されていた世界観では、獲物は山の民 bjergfolket に属していたため、狩猟民にとって山の民と仲良くなることは重要であった。その一方で、トロルの一族は自らのためにある種の獣たちを確保していたため、狩猟民たちが捉えることのできない獲物が存在したと考えられている（ハストロプ 1996 (1)、67 頁参照）。このハストロプが示した考えは、AM45 番に反映されている。

[66] Hodne, AT303: 「双子の兄弟」 Tvillingbrødrene (「双子または兄弟」 The twins or blood-brothers).

を求めて森に入ると、森の中でキリスト教徒の血の臭いを嗅ぎまわるトロルたちに遭遇すると言う話が展開されている。また、「太陽の東と月の西」 *Østenfor sol og vestenfor måne* (AM6 、 AT425[67]) では、主人公はトロルの城へと失踪した恋人を探しに、何日も森をさまようと言う描写が見られる。ノルウェー民間説話において、主人公はトロルの別世界の場所を明確には知らなくても、トロルを探すためには「外側」である山や森をさまようのである。

よって、ノルウェー民間説話では、 (アミリアンの論に習うのならば) キリスト教の影響を受けつつも、「内側」 / 「外側」の世界観は存在しており、トロルの住処は「外側」におかれていると言えるだろう。

2-2. アイスランド民間説話に展開される世界観

次に、アイスランド民間説話において、「内側」 / 「外側」の概念が存在するのか、また存在するのならば、どのように展開されているのかを見ていこう。先にトロルが別世界を保有するという特徴はノルウェー独自のものであると述べたように[68] 、アイスランド民間説話に登場するトロルは、主として洞窟、 (無人) 島に住処を置いている。まずは、トロルの住む (無人) 島からみていく。トロルの住んでいる場所を「外側」と見なすのであれば、トロルの住む洞窟も島も「外側」に分類されるが、その法則が成り立つかどうかを吟味していく。例えば、「リーネイクとレウーヴェイの物語」 *Sagan af Líneik og Laufey* (J24 、 AT870B) を見てみよう。

> [王の妃は死ぬ間際に、「もし新しい奥方を求探すのであれば、小さな町や遠く離れた島にいる人を選んではいけない」と言い残し亡くなる。王は悲しみに暮れ、国の支配が乱れたため、大臣は新しい妃を探す旅に出る。] 大臣は海に船を進め、その旅路をしばらくの間進んだ時、彼の上にとても濃いもやがかかり進行方向を見失う。陸を見つけられないまま丸一カ月、漂流を続ける。すると大臣の前に、ある知らない陸地が現れる。 (中略：島の中の森で、美しい人間の姿をした女トロルに出会う .) 大臣は、

---

[67] Hodne, AT 425: 「東の太陽と西の月」 Østenfor sol og vestenfor mane (「消えた夫をさがす」 The search for the lost husband).

[68] 第 1 章第 3 節 3-1-3. 参照。

その女を王の新しい妃として船に乗せる。すると、もやが晴上り、大臣はこの土地があたり一帯に崖のある一つの岩礁なのを見た。（中略）すぐに強い風が吹き出し、王の都へ帰り着く。

この物語は、大臣が難破したどり着く無人島で人間の姿に扮した女トロルに出会うとうものであるが、大臣が無人島を去る場面に注目すると、女トロルを見つけた場所は、“一つの岩礁”であり、島ではない。この描写から、大臣たちは、女トロルの魔法[69]によって造りだされた空間に滞在していたことが判明する。また、大臣の船は不可思議な天候により進行方向を左右されていることが窺え、女トロルの魔法によるものであると考えられる[70]。即ち、大臣たちは、超自然的な力によって無人島に流れ着き、またその島は魔法によって創造された場所なのである。女トロルと無人島で出会うという描写が見られる他の物語でも、人間は超自然的な力によって無人島にたどり着くのである。この超自然的な力によってトロルの住処にたどり着くと言う描写は、ノルウェー民間説話の主人公がトロルの住処（「別世界」）にたどり着く方法と同じである。即ち、アイスランド民間説話においてトロルが住んでいる無人島は、人間が感知できない場所にあるといえる。したがって、トロルの住む無人島は「外側」であると判断できるであろう。

しかしながら、トロルの住む洞窟はどうであろうか。上で述べたように、追放された人間が、人間の住んでいない場所、つまり「外側」に向かい、たどり着く多くの場所が洞窟である。この論点からみれば、洞窟は「外側」に配置される。それではなぜ、語り手は、トロルが住んでいる洞窟がある場所を感知しているのであろうか。第 1 章第 3 節 3-1-3. で述べたように、アイスランド民間説話では、実在する地名と、トロルの住処を結び付ける傾向がみられる[71]。空想上の場所にトロルの住処を設置していたノルウェー民間説話に対し、アイスランド民間説話がトロルの住処として言及する場所は、極めて現実的な意義が含まれる。確かに、尾崎が、スカンディナヴィア人は神話の世界像を具体的な「巨石」や

69　アウルマンが「トロル」という語の第11の使用法で、トロルは地形を作り変える能力 trolldómr を所有すると述べている（第 1 章第 4 節 11. 参照）。

70　J5 番、および Fb1 番にも、天候を操作する力をもつ女トロルが登場する。

71　他方で、実際の地名と結びついていない場合でも、人間がトロルの居場所を知っている例も見られる。ノルウェー民間説話の「太陽の東と月の西」（AT425）に登場する主人公がトロルの住処を探し、森をさまようのに対し、アイスランド民間説話の「イヌのモウリの話」*The Tale of the Dog Móri*（TH90、AT425）では、主人公は恋人が向かう場所（トロルの居場所）を教えてもらうのである。

「山岳 」、 さらに北欧諸国の地理上の場所と結び付けて理解する傾向があったと指摘するように[72] 、ノルウェーでもトロルが住んでいる場所をドブレ山脈と結び付けて考えていたという例が挙げられるだろう[73] 。しかし、アイスランド民間説話において、主人公たちは自分の住んでいる場所からトロルの住む洞窟へ行く (例えば、 J13, 16) 、あるいはトロルの住む洞窟から自分の家へ帰るという (例えば、J8, 11)、行き来が見られる。言い換えれば、トロルの住んでいる洞窟は、人間の住んでいない場所という点では「外側」に存在すると捉えることができるが、その一方で、そこは決して未知の場所ではなく民衆の地理的な知識が行き届いている場所であると言えるのではないだろうか。ところで民衆の地理的な知識が行き届いている場所は、ノルウェー民間説話では、「内側」と「外側」が接触する領域にあたるのだが、そのことと類比的に位置づけるのなら、アイスランドのトロルが住んでいる場所は、「内側」と「外側」の結節点にあるとみることができるであろう。

先ほど尾崎の指摘を引用したが、アイスランド人も神話の中に見られる世界像を具体的な身の回りの場所と結び付けて理解する傾向があり、その神話において洞窟は地獄「ヘル」 Hel への入り口「グニパヘリル」 Gnipahellir でとして考えられていた[74] 。またそこは、険しい、切り立った岩で囲まれた場所にあるとされている[75] 。つまり、トロルは地獄の入り口に住んではいるが、地獄の住人として捉えられているわけではない。第 1 章第 3 節 3-1. で確認したように、 AT301 に分類されるアイスランドの類話において、地下世界が展開されている物語においても、トロルはその＜地下世界の入り口＞としての機能しか持たない「洞窟」に居を置いているのである[76] 。即ち、決してアイスランドのトロルは、地獄の住人にはならないのである。トンプソンによれば、民間説話において、北欧神話を含め他の神話の意味においても、キリスト教の意味においても「地獄」は、人の手の行き届かない場所として捉えられているが[77] 、トロルはそのはるか手前に居を構えているのである。したがって、アイスランド民間説話においてトロルが登場する “洞窟 ” は、人間が行き来でき、民衆の地理的な知識が及ぶる場所にあるという意味で「内側」と「外側」の境界線

---

72 尾崎 1994 、 529 頁参照。

73 第 1 章第 2 節 2-1. 参照。

74 *Vǫlospá*.44 (『巫女の予言』第 44 節) 。また、ここでいう「地獄」 Hel とは、北欧神話における最も最下層に位置する死者の国であり、極寒の世界のことを指す。

75 ネッケル 1973 、 13 、 24 頁参照。

76 ノルウェーの類話 (AM7) では、地下世界にトロルが住んでいる。

77 主人公が地獄へ赴く場合は、何らかの超自然的助力を借りる場合が多い (Cf. Thompson1946, pp. 146-148.)。

上あるいはそれが交わる場所に配置されており、それとは反対に、“島”は「外側」に配置されると言えるのではないだろうか。

ここまで、ノルウェー、アイスランド民間説話に展開されている世界観を分析してきた。その結果、ノルウェー民間説話において、トロルが住処としている場所は「外側」に置かれているということができるであろう。また、ノルウェーで展開されていた「屋敷内」「屋敷外」の概念が示すように、民衆は自分たちの住んでいる場所のすぐ周りに、トロルたちが住む「外側」の世界が広がっていたと考えられる。他方で、アイスランド民間説話においては、トロルの住処は、「内側」と「外側」の境界線上の範囲にあり、またトロルの住む場所が“無人島”である場合は「外側」に置かれている。即ち、アイスランド民間説話において、明確に「外側」と判断され得る場所はアイスランド島内には見られないのである。さらに無人島を住処にしているトロルは、人間の姿に扮し、人間が自分の島にたどり着くのを待ち、やって来た人間たちにアイスランドに連れてきてもらうという発端をもっている。つまり、無人島に住むトロルは、自らアイスランドに到達しようとせず、人間たちがやってくることを住処である島でただ待っているのである。ノルウェーにも内側(法の内側)と外側(法の外側)の概念は存在していたが[78]、ノルウェーは、国内に4つの立法集会(裁判集会)を有しており、少なくとも4つの法的領域が存在していた[79]。そのため、法の侵害=社会からの追放という「内側」と「外側」の概念は見られるが、国内からの追放とまでは成り得なかったと考えられる。それに反して、全島民会という一つの立法集会によって成立していたアイスランドにとって法は社会の在り方そのものであったため、内側と外側の概念はノルウェーよりも確固としたものであったと考えられる。なぜならば、法の外側へ追放された人間は、アイスランドにおいて人間として生きていくことを諦めなければならないからである。アイスランドでは、法の及ぶ範囲はアイスランドの島全体であるが、ノルウェーでは、法の及ぶ範囲は立法集会の対象としている地域をさすのである。したがって、無人島に住んでいるトロルは、「内側」としての側面が強いアイスランドには自力ではやってくることができないと考えられるのではないだろうか。

アイスランドは、植民によって成立した共同体であり、植民をした人々が自ら切り開い

---

78 ハストロプ 1996 (1)、13-19 頁参照。

79 熊野 1994、101-109, 122 頁参考。その後、マグヌス法改正王は、旧来の地域ごとの法を基礎に国全体に適応される統一法を制定しており、追放制度が禁止されている。(第2章第2節 1-2. 参照)。

ていった場所である。また、植民当初は存在していた森林も、気候の寒冷化および植物資源の搾取によって衰退していく[80]。森林の衰退は、超自然的存在の住んでいるとされる「外側」の衰退でもある。なぜならば、ノルウェーからの植民してきた人々の中には、追放制度 skoggang に処された人を「森を歩く人」と呼ぶように、森は「外側」に配置された場所であり、その用語を引き継いでいるところを見るとアイスランドでも同様の概念は存続していたと推測できる。また、アイスランド人が新たな土地を求めて、 985 年頃にグリーンランドへ移住を開始しているが、他方で、ハストロプによれば、それは「外側」を征服するという意欲によるものであった[81]。即ち、アイスランドへの植民もノルウェーの人々にとってはある種の「外側」の征服心に基づいたものであったという推測もできるであろう。このことについては現段階ではまだ十分に論じることはできないが、アイスランド全土がノルウェーの人々にとってくまなく征服し、あらゆるこまやかな地形も地図上に描き込むことのできた土地であるとするならば、島内において「内側」 / 「外側」の世界観は展開し難いのではないだろうか。また、サガにおいて人間とトロル、つまり超自然的存在との区別が曖昧であったと指摘されているように、「内側」 / 「外側」の境界線にもその曖昧性が生じていたと考えられるのではないだろうか。

以上、このような北欧諸国の人々が展開していた世界観と、各国あるいは地域の自然観が結びつき、独自の世界観を展開していったと考えられるであろう。

第 2 章・小括

第 2 章では、民間説話におけるトロル像の描写を通じて、ノルウェー、アイスランド両国の世界観を展望することを目的に、両国の宗教的背景、追放制度という社会制度、自然観からトロル像の変遷を検討した。この章からは次のことが導き出せた。

第 1 章の終わりに、ノルウェーとアイスランド民間説話における、トロルという存在が含有するイメージの範囲の差異の問題を提示した。この問題に対するいくつかの答えを示すことができたと考えられる。

はじめに、ノルウェーとアイスランドのキリスト教への改宗の背景にみられる差異を確

---

[80] 13 世紀後半から森林の衰退が著しくなっていたと考えられている (清水 2009 、 3 頁、山室 1992 、 230 頁参照) 。

[81] ハストロプ 1996 (3) 、 173 頁参照。

認した。ノルウェーでは王による制裁を伴う強制的なキリスト教への改宗が行われたのに対し、アイスランドでは、キリスト教への改宗の宣言とともに、古来の信仰に基づく慣行も並行して持続することを容認する宣言が行われると言う対極的な事実を示した。この両国がもつキリスト教への改宗の背景が、アイスランドのトロル像が他の超自然的存在である幽霊・悪霊 *draugur* との混合を可能にさせたと考えられる。なぜならばトロル像が取り込んだ幽霊・悪霊の特徴は、古来の信仰に基づく慣行に由来するものであるためである。即ち、このアイスランドのトロル像の進展は、民衆の慣行に少なからず起点をもつと考えられる。また、それと同様のことが、追放者とトロルとの混合においても当てはまり、また追放者に対する、＜追放者＝人間ならざる者＞という民衆の思想が影響していると言えるであろう。

追放制度とも関連するが、北欧諸国に定着していた世界観、即ち「外側」/「内側」の概念では、ノルウェーではその概念が確固としたものであるのに対し、アイスランドにおけるその概念の曖昧性を指摘することができた。ノルウェー民間説話において、トロルが「自分の住処にやって来た主人公を襲う」という行為で示すように、自分の縄張りを意識しており、本来超えてはならない領域に対する認識を持っている。それに反し、アイスランド民間説話では、その「内側」/「外側」の概念が希薄であることを確認した。アイスランドでは、どこに誰がどんな理由で植民したのかが史料に残されているように[82]、人々はアイスランドという共同体の構成要素(居住地、人口など)を熟知していたと考えられる。したがって、他の北欧諸国の人々、特にノルウェー人が有していた「外側」/「内側」の概念が、アイスランドでは維持されにくかったと推測できるのである。

また、ノルウェー、アイスランド民間説話における描写の仕方にも差異がみられ、ノルウェーではキリスト教の要素が間接的にトロルのなかに描かれているのに対し、アイスランドではトロルとキリスト教との協和および対立関係が同時に直接的に描かれているのである。この差異は、両国の宗教的背景に因るものであると考えられ、特にアイスランド民間説話に見られるトロルとキリスト教との協和および対立関係はアイスランドの古来の信仰とキリスト教との併存した二重性を示していると言えるであろう。

以上のことから、第1章の最後に、アイスランド民間説話のトロル像は、怪物的要素が

---

[82] 『アイスランド人の書』 *Íslendingabók* (ca.1100)、『植民の書』*Landnámabók* (ca. 9-10 C.) などに、植民者の名前、植民者の数および出身地、植民した場所、植民の理由などが記載されている。

強い超自然的存在という様相と、超自然的存在と人間の間を移行可能な存在という 2 つの様相をもつと言う指摘を提示したが、前者はノルウェー人がアイスランドに植民した当初から持っていたトロル像であり、後者は植民後にアイスランドのなかで生まれたトロル像であると考えられる。

結論

ここまで、ノルウェー、アイスランドの世界観を見出すことを目的とし、トロル像の変遷を検討してきた。

第 1 章では、トロル像をノルウェー、アイスランド民間説話に見られる記述から分析を行った。両国のトロル像の特徴をテクストから抽出し、それらの分類を行った。アミリアンによるノルウェーのトロル像の研究と、アウルマンによるサガにおけるトロル像を参照し、ノルウェー、アイスランド民間説話のトロル像に見られる共通点および相違点を提示した。またこれまでの先行研究で分析対象から外されていたアイスランド民間説話に登場するトロル像の記述的分析、および魔法昔話以外に分類される物語にも焦点を当てた。

第 2 章では、第 1 章でノルウェー、アイスランド民間説話から見出したトロル像を、宗教的背景、社会制度、自然観といった観点から検討した。ノルウェー、アイスランド双方のトロル像にとって重要な転換期となる古来の信仰からキリスト教への改宗の背景をそれぞれ確認し、トロル像への影響をみた。次いで、第 1 章で提示した、アイスランド民間説話における人間とトロルとの境界線の問題に注目し、追放制度という社会制度の観点から考察を行った。これらの分析を基にノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像を北欧諸国でみられた世界観に注目し、検討を行った。

以上の第 1 章、第 2 章の分析から、次のことを示すことができたと考えられる。

ノルウェー、アイスランド民間説話に登場するトロル像を比較した結果、ノルウェー民間説話に登場するトロルは、「別世界 」、 山、森など「外側」に位置する場所に住み、人間の手に及ばない範囲に生息していると考えられている。確かに「外側」に住むトロルは身近な存在ではあったが、キリスト教への改宗以降、古来の慣行の持続が困難であったため、民衆はトロルの様相を想像力で培ってきたと考えられる。アミリアンが指摘をしている、トロルの別世界とカトリック教会における煉獄の概念の統合や、複数の頭をもつトロルと聖書における怪物の類似などキリスト教からの影響は否めない。しかしながら、エッダ群、サガ群で語りの手法から遠ざかっていく一方で、そのことがノルウェーのトロル像の独自性を生み出していると言えるであろう。その一方で、アイスランドにおいて維持され得なかった「内側」 / 「外側」の世界観がノルウェーでは維持されたため、トロルの超自然的存在としての明確な地位は揺るがなかった。

それに反して、アイスランド民間説話では、トロルの住処、および人間とトロルの境界

線の曖昧性から、「内側」 / 「外側」の世界観の曖昧性を提示することが可能である。この世界観の曖昧性は、アイスランドの共同体成立およびキリスト教への改宗が背景にあると考えられる。そのため、エッダ群やサガ群にみられる語りの手法は維持されていることが確認できる一方で、トロルおよび人間は、互いの間を移行することができるという新たな様相を身に着けている。この新たな様相と、怪物的要素が強い超自然的存在という様相とが組み合わさり独自のトロル像を進展させていったのではないだろうか。また、キリスト教への改宗以降も、古来の慣行が維持し得たために、トロルと他の超自然的存在との混合、あるいは追放者との混合が生じたと考えられる。

したがって、ノルウェー、アイスランド民間説話の双方に登場するトロル像は、ノルウェーでは民衆の純粋に想像力に基づく進展の側面が大きいのに対し、アイスランドではごく日常的な経験的な事象に基づいて形成されている側面が大きいと言える。

本論文では、ノルウェー、アイスランド民間説話におけるトロル像の変遷から、両国に展開される世界観の一側面を示すことできた。しかし、今後さらに研究を進めていくうえで、サガが示すトロル像の多様性にさらに注目することは必要不可欠である。なぜならば、民間説話におけるトロル像からトロル像の起源に迫るための資料としては、14世紀からのサガ衰退以降に文学的暗黒時代に入るノルウェーとアイスランドにとって、それ以前に成立したサガよりも重要なものはないと言えるからである。その認識に立ち、本論ではアウルマンが示した「トロル」という語の全13の使用法からもトロル像の多様性を跡付け、民間説話において見られないトロル像もいくつか確認することができた。トロル像の変遷を探ることで北欧諸国の世界観を導き出すためには、民間説話におけるトロル像の分析のみでは補えない部分があることは否定できないと思わされる所以である。また、本論文では、第 2 章で主としてキリスト教への改宗前後の時代に焦点を当てたが、その後ノルウェー、アイスランドは共に長い他国の支配を経験する。アイスランドではノルウェーによる支配を受け、次いでノルウェーがデンマークの支配下にはいると、アイスランドもそれに準じデンマーク支配下にはいる。特に、ノルウェーでは、1900年代までデンマーク語を書き言葉として使用するなど、言語レベルにまで支配が及んでいる。そのため、サガ以降のトロル像の変遷をたどるためには、デンマークの支配時代の歴史的事象に向ける必要があると考えられる。本論文で行ったノルウェー、アイスランド民間説話に見られるトロル像の分析を更に展開させるために、サガ群とデンマークによる両国の支配時代の様相を捕らえる必要があると結論付けられるであろう。以上述べたような項目に関して、これからも研究

を引き続き行っていく余地は大いにあると言える。

書誌 [1]

A. 作品（ノルウェー語・アイスランド語）

a. ノルウェー

Alm, Birgit og Mørkhagen, Sverre, *De beste Eventyrene fra Asbjørnsen & Moe*, Andresen & Butenschøn, Oslo, 2004. [現代ノルウェー語抄訳]

Alver, Brynjulf, *Jomfru Marias Gudmorsgåve: Eventyr frå Hordaland*, Norsk Eventyrbibliotek Band 4, Det norske samlaget, Bergen, 1972.

Asbjørnsen, Peter Christen og Moe, Jørgen (saml.), *Norske Folkeeventyr*, Bind I-II., Johan Dahls Forlagsboghandel, Christiania, 1841 bis 1844.

Asbjørnsen, Peter Christen og Moe, Jørgen (saml.), *Norske Folkeeventyr*, Anden forøgede Udgave, Christiania, 1841 bis 1852.

Asbjørnsen, Peter Christen (saml.), *Norske Huldre-Eventyr og Folkesagn*, Forfatterens Forlag, Christiania, 1870.

Asbjørnsen, Peter Christen og Moe, Jørgen (saml.), *Norske Folke-Eventyr*, Ny samling (Med Bidrag fra Jørgen Moes Reiser og Optegnelser), Christiania, 1871, Anden Udgave København, 1876.

Asbjørnsen, Peter Christen og Moe, Jørgen (saml.), *Norske Folkeeventyr* [1841-44], Font Forlag, 2010. [現代ノルウェー語抄訳]

Gaarder, Inger Margrethe, *Trollskap og Draugemål*, J. W. Cappelens Forlag, Oslo, 1992. [現代ノルウェー語抄訳]

Hannaas, Torleiv (saml.), *Sogur frå Sætesdal. sagde av Olav Eivindsson Austad*, Steenske Forlag, Oslo, 1927.

Holm-Olsen, Ludvig, *Vikingenes visdomsord*, Gudrun, Oslo, 1994.

b. アイスランド

Árnason, Jón, *Íslenzkar þjóðsögur og æfintýri*, Leipzig, 1862-64.

Árnason, Jón (safnað hefur), Árni Böðvarsson og Bjarni Vilhjálmsson (önnuðust útgáfuna), *Ísleszkar þjóðsögur og ævintýri*, I-VI., Bókaútgáfan Þjóðsaga, Reykjavík, 1954-61.

[1] 著者・編者がアイスランド人の場合、本来アイスランド人は名字を持たないが、ここでは父称を名字と見なし記載している.

B. 作品（翻訳）

a. ドイツ語訳

Schier, Kurt (ed.), *Märchen aus Island*, Eugen Diederichs Verlag, Köln, 1983 (小澤俊夫編、『世界の民話 32 アイスランド』[1983]、谷口幸男（抄）訳、1985年).

Stroebe, Klara und Christiansen, Reidar Th. (edd.), *Nordischen Volksmärchen*, Eugen Diederichs Verlag, Köln, 1967.

b. 英語訳

Asala, Joanne, *Trolls remembering Norway*, Penfield Press, Iowa City, 1994.

Asbjørnsen, Peter Christen og Moe, Jørgen (saml.), Dasent, George Webbe (tr.), *Popular Tales from the Norse*, Edmonston, 1859.

Asjørnsen, Peter Christen (saml.), Breakstad, Hans Lien (tr.), *Christmas fireside stories or, Round the yule log; Norwegian folk and fairy tales* [1919], New York Public Library, Lexington, KY, 2011, (Reprinted).

Boucher, Alan (tr.), *Elves, Trolls and Elemental beings*, Icelandic folktales II, Iceland Review Library, Reykjavík, 1977.

Christiansen, Reidar Thoralf (ed.), Iversaon, Pat Shaw (tr.), *Folktales of Norway*, The University of Chicago Press, 1964.

Craigie, William A., *Scandinavian Folk-lore – Illustrations of the traditional beliefs of the Northern peoples* [1896], Biblio Bazaar, Amazon Japan, 2009, (Reprinted).

Kvidland, Reimund, Sehmsdorf, Henning K.(eds.), *Scandinavian Folk Belief and Legend*, Norwegian University Press, Oslo, 1991.

Kvideland, Reimund, Sehmsdorf, Henning K.(eds.), *All the World's Reward: Folktales Told by Five Scandinavian Storytellers*, University of Washington Press, 1999 (クヴィーデラン，レイムン、セームスドルフ，ヘンニング・K監修、『5人の語り手による　北欧の昔話』[1999]、川越ゆり訳、古今社、2002年).

Lunge-Larsen, Lise (retold), *The Troll with No Heart in his Body and Other Tales of Trolls, from Norway*, Houghton Mifflin Company, Boston, 1999.

Romskaug, Brenda and Reidar (tr.), *Norwegian Fairy Tales*, University of London Press Ltd, 1961.

Simpson, Jacqueline, *Icelandic folktales and Legends*, Tempus, UK, 2004.

c. 日本語訳

アスビョルンセン，ペテル・クリステン、モー，ヨルゲン編、『ノルウェーの昔話』、大塚勇三訳、福音館書店、2003年．

アウトナソン，ヨウーン編、『アイスランドの昔話』世界民間文芸叢書第 9 巻、菅原邦城訳、三弥井書店、1979年．

ネッケル，V. G. 他編、『エッダ　古代北欧歌謡集』 [1950 / 1962] 、谷口幸男訳、新潮社、1973年 (Neckel, V. G. Khun, H., *Edda*, Heidelberg, 1962. A. Holtsmark, J. Helgason, *Snorri Sturlson*, *Edda*, Stockholm, 1950).

小沢俊夫編、『世界の民話 3　北欧』 [1967] 、櫛田照夫（抄）訳、ぎょうせい、1999年．

谷口幸男訳、『アイスランドサガ』、新潮社、1979年[2]　．

山室静編、『北欧の昔話』、岩崎美術社、1970年．

山室静編著、『新編世界むかし話集 3　北欧・バルト編』、現代教養文庫、1977年．

C. 参照文献

a. 伝承文芸学関係

Amilien, Virginie, *Le Troll et autres créatures surnaturelles*, Berg International Éditeurs, 1996.

Bolte, Johannes, Polívka, Georg, *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*, I, Georg Olms, Hildesheim, 1963

Grimm, Jacob, *Deutsche Mythologie* [1835], Keip Verlag frankfurt / Main, 1985.

Hartmann, Elisabeth, *Die Trollvorstellungen in den Sagen und Märchen der skandinavischen Völker*, Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart & Berlin, 1936, (Tübinger germanistische Arbeiten 22).

Hodne, Ørnulf, *The type of the Norwegian folktale*, Instituttet for sammenlignende kulturforskning, Oslo, 1984.

Ingemark, Camilla Asplund, *The Genre of Trolls*, Åbo Akademi University Press, Åbo, 2004.

Mckinnell, John, *Meeting the other in Norse myth and legend*, D. S. Brewer, Cambridge, 2005.

Shippey, Tom, *The Shadow-Walkers: JACOB GRIMM'S MYTHOLOGY Of THE MONSTROUS*, Arizona Board of Regents for Arizona State University and Brepols Publishers, Turnhout,Belgium, 2005.

Thompson, Stith, *The Folktale* [1946], University of California Press, 1977 (Reprinted).

[2] このサガの翻訳書には、6 話のサガが収められており、谷口は各話に対し底本とドイツ語訳の 2 冊を使用しているため、この翻訳書の原典の表記を割愛した。

稲田浩二編代、『世界昔話ハンドブック』、三省堂、2004年．
尾崎和彦、『北欧神話・宇宙論の基礎構造—『巫女の予言』の秘文を解く』、明治大学人文科学研究所叢書、白凰社、1994年．
プロップ，ウラジミール、『魔法昔話の研究　口承文芸学とは何か』[1976]、齋藤君子訳、講談社学術文庫、2009年 (Пропп, Владимир Яковлевич, *Фольклор и действительность*, Hayka, Москва́, 1976).
谷口幸男、『エッダとサガ　ー北欧古典への案内ー』、新潮選書、1976年．
ストレム，フォルケ、『古代北欧の宗教と神話』[1967]、菅原邦城訳、人文書院、1982年 (Ström, Folke, *Nordisk hedendom. Tro och sed i förkristen tid*, Akademiförlaget, Göteborg, 1967).
山室静編代、『四次元の幻境にキミを誘う　妖怪魔神精霊の世界』、自由国民社、1979年．
山室静、『サガとエッダの世界』、現代教養文庫、1992年．

b. 言語（史）関係

カーカー，アラン編『北欧のことば』[1997]、東海大学出版、2001年 (Karker, Allan. Lindgren, Birgitta og Løland, Ståle (red.), *Nordens språk*, Novus Forlag, Oslo, 1997).
岡澤憲芙・村井誠人編、『北欧世界のことばと文化』、成文堂、2007年．

c. 用語事典

De Vries, Jan, *Altnordisches Etymologisches Wörterbuch* [1957-60], E. J. Brill, Leiden, Netherlands, 1977.
Jobes, Gertrude, *Dictionary of Mythology Folklore and Symbols*, Part 2, The Scarecrow Press, New York, 1962.
Lurker, Manfred, *Lexikon der Götter und Dämonen : Namen, Funktionen, Symbole / Attribute*, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1984.
ブリッグズ，キャサリン編、『妖精事典』[1976]、平野敬一他訳、富山房、1992年 (Briggs, Katharine Mary, *A dictionary of fairies*, Pantheon, New York, 1976).
コッテル，アーサー、『世界神話事典』[1976/1986]、左近司祥子他訳、柏書房、1993年 (Cotterell, Arthur, *A Dictionary of World Mythology*, Oxford University Press, 1979 / 1986).
稲田浩二編代、『日本昔話事典』、弘文堂、1972年．

d. 歴史・宗教・社会制度関係

Craigie, William, *The Religion of Ancient Scandinavia*, Constable, London, 1914.

Shetelig, Haakon, *Det Norske Folks Liv og Historie -Gjennem Tidene*, Bind I ; Fra oldtiden til omkring 1000 e. Kr., H. Aschehoug & Co. Oslo, 1930.

Wolf , Kirsten, *Daily Life of The Vikings*, Greenwood Press, 2004

ボワイエ，レジス、『ヴァイキングの暮らしと文化』[1992] 、熊野聰監修、持田智子訳、白水社、2001年 (Boyer, Régis, *La vie quotidienne des Vikings(800-1050)*, Hachette, Paris, 1992).

カールソン，グンナー、『アイスランド小史』[2000] 、岡沢憲芙監訳、早稲田大学出版部、2002年 (Karlsson, Gunnar, Anna Yates (Translation), *A Brief History of Iceland*, Mal Og Menning, Reykjavik, 2000).

ハストロプ，キアステン編、『北欧社会の基層と構造 1 －北欧の世界観』[1992] 、菅原邦城、新谷俊裕訳、東海大学出版会、1996年 (Hastrup, Kirsten, *Den nordiske verden*, I-II, Nordisk Forlag A.S., Copenhagen, 1992).

ハストロプ，キアステン編、『北欧社会の基層と構造 3 －北欧のアイデンティティ』[1992] 、菅原邦城、熊野聰訳、東海大学出版会、1996年 (Hastrup, Kirsten, *Den nordiske verden*, I-II, Nordisk Forlag A.S., Copenhagen, 1992).

熊野聰、『北欧初期社会の研究』、未來社、1986年．

熊野聰、『サガから歴史へ』、東海大学出版、1994年．

ステーネシェン，エイヴィン、リーベグ，イーヴァ、『ノルウェーの歴史』[2003] 、岡沢憲芙監訳、早稲田大学出版部、2005年 (Stenersen, Øivind and Libæk, Ivar, *The History of Norway: from the Ice Age to Today*, Dinamo Forlag, Lysaker, 2003).

e. 文学（史）関係

Berge, Anne Lene, *Impuls 2, Teoribok*, J. W. Cappelens forlag, Oslo, 1995.

Beyer, Harald, *Norsk Litteratur Historie*, H. Aschehoug & CO., Oslo, 1939.

Bredsdorff, Elias (ed.), *An Introduction to Scandinavian Literature from the earliest time to our day*, Ejnar Munksgaard, Copenhagen, 1951.

清水誠、『北欧アイスランド文学の歩み－白夜と氷河の国の六世紀－』、現代図書、2009年．

山室静、『北欧文学の世界』、東海大学出版会、1969年．

f. その他参照作品

Ibsen, Henrik, *Peer Gynt* [1867], Gyldendal Norsk Forlag, Oslo, 2005 (2. utgave).

ブレッチャー，ローン、ブレッチャー，ジョージ編、『スウェーデンの民話』 [1993] 、米原まり子訳、青土社、1996年 (Blecher, Lone Thugesen and Blecher, George (eds.), *Swedish Folktales and Legends*, Pantheon, New York, 1993).

小泉保、『カレワラ神話と日本神話 』、 日本放送出版会、1999年 .

D. 雑誌論文

Jakobsson, Ármann, 'History of the trolls? Bárðar saga as an historical narrative', *Saga-book*, 25/1, The Viking society for northern research, 1998, pp.53-71.

Jakobsson, Ármann, 'The Trollish Acts of Þorgrímr the Witch: The Meanings of *Troll* and *Ergi* in Medieval Iceland', *Saga-book*, 32, The Viking society for northern research, 2008, pp. 39-67.

阪西紀子、「異教からキリスト教へ：北欧人の改宗を考える」、『一橋論叢』 第 131 巻第 4 号、2004年、 304-315 頁 .

堀哲、「妖怪伝承の背景 」、 『中京英文学』第 2 巻、1982年、 75-85 頁 .

谷口幸男、「ヴィルヘルム・グリムの北欧研究について 」、 『広島大学文学部紀要』第45巻、1986年、 348-370 頁 .

谷口幸男、「北欧のキリスト教改宗について 」、 『大阪学院大学　国際学論集〈論説 〉』第 9 巻第 2 号、1998年、 45-62 頁 .

E. 使用した言語辞典

[ノルウェー語]

Bertulfsen, B., Christophersen, R. og Scavenius, H., *Engelsk – Norsk, Norsk –Engelsk*, Gyndendals Ordbøker, Gyndendal Norsk Forlag, Oslo, 1954 (Tiende opplag).

Guttu, Tor (Redaktør), *Norsk Ordbok med 1000 illustrasjoner : Riskmål og morderat bokmål*, Kunnskapsforlaget – Aschehoug –Gyldendal, Oslo, 2008 (2. utgave).

Hallager, Laurents, *Norsk Ordsamling* [1802], Vigmostad Bjørke, Bergen, 2004.

Haugen, Einar (Hovedredaktør), *Norwegian English Dictionary*, Universitetsforlaget, Oslo, and University of Wisconsin Press, Madison, 1974 (New and Enlarged American Printing).

Kirkeby, W. A., *Norsk engelsk ordbook*, Kunnskapsforlaget – Aschehoug –Gyldendal, Oslo, 1986 (Annen

utgave).

Taule, Ragnvald, *Escolas Ordbok -Bokmål*, Escola Forlag, Oslo, 2003 (3. utgave).

[アイスランド語]

Hólmarsson, Sverrir (Ráðgjöf), Sanders, Christopher og Tucker, John, *Íslensk –ensk orðabók*, Iðunn, Reykjavík, 1989.

Zoëga, Geir T., *A concise Dictionary of Old Icelandic* [1910], Benediction Classics, Oxford, 2010 (Reprinted).

[デンマーク語]

Vinterberg, Hermann og Bodelsen, C. A., *Dansk –Engelsk Ordbog*, Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag, København, 1973 (Andet oplag).

Vinterberg, Hermann og Axelsen, Jens, *Engelsk –Dansk Ordbog*, Gyndendals Røde Ordbøger, Bogtrykkeriet Hefnia, København, 1973 (Ottende ændrede udgave, Niende oplag).

Vinterberg, Hermann og Axelsen, Jens, *Dansk –Engelsk Ordbog*, Gyndendals Røde Ordbøger, Bogtrykkeriet Hefnia, København, 1973 (Syvende reviderede og forøgede udgave, Syvende oplag).

古城健志、松下正三編、『デンマーク語辞典 』、 大学書林、1993年 (第 1 版).

[ドイツ語]

濱川祥枝監修、『クラウン独和辞典 』、 三省堂、2002年 (第 3 版).

相良守峯編、『ポケット独和辞典 』、 研究社、1967年 .

相良守峯編、 *Großes Deutsche –Japanisches Wörterbuch* 、博友社、1970年 (第16版).

[フランス語]

天羽均他編、『クラウン仏和辞典 』、 三省堂、2002年 (第 5 版).

倉方秀憲編代、『プチ・ロワイヤル仏和辞典 』、 旺文社、2011年 (第 4 版).

田村毅編代、『ロワイヤル仏和中辞典 』、 旺文社、2005年 (補改定第 2 版).

[英語]

Wehmeier, Sally, *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, Oxford University Press, 2005 (7th Edition).

小西友七、南出康世編代、『ジーニアス英和大辞典 』、 大修館書店、 2001-2002 年 .
松田徳一郎編代、『リーダーズ英和辞典 』、 研究社、2002年 (第 2 版).
松田徳一郎編代、『リーダーズ・プラス 』、 研究社、1994年 .

【補遺】 AT 分類Aarne-Thompson type indexの概要

AT 分類とは、アンティ・アールネ Antti Aarne (1867-1925, Finland) とスティス・トンプソン Stith Thompson (1885–1976, US) によって作成された、各昔話をさまざまな話型 (タイプ) によって分類し、番号を定めていったものである。現在、伝承文芸研究で最も代表的な AT 分類は、アールネが、各昔話に独自の「原郷」 (発祥地) があるという一元発生説派に立ち、可能な限り数多くの昔話を国際的に収集し、話型とモチーフを基準にこれらを比較・分類することによって個々の話型の原型を復元するとともに、その発生地・発生時期・伝播経路を明らかにしていることを昔話研究の方法論として提唱したことに由来する。アールネは、その方法論に基づき、1920年にフィンランド周辺の昔話を対象に話型表を作成した。その後、1927年にトンプソンが他国の資料も取り入れ拡大し、1961年にさらに増補した。2004年に改訂版[1] が出版されている。

また、トンプソンが1946年に出版した『民間説話』*The Folktale* では、 AT 番号ごとに各話型の主要な流れと分布地域の大まかな範囲がまとめられており、それらを参照することによって分析対象の昔話の話の展開の相違、あるいは登場人物の属性の相違などを確認することができる。また、ノルウェーとアイスランドの民話において、同じ話型なかで、どのようにトロルが語られているのかが展望でき、ノルウェーとアイスランドのトロル像を見出すための一つの分析方法と成り得るだろう。

以下が AT 番号の分類の概要である[2] 。

---

[1] Hans-Jörg Uther, *The types of international folktales : a classification and bibliography : based on the system of Antti Aarne and Stith Thompson*, FF communications, Suomalainen Tiedeakatemia, Helsinki, 2004.

[2] 日本語表記は、スティス・トンプソン、『民間説話　理論と展開』上・下 [1946] 、荒木博之、石原綏代訳、現代教養文庫、1977年による。トンプソンは著作の中で、folktale という言葉は、長い期間をかけて口承あるいは書承で伝承されたあらゆる形式の散文体の話を含む広い意味で使用されているが、folktale という語において最も重要な事柄は伝承性 (the traditional nature of the material) であると述べている(Cf. Thompson1946, p.4) 。日本語において folktale という語に該当する語を選定するのが困難であるため、訳者注において、「原語の folktale はそのときどきの文脈によって、民間説話、説話、昔話等に訳し分けた」と記載されている (荒木・石原訳 1977 、 p.7) 。以上のような翻訳上の事情から、原語の術語に当てられている日本語は状況によって異なっているが、 AT 分類における日本語表記に関しては、荒木・石原による翻訳が定着しているため、本論文でもこの表記に習うこととする。

1　動物説話Animal tales　(1-299)

野生動物	1-99
野生動物と家畜	100-149
人間と野生動物	150-199
家畜	200-219
鳥	220-249
魚	250-274
他の動物や物	275-299

2　本来の昔話　Ordinary Folktale　(300-1199)

A　魔法昔話　Tales of Magic (300-749)

超自然の敵対者	300-399
超自然の、あるいは魔法にかけられた夫・妻・親類	400-459
超人間的な課題	460-499
超自然の援助者	500-559
魔法の物	560-649
超自然の能力・知識	650-699
その他の超自然的な物語	700-749
B　宗教説話　Religious Stories	750-849
C　短編小説風の話　Novelle (Romantic tales)	850-999
D　愚かな悪魔の話　Tales of the Stupid Ogre	1000-1199

3　笑い話・逸話 (アネクドート) Jokes and Anecdotes　(1200-1999)

間抜けの話	1200-1349
夫婦に関する話	1350-1439
女性 (少女) に関する話	1440-1524
男性 (少年) に関する話	1525-1874
嘘に関する話	1875-1999

4　形式譚　Formula Tales　2000-2399

5　どれにも分類できない話　Unclassified Tales　2400-2499

Norske folkeeventyr　　ノルウェー　67 話

【出典】

Peter Christen Asbjørnsen og Jørgen Moe (saml.), *Norske Folkeeventyr*, Bind I-II., Johan Dahls Forlagsboghandel, Christiania, 1841 bis 1844.

Peter Christen Asbjørnsen og Jørgen Moe (saml.), *Norske Folkeeventyr*, Anden forøgede Udgave, Christiania, 1841 bis 1852.

Peter Christen Asbjørnsen (saml.), *Norske Huldre-Eventyr Og Folkesagn*, Forfatterens Forlag, Christiania, 1870.

Peter Christen Asbjørnsen og Jørgen Moe (saml.), *Norske Folke-Eventyr*, Ny samling (Med Bidrag fra Jørgen Moes Reiser og Optegnelser), Christiania, 1871, Anden Udgave København, 1876.

1) Småguttene som traff trollene på Hedalsskogen (ヘーダルの森でトロルに出会った小さな男の子たち)

大塚訳：8. 森でトロルに出あった男の子たち[1]

2) Risen som ikke hadde noe hjerte på seg

N) Trollet som ikke hadde noe hjerte på seg[2]

独)23. Von dem Riesen, der sein Herz nicht bei sich hatte[3]

大塚訳：6. 体に心臓のない大男[4]

櫛田訳：61. 心臓をもっていない巨人の話[5]

3) De tre bukkene Bruse som skulle gå til seters og gjøre seg fete (山の草地へ行って太ろうとしている三匹の雄山羊)

大塚訳：34. ふとろうと山に行く三匹のヤギのドンガラン[6]

山室訳：三びきのヤギ[7]

米原訳：三匹の山羊[8]

4) Dumme menn og troll til kjerringer

英) 76. Stupid men and shrewish wives[9]

---

[1] ペテル・クリステン・アスビョルンセン、ヨルゲン・モー編、『ノルウェーの昔話』、大塚勇三訳、福音館書店、2003 年、8 番.

[2] Birgit Alm og Sverre Mørkhagen, *De beste Eventyrene fra Asbjørnsen & Moe*, Andresen & Butenschøn, Oslo, 2004, s. 152-159.

[3] Klara Stroebe und Reidar Th. Christiansen (edd.) , *Nordischen Volksmärchen*, Eugen Diederichs Verlag, Köln, 1967, Nr. 23.

[4] 大塚訳 2003、6 番.

[5] 小沢俊夫編、『世界の民話 3　北欧』[1967]、櫛田照夫(抄)訳、ぎょうせい、1999 年、61 番.

[6] 大塚訳 2003、34 番.

[7] 山室静編著、『新編世界むかし話集 3　北欧・バルト編』、現代教養文庫、1977 年、207-210 頁.

[8] 稲田浩二編代、『世界昔話ハンドブック』、三省堂、2004 年、162-163 頁.

[9] Reidar Thoralf Christiansen (ed.), Pat Shaw Iversaon (tr.), *Folktales of Norway*, The University of Chicago

5) Jutulen og Johannes Blessom

英) 35. The jutul and Johannes Blessom[10]

6) Østenfor sol og vestenfor måne

独) 31. Östlich von der Sonne und westlich vom Mond[11]

山室訳：太陽の東・月の西[12]

7) De tre kongsdøtrene i berget det blå

大塚訳：33. 青い山の三人のお姫さま[13]

8) Følgesvennen

大塚訳：17. 旅の仲間[14]

9) Smørbukk

英) Buttercup[15]

山室訳：バタ坊や[16]

10) Manndatteren og kjerringdatteren (夫の娘と妻の娘)

大塚訳：30. ふたりの娘[17]

11) Herreper

大塚訳：12. ペール殿下[18]

12) Gutten som gjorde seg til løve, falk og maur (ライオンとハヤブサとアリになった少年)

大塚訳：29.ライオンとタカとアリになった少年[19]

13) Kvitebjørn kong Valemon

独) 29. Der weiße Bär König Valemon[20]

大塚訳：24. 白クマ王ヴァレモン[21]

櫛田訳：63. 白くま王ワレモン[22]

14) Fugl Dam

英) 81. Bird dam[23]

Press, 1964, Nr.76.

[10] Cristiansen1964, Nr.35.

[11] Stroebe1967, Nr.31.

[12] 山室静編、『北欧の昔話』、岩崎美術社、1970 年、70-83 頁.

[13] 大塚訳 2003、33 番.

[14] 大塚訳 2003、17 番.

[15] Joanne Asala, *Trolls remembering Norway*, Penfield Press, Iowa City, 1994, pp. 21-26.

[16] 山室 1977、211-218 頁.

[17] 大塚訳 2003、30 番.

[18] 大塚訳 2003、12 番.

[19] 大塚訳 2003、29 番.

[20] Stroebe1967, Nr.29.

[21] 大塚訳 2003、24 番.

[22] 櫛田訳 1999、63 番.

[23] Cristiansen1964, Nr.81.

15) Askeladden og de gode hjelperne

大塚訳：26.灰つつきとすてきな仲間たち[24]

16) Høna tripper i berget

英) 79. The hen is tripping in the mountain[25]

17) Det blå båndet

英) 75. The blue band[26]

18) Kari Trestakk

独)27. Kari Holzrock[27]

櫛田訳：62. カーリ・ホルツロック[28]

山室訳：木のつづれのカーリ[29]

19) Mestermø

英) 78. Mastermaid[30]

20) Lurvehette (もじゃもじゃ頭のフード)

英) 82. Mop head[31]

英) Tatterhood[32]

21) De syv folene

英) 71. The seven foals[33]

22) De tre prinsesser i Hvittenland

英) 68. The three princesses in Whittenland[34]

23) Kjetta på Dovre

大塚訳：2.ドブレ山地の小ネコ[35]

24) Soria Moria slott

25) Soria Moria Castle[36]

26) Gullfuglen

英) The Golden Bird[37]

---

[24] 大塚訳 2003、26 番.
[25] Cristiansen1964, Nr.79.
[26] Cristiansen1964, Nr.75.
[27] Stroebe1967, Nr.27.
[28] 櫛田訳 1999、62 番.
[29] 山室 1977、176-201 頁.
[30] Cristiansen1964, Nr.78.
[31] Cristiansen1964, Nr.82.
[32] Peter Christen Asjørnsen (saml.), Hans Lien Breakstad (tr.), *Christmas fireside stories or, Round the yule log; Norwegian folk and fairy tales* [1919], New York Public Library, Lexington, KY, 2011, (Reprinted), pp.346-353.
[33] Cristiansen1964, Nr.71.
[34] Cristiansen1964, Nr.68.
[35] 大塚訳 2003、2 番.
[36] Joanne Asala, *Trolls remembering Norway*, Penfield Press, Iowa City, 1994, pp.51-53.　24)の話と同じ題名が付けられているが出典、語り手、内容が異なっている．25)の語り手は Theodor Kittelsen.

27) Askeladden som kappåt med trollet

英)Boots who ate a match with the troll[38]

28) De tolv villender　(12 羽の野ガモ)

英)The twelve wild ducks[39]

29)Jomfru Maria som gudmor[40]　(養母、聖母マリア)

英) The Lassie and Her Godmother[41]

30) Askeladden som stjal sølvendene til trollet

英) Boots and the Troll[42]

31) Lillekort

英)Shortshanks[43]

32) Enkesønnen

英)The Widow's Son[44]

33) Rødrev og Askeladden　(キツネ[45]と灰つつき)

34) Grimsborken

英)Dapplegrim[46]

35) Gullslottet som hang i luften　(天空にぶら下がっている金の城)

36) Kvernsagn[47]

英) Legends of the Mill[48]

独) Selbst getan[49]

37) Håken Borkenskjegg

英) Hacon Grizzlebeard[50]

38) En tiurleik i Holleia

英) A Day With The Capercailzies[51]

---

[37] Asala1994, pp.31-38.
[38] Peter Christen Asbjørnsen og Jørgen Moe (saml.),George Webbe Dasent (tr.), *Popular Tales from the Norse*, Edmonston, 1859, pp.21-31.
[39] Dasent1859, pp.423-432.
[40] 登場人物にトロルは登場しないが、主人公がトロルではないかと疑いをかけられる場面がある.
[41] Dasent1859, pp.198-204.
[42] Dasent1859, pp.232-240.
[43] Dasent1859, pp.125-148.
[44] Dasent1859, pp.390-404.
[45] "Rødrev"は"赤いキツネ"の意であるが、作中では狡賢い登場人物の呼称として使われている.
[46] Dasent1859, pp.325-341.
[47] ドイツ語訳は、この話に出てくる小話を抜粋し翻訳している. 小話の中にはトロルは登場しないが、原典を参照すると、小話に出てくる"Møllerkjerring"(eine Mühle)が女トロルであることがわかる. 小話は AT1137.
[48] Breakstad1919, pp.151-161.
[49] Stroebe1967, Nr.20.
[50] Dasent1859, pp.39-48.
[51] Breakstad1919, pp.68-93.

39) Mumle Gåsegg (囁くダチョウのたまご)

英) The Greedy Youngster[52]

40) Berthe Tuppenhaugs fortellinger[53]

英) Mather Bertha's stories[54],[55]

独) Die Trollhochzeit[56]

41) Malkrelldorg (サバの引縄)

英) Mackerel Trolling[57]

42) En sommernatt på Krokskogen[58]

英) A Summer Night in a Norwegian Forest[59]

43) Tyrihans som fikk kongsdatteren til å le[60]

英) Hans, Who Made The Princess Laugh[61]

44) Sju år gammal graut (七歳のポリッジ)

45) Bjørnen og reven (熊とキツネ)**:**

4: Mikkel vil smake hestekjøtt (馬の肉を食べたいミッケル)[62]

46) Haren som hadde vært gift (結婚した男)

47) Kjerringa mot strømmen (川の流れに逆らう女/妻)

48) En halling med kvannerot (A halling dance with an Angelica's root[63])

49) Tre sitroner (3 つのレモン)

独)Drei Zitronen[64]

50) Den grønne ridder (緑の騎士)

51) Tobakksgutten (煙草の代金として売られた少年)

52) En aften ved Andelven (Andelven[65]でのある夕方)

---

[52] Breakstad1919, pp.94-107.

[53] Berthe Tuppenhaug は語り手の名前．また、この話では直接 troll という語は出てこないが、物語の中で結婚式を行っている女、あるいは客がトロルである可能性が、語り手の表現の仕方から見てとれる．

[54] Breakstad1919, pp.114-131.

[55] 他の翻訳では、タイトルが"Berthe Tuppenhaug's Stories"となっていることが多い.

[56] Stroebe1967, Nr.9. (抄訳)

[57] Breakstad1919, pp.180-193.

[58] 英題では" a Norwegian forest"と訳されているが、原題は"Krokskogen"となっており、実際に現在も実在している森の名前である．Ringerike 県(オスロがある Østlandet 県に隣接している)にある森で、大きな湖が広がっている．物語内でも、湖の話題が出ている．

[59] Breakstad1919, pp.277-294.

[60] この物語の中に、トロルは登場しないが、登場人物の一人の容姿に対し、"troll"という語を使用し、表現している．

[61] Breakstad1919, pp.269-276.

[62] 4 部作のうちの一つ.

[63] "halling dance"は Østlandet 県 Hallingdal (地名) に由来のあるノルウェーの伝統的なダンスの一つで、この昔話の舞台も Hallingdal である．また、"kvannerot"はシシウドの根っこ.

[64] Stroebe1967, Nr.4.

[65] Bårtidalen にある Andelven．現在の Akershus 県にある地名.

53) Tuftefolket på Sandflesa[66] (サンドフレサの屋敷の人々(超自然的存在))

54) Julebesøket i prestegården (司教館でのクリスマス会)

55) En signekjerring (A wise woman[67], 賢い女性)

56) Huldreætt (フルドラ一家)

57) Ekebergkongen (エーケベルクの王)

58) Graverens fortellinger (墓掘り職人の語る物語)

59) Fra Sognefjorden (ソグネフィヨルドの物語)

60) Fiskersønnene (漁師の息子たち)

61) Klokkeren i bygda vår (私たちの村の寺男)

62) Gutten som skulle tjene tre år uten lønn (見返り(給料)なしに 3 年間働いた男の子)

Høyfjellsbilleder[68]**:** (高い山の物語)

63) 1: **En søndagskveld til seters** (夏の山の牧草地でのある日曜の夜)

64) 2: **Rensdyrjakt ved Rondane** (ロンダーネでのトナカイ狩り)

独) Per Gynt[69]

65) En aften i nabogården (隣の農場でのある午後)

66) På høyden av Aleksandria (エジプト、アレキサンドリアの丘で)

67) Tatere (ジプシー)

---

[66] Sandflesa は北ノルウェーHelgeland 県に属する Dønna 諸島の一つ.

[67] Marte Hvam Hult, *Framing a national narrative –The legend collections of Peter Christen Asbjørnsen*, Wayne State University Press, Detroit, 2003, pp.120-129, 抄訳と分析を参照できる.

[68] 2 部構成のお話で、物語内では方言が使われているほか、英語・ドイツ語も使われている.

[69] Stroebe1967, Nr.1. (抄訳)

(a)名称と外形：「」内は名前、それ以外は表記されている呼称．( )内は外形.
(b),(c),に関して特に記載がない場合は、— と表記する.
また、注記の欄には、註において特徴的な内容を要約し記載した．“*“以下の註は粉川による.
AT 番号分類は Ørnulf Hodne, *The type of the Norwegian folktale*, Instituttet for sammenlignende kulturforskning, Oslo, 1984、およびオスロ大学 Universitetet i Oslo の HP で公開している AT 番号対応表[70]を参照している．(AT: Antii Aarne and Stith Thompson, *The Types of the Folktale. A classification and Bibliography* (Second Revision), Helsinki, 1971.)
モティーフ・インデックス(Index of Motifs)分類は、Stith Thompson, *Motif-Index of Folk Literature*, 6 vols, Bloomington, Indiana, 1955-58 による．ML (Index of Migratory Legends)分類は、Reidar Th. Christiansen, *The Migrartory Legends: A Proposed List of Types with a Systematic Catalogue of the Norwegian Variants*, Helsinki, 1958 による.

番号	(a)名称と外形	(b)出現の仕方の特徴	(c)住居	注記
1	(i) skogtroll 森のトロル / trollene トロルたち (3 人で一つの目玉しか持っていない、魔法 trollskap を使える) (ii) kjerring 女 (i)の妻 敵対者	(i)鼻を鳴らし、「ここはキリスト教徒 kristent の血のにおいがする！[71]」と言いながら、重そうな足音を響かせてやって来る．(大塚訳は、「キリスト教徒」ではなく「人間」となっている) (ii) (i)に呼ばれ、主人公たちのいるところから遠く北の岩山からやってくる.	(i)(ii) kampesteinen 巨大な岩 (ヘーダルの森 Hedalsskogen から遠く北のほうにある) (大塚訳：丸い丘)	1842 年、Oppland 県 Sel で、Asbjørnsen によって記録された話．53 類話がノルウェー各地(Norland 県まで)で記録されている. AT303
2	(i) trollet 敵対者	(i)主人公の 6 人の兄とそれぞれが連れていた姫を石に変える.	(i) trollgården トロルの家 (険しい岩壁にある家)	おそらく 1842 年に、Telemark 県 Seljord の Anne Golid から Moe が採集し、記録した

[70] Eventyrene listet etter eventyrtyper (http://www.hf.uio.no/ikos/tjenester/kunnskap/samlinger/norsk-folkeminnesamling/eventyr/eventyrene-etter-typenummer/) 2012/10/24 参照

[71] "Det lukter kristent blod her!"

				話. 31 類話がノルウェー各地 (Nord-Trøndelag 県まで) で記録されている. AT302 ML4000: The Soul of a sleeping person wanders on its own (The „Guntram Legend”)
3	(i) stort, fælt troll 図体がでかい、おそろしいトロル (皿のように大きい目、くま手の柄くらい長い鼻) 敵対者	(i) 山羊が橋を渡ると、「誰だ、おれの橋を渡っているのは！」と怒鳴る.	(i) 橋の下 (激流の川に架かる橋の下)	1842 年、Oppland 県で Andres Lysgaard から Asbjørnsen によって採集され、記録された話. 9 類話が南ノルウェーで記録されている. AT122E
4	(i) Ola Sør-i-garden (troll のような愚かで騙されやすい性格) 実際にこの話にトロルは出てこないが、夫の性格をトロルに例えて説明している. トロルの性格のイメージがわかる.	(i) ―	(i) ―	1859 年[72]、東ノルウェーSogn og Fjprdane 県 Sogn で P. Ch. Asbjørnsen によって採集された. この話はヨーロッパのほとんどの地域から報告されている. 10 類話が報告されている (Nordland 県まで). またイラクなどの近東、アングロサクソンの間でも伝統的に

[72] Christiansen1964 には採集年は 1847 年と記されている. オスロ大学の AT 番号対応表および Hodne1984 では 1859 年.

				語られている. AT1406[73]
5	(i) jutul (大きな体の男、皮の袋と銀ダーラのようなボタンの付いた白い上着、12 歩で一マイル走る馬をもっている) 正体が明かされるまでは Vaage 出身の男として描かれる 助力者、あるいは助力者でも敵対者でもない ⇒主人公を家まで送ってあげる.	(i)主人公 Johannes Blessom が歩いているところを突然跨いで越えていく. ⇒主人公の名前 : ノルウェーの農民は習慣的に農場の名前で呼ばれた.	(i) 裂け目となめらかな壁の小さい山 (jutul の山 Jutulsberget、山に Jutulsporten と呼ばれる出入り口があり、宮殿に続いている. 出入り口の大きさは最も大きい 15 の頭を持つトロルが膝を折らずに、ゆうゆうと通れるほどの大きさ.	1842 年に東ノルウェーVaage でアスビョルンセンによって採集された. この話は人間とトロルの間に交際があった時代の話である. 当時ノルウェーには裁判所がなくコペンハーゲンにまで出向かねばならなかった. この伝説の確認されている 30 類話の大部分が東ノルウェーのものである. デンマークのサクソ・グラマティクスの Gesta Danorum のなかに類似した話がある. AT 番号該当なし. Motif D2121.5:Magic journey: man carried by spirit or devil ML 5005: A Journey with a Troll
6	(i) troll ((ii)の魔法によって白熊 kvitbjørnen の姿	(i) (白熊の姿で)主人公の家へやってきて、主人公に求婚	(i) slott 城 (険しい山 stort fjell の崖の中にある城)	1870 年頃、南ノルウェー Aust-Agder 県 Valle で A. Schneider

[73] Christiansen1964 の解説註に AT1460 と記されているが、同書巻末に AT1406 と記されていることと、オスロ大学の AT 番号対応表および Hodne1984 にも AT1406 に分類されていることから、この話を AT1406 と判断した.

	に変えられている美しい王子) (ii) stemor 継母 / gamletrollkjerringa 年老いた女トロル (3 エレもある長い鼻) (iii) prinsesse / nesegrevet 鼻女 / trollpakk トロルども (ii)の娘 (醜い) (iv) gammel kjerring 年老いた女 (金のりんごを持っている) (v) gammel kjerring 年老いた女 (金のすき櫛を持っている) (vi) gammel kjerring 年老いた女 (金の糸車を持っている) (vii) østavinden 東風 (viii) vestavinden 西風 (ix) sønnavinden 南風 (x) nordavinden 北風 (xi) trollene トロルたち / småtrollene 小さいトロルたち	する. (ii) — (iii) 主人公に金色のりんごを売ってくれないか、と頼む. (iv) 険しい山のふもとにいる. (v) 大きな山のふもとで、櫛を持って座っている. (vi) 険しい山のふもとにいる. (vii)(viii)(ix) — (x) 主人公と主人公を乗せていた(ix)南風に冷たい風をぴゅーぴゅー吹き付けてきた. (xi) (ii)(iii)に加勢する.	(ii)(iii) slott som ligger østenfor sol og vestenfor måne 〈太陽の東・月の西〉のお城 (人間は到底辿り着けないと言われている) (iv) — (v) — (vi) — (vii)(viii)(ix) — (x) — (xi) slott som ligger østenfor sol og vestenfor måne	が記録した話. 80 類話がノルウェー各地(Nordland 県まで)で記録されている. AT425
7	(i) bergtroll 山のトロル / troll (頭の三つあるトロル) (ii)bergtroll / troll (頭の六つあるトロル)	(i)(ii)(iii) 鼻を鳴らし、「ここはキリスト教徒 kristent の血と骨のにおいがする！[74]」と言いなが	(i)(ii)(iii) 岩の下 (岩の下にある深い穴 dypt hull の下に別世界 annen verden が広がっている.)	52 類話がノルウェー各地(Nordland 県まで)で記録されている.

[74] "Tvi, tvi! Her lukter kristenmanns blod og bein i mitt hus,"

	(i) bergtroll / troll (頭の九つあるトロル) 敵対者	らやって来る. (大塚訳は、「キリスト教徒」ではなく「人間」となっている)		AT301
8	(i) trollkjerringa 女トロル (金の剣を持っている) (ii) trollkjerringa 女トロル (金の糸玉を持っている) (iii) trollkjerringa 女トロル (金の帽子を持っている) (iv) troll, bergtroll (トロルに、トロルの皮をかけられたお姫さまの恋人) (i)~(iii) 敵対者	(i) (i)(ii)(iii)主人公に椅子に座るよう勧める. (iv)お姫さまと仲良く笑っている.	(i) 岩山の中 (ii) 岩山の中 (iii) 岩山の中 (iv) 岩山の中	1845 年、Oppland 県 Sør-Aurdal で Ole Haagensen から Moe が採集し、記録した話. 20 類話がノルウェー各地(Nordland 県まで)で記録されている. AT507A
9	(i) troll (女) haugkjerringa (巨大な図体、老婆、自分の頭をわきに抱えている、銀のナイフ・フォーク・スプーンを持っている) (ii) troll (i)の娘 敵対者 ⇒主人公を食材として狙っている.	(i)犬(Gulltann)が泣き始めたため、様子を見に主人公(Smørbukk)外へ出ると、主人公の家へと向かっているのが見出される. (ii) (i)に主人公を殺すよう命じられる.	(i) 森 (ii) 森	1836-37 年、Akershus 県 Fjellstad,Gjerdrum で Asbjørnsen によって記録された話. 42 類話がノルウェー各地(Nordland 県まで)で記録されている. AT327C
10	(i) trollkjerring 女トロル (娘と住んでいる)	(i) 主人公に仕事がないかと尋ねられる.	(i) stor gård 大きな農家 (井戸の下に広がっている世界にある	Akershus 県 Romerike で、おそらく Asbjørnsen が記録し

	主人公に対しては報酬を与え、悪い継子に対しては罰を与える.		農家)	た話. 67 類話がノルウェー各地(Nordland 県まで)で記録されている. 採集年不明 AT480
11	(i) troll (太陽の光で弾ける) 敵対者	(i) 自分の城をドンドンと門たたき、主人公 Per たちに怒鳴る.	(i) slott 城	1838 年、Buskerud 県 Ringerike, Hole で、Lars Hansen Svedserud から Moe が採集し、記録した話. 44 類話がノルウェー各地(Nordland 県まで)で記録されている. AT545B
12	(i) haugebasse 丘の不思議な生き物 troll (九つの頭) (ii) drage 竜 (九つの頭、炎を吹く、毒の汁を吹く) (i)の使い (iii) haugebasse,troll (三つの頭) (iv) haugebasse, troll (六つの頭) (i)~(iv)敵対者 ⇒姫をさらう、(i),(iii),(iv)は(ii)の九本目の舌の下にある砂粒によって死	(i) お姫様を捕まえ空へ飛び立つ. (ii)木曜の朝に王のところへよく肥った九匹の豚を受け取りに来る. (iii) (iv) お姫さまにシラミを取ってもらっている.	(i) 岩の中 (ごつごつした岩) (ii) ― (iii) 岩の中 (iv) 岩の中 ⇒最後に岩は、金の城、緑の牧草地となる.	1845 年頃、Oppland 県 Gudbrandsdale で、Asbjørnsen が記録した話. 53 類話がノルウェー各地(Nordland 県まで)で記録されている. AT302

	ぬ.			
13	(i) trollkjerring トロル女	(i) 主人公の持っている金の鋏を欲しがる.	(i) slott 城 (高い岩山の上に広がる高原の中にある城)	Setesdal で、Künstler August Scheider から採集した話. (1852 年版に収録されている話) AT425A
14	(i) troll 「トロル王子」 trollprinsen (巨大な図体、醜い容姿、聞くと恐ろしくなるような声、を持つ、鉄のボートを持つ) (ii) alle slags vakter 英:kings of animals (狼、ライオン、熊) iii) troll i)の主人 (巨大な図体、12 の頭を持つ) iv) Fugl Dam 英:Bird Dam (非常に大きな図体) i) 助力者 ⇒12 人の姫を助ける方法を助言する. (主人公が iii)を殺したため、王になる) iii) 敵対者 ⇒12 人の姫を閉じ込めている	(i) 城のベンチに座っているのが見出される. (ii) (i)とは異なる)城の前に見張りとして立っているのが見出される. (iii) 城の中の、間に座り寝ており、各頭のそばに 12 人の姫が座り虱をとっているのが見出される. iv) 主人公が城で寝ているときに、Fugl Dam の声を聞く.	(i) 小さな島にある城 (王子たちが 7 年航海をしてたどり着いた場所) ii) 城 iii) 城 (血の小川が流れている) iv) 城	1840 年代、東ノルウェー Buskerud 県 Røyken で Asbjørnsen によって採集された. (1843 年版に収録されている) この話は世界に最も広く分布している話の一つであるが、Asbjørnsen によって採集された、この話は非常に特異なものである. ノルウェーにおいて、人気の高いこの話は、しばしば、サガや年代記風に語られる、あるいは個人の語り手によって、別の方法で脚色されている. 52 類話がノルウェー各地(Nordland 県まで)で記録されている. AT301(AT301D)[75]

[75] Christiansen1964 の解説註に AT310A と記されているが、同書巻末に AT301D と記されていることと、オスロ大学の AT 番号対応表および Hodne1984 でも AT301 に分類されていることから、この話を AT301 と判断した.

	iv) 助力者 ⇒主人公に助言を与える ＊超自然的存在ではないが、敵対者(偽主人公)としてRidder Rød (Red knight)という人物が登場する. ＊人がいなくなる＝山に行った、という思想が描かれている.			
15	(i) troll (複) (ii) trollkjerringsmell 女トロル 敵対者でも助力者でもない	(i) 主人公の仲間の頭のシラミを取っている. (ii) ―	(i) verdens ende 世界の果て (ii) ―	Oppland 県 Gudbrandsdale で Asbjørnsen によって記録された話. 37 類話がノルウェー各地(Nordland 県まで)で記録されている. 収集年不明(1850.ca) AT513
16	i) bergmann 山の男 troll (英:mountain troll) (巨大な図体、醜い) 敵対者 ⇒太陽の光で爆発する	i) 罠を仕掛けた扉 kjellerlemmen から落ちてきた娘に求婚する. **×3 回**	i) 山の壁(岩壁) bergvegg の中にある、地下の最下層にある部屋 kjelleren.	1838 年、東ノルウェーBuskerud 県 Hole, Ringerike で、Lars Hansen Svendserud から Moe が採集し、記録した話. この話はヨーロッパに広く分布しており、また北米、中米でも伝承されている. ノルウェーから 70 話の類話が報告さ

				れている(Nordland 県まで). R. T.Christiansen は、スカンディナビア諸国のこの類話の分布は、(スウェーデンの語り手に、顕著に広く受け入れられることのない) 西スカンディナビアの伝承グループに属しているということに注視している. AT311
17	i) troll, bergtroll (巨大な図体、年齢 300 歳以上、大きな雄牛を持っている) ii) troll, bergtroll i)の兄 (12 頭のライオンを飼っている) iii) troll, bergtroll (複) i)の兄たち (悪い雄牛の姿をとっている) i)~iii)敵対者	i) 椅子に座っているのが見出される. ii) ― iii) 主人公のもとへやって来る.	i) 山 ii) ― iii) 林檎園がある宮殿	1830 年代、東ノルウェーBuskerud 県 Ådal で、おそらく Moe が記録した話. 6 類話がノルウェー南部で記録されている. この話の類話はヨーロッパ・アジアのすべて地域に分布し、また北米、中米からも確認されている. AT590
18	(i) troll (三つの頭を持つ、smurningshirnet (軟膏つぼ)をベルトにぶらさげている) (ii) troll (六つの頭を持つ、smurningshirnet (軟	(i) 主人公 Kari Trestakk が一枚の葉っぱをもぎ取った瞬間に駆けつけてくる. (ii) 主人公が一枚の葉っぱをもぎ取った瞬間に駆けつ	(i) stor kobberskog 大きな銅の森 (ii) sølvskog 銀の森 (iii) gullskog 金の森	1833 年(?)、Buskerud 県 Røyken で、Asbjørnsen が記録した話. 71 類話がノルウェー各地(Nordland 県まで)で記録されている.

	膏つぼ)をベルトにぶらさげている) (iii) troll (九つ頭を持つ、smurningshirnet (軟膏つぼ)をベルトにぶらさげている)	けてくる. (iii) 主人公が gulleple 金のりんごをもぎ取った瞬間に駆けつけてくる.		収集年不明確 AT510AB (AT510+545)
19	i) rise (英:troll) (ヤギを連れている) ii) 山の壁から出てきた誰か (詳細不明) iii) gammel kjerring, troll (女) (英:old hag, troll hag) (怒っていて、邪悪な、やかましい醜い老婆) i),iii)敵対者 i)の特徴 ⇒朝に山羊を連れて森に行き、夜に帰って来る＝太陽が出ている時間でも活動できる	i) ― ii) 主人公が山の壁をノックすると、火花を散らしながら壁から目と鼻をだす. iii) ―	i) 山の中にあるトロルの屋敷 hos risen (英 troll's manor) (主人公の城から遠い場所) ii) 山 fjellveggen の壁の中 iii) 王宮の近くの牧草地にあるコテージ	1842 年、Telemark 県 Seljord で、Anne Golid から、Moe が採集し、記録した話. 世界に最も広く分布している話型の一つであり、ノルウェーで広範囲にわたって収集されている(62 類話・Nordland 県まで). この AT313 は古代ギリシアの、イアソンとメーディアの説明としてよく知られている話である. R. T.Christiansen は二つの広く分布しているノルウェーの類話は、古代の北欧とゲールの関係を示している、いくつかのゲールの特徴を伴っていることを見出した. AT313
20	(i) trollkjerringene (複), trollkjerringflokken 女トロルたち	(i) クリスマスの夜に、城の周りで女トロルたちが祭りをとり行っているの	(i) kjerringslottet 女トロルの城 (主人公が船である土地に渡った先にあ	1847 年、Vest-Agder 県 Åseral で、Ingri Friderichsdatter から、Moe が採集し、記録

	*物語の最後で、主人公 Lurvehette が持っている木製のスプーンは銀の団扇に変わり、醜い羊は美しい馬に変化する. そして Lurvehette がかぶっている醜いフードは黄金の冠に、彼女の(troll の様だと称される)醜い顔は美しくなる.	が見出される. その後、主人公 Lurvehette に木製のスプーンで追い払らわれる. その際に、主人公の美しい姉(妹)の頭を取り外し、かわりに子牛の頭を取り付ける. (Lurvehette がトロルの城に行き、窓のフレームにぶら下がっている姉の頭を取り戻し、木製のスプーンでトロルを倒す.)	る城)	した話. この話は、一般的なノルウェーの昔話ではない. Christiansen は 6 類話を報告している (Oppland 県、Telemark 県、Vest-Agder 県の 3 県). この話は、スウェーデン、アイスランド、アイルランドで知られており、またいくつかの類話が南東ヨーロッパ、Anglo-American から報告されている. AT711
21	i) gammel kjerring (英:old hag) ii) troll (恐ろしい fælt) i),ii)敵対者 ⇒ii)王様の 7 人の息子に魔法をかけ馬にする. しかしその魔法は教会に入ると解ける.	i) 座って糸巻き棒で糸を紡いでいるのが見出される. ii) ― (回想で出てくる)	i) 山の裂け目 ii) ―	1837 年(?)、東ノルウェー Burskerud 県 Ådal で、Moe によって記録された話. 15 類話がノルウェーのいくつかの地方から報告されている. この話はアフリカを除き、すべての大陸で分布が確認されている. 最年少の利口な弟は Askelad という名前でノルウェーでは登場する(スペイン :Juan, フランス:Louis,イングランド:Jack). AT471

22	i) gammel mann (英:old mann) (長く、白いひげ) ii) to løver (英:two lions) iii) troll (三つの頭と三つの木の枝 ris (英:カバの木の棒 birch rods)を持つ) iv) troll (六つの頭と六つの木の枝 ris (英:カバの木の棒 birch rods)を持つ) v) troll (九つの頭と九つの木の枝 ris (英:カバの木の棒 birch rods)を持つ) vi) herre over alle dyrene i skogen (森のすべての動物の支配者、角笛を吹く) vii) mann vi)の兄 (空のすべての鳥の支配者) viii) herre over alle fiskene i havet vii)の兄 (海のすべての魚の支配者) ix) tre brødre (英:three brothers)	i) 主人公が漂流した場所で出会う. ii) 門の前に立っている. iii) 宮殿のなかのくらい小さな部屋にいる主人公を殺しに来る. iv) 宮殿のなかのくらい小さな部屋にいる主人公を殺しに来る. v) 宮殿のなかのくらい小さな部屋にいる主人公を殺しに来る. vi) ある山で主人公と出会う. vii) ― 主人公は vi)からもらったスキー板で vii)のもとに辿り着く viii) ― 主人公は vii)からもらったスキー板で viii)のもとに辿り着く ix) ― 100 年間その場所に立っている x) ― xi) x)が宮殿の壁を揺らした時に、宮殿から出てくる	i) Hvittenland (英:whittenland) ii) Hvittenland の森のなかにある宮殿 iii) Hvittenland の森のなかにある宮殿 iv) Hvittenland の森のなかにある宮殿 v) Hvittenland の森のなかにある宮殿 vi) 山 vii) vi)の山から 700 マイル離れた場所 viii) vii)の山から 700 マイル離れた場所 ix) 湿地 x) ― xi) Hvittenland の森のなかにある宮殿	1840 年頃(1840 ca.)、東ノルウェー Buskerud 県 Ringerike, Norderhov で、Engebret Christiansen Askjem から、Moe が採集し、記録した話. この話は世界中に広く分布している. 78 話の類話がノルウェーで確認されている(Troms 県まで). ラップ人の類話はノルウェーから由来していると考えられる. AT400

	x) nordenvinden (英:north wind) xi) prinsen 偽物の王子 i),vi),vii),viii),x) 助力者 iii),iv),v),xi)敵対者 ii),ix) どちらでもない			
23	(i) trollene (複) (巨大な図体、小さい図体、尻尾が長い、尻尾がない、長い鼻)	(iv) クリスマス・イブ julegraut にドブレ山地にある小さな家(Halvor の家)にやってくる.	(i) Dovrefjell ドブレ山の森の奥	Oppland 県 Vågå または Sel(Valdres?)で、Asbjørnsen が記録した話. 64 類話がノルウェー各地 (Nord-Trøndelag 県まで)で記録されている. 収集年不明(1852 年版に収録されている) * 北ノルウェー Finnmark が舞台 AT1161
24	(i) troll (三つの頭をもつ、部屋の壁に剣を掛けている、一番上の姫を閉じ込めている) (ii) troll (六つの頭をもつ、部屋の壁に戦いで使用した剣を掛けている、真中の姫を閉	(i)「Huttetu!ここはキリスト教徒の血のにおいがする![76]」と言いながら部屋に入って来る. (ii) 「Huttetu!ここはキリスト教徒の血のにおいがする![77]」と言いながら部屋に入って来る.	(i) 城 (ii) 城 (i)よりも豪華 (iii) 城 (ii)よりも豪華 (iv) 森の中にある小さな小屋 (v) ― (vi) ― (vii) Soria Moria 城の	Buskerud 県 Røyken で、Asbjørensen が記録した話. 78 類話がノルウェー各地(Troms 県まで)で記録されている. 収集年不明(1843 年版に収録されている) AT400

[76] "Huttetu! her lukter så kristen manns blod!"
[77] "Huttetu! her lukter så kristen manns blod!"

	じ込めている) (iii) troll (九つの頭をもつ、部屋の壁に剣を掛けている、一番下の姫を閉じ込めている) (iv) par gamle folk 老夫婦 (夫:非常に年を取っている、鳩のような灰色の頭、妻:非常に長い鼻) (v) månen 月 (vi) vestenvinden 西風 (vii) jentene 少女たち (i)~(iii)敵対者 (iv)~(vii)助力者	(iii) 「Huttetu!ここはキリスト教徒の血のにおいがする![78]」と言いながら部屋に入って来る. (iv) (妻は)暖炉のそばに座り、長い鼻を、灰をかくすコップにして灰をかいている. (百年以上もキリスト教徒を見たことがないという) (v)― (iv)に話しかけられる. (vi) ― (iv)に話しかけられる. (vii)洗濯をしている.	近く (城に一番下の姫がいる)	主人公の名前:Halvor
25	(i) dragon (いくつもの頭をもつ、十万年の間寝ている、苔や草に覆われている) (ii) golden bird (美しい、太陽のように輝いている、十万年の間寝ている) (iii) troll (巨大な図体、醜い、キリスト教徒を食べ物にしている)	(i) 城の門の前で寝ているのが見出される. (ii) 金の木の上で寝ているのが見出される. (iii) 姫に頭のシラミを取ってもらいながら寝ているのが見出される. (その後、「キリスト教徒のにおいか?[79]」と言う)	(i) Soria Moria 城 (ii) Soria Moria 城 (iii) Soria Moria 城	主人公の名前 : Espen Askeladden 登場人物に、キツネの Mikkel、熊の Bamse、狼の Iserimhga いるが特に活躍しない. AT400 *24 註を参照

[78] "Huttetu! her lukter så kristen manns blod!"
[79] “What’s this I smell?” ….”Christian blood?”

	(iii)敵対者			
26	(i) rev　キツネ (本当の姿は、姫の兄弟) (ii) troll (巨大な図体、菩提樹 lind と金の鳥の主人) (iii) troll　(ii)の隣人 (iv) troll　(iii)の隣人 (i) 助力者 (ii)~(iv)敵対者?	(i) トウヒの藪 granholt から出てくる. **×3 回** (ii) 主人公が木の枝に触った(禁止事項)瞬間に、主人公の前に出てくる. (iii) 主人公が、トロルの家の壁にかけてある手綱 biksel に触った(禁止事項)瞬間に、主人公の前に出てくる. (iv) **—**	(i) **—** (ii) 森 (iii) 山　(ii)の家から 300 マイル離れた場所. (iv) 山　(iii)の家から 300 マイル離れた場所.	1842 年、Oppland 県 Sel で、Asbjørensen が記録した話. 25 類話がノルウェー各地 (Nord-Trøndelag 県まで)で記録されている. AT550
27	(i) troll (巨大な図体) 敵対者 ⇒三男の灰つつきに騙され死ぬ.	(i) 木を切ろうとすると、「私の森で木を切るやつは殺すぞ!」と言いながら出てくる.　**×3 回**	(i) 森 (金銀財宝をもっている)	1838 年、Buskerud 県 Ringerike, Hole で、Lars Hansen Svendserud から、Moe が採集し、記録した話. 世界各地で分布がみられ、ノルウェーでは 27 話の類話が報告されている. AT1088 (AT1060+1049+1088)
28	(i) trollkjerring (女)	(i) 女王のもとへ現れ、「あなたは一人の娘を授かる」と告げる. (しかし、娘を授かる代わりに、女王の 12 人の息子は自分のものになるという)	(i) **—**	Akershus 県 Gjerdrum で、Asbjørensen が記録した話. 11 類話がノルウェーのいくつの地域で記録されている (Nord-Trøndelag 県まで).

				採集年不明(1843 年版に収録されている) AT451
29	(i) trollmenneske トロル人間 ＊美しい主人公が口をきけなくさせられているときに、「(主人公は)一言も話さないので、トロルではないか?」と疑われる.	(i) ―	(i) ―	1838 年、Buskerud 県 Ringerike, Hole で、Lars Hansen Svendserud から、Moe が採集し、記録した話. 11 類話が Hedmark 県、Oppland 県、Buskerud 県、Telemark 県、Hordaland 県から報告されている. AT710
30	(i) troll (7 羽のカモ・銀と銀のパッチでできたベッドキルト・金のハープをもっている) ⇒怒りで爆発し死ぬ. (ii) trolldatter トロルの娘 (i)の娘 (iii) gjestebudsfolkene (具体的な詳細は不明) (i)(ii) ⇒主人公・灰つつきを太らせて食べようとする. (iii) ⇒主人公を食べる際	(i) 主人公に自分のものを盗んだのはお前か?と尋ねる. **×3 回** (ii) ― (i)に主人公を太らせて料理するよう命じられる. (iii) 食事会の際に、(i)とともに(i)の家に入って来るのが見出される.	(i)(ii) 山 (王さまの敷地の反対側にある土地で、両者の敷地の間には大きな湖がある) (iii) ―	1838 年、Buskerud 県 Ringerike, Hole で、Lars Hansen Svendserud から、Moe が採集し、記録した話. 47 類話がノルウェー各地(Nordland 県まで)で記録されている. AT328 AT327B(?)

	にまぬかれる客人たち			
31	(i) gammel, gammel krokrygget kjerring とても年老いたせむしの女 (片目しかない、刀を持っている) (ii) gammel, gammel krokrygget kjerring とても年老いたせむしの女 (片目しかない、船を持っている) (iii) gammel, gammel krokrygget kjerring とても年老いたせむしの女 (片目しかない、醸造樽を持っている) (iv) troll (巨大な図体、恐ろしい、五つの頭を持っている) (v) troll (巨大な図体：(iv)のトロルの二倍の大きさ、十の頭を持っている) (vi) troll (巨大な図体：(iv)(v)よりもはるかに大きい、十五の頭を持っている)	(i) — (道で出会う) (ii) — (道で出会う) (iii) — (道で出会う) (iv) 木曜日の夜に、姫(長女)をさらいに trollskipet 船に乗って海岸に現れる. (v) 木曜日の夜に、姫(次女)をさらいに trollskipet 船に乗って海岸に現れる. (vi) 木曜日の夜に、姫(三女)をさらいに trollskipet 船に乗って海岸に現れる. (vii) 「Huff!ここはキリスト教徒の血のにおいがする![80]」と言いながら部屋に入って来る. (viii) —	(i) — (ii) — (iii) — (iv) — (v) — (vi) — (vii) 岩山の中 (山にドアがある) (viii) —	Stroebe1940[81]に掲載されているスウェーデンの昔話“Knös“(独)という物語は、この話の類話である. “Knös“の中にも、人間の敵対者として「赤いペーター」という人物が登場する. この話では「赤い騎士 Ridder Rød」という名で登場する. 14)Fugl Dam にも同じ属性、呼称で登場する. 主人公の名前：Lillekort 主人公の兄の名前：kong Lavring (英：king Sturdy) AT 番号不明

[80] "Huff! her lukter så kristenmanns blod,"
[81] Klara Stroebe, *Nordische Volksmärchen*, I (MdW). Jena, 1940.

	(vii) troll (王様の姫(長女)を閉じ込めている、一度に大量の醸造酒を作れる) (viii) troll (vii)に呼ばれてやってくる. (i)~(iii)贈与者 ⇒主人公 Lillekort が片目をあげる代わりに、自分の持っている呪物をくれる. (iv)~(vii)敵対者 ⇒主人公 Lillekort に殺される. ＊超自然的存在ではないが、敵対者(偽主人公)として Ridder Rød (英:Ridder Red)という人物が登場する.			
32	(i) fremmed mann (英:strange man), troll (木イチゴの枝でできた棒、巨石、水差し、大釜、大きな黒い馬[美しい王子]をもっている) 敵対者 ⇒ただし、主人公がトロルの言った禁	(i) 主人公に「どこにいくの?」と尋ねてくる. (主人公が旅をしている際に出会う)	(i) ― (部屋が 4 つある屋敷)	1838 年、Buskerud 県 Ringerike, Hole で、Lars Hansen Svendserud から、Moe が採集し、記録した話. 11 類話がノルウェーのいくつかの地域(Nordland 県まで)で記録されている. AT314

	止事項を破る(4 回)ため 助力者：黒い馬 ⇒自分の父親である王さまによってトロルに売られた美しい王子			
33	(i) troll (大きな音をたてる、家畜を殺す、植物タイム timian を恐れる) ⇒夜の間ずっと全ての丘や山にいる動物を狩っている. (ii) gammel kjerring 老女 (鍵を回すと鍵穴から、見たいものが何でも除ける古い鍵 gammel nøkkel を三男 Askeladd に与える) (i) 敵対者 (ii) 贈与者 ＊超自然的存在ではないが、敵対者(偽主人公)として Rødrev という人物が登場する.	(i) 2.5m 四方の森を倒しながら姫をさらいにやって来る. そして、「Hu hu!ここに座ってキリスト教徒の虱をとっているのか[82]」と言う. (ii) 道に横になっているのが見出される. (その後、「少し食べ物を恵んでください」と話しかけてくる.) **×3 回**	(i) 王の領土 kongsgården (トロルが悪さをするため人が住めなくなった、肥沃な土地) (ii) ―	AT 番号不明 *主人公の名前 : 三男 Espen Askeladd 主人公の兄の名前 : 長男 Per 次男 Pål

[82] “Hu hu! Ditter du her og lysker kristent folk, så eter jeg deg.”

34	(i) 「Grimsborken」馬の呼称 (大きい)(美しい) (ii) troll (王様の娘をさらい、囲っている)	(i)丘にいるのが見出される．(両親の遺産相続で主人公に配分される) (ii) ― ＊主人公がトロルの家から、トロルが帰宅する前に姫を取り戻すため、実際には登場しない．	(i) ― (主人公と一緒に行動を共にする) (ii) 山の中	1842 年、Telemark 県 Selijord で、Anne Golid から Moe が採集し、記録した話． 39 類話がノルウェー各地 (Møre og Romsdal 県まで)で記録されている． AT531
35	(i) gammel kjerring (100 年間食べ物を口にしていない、主人公が行きたい所へ行ける灰色の毛糸 grått ullgarnnøste を三男 Askeladden に与える) (ii) ravn カラス (i)の家族(仲間) (iii) trollunge トロルの子ども(男) (山の上から下りることができない) (iv) troll, bergtroll (iii)の親 (主人公に子供を送ってくれたお礼に灰色のロバ[美しい王子]を与える、金銀財宝をもっている) (v) tre drager 3 頭の竜 (100 年間ずっと眠	(i) 森で座って弁当を食べていると、食べ物をもらいにやって来る．(長男・次男:与えない、三男:パンを与える) (ii) 松の上にとまっているのが見出される． (iii) 山を降りることができず、泣いて文句を言っているのが聞こえてくる． (iv) (iii)が帰ってきて喜ぶのが見出される． (v) 城門の前でいびきをかきながら眠っているのが見出される．(その後主人公は一番年下の竜を起こし、牛肉を与え、城の中へ入れてもらう) (vi) 「Hu,キリスト教徒のにおいがす	(i) 大きな森 (ii) 大きな山 (iii) 大きな山 (本来の居住地は trollgården トロルの国) (iv) trollgården (v) sølvslott 銀の城 (大きくて壮大な城、すべてが銀でできている、人一人住んでいない) (vi) sølvslott 銀の城 (vii)城 (sølvslott から 300 マイル離れたところにある、sølvslott よりも壮大で豪華な城、人一人住んでいない) (viii)城 (vii)と同じ城 (x)gullslott 金の城 (他の城よりも豪華、金でできている，人一人住んでいない)	1850 年、Møre og Romsdal 県 Kristiansund-kanten で、コルベット船「Ørnen」の船乗りから、Asbjørensen が採集し、記録した話． 39 類話がノルウェー各地 (Møre og Romsdal 県まで)で記録されている． AT531

	り続けている、100年間食べ物を口にしていない、目に苔が生えているため目が見えない) (vi) troll (3 つの頭をもつ、長女・姫を城に閉じ込めている) (vii) menneskeetende slange 人食い蛇 (viii) troll (6 つの頭をもつ、次女・姫を城に閉じ込めている) (x) alle slags ville dyr i verden, alle ville og vonde dyr 世界の全種類の野生動物、悪い動物 (城門の前の道の両側で眠っている) (xi) troll (9 つの頭をもつ、三女・姫を城に閉じ込めている) (i)~(iv)助力者、贈与者 (v)~(xi)敵対者 ＊超自然的存在ではないが、Ridder Rød (英:Ridder Red)	るぞ![83]」と言いながら部屋に入って来る. (vii) 城の外の道端にいるのが見出される. (viii)「Huff,キリスト教徒のにおいがするぞ!」と言いながら部屋に入って来る. (x) 城門の前で眠っているのが見出される. (xi) 夜に、「Huff,キリスト教徒のにおいがするぞ!」と言いながら部屋に入って来る.	(xi)gullslott 金の城	

[83] “Hu, her lukter det kristen mannelukt!”

	という人物が登場する.			
36	i) Møllerkerringa 粉を挽く女,名前は「Sjøl」(独:Selbst) (女トロル trollkjerringa)	i) 主人公・貧しい女のもとに訪れる.	i) ― (誰も近づくことのできない、魔術のたち込めた、ある地域に足を踏み入れる)	AT1137(小話のみ)
37	i) en Kongsdatter 王の娘、det leie trollet (英:the wicked hussey) 邪悪なトロル (非常に美しい姫) ＊黄金の糸紡ぎ車を欲しがる (i)敵対者ではない	i) 主人公の Håken Borkenskjegg 王子が王女のもとへ求婚に来る.	i) 宮殿	Sørum で Asbjørensen が記録した話. 22 類話が、ノルウェーのいくつかの地域で記録されている (Holdaland 県まで). 収集年不明(1844 年版に収録されている) AT900
38	i) trollfugler トロル鳥 (年老いた雷鳥、大きい、緑色をしている、塩や銀で死なない、なかなか仕留めることができない) ii) trollhare トロルウサギ (年老いたウサギ、アシナシヘビトカゲによって殺せる、なかなか仕留めることができない) iii) gamlemor 年老いた女 (頭にベールをかぶ	i) 轟きながら、くちばしを鳴らしている. ii) 狩人たちの前に現れる. iii) カバの木の森で出くわす. iv) ― (狩人の Per が語る物語に出てくる)	i) トドマツの木 ii) Sukkestadsletta(地名), Holleia(地名) iii) ― iv) Holleia の南にある 2 つの山(頂、Store-Knuten, Vesle-Knuten) に住んでいる.	1841 年に Asbjørensen が記録した話.

	っている、皮のジャケットを着ている、黒いスカートをはいている) iv)ei gammal bergkjerring 年老いた山女 (山の王 Kongesberg よりも金持ち、ドラゴンのように座っている)			
39	i)「Mumle Gåsegg」 (とても醜い容姿、大きな頭、小さいが強靭な胴体、大食漢、銃などは効かない、力持ち) ii)「Gamle-Erik」 年老いたエリック (英:The Devil) (金銀を保有している) *おそらくトロル(主人公と trollslottet にて再会するため) iii) en mor (ii)の母親 (古いモミの木があるため地獄から出られない. 主人公にその木を抜いてもらう) iv) bergtrollet 山のトロル (七つの頭を持つ、金銀財宝を持つ、王の	i) 5 人の子供のいない女たちによって温められた非常に大きなダチョウの卵から、「ニシン、粥、ポリッジ、牛乳!」と泣きながら生まれてくる. ii) 主人公を見つけ、追って来るが、主人公の棍棒によって谷に落とされ、足を痛める. iii) 家にいたところ、主人公に地代を払うよう要求される. iv) 山の中から出てくるのが見出される. (主人公によって頭を切り落とされる) v) 麦の樽を食べているのが見出され	i)— (5 人の女たちが畑を歩いている際に見つけられる.) ii) 地獄 (helvete) にある城(slottet) iii) 地獄にある城 (ii)と同じ iv) 誰も近づこうと思わない山(fjell)にある城 (slottet)、海(sjøen)のそばにある. (山が“開く”、“閉まっている”という表現を使っている) v) トロルが出てきた山の中にいる. vi) (iv)と同じ vii) trollslottet トロルの城	1840-50 年頃、Oppland 県 Dovre で、Hans Agerjordet から、Asbjørensen が採集し、記録した話. 57 類話がノルウェー各地 (Nordland 県まで) で記録されている. AT650A

	父親の剣を持っている、またその剣はトロルの母親のベッドの隅にある) v) en hest 馬 (iv)によって馬にさせられた美しい男、主人公とともに王の父親の剣を取り戻す. vi) gamlemor 年老いた女トロル (iv)の母親 vii) datter 王の娘 (大きなモミの塊の中にいる) i)は主人公 ii)敵対者 iii) iv)敵対者 v)助力者 vi)敵対者	る. そして主人公に頭を撃ち落としてもらうことにより、元の人間の姿に戻る. vi) 海の水を飲んでいるのが見出される. そして爆発する. vii)主人公によって見出される.		
40	i) ― ある女 *結婚式が、登場人物である男に中断されると、豪華だった食事が“trollkjerringspy(女トロルのおしっこ)”に変化する. (英訳では苔 moss に変化する)	i)「ホーコン王!結婚しましょう![84]」と大きな声で尋ねてくる.	i) Valdres(地名)	1843 年に、Romerike で Berte Tuppenhaug から採集された. この物語は、ノルウェーに広く分布しており、130 の類話が確認されている. また他の北欧諸国においても知られている物語である. ML 6005: The interrupted fairy

[84] ”Kong Håken, min sønn, vil du gifte deg?”

				wedding *この話では直接 troll という語は出てこないが、物語の中で結婚式を行っている女、あるいは客がトロルである可能性が、語り手の表現の仕方から見てとれる.
41	i) troll ii) trollkjerringer (複) 女トロル iii) tre kolsvarte ravner 3 羽の真っ黒い烏、trollkjerringer (複) iii) 敵対者(カンバの木の丸太の綱で殺される)、最初に登場する烏から順に強くなっていく.	i) ― ii) ― (i)(ii)は強風や悪天候を引き起こす原因と考えられている. iii) 首船楼の大梁に座って、自分の夫たちを殺そうと話し合っている. (船乗り Rasmus の祖父がその話を盗み聞きしているが、烏の女トロルたちは気づいていない. そして毎回「誰も私たちの話を聞いていないわよね?」[85]とトロルの相槌が入る.)	i) ― (おそらく海、海から泣き声/叫び声が聞こえてくる) ii) ― (おそらく海、海から泣き声/叫び声が聞こえてくる) iii) ―	AT 番号不明 *物語内で船乗り Rasmus Olsen が主人公に語る、Rasmus の祖父の話の中にトロルが登場する.
42	i) troll ii) huldre フルドラ(隠された	(i)(ii)(iii) ― (実際には登場しない:主人公が夜に森	(i)(ii)(iii) 森の中 vi) Kilebakken の丘	AT 番号不明 *36、38、40、41 と同

[85] “Men det er vel ingen som hører oss?” , ”Ja, men de dere viss på at ingen hører oss?”

	人々) iii) gjekkende dverger ドワーフ vi) bergmor　山女 (英:the witch)	の中にいると、静けさの中に何かの声が響き渡り、主人公が幼少時代に聞いた昔話を思い出した途端、森の中が超自然的存在でいっぱいになっている) vi)― (登場人物が遅くに山にやってきたため怒ったのではないかと心配する描写がある．)		様、この物語も、主人公が旅路の途中で出会った人々に昔話(伝説)を聞くというスタイルをとっている．
43	i) den andre sønnen 次男 (教師、左右の足の長さが極端に違う、片足は少年のように短く、他方は長いため、長い方の足で立った際には、troll と同じくらい大きくなる) *主人公(末っ子)の 2 番目の兄.	i) 王女を笑わせようと名乗りでる.	i) 王の城の近く	Buskerud 県 Ringerike で Asbjørensen が記録した話. 14 類話がノルウェーのいくつかの地域で記録されている. 採集年不明(1871 年版に収録されている) AT571 *異形をトロルに例える傾向がある.
44	i) en gutt 男 (結婚相手が清らかな人か確かめるために、手に大きな斧を巻きつけている. そして、人々にその手のことを聞かれた際に、「水のトロ	i) ―	i) ―	1871 年、Nord-Trøndelag 県 Inderøy で Margrethe Løchen から Asbjørensen が採集し、記録した話. 3 類話が Vest-Agder 県、Nord-Trøndelag 県、Troms 県から報

	ル vasstroll に魔法をかけられた」と答える．) *結婚相手を探している．			告されている． AT1462* *43 の物語同様、異形をトロルに例える傾向がある．
45	i) bjørnen 熊 *この話の中では、熊の性格を意地悪として語られているが、熊はしばしばキツネにだまされる「愚かな」動物として描かれる場合が多い．その「愚かさ」が troll の性質に似ていると、物語内で語られている．	i) ―	i) ―	1854 年、Akershus 県 Aurskog で、E. Snedkersveen が記録した話． 9 類話がノルウェーのいくつかの地域で記録されている (Møre og Romsdal 県まで)． AT47A *「愚か」という特徴をもつ登場人物の代表として、troll が広く認識されている．
46	i) en hare 男(人間) ii) en rev キツネ iii) et troll, kjerringa (i)の結婚相手、女トロル (お金と大きな屋敷を持っている) *主人公は女トロルと結婚し、莫大な財産と大きな屋敷を手に入れるが、その結婚当日に屋敷が	i) 森の中で、スキップやデングル返しをしながら一人はしゃいでいる． ii)はしゃいでいる主人公のもとへやって来て、主人公がはしゃいでいる理由を尋ねる． iii) ― (会話の中に登場するのみ)	i) ― ii) ― iii) ―	採集年、採集地域不明 AT2014 *人間とトロルが婚姻関係を結んでいる昔話のひとつ．

	燃えてしまう．主人公はそれを悲しく思うが、妻である女トロルも屋敷と一緒に燃えて死んだため、幸せも感じている．			
47	i) en kjerring 女/主人公の妻 (頑固で強情) *頑固で強情な性格ゆえに、夫を怒らせ、夫に殺される(水死)際に、夫が妻に向って言うセリフの中に”ditt troll”(「愚か者め」) という表現が使われている．そして、頑固で強情な性格のために、妻の水死体は下流ではなく上流で見つかる．	i) 主人公である夫とともに川の側にある畑の様子を見に行く．	i) ―	1847 年、Sogn og Fjordane 県 Sogn で、Asbjørensen が記録した話． 13 類話がノルウェーのいくつかの地域で記録されている． AT1365AB *「頑固」、「強情」な妻に向って、troll という呼び方をしている．45 と同様に、人間の性質(愚か/分からずや)に troll といういい方が使われている．
48	i) hangatroll 丘のトロル ii) huldren 隠された人々 iii) underjordiske 地下に住む人々 iv) haugafolk, hagafolkji 丘に住む人々 (i)~(iv)登場人物の一人が主人公に語る	i) ― ii) ― iii) ― iv) 物語内で昔話を語っている男の叔母 Birgit Sandehusé が若い時に、Nysætstøle(地名)で雨に降られた際に出くわす．	i) ― ii) ― iii) ― iv) Nysætstøle (i)~(iii)まで詳細は語られていないが、全て Østlandet, Hallingdal 付近に住んでいる超自然的存在であることが物語からわかる．	AT 番号不明 * 36、38、40、41、42 と同様、この物語も、主人公が登場人物に昔話(伝説)を聞くというスタイルをとっている． *語り手は、人々が超自然的存在はいなくなったのではなく、人が彼らの存在を信

	昔話に登場する)			じなくなったために見えなくなった、と語っている．このことは他の昔話内でも登場人物によって指摘されている．
49	i) en gammel kjerring 年老いた女性 ii) småtroll 小さなトロル(複) (独:Zwergen) (i) ― (ii)助力者 (主人公を王の姫たちがいるトロルの城 trollslott へ案内する．	i) 主人公 Tyrihans の前に現れ、Tyrihans のかばんの中に何が入っているのかを尋ねる．そして Tyrihans から食料をもらう． ii) Tyrihans の前に、「主人は何を望んでいるのか?」「主人は何を望んでいるのか?」と言いながら現れる．	i) ― ii) ―	1843 年に、Kristiania で Dreyer おばさんから、Asbjørensen が採集し、記録した話． この話以外に類話は報告されていない． 彼女は、籠を持って歩きまわり、様々な品を売る“籠女 kurvkone”であった． ノルウェーでは証明されていないが、この話はノルウェーの土着の物語ではなく、南、東ヨーロッパの昔話のものである．しかし全ての周辺諸国で予期せぬ、また不可解な分布をみせる昔話の一つである． (Stroebe1967, Nr.4.巻末註参考) AT408 *トロルが魔術を使い、王女たちを別の姿に変えている描写がある．
50	i) en dronning 女王	i) ―	i) ―	1847 年、Aust-Agder 県 Bygland で、Karen

	(意地悪) *女王が継娘に対してひどい苛めをしたことを表現する際に、”troll”という語が用いられている.[86]			Nielsdatter とその夫 Søren Tostensen から、Moe が採集し、記録した話. 7 類話が Telemark 県(6 話)と Aust-Agder 県(この話)が報告されている. AT432 *王様の後妻が継娘にひどいいじめ表現する際に、”troll”という語が使われている. 45、47 と同様に、人間の性質(意地悪/愚か/分からずや)に troll といういい方が使われている.
51	i) en gammel kjerring 年老いた女 (ii)~(iv)の妹 ii) trollkjerringa 女トロル (古いテーブルクロスを持っている) iii) trollkjerringa 女トロル (古い剣を持っている) iv) trollkjerringa 女トロル (祖父の古い讃美歌の本を持っている)	i) 「私はここに 100 年間座って、叫んで叫んでいました. そしてこの海峡を越えたいと思っているのです. でもあなた以外に私の叫びを聞きいれてくれた人はいません」と主人公に言い、主人公に助けてもらう. ii) 「私はここに 100 年間座って、叫んで叫んでいました. そしてこの海峡を越	i) ― ii) 山 iii) ― iv) ―	1847 年、Aust-Agder 県 Bygland で、Aanon Knudsen から Moe が採集し、記録した話. 7 類話がノルウェーのいくつかの地域で記録されている. AT611 *女トロルが讃美歌の本を持っている. また主人公は教会に行く人々から孤立している.

[86] …; slem og trollet var hun støtt mot stedatteren.

		えたいと思っているのです. でもあなた以外に私の叫びを聞きいれてくれた人はいません」と主人公に言い、主人公に助けてもらう. また妹が主人公に助けてもらったと知り、主人公の願いを聞く. iii) (ii)と同じ. iv) (iii)と同じ		
52	(i) trollfolket トロル underjordiske 地下に住む人々 (古い祖父の魔術的な帽子を持っている)	(i) torsdagskvelden 木曜日の夜に Kristoffer と Torvald が、(i)のもとへ、黒い猫を貸す代わりに、隠された人々の帽子 huldrehatt を借りに行く.	(i) Stramdsåsen(地名)	AT 番号不明 * 36、38、40、41、42、48 と同様、この物語も、主人公が登場人物に昔話(伝説)を聞くというスタイルをとっている. 物語内に登場する語り手の名前は、Anne Marie で、出身は Åshøyden(東 Vorma).
53	(i) tuftefolket, 屋敷の人々 (blåkledde) småfolk, (青い服を着た)小さな人々 troll (小さい、青い服を着ている、人間の娘を花嫁として囲っている、クリスマス jule の夜に船 jekt に	(i)クリスマスの夜に julekvelden、主人公が今まで見たことないような大きな北国の船 nordlandjekt に乗って、バイオリンと音楽を奏でながら海からやって来る. またその船には誘拐した人間の娘が冠	(i) Sandflesa (しかし、その後 tuftefolk は Dønna 諸島の別の島 (Lekangholmene)に引っ越しをしたと考えられている)	AT 番号不明 *物語の舞台である Sandflesa は魚が非常に取れる場所として知られているが、この島を見つけるのは困難であると語り手が言っている.

	乗って旅行に出る、踊る、金銀財宝を持っている) (i) 敵対者(人間の娘を小さい頃に山で誘拐したという点では敵対者に相当するが、主人公(Lykke-Anders と Hans Nikolai)に対して、悪事は何も行っていない)	を付け花嫁の格好をして乗っている.		
54	(i) alfer　エルフ (ii) troll (iii) juletrollsfølge クリスマストロル (iv) jøtner ヨウトゥナー(巨人の一種) (v) riser リーゼ(巨人の一種) (vi) dverger ドヴェルガー(小人の一種) (vii) underjordiske 地下の人々	(i)(ii) ― (実際には登場しない. しかし、洞窟や洞穴を説明する際に、「エルフやトロルたちが遊ぶ場所」と語られている.) (iii) ― (名前が会話内に出てくるのみ) (iv)(v)(vi) ― (実際には登場しないが、会話内に名前が出てくる. 「jøtner、riser、dverger の物語を知らない奴はいるか?」) (vii) 歌ったり、音楽を奏でたり、(古びた)教会の時計を鳴らしたりしてい	(i)(ii) 洞窟 (iii) ― (iv)(v)(vi) ― (vii) Bratteberget ブラッテ山 (ソグン・オ・フィヨーラネ県の一地域であるヘイヤンゲル Høyanger にある山である、海に面している)	AT 番号不明 * 36、38、40、41、42、48、52 と同様、この物語も、主人公が登場人物(聖職者)に昔話(伝説)を聞くというスタイルをとっている. *語り手は、物語内でフルドラ hulder や地下の人々 underjordiske たちへの信仰は消滅したと語っている. また、病気が超自然的な力を原因としているという考え方があるが、実際は、最初に病気になり、そして病気の原因がトロルやニッセ nisse などの超自然的存在の仕業

		る. (会話内にたびたび登場する)		ではないかと考えるものであると語っている. *物語に登場する人物の一人は、ノルウェーの昔話のいくつかが、ヨーロッパの国々の多くで見つけられることを知っており、またアジアの地域でも見つけることができると知っている. そして異なった形ではあるが、同じ話 sagn と物語が受け継がれていると語っている. (アラブ諸国も含む)
55	(i) trollunge トロルの子ども(男) (実際にトロルの子どもかは分からないが、奇形) (ii) trollvekk トロルのくる病(骨格異常) (iii) vassnekk 水のくる病 (vi) liksvekk 死骸のくる病	(i) ― (トロルによる取り替え子ではないかと、賢い女性 signekjerring に疑われる) (ii) ― (実際にトロルは登場しないが、トロルが出かけているうちに、山に入り、イエスの名を呼ぶことで、くる病が治ると語られる) (iii)(vi) ― (水に入り、イエスの名を呼ぶ、あるいは夜明け前に教会	(i) ― (主人公の住んでいる場所は Oppland 県 Dovre,Gudbrandsdalen 付近) (ii) 山 (iii)(iv) ―	AT 番号不明 語り手の Gubjør は放浪し流れてきたフィン族の女の人と考えられる. フィン族の信仰は、1100 年に成立したと考えられており、ノルウェー南東部で施行されてきた「ボルガルシング法」の「教会法」によって禁止されており、フィン族の人々は危険な存在として捉えられてきた. *36、38、40、41、42、

		の庭に行くと、くる病が治ると語られる)		48、52、54 と同様、この物語も、主人公が登場人物(聖職者)に昔話(伝説)を聞くというスタイルをとっている. (memorats[87])
56	(i) huldrefolk, フルドラ族(隠された人々) Jomfru Marie 処女マリア (処女マリアは、自分がフルドラ族の出であり、自分にはトロルの血 trollblod が流れていることを明かす、また彼女の祖母あるいは曾祖母は正真正銘のフルドラであるとも語っている. 小さな男の子たちと一緒にいる)	(i) ―	(i) Bjerke (地名) (ノルウェーにはいくつか Bjerke という場所が存在するが、すべて Oslo 近郊)	AT 番号不明
57	(i) underjordiske 地下に住む人々 「エーケベルクの王 Ekebergkongen」 (年老いており、醜く、赤目のトロル rødøyde trollet、子沢山) *(i)の子どもたちは、	(i) ― (語り手が Ekebergkongen についての伝説を語ると言い、話し始めるため)	(i) Ekeberg(地名) (Oslo 近郊、物語内の描写によれば、1790 年頃は、収集時(1838)の Ekeberg とは異なり、森と雑木林に覆われた土地であった. 古い家と赤い小屋 hytte があった.)	この物語は 1838 年に書きとめられた. AT 番号不明

[87] memorate は、ここでは語り手の個人の経験と関係のある回想(物語)を指す.

	怒りっぽく、醜く、赤目、大きな頭、叫ぶ大食漢である．取り替え子を行う．			
58	(i) trollkjerringene (複) 女トロルたち (一匹の黒い犬を連れている、ぞっとするような風貌、悪戯好き) (ii) Gamle-Erik エリック爺さん (iii) Fanden 悪魔 (iv) underjordiske (複) 地下に住む人々	(i) イースターの夜に、Eidsvoll 小教区 (Akerhus 県)で、跳ねたり、踊ったり、神への冒涜と見なされる行為を行っているのが見出される．(祭日の夜に、女トロルたちが教会で戯れるという話をある農夫が聞き見に行く) (ii) 女トロルと行動を共にしているのが見出される． (iii) ある男に呼び出され、登場するのが見出される． (iv) ある男が棚に入れた酒樽を飲んでいるのが見出される．	(i) ― (ii) ― (iii) ― (iv) Komperud (地名) (Hedmark 県、Åsnes にある地名)	AT 番号不明 * 36、38、40、41、42、48、52、54 と同様、この物語も、主人公が登場人物(墓掘り職人ペール Per graver)にいくつかの昔話(伝説)を聞くというスタイルをとっている．
59	(i) so mange småtroll 沢山の小さなトロル	(i) ― (土地の説明をするときに名前が出てくる)	(i) フィヨルドの側面の山	AT 番号不明 * 36、38、40、41、42、48、52、54、58 と同様、この物語も、主人公が登場人物にいくつかの昔話(伝説)を聞くというスタイルをとっている．

				*物語の中で、地名、人名が多く登場する.
60	(i) en diger hellefisk 一匹の巨大なオヒョウ(大カレイ) (魔術的な力がある漁師によって 8 等分にさばかれ、2 切れを妻に、2 切れを犬に、2 切れを雌馬、2 切れをテーブルに与えた. そして、妻・犬・雌馬は双子を産み、テーブルは 2 本の剣に変わった) (ii) troll, et stort troll / stortrollet 大きなトロル / sjøtrollet 海のトロル (花嫁として差し出される王女の王国に住んでいる処女の肉を全て食べつくした. 王は最後の処女である花嫁を助ける者を募集したが、誰も現れなかったためトロルに差し出した.) (iii) trollkjerring 女トロル (ii)の母親 * その他に、kullbrenneren(灰を焼	(i) 漁師に釣られる. (ii) 海から花嫁(王女)を迎えにやって来る. (双子の兄が、犬と馬、剣を使いトロル殺す) (iii) 双子の兄が自分の家に泊まりに来た際に、髪の毛を 3 本抜かせ束ねさせ、石に変えさせる.	(i) ― (ii) 海 (iii) 小屋	1847 年、Aust-Agder 県 Bygland で、Karen Nielsdatter から、Moe が採集し、記録した話. 53 類話がノルウェー各地(Nordland 県まで)で記録されている. AT303 *トロルによって、石化させられた双子の兄は、弟が犬と馬、剣を使い、助け出される.

	く人)という偽主人公が出てくる.			
61	(i) troll	(i) ― (実際には登場せず、会話に出てくるのみ.「季節外れの時期に、トロルは殺されただろう」)	(i) ―	Oppland 県 Biri で Asbjørnsen が記録した話. 9 類話がノルウェーのいくつかの地域で記録されている. 収集年不明(1871 年版に収録されている) AT1537 *トロルの名が出てくる文章の意味が不明瞭.
62	(i) en trollkjerring 女トロル / En gammel kjerring (蓋をかぶせた籠を持っている、年老いている) *各動物：助力者	(i) 村で蓋をかぶせた籠を持っているのが見出される. その後、主人公が「何を売っているの」と尋ね、「知りたければ買いな」と返す(×3 回). そして主人公は、一回目は子犬、二回目は子猫、三回目は小さいトカゲを買う. 実は、それらの生き物は王子から奪ったものである.	(i) ―	1847 年、Oppland 県 Sel で Asbjørnsen が記録した話. 2 類話が Oppland 県のみから報告されている. AT560 籠女
63	(i) bregetrølløe (複) 山のトロルたち	(i) 3 人のトロルが人間の女の子のもとにやって来る.	(i) 山	AT 番号不明 *強い方言が使われている. * 36、38、40、41、42、

				48、52、54、58、59と同様、この物語も、主人公が登場人物にいくつかの昔話(伝説)を聞くというスタイルをとっている. 話を聞く側が、語り手に「聖書の話ではなく、トロルやフルドラの物語、あるいは灰つつきの昔話をするよう要求する. *物語の中で、地名、人名が多く登場する.
64	(i) stortrølle / 大きなトロルたち den store Bøygen i Ætendalé エトネダールの大きな“まがり” (冷たい大きなつるつるした生き物) (ii) trøll (長い鼻) (iii) fire haugtrøll 4 人の丘のトロル 「Gust i Våré」、「Trond Valfjellé」、「Tjøstol Åbakka」、「Rolv Eldførpungjé」 (iv) trøll (v) fire trøll 4 人のトロル (長い鼻、バイオリ	(i) とぐろを巻いてチーズ小屋を囲っており、主人公 Per Gynt と質問の掛け合いをしているのが見出される. (ii)主人公のいるチーズ小屋に長い鼻を突きさす. (iii) ファル小屋にいるチーズ作りの女たちをねらっている. (iv) クリスマスの夜にお祝いをしているのが見出される. (v)クリスマスの夜にある百姓の家にやってくる.	(i) 丘 (ii) 山 (iii) 山 (iv) Dovre (山の名前) (v) Høvringen	この物語で語られる物語の一つ、「Per Gynt」は、後にヘンリック・イプセンによって参考にされている. AT 番号不明 *Hedmerk 県、Oppland 県に跨る 10 の峠を含む地域一帯の名前を Rondane といい、その地域にまつわる、いくつかの昔話を語り手が物語内で話す.

	ンを持っている、楽師を連れているなど)			
65	(i) trollkjerringer 女トロルたち (ii) troll (長い鼻) *その他に、実際には登場しないが、描写の中で「トロル」という語がたびたび出てくる．その中で、トロルは長い鼻を持っていて、クリスマスの夜 julenatte に活発に行動する、取り替え子を行う、9 つの頭を持つという説明がある．	(i) クリスマスの夜にドブレ山 Dovrefjell に集まっているのが見出される． (他にもブローク山 Bloksberg で女トロルたちの集会 trollkjerringmøter が行われている) (ii) クリスマスに主人公が山に入ると、山の扉から出てくる．	(i) ― (ii) 山 (Trondhjem の Stadsbygden にある山)	この物語は1853年に書きとめられた． AT 番号不明 * 36、38、40、41、42、48、52、54、58、59、64 と同様、この物語も、主人公が登場人物にいくつかの昔話(伝説)を聞くというスタイルをとっている． *物語の中で、地名、人名が多く登場する．
66	(i) trollkjerringene 女トロルたち	(i) クリスマスの夜に、主人公が村の教会へ行き、中を窓からのぞくと、たくさんの女トロルがいるのが見出される． (その中に、聖職者の妻と貧しい女もいる)	(i) ― (クリスチャンサン Kristiansand の村の教会に現れる)	AT 番号不明 * 36、38、40、41、42、48、52、54、58、59、64、66 と同様、この物語も、主人公が登場人物にいくつかの昔話(伝説)を聞くというスタイルをとっている．
67	(i) maskan / trolldomskatt トロル猫 (ii) dem forferdelige trolldomsmaskan	(i) 「悪い隣人が、利益とお前の牛の血を取るために、おまえのもとへトロル猫を差し向ける	(i) ― (ii) ―	AT 番号不明

	とても醜いトロル猫	ぞ」と伝える. (ii) Vårherre(イエス) と St. Per が向かう道でトロル猫と出くわすと知る.		

Folktales of Norway　　ノルウェー　15 話

【出典】

Reidar Thoralf Christiansen (ed.), Pat Shaw Iversaon (tr.), *Folktales of Norway*, The University of Chicago Press, 1964.

＊番号は *Folktales of Norway* による

Part I: Historical Legends

Ib. King Olav and the Gyger

2a. King Olav, Master Builder of Seljord Church[1]

独)Wie König Olav der Heilige die Kirche in Seljord gebaut hat[2]

2b. King Olav, Master Builder of Trondheim Cathedral

(3. The Plague as an Old Hag is ferried across a river)

Part VI: Legends about Spirits of Forest and Mountain

33. Troll resent a disturbance

34. The old troll and the handshake

36. The Urdebö Rockfall

51a. The interrupted Huldre wedding at Melbustad

52c. The drinking horn stolen from the huldre-folk at Hifjell

53a. The Christmas visitors and the tabby Cat

Part VII: Legends about Household Spirits

65. The Tunkall

66. The gardvord beats up the troll

Part VIII: Fictional Folktales

67. The Finn King's daughter

72. All-Black and All-White

日)まっ黒けとまっ白け[3]

14 話

[1] 原題：Kirkebyggeren (Finndagnet)

[2] Klara Stroebe und Reidar Th. Christiansen (edd.) , *Nordischen Volksmärchen*, Eugen Diederichs Verlag, Köln, 1967, Nr.17.

[3] 山室静編、『北欧の昔話』、岩崎美術社、1970 年、92-102 頁.

【出典】

Joanne Asala, *Trolls remembering Norway*, Penfield Press, Iowa City, 1994.

＊番号は粉川

1) Dyre Vaa and the mountain troll (pp.54-55)

(a)名称と外形：「」内は名前、それ以外は表記されている呼称．( )内は外形.
(b),(c),に関して特に記載がない場合は、―― と表記する.
また、注記の欄には、註において特徴的な内容を要約し記載した．“*“以下の註は粉川による.
AT 番号分類は Ørnulf Hodne, *The type of the Norwegian folktale*, Instituttet for sammenlignende kulturforskning, Oslo, 1984、およびオスロ大学 Universitetet i Oslo の HP で公開している AT 番号対応表[4]を参照している．(AT: Antii Aarne and Stith Thompson, *The Types of the Folktale. A classification and Bibliography* (Second Revision), Helsinki, 1971.)
モティーフ・インデックス(Index of Motifs)分類は、Stith Thompson, *Motif-Index of Folk Literature*, 6 vols, Bloomington, Indiana, 1955-58 による．ML(Index of Migratory Legends)分類は、Reidar Th. Christiansen, *The Migrartory Legends: A Proposed List of Types with a Systematic Catalogue of the Norwegian Variants*, Helsinki, 1958 による.

番号	(a)名称と外形	(b)出現の仕方の特徴	(c)住居	注記
1b	(i)gyger (female troll) (ii)gjöger (female troll) 敵対者	(i)主人公(St. Olav)に賭けを申し込む. (ii)主人公が細い谷の道に入ってきたときに、山から駆け下り叫んでくる.	(i)(ii) Gyrihaugen	1840 年代に東ノルウェー Ringerike で A. Faye によって採集された伝説. AT/ML 番号該当なし
2a	(i)「Skaane」 troll (一部の人は Vinfjell と呼ぶ) 敵対者	(i)主人公(St. Olav)から Seljord に教会を建てる契約を申し込まれる. (troll は報酬として、太陽、月、そして主人公の頭を要求)	(i) Seljord にある Bringsaas 山	1840 年代に Reverend M. B. landstad によって採集された．Telemark の Seljord 教会の伝説. この伝説はノルウェーとスウェーデンの多くの地域で採集されている. この話型の昔話は、デンマーク、フィンランド、ドイツ、アイルランドで特別人気が高い.

[4] Eventyrene listet etter eventyrtyper (http://www.hf.uio.no/ikos/tjenester/kunnskap/samlinger/norsk-folkeminnesamling/eventyr/eventyrene-etter-typenummer/) 2012/10/24 参照

				AT500 (13 類話) ML7065: Building a Church: The Name of the Master Builder Motif H521: Test: guessing unknown propounder's name
2b	(i)「Tvester」 troll 敵対者	(i)主人公(St. Olav)と教会の尖塔を建てる契約を結ぶ. (報酬は太陽)	(i) Trondheim 郊外にある Ladehammeren 山	1830 年代に A.Faye によって採集された伝説. *Trondheim 大聖堂の尖塔にまつわる伝説 AT 番号該当なし
(3)	(i)the Black Death (熊手 rake と箒 broom を持っている、老婆) ＊Black Death が熊手を使うと、いく人か生き残るが、箒を使って農場をきれいにすると、全員死亡. 敵対者	(i) ― (Aamot を荒らしている)	(i) ―	1900 年頃に東ノルウェーの Aamot, Österdal で S. Nergaad によって採集された. 大疫病に関する伝説群の一部. これらの伝説は国内で広く知られており、本来ノルウェーの伝説だと考えられる. *troll の語は出てきていないが、troll-hag の話として分類されている ML7085: [The Plague as an old hag is ferried across the river]
33	(i) huldre-folk (複) old wife (ii) troll (巨大な図体、醜い容	(i)お互いに話し合っているのが見いだされる. (主人公 Ol‘ Lanky	(i)山の中の丘 (ii)山の中の丘 (iii) (i)(ii)とは別の山の中の丘	1918 年、東ノルウェー Hustad で Edvard Langset によって採集された. この伝説の類

	姿) (iii) troll (ii)敵対者 (iii)助力者	Tor を料理しようとしている) (ii)大きな轟きとともに、主人公の背後にやってくる. (iii) (ii)に追われている主人公に助言を与える.		話は 50 話以上確認されている. またこの類話はスウェーデンの中世までさかのぼることができる場所でよく知られている. *クリスマスイブの話 AT 番号該当なし
34	(i)old man (ii) very old fellow (i)の父親、乾いたもみの木の苔に見える(?) (iii) 「Skaane」 (ii)の父親、壁にかかっている角笛に入っている、歩くことも見ることもできない老人 St. Olav と Seiljord 教会を巡って戦った troll (i)(ii)(iii)ともに troll 助力者でも敵対者でもない	(i) 膝をついて、木を切って割っているのが見出される. (ii)暖炉の前に座って、ベーコンを焼いているのが見出される. (iii)壁にかかっている大きな角笛に入っているのが見出される.	(i)(ii)(iii) たくさんの建物がある農場 (Skorve という大きな山のなかで、突然緑の野原が現れる. その中にある農場)	1840 年代に Telemark で聖職者 M. B. Landstad によって採集された. Telemark と別の東ノルウェーの地域から 18 の類話が確認されている. R. Th. Christiansen はゲールとの関係を示唆している. ML5000: Trolls Resent a Disturbance Motif G312: Cannibal ogre
36	(i)「Tor Trollebane」mighty mountain troll (巨大な図体、大食漢、槌を持っている)	(i)谷で行われていた結婚式(農場での)にお酒を飲みにやってくる.	(i)山	1840 年に Telemark で聖職者 S. O. Wolff が Andreas Faye に語った話. この伝説の最も早い記録は 1777 年. この伝説は、比較的近代においてトール神について語られ、採集された唯一

				の伝説である. *Telemark の Rauland 地区、Lake Totak の上にある Urdebö 農場と Özgard 農場の間にある断崖がどのようにできたのかについて. AT 番号該当なし
51a	(i) troll (troll のうちの一人が主人公の恋人の姿をとっている) (ii) huldre-folk (燃えかけて灰色の毛玉みたいになる) 敵対者	(i)(ii) 主人公が seter (夏の間仕事のために寝泊まりする山の上の小屋)に座っていると、中へとぞろぞろ入ってきて結婚式の準備を始める.	(i)(ii) ―	1844 年以前に東ノルウェーLand で A. Faye によって採集された伝説. 東部、西部ノルウェーともに多くの類話が収集されている話である. デンマーク、スウェーデンでも似た話が確認されている. ML6005: The Interrupted Fairy Wedding Motif F303: Wedding of mortal and fairy
52c	(i) Hifjell troll 大きな銀の盃を持っている、年寄り ⇒銀の盃は現在の Reins 教会の聖杯 敵対者 ⇒主人公がトロルをそそのかして、トロルが怒る	(i)外に出てくる.	(i)Hifjell 山	1935 年にトロンハイム近郊の Rissa(Tröndelag) で Karen Sollie によって採集された. この伝説に類似した話が 1883 年にも記録されている. ML6045: Drinking Cup Stolen from the Fairies

53a	(i) trolls (大きい図体、小さい図体、長い尻尾、長い鼻、子ども、大人) 敵対者でも助力者でもないが、恐れられている存在	(i) クリスマスイブにご馳走を食べに Halvor の家へやってくる.	(i) Dovre 山	この伝説はノルウェーで広く知られており、200 類話が収集されている. しかし、北部からの類話は 7 話のみ. AT1161 (64 類話) ML6015 :The Christmas Visitors Motif K1728: The bear trainer and his bear
65	i) tunkall ii) tunkall iii) troll 敵対者 ⇒日没後に少年を襲おうとするが、少年が家の守護精 gardvord を連れているために近寄れない.	i) ― ii) ― (農夫の Njadl に豚小屋を追い出される) iii) ―	i) Hjelmeland の Steintland 農場にある羊小屋 ii)Hylsfjord の Tengisdal 農場にある豚小屋 iii) ―	1880 年頃、西ノルウェー Hjelmeland で T. Mauland によって採集された. 家の守護精、女 tunkall、強い tunkall の習慣、信仰は北部と西部ノルウェーでみられる. 一方で nisse の信仰は南部と東部ノルウェーに限られている. AT/ML 番号該当なし
66	i) troll (複) ii) gardvord (背中に棒を持っている) 敵対者 ⇒家の守護精に殺される	i) 主人公 Tore Nabben を料理しようと話し合っている. ii)主人公がトロルから逃げている時に出くわす	i) 山の丘 ii) ―	1842 年、西ノルウェー Sogn の Sogndal で Ivar Aasen によって採集された. gardvord は tunkall の別名. AT/ML 番号該当なし
67	i) troll hag、troll beast (だらしなく、醜い生き物)	i)宮殿にやって来る.	i) ―	1900 年頃、Telemark の Kvitseid で、Rikard Berge によって採集された. この昔話は伝説

	敵対者 ⇒Finn 王の娘だと偽り王子と結婚する．その後悪事がばれ、樽に詰められ川に流される．			が基となっており、スカンディナビアで最も古い語りはユトラント半島からのものである． AT870 (33 類話)
72	i) troll hag (老婆、3 人の姉を持つ、Gjernmund*という実の息子を持つ) ii) troll(女) (三女、凶暴な豚を持っている) iii) troll(女) (次女、凶暴な雄牛を持っている) iv) troll(女) (長女、毒液の入ったボールを持っている) v) troll (三つの頭を持つ) vi) troll (四つの頭を持つ) vii) troll (五つの頭を持つ) viii) maiden (きれいな金色の髪、i)が化けている) i)~viii)敵対者 ⇒i) の継息子 All-Black、All-White を殺そうとしている．	i)小屋の中で料理をしているのが見出される． ii) ― iii) ― v)主人公の前に現れる． vi)主人公の前に現れる． vii)主人公の前に現れる． viii)主人公が森に座っているときに、中人公のもとへ現れる．	i) 森の中にある小屋 ii) 山 iii) 山 iv) 山 v) 山 vi) 山 vii) 山 viii) 森	1880 年、Telemark の Böherad で Moltke Moe によって採集された．Kurt Ranke は広い分布を持つこの話の起源は西ヨーロッパであるとし、おそらくフランス起源であると主張している． またノルウェーのこの類話はアイスランドの Bjarki-saga と比較することができる．ノルウェーで確認されているこの話の類話の約半分は Telemark より採集されたものである．Telemark の多くの語り手は昔話をアイスランドのサガの語りと類似した様式で語る． AT303,303B (53 類話)

	* Gjernmund は話において特に目立った行動はしないが、最終的に蛇の穴へ入れられる			
1)	(i) mountain troll (巨大な図体) 敵対者でも助力者でもない	(i)クリスマスイブの夜に、恐ろしい轟を響かせながら Totak 湖へやって来る.	(i)Åshaug	*Telemark,Rauland(山) の大きな山の湖 Totak が舞台. 主人公の名前： Dyre Vå

Scandinavian Folk Belief and Legend　ノルウェー 8 話

【出典】

Reimund Kvidland, Henning K. Sehmsdorf (eds.), *Scandinavian Folk Belief and Legend*, Norwegian University Press, Oslo, 1991.

*番号は出典による

39.1. The Troll Cat

(Knut Strompdal, *Gamalt frå helgeland 1*, (Norsk folkeminnelag skrifter 19), Oslo, 1929, p.159.)

39.3. Marte Holon

(Edvard Grimstad, *Etter gamalt: Folkeminne frå Gudbrandsdalen 3*, (Norsk folkeminnelag skrifter 71), Oslo, 1953, pp.60-61.)

47.4. The Wood Sprite Woke Him Up in Time

(Sigurd Nergaard, *Hulder og trollskap: Holkminne fraa Østerdalen 4*, (Norsk folkeminnelag skrifter 11), Oslo, 1925, pp.36-37.)

47.18. The Troll Hat

(Johan Skrindsrud, *På heimleg grunn: Foleminne frå Etnedal*, (Norsk folkeminnelag skrifter 77), Oslo, 1956, p.52.)

49.1. The Mill Troll

(Olav Rekdal, *Eventyr on degner: Folkeminne frå Romsdal*, (Norsk folkeminnelag skrifter 30), Oslo, 1933, p.104.)

59.3. The Troll Hag Spinning on Her Wheel

(Aamund Salveson, *Folkeminne*, Stavanger, 1924, p.50.)

59.4. Saint Olav at Reinsfell

(Reidar Th. Christiansen, *Norske sagn: Sanlet ved Allers Familie-Journal*, Aschehoug, Oslo, 1938, p.34.)

59.5. Saint Olav and the Master Builder

(Torkell Mauland, *Folkeminne fraa Rogaland 2*, (Norsk folkeminnelags skrifter 26), Oslo,1931, p.39-40.)

(a)名称と外形：「」内は名前、それ以外は表記されている呼称．( )内は外形.
(b),(c),に関して特に記載がない場合は、— と表記する.
また、注記の欄には、註において特徴的な内容を要約し記載した．“*“以下の註は粉川による.
AT 番号分類は Ørnulf Hodne, *The type of the Norwegian folktale*, Instituttet for sammenlignende kulturforskning, Oslo, 1984、およびオスロ大学 Universitetet i Oslo の HP で公開している AT 番号対応表[1]を参照している．(AT: Antii Aarne and Stith Thompson, *The Types of the Folktale. A classification and Bibliography* (Second Revision), Helsinki, 1971.)
モティーフ・インデックス(Index of Motifs)分類は、Stith Thompson, *Motif-Index of Folk Literature*, 6 vols, Bloomington, Indiana, 1955-58 による．ML (Index of Migratory Legends)分類は、Reidar Th. Christiansen, *The Migrartory Legends: A Proposed List of Types with a Systematic Catalogue of the Norwegian Variants*, Helsinki, 1958 による.

番号	(a)名称と外形	(b)出現の仕方の特徴	(c)住居	注記
39.1.	(i) a troll cat	(i) 毎週木曜の夜に、Lispet Snipånn が男の子に箒用の刷毛を切るよう命じ、それに Lispet は自分の血を 3 滴たらしトロル猫 troll cat を作り出しているのが見出される. (悪魔の年老いたニックに呼びかけもしている. Lispet は魔女として描かれている)	(i) —	Nordland の Frei で、Knut Strompdal によって収集された. 当時の人々は、トロル猫は、人の髪や爪、木屑などから魔女によって作り出されると信じていた．トロル猫への信仰は、髪などのある物の蓄積の観察に関連付けられている．トロル猫は、ある物体が地面の上で乾いたのちに、風によって畑や地面を転がっていく様子が、走る動物として印象を人々に与えたことから来て

[1] Eventyrene listet etter eventyrtyper (http://www.hf.uio.no/ikos/tjenester/kunnskap/samlinger/norsk-folkeminnesamling/eventyr/eventyrene-etter-typenummer/) 2012/10/24 参照

				いる.
39.3.	(i) a witch 「Marte」 (南 Fron において最も悪名高い魔女、黒い本を持っている、troll cat を従えている) (ii) a troll cat (i)に連れられている (灰色、毛玉のように丸い、地面を転がりまわる)	(i) 鍛冶屋に突然現れ、HansTofte に歯を 2 本折られ、箒に跨り Tofte 谷間に消えていく. (ii) 牛から乳を吸い、クリームを盗みに家に忍び込む. (しかし、クリームを吸いすぎると吐き出してしまい、それは灰色のバターに変わる. またそれは「トロル猫のおう吐物」や「トロル猫のバター」と呼ばれている. それらは霧の立ち込める夜が明けた朝に見ることができる)	(i) Holon (ii) Holon	Oppland の Fron で Edvard Grimstad によって採集された話. 増殖が速いカビ菌は、しばしばトロル猫の落とした物体として考えられていた. また魔女は、自身のトロル猫の嘔吐物が焼かれると、のどの渇きを覚え、焼かれている場所への出現を強いられる.
47.4.	(i) a wood sprite (原語:skogsrå) (ii) a boy (実際には人間であるが、troll のようにせっかち) *hulder に似ているが、森の精は自分自身で生きているという点で異なっているという説と、全く同じものだとする説と 2 つある. また彼らは道に迷っ	(i) 馬を探しに Halvor 山に入っていた主人公を起こしているのが見出される. (ii) 山で主人公と出会い、自分も馬を探していると伝える.	(i) Halvor 山 (ii) —	Østerdalen の Elverum で Sigurd Nergaard によって採集された話. この物語に登場する森の精の特徴はスウェーデンから借りてきたものである. 森の精は孤独な生き物として描写されており、特にこの物語の中での彼女の属性は、フルドラ(隠された人々)へのノルウェーの

	た人を呼び、いつでも人々を助けるために姿を現し、人を傷つけることは決してしない.			民間信仰に対応している. ML6025[2]
47.18.	(i) a holder woman 女フルドラ (かぶると姿を消すことができる troll hat を持っている)	(i) 主人公 Hurdabaken の夢の中に現れ、troll hat を授ける.	(i) —	Valdres Buskerud の Vestre Slidre で Johan Skrindsrud によって収集された話. 自分の姿を消せる帽子をもらう話は、明瞭な叙事詩の型を持っているわけではない. Hurdabaken あるいは Hulabaken という名の男の伝承は、Valdres(地名)に特徴的に分布しており、悪魔などと考えられている有名な盗人を指示している. ML6050[3]
49.1.	(i) a big old fellow 年老いた大男 (ii) a huge troll (大きな口:上あごが天井のドアフレームに届き、下あごが敷居に触れるくらい大きい)	(i) 粉ひき機の軸を止めているのが見出される. (その後、主人公が燃えている木のかけらを、(i) のあごひげに投げつけ追いはらわれる) (ii) 外を誰がのしのしと歩いているのが聞こえ、主人公が	(i) — (ii) — (どちらも Ner-Duåsen に現れる)	1933 年、Asbjørn Heggem が Romsdal の Sørstranda に住む自分の父親から収集した話. この人気がある話は、トロルだけでなく、塚の民、水の精、農場の精、さらには人魚についても語られている. ノルウ

[2] ML6025: Calling the dairymaid
[3] ML6050: The fairy hat

		ドアの隙間から覗き込む と、大きなトロルが歩いてくるのが見出される．そして粉ひき機を止めようとするが、主人公に沸騰したポットを口の中に入れられ、逃げていく．		ェーとスウェーデン(特にノルウェーとの国境近く)ではミル Mill に関する民間伝承が残っている．超自然的存在は、夜あるいは神聖な日にミルがまわっていた場合、止めようとすることで知られている．
59.3.	(i) Troll hag 女トロル	(i) 女トロルが座って糸を紡いでいるが、そこに聖オーラヴが航行してきて、女トロルが「どうしてここを通るんだ」と彼に怒ると、聖オーラヴは「石になれ」と返し、石になってしまった．	(i) Gyvrodalen (Sand 県の Brommeland の外れにある谷で、Troll Hag Dale とも呼ばれている．またその谷間の型側面に大きな岩があり、その岩が糸を紡いでいる女に見えることから、その岩を Gyvro (Troll Hag)と呼んでいる)	Rogaland で、Aamund Salvrson によって採集された話．聖オーラヴについての伝説で、原子のトロルとの対決はメインテーマの一つである．オーラヴは魔術的な言葉の力によって、悪い女を石に変える．同じ話が、民間バラッドの中で同様にみられる．しかし、それはデンマークとスウェーデンのみで確認できる．民間伝承におけるオーラヴの研究をしている Bø は、バラッドはこの伝説の古い類話から派生したものであると言及している．

59.4.	(i) Reins troll (悪名高い)	(i) Angersnes(地名)で、Altensfjord の北に吹き込む南西の風を吸い、吐き出し、Ranafjord で激しい沖に向かう嵐を引き起こす．航行が困難になり、多くの人々が draug と遭遇する． その後、聖オーラヴが銀の弓矢を山に向かって放つと、大きな岩がうなり声とともに落ち、人々はトロルが死んだことを知る．山に大きな穴ができ、現在はその穴は Saint Olav's Shot と呼んでいる．	(i) Angersnes の山 (北ノルウェーに位置する)	Helgeland の Holmvikja で Hilmar Øren Båtstø によって収集された話． draug とは難破と死を象徴する悪い女である．北部ノルウェーの民間伝承によれば、draug はボートの半分で航海している．
59.5.	(i) troll / jutul 「Sigg」 (妻と子供がいる)	(i) Karmøy の Haldnes で聖オーラヴが教会を建設していたとき、姿を現し、「月と太陽、あるいは聖オーラヴをくれるのならば教会作りを請け負う」と言う． (聖オーラヴに名前を呼ばれ死ぬ)	(i) Blood Field の側にある丘	Rogaland の Karmøy で、Torkell Mauland によって収集された話． 伝道師の王、聖オーラヴは、ノルウェーじゅうに多くの教会をたてたことは疑う余地がない．しかし、民間伝承において、実際に彼が建てた教会よりも多くの教会が、聖オー

				ラヴによるものだと語られている. ML7065[4]

[4] ML7065: The name of the masterbuilder

Sogur frå Sætesdal　ノルウェー　3 話

【出典】

Torleiv Hannaas (sml.), *Sogur frå Sætesdal. sagde av Olav Eivindsson Austad*, Steenske Forlag, Oslo, 1927.

＊英訳：Reimund Kvideland, Henning K. Sehmsdorf, *All the World's Reward: Folktales Told by Five Scandinavian Storytellers*, University of Washington Press, 1999 (レイムン・クヴィーデラン、ヘンニング・K・セームスドルフ監修、『5 人の語り手による　北欧の昔話』[1999]、川越ゆり訳、古今社、2002 年.)

Sogur frå Sætesdal (『セーテスダールの昔話』)に収録されているノルウェーの昔話 43 話のうちトロルが登場する 3 話を分析[1]．今回扱う昔話は、すべて 1907~1926 年に語り手オーラヴ・エイヴィンソン・アウスター Olav Eivindsson Austad (1843-1929)から採取されたものである. 題にある「セーテスダール Setesdal」はノルウェーの地名．題名につけている数字は、原書番号による.

12. Dei tolv ramnane
13. The Twelve Ravens
13. 12 羽のカラス

26. Kjetta på Dogre
29. The Cat in Dogre
29. ドブレ山のネコ

27. Trond
30. Trond
30. トロンの話

[1] 日本語翻訳本では 8 話.

(a)名称と外形 :「」内は名前、それ以外は表記されている呼称. ( )内は外形.
(b),(c),に関して特に記載がない場合は、— と表記する.
また、注記の欄には、註において特徴的な内容を要約し記載した. “*“以下の註は粉川による.
AT 番号分類は Ørnulf Hodne, *The type of the Norwegian folktale*, Instituttet for sammenlignende kulturforskning, Oslo, 1984、およびオスロ大学 Universitetet i Oslo の HP で公開している AT 番号対応表[2]を参照している. (AT: Antii Aarne and Stith Thompson, *The Types of the Folktale. A classification and Bibliography* (Second Revision), Helsinki, 1971.)
モティーフ・インデックス(Index of Motifs)分類は、Stith Thompson, *Motif-Index of Folk Literature*, 6 vols, Bloomington, Indiana, 1955-58 による. ML (Index of Migratory Legends)分類は、Reidar Th. Christiansen, *The Migrartory Legends: A Proposed List of Types with a Systematic Catalogue of the Norwegian Variants*, Helsinki, 1958 による.

翻訳書番号	(a)名称と外形	(b)出現の仕方の特徴	(c)住居	収集年代・注記
12	(i) trollkjering 女トロル 敵対者 ⇒最終的に女トロルは捕まり、蛇の巣に放り投げられる.	(i) 主人公の赤ん坊の小指を切り、蛇の巣に放り投げる.	(i) —	1917 年 AT451
26	(i) troll (複) (長いしっぽ、短いしっぽ、しっぽなし) 敵対者でも助力者でもない	(i) クリスマスイブ joleftanskveld に、ドグレ山 Dogre に住むハルヴォル Hallvord の家にごちそうを食べにやって来る.	(i) 山 fjellet	1913 年 この話型は、ノルウェーで少なくとも 64 話が記録されている. この話は、北ヨーロッパとスラブ系の地域で、非常に広い分布を持っている. AT1161
27	(i) troll / Trond トロルの親分「トロン」 (大きい図体で怖そうな面持ち、長い鼻) 敵対者でも助力者でもない	(i) クリスマスイブ joleftanskveld に、民家にごちそうを食べにぞろぞろとやって来る.	(i) 山 fjellet (はげ山 Berrfjell)	1913 年 (第 26 話を参照) AT1161

[2] Eventyrene listet etter eventyrtyper (http://www.hf.uio.no/ikos/tjenester/kunnskap/samlinger/norsk-folkeminnesamling/eventyr/eventyrene-etter-typenummer/) 2012/10/24 参照

Ísleszkar þjóðsögur og ævintýri　アイスランド　37 話

【出典】

Jón Árnason (safnað hefur), Árni Böðvarsson og Bjarni Vilhjálmsson (önnuðust útgáfuna), *Ísleszkar þjóðsögur og ævintýri*, I-VI., Bókaútgáfan Þjóðsaga, Reykjavík, 1954-61.

*Jón Árnason, *Íslenzkar þjóðsögur og æfintýri*, Leipzig, 1862-64 を編集した、全六巻の新版.　約 2920 話が収められている.

*分類は *Ísleszkar þjóðsögur og ævintýri* による. (アイスランド語題についている番号は粉川)

*物語の題名は太字で表示している.

第 I 巻

I. Flokkur; Goðfræðissögur 神話物語

3. Grein; Tröll　トロル

A. Meingjörðir tröll　危険なトロル

1 s.138-140. Vigð Drangey

J: 13　浄められたドラウング島[1]

2 s.147-148. Skessusteinn

E/C: Thr Giantess‘s Stone[2]

3 s.148-151. Gellivör

J: 14　ギェトリヴェル[3]

4 s.151-154. Gissur á botnum

E/C: Gissur of Botnar[4]

E/B: Gissur of Botnar[5]

5 s.157. Saga af þorgeiri stjakarhöfða

E/S: The old man of the cliff[6]

6 s.172-173. Gilitrutt

J: 16　ギーリトルット[7]

---

[1] ヨウーン・アウトナソン編、『アイスランドの昔話』世界民間文芸叢書第 9 巻、菅原邦城訳、三弥井書店、1979 年、58-63 頁.

[2] William A. Craigie, *Scandinavian Folk-lore – Illustrations of the traditional beliefs of the Northern peoples* [1896], Biblio Bazaar, Amazon Japan, 2009, (Reprinted), pp.48-50.

[3] 菅原 1979、64-73 頁.

[4] Craigie1896, pp.51-52 (抄訳).

[5] Alan Boucher (trs.), *Elves, Trolls and Elemental beings*, Icelandic folktales II, Iceland Review Library, Reykjavík, 1977, pp.52-55 (抄訳).

[6] Jacqueline Simpson, *Icelandic folktales and Legends*, Tempus, UK, 2004, pp. 85-86.

[7] 菅原 1979、74-79 頁.

7 s.173-175. Jóra í jórukleif

E/C: Jóra in Jóru-kleyf[8]

8 s.178-180. Kráka tröllskessa

E/S: How Kraka lost her lover[9]

9 s.182-183. Loppa og Jón Loppufóstri

J: 17　ロッパとロッパの養い子ヨウーン[10]

10 s.183-184. Trunt, trunt og tröllin í fjöllunum

E/C: Trunt, Trunt, and the trolls in the Fells[11]

11 s.184-185. Um trölla-láfa

E/B: Troll-Lafi[12]

12 s.186. Andarímur og Hallgrímrímur

E/C: Andra-rímur and Hallgríms-rímur[13]

C. Tröll Sýna Vinsemd 友情を示すトロル

13 s.193-196. Jón og tröllskessan

J: 18　ヨウーンと女トロル[14]

D. Nátttröll 夜のトロル

14 s.198-199. Nátt-tröllið

J: 19　夜のトロル[15]

15 s.199-200. Upptök Drangeyjar

J: 20　ドラウング島の起り[16]

16 s.202-203. Bergþór í Bláfelli

E/C: Bergthor in Blá-fell[17]

17 s.205. Kerlingin í vatnsdalsfjalli

E/S: The giantess‘ staff[18]

18 s.206. „Djúpir eru Íslands álar.“

J: 21　「アイスランドの澪は深い」[19]

---

[8] Craigie1896, pp.52-54 (抄訳).
[9] Simpson2004, pp.89-91(抄訳).
[10] 菅原 1979、79-83 頁.
[11] Craigie1896, p.56.
[12] Boucher1977, pp.48-51.
[13] Craigie1896, p.57-58.
[14] 菅原 1979、83-92 頁.
[15] 菅原 1979、93-96 頁.
[16] 菅原 1979、96-98 頁.
[17] Craigie1896, pp. 59-61.
[18] Simpson2004, pp.100-102.

E. Grýla, Leppalúði og fjölskylda þeirra オーグル、レーパルンディとその家族

19 s.207. Grýla

E/A: Gryla and Her Mob[20]

III. Flkkur; Galdrasögur 魔法物語

3. Grein; Einstakir galdramenn – Frá séra Háfdani á felli

個々の魔法使いたちーフェットルのハウルヴダウン牧師から

20 s.501-502. Málmeyjarkonan

J: 38　マウルム島の女主人[21]

第 II 巻

VII. Flokkur ; Útilegumannasögur 盗賊物語

B. Útilegumenn Ræna Byggðamönnum 里人に盗みを働く盗賊(追放者)

21 s.203-209. Sigríður Eyjafjarðarsól

J: 50　エイーヤフィヨルドの太陽シグリーズル[22]

22 s.234-237. Sagan af Ketilríði Bóndadóttur

J: 51　百姓娘キューティルリーズルの物語[23]

VIII. Flokkur ; Ævintýri 昔話

A. Stjúpusögur 継母継子譚

23 s. 299-305. Sagan af Mjaðveigu Mánadóttur

J: 54　マウーニの娘ミャズヴェイグの物語[24]

24 s. 318-323. Sagan af Líneik og Laufey

J: 55　リーネイクとレウーヴェイの物語[25]

25 s.343-347. Sagan af Surtlu í Blálandseyjum

D: 15. Surtla in den Blaulandinseln[26]

(ブラウランド島のスルトラ)

B. Vondir ættingjar 悪い肉親

26 s.396-398. Helga karlsdóttir

---

[19] 菅原 1979、98 頁.
[20] Boucher1977, pp. 62-65.
[21] 菅原 1979、143-147 頁.
[22] 菅原 1979、195-212 頁.
[23] 菅原 1979、212-224 頁.
[24] 菅原 1979、234-249 頁.
[25] 菅原 1979、249-264 頁.
[26] Kurt Schier (ed.) , *Märchen aus Island*, Eugen Diederichs Verlag, Köln, 1983, Nr.15.
(小澤俊夫編、『世界の民話 32 アイスランド』[1983]、谷口幸男(抄)訳、1985 年、十五番)

D: 17. Helga und der Zwerg[27]

(ヘルガと小人)

27 s.408-411. Skessan á steinnnökkvanum

D: 5. Die Riesin im Steinboot[28]

(石のボートに乗った女巨人)

第 IV 巻

VIII. Flokkur ; Ævintýri 昔話

A. Stjúpusögur 継母継子譚

28 s.504-512. Sagan af sigurði hring og snata

D: 7. Die Geschichte von Sigurd Hring und Snati[29]

(シーグルズル・フリングとスナーティの物語)

29 s.538-541. Rauði boli og Sigurður kóngsson

D: 26. Der rote Stier Raudiboli und Sigurd Königssohn[30]

(赤牛ロイジボーリと王子シーグルズル)

30 s.594-599. Hildur góða stjúpa og Ingbjörg kóngsdóttir

D: 19. Die gute Stiefmutter Hild und die Königstochter Ingiborg[31]

(人のよい継母ヒルドルと王女インギビョルグ)

第 V 巻

VIII. Flokkur ; Ævintýri 昔話

C. Eftirlætisö og olnbogaörn kónga on kotunga 貧乏人の子どもと王の子ども

31 s.67-70. Bangsimon og tröllkonan

D: 16. Bangsimon und das Trollweib[32]

(バングシーモンと女の妖怪)

32 s. 139-141. Búkollu saga

D: 4. Die Kuh Bukolla[33]

(雄牛のブーコトラ)

33 s.149-151. Þorstrinn karlsson og skessurnar tólf

D: 24. Thorstein Karlsson und die zwölf Riesinnen[34]

---

[27] Schier1983, Nr.17、谷口 1985、十七番.
[28] Schier1983, Nr.5、谷口 1985、五番.
[29] Schier1983, Nr.7、谷口 1985、二十三番.
[30] Schier1983, Nr.26、谷口 1985、二十六番.
[31] Schier1983, Nr.19、谷口 1985、十九番.
[32] Schier1983, Nr.16、谷口 1985、十六番.
[33] Schier1983, Nr.4、谷口 1985、四番.
[34] Schier1983, Nr.24、谷口 1985、二十四番.

(ソルステイトン・カールストンと十二人の女巨人たち)

34 s.152-155. Trítill læralítill

D: 10.　Tritil Laeralitil[35]

(トリーティル・ライラリーティル)

35 s.159-161. Döggvi og Helga

D: 9.　Tau und Helga[36]

(トイとヘルガ)

36 s.161-162. Hyrnihraukur

D: 27.　Hyrnihrauk[37]

(ヒトニフロイク)

D. Laun dyggða og hegning ódyggða　善行の報酬

37 s.202-206. Sex bræðra saga

D: 18.　Die Geschichte von den sechs Brüdern[38]

(六人兄弟の物語)

[35] Schier1983, Nr.10、谷口 1985、十番.
[36] Schier1983, Nr.9、谷口 1985、九番.
[37] Schier1983, Nr.27、谷口 1985、二十七番.
[38] Schier1983, Nr.18、谷口 1985、十八番.

(a)名称と外形：「」内は名前、それ以外は表記されている呼称．( )内は外形.
(b),(c),に関して特に記載がない場合は、— と表記する.
また、注記の欄には、註において特徴的な内容を要約し記載した．“*“以下は粉川による註.
AT 番号分類は Jón1961, VI, s.317-319 に記載されている AT 番号対応一覧表を参照した. またその一覧表は、Einar Ól. Sveinsson, Veryeichnis Isläandischer Märchenvarianten, ed. as no. 83 in FF Communications, Helsinki, 1929 に収められている AT 番号対応一覧表を参考にしている. (AT: Antii Aarne and Stith Thompson, *The Types of the Folktale. A classification and Bibliography*)
モティーフ･インデックス(Index of Motifs)分類は、Stith Thompson, *Motif-Index of Folk Literature*, ed. in FF Communications Nos. 106, 107,108, 109, 116, 117, and in Indiana University Studies Nos. 96, 97, 100, 105, 106, 108, 109, 110, 111,112.による.

番号	(a)名称と外形	(b)出現の仕方の特徴	(c)住居	注記
1	(i) vættir 超自然的存在たち (ii) ein stór bæði grá og loðin með rauðdii ermi 一本の大きな手 (灰色、毛むくじゃら、赤い袖) (iii) tröllkona 女トロル (iv) tröllkona 女トロル	(i) グヴズムンドゥル・アーラソン聖人 Guðmundur góði Arason(西･北部アイスランドを管轄するホウーラル Hólum の司教)が、食糧不足のため、従者をドラウング島へ送ると、彼らの命を奪っているのが見出される. (ii) 島で、司教が悪霊払いの祈祷朗読と歌をあげて、聖水をたずさえ、神父らをつれて歩いていると、岩から一本の大きな手が伸びてくるのが見出される．その後、司教にこれ以上島を清めないでほしいと頼む. (iii) 別のトロル(iv)に向かって大声で呼びかけ、ホウーラル司教	(i) ドラウング島 Drangey (ii) 島の岩の中 (iii) 北部地方のフリョウーラホルトン Fljótahorni fyrir norðan (iv) ストランドハーリ Strandhala	島近くの地域住民から原典編者 Jón Árnason が記録した. フーナヴァッシスラおよびスカーガフィヨルド、西部地方に分布している. *四方八方が断崖絶壁の Drangey のまわりでは事故が絶えなかったため、崖の中には、島へ来る人々が彼らの神通力を弱めることを嫌い、またまるで招かざる客の様に島から利益を得ようとしている者が住んでいると考えられてきた。 AT 番号該当なし

		が死んだと告げる. (iv) 別のトロル(iii)の報告を聞き、「もっと悪い司教がくる」と教える.		
2	(i) tröllkarl 男トロル 「ソーリル Þórir」 (ii) tröllkerling 女トロル (魔術が使える) *(i)と(ii)は魔術を使って村から毎年一人ずつ聖職者あるいは羊飼いを、食料として自分たちの住処に引きこんできたが、村の教会の司祭としてエイリーク Eiríkur がやって来てからはうまくいかなくなった.	(i) 食べ物がなくなったため、外へ出て食べ物を探せと(ii)に言われる. その後、鱒(silungi)釣りを始めるが、氷にくっついてしまい死んでしまう. (ii) 主人の帰りが遅いため、洞窟の外へ出ると、(i)が死んでいるのを見つけ、(i)が釣った鱒を洞窟に持って帰ろうとするが、洞窟に着く前に日の出の光と、教会の音を聞き、石になってしまう.	(i)(ii) 洞窟 Hellir Hróarstungu にある Kirkjubæ 村近くの Skersl という絶壁にある洞窟 hellir	Skriðuklaustri に住む学生 Jónssonar からの書簡に収められていた物語. AT 番号該当なし
3	(i) huldukona 女フルドラ (みすぼらしい格好、昔のアイスランドの服装、3 人の赤ん坊) (ii) skessa, tröllkona, kona stórvaxin 女巨人、女トロル、大きな女 「Gellivör」 (二歳の息子がいる、女トロルの暦 Tröllkonurím を持っている)	(i) 主人公の夢の中に出てきて、牛乳をくれれば、主人公に助言を与え、主人公の旦那をさらったトロルを主人公が住んでいる地方から追放すると約束する. (ii) クリスマスの夜に主人公の屋敷の前の石畳に立っているのが見出される. (その後、いろいろな場所に連れて行かれるが、主	(i) 主人公の屋敷の近くにある丘 hólnum の中 (東部 Borgarfirði の Hvoli に主人公の屋敷がある) (ii)(iii) Staðarfjallinu (山) その後 (ii) だけ Þórláksdagur ⇒ Bláskóga と移動する.	クリッフススターズル Klyppsstað のスナイービョトン Snæbjörn から採集した話. AT 番号該当なし

	(iii) barn (ii)の子ども (クリスマスに新鮮な人間の肉を食べる) *物語の冒頭で、カトリック教時代の終わりに、デーシャルミーリ Desjarmýri から南南東の方向にある山に女トロルが住んでいると噂になっていたが、悪霊 meinvættur ではないと言われていた、と説明されている. *物語中で、司教が暦を混乱させたため、クリスマスの時期が分からなくなった際に、一人の男が司教本寺のあるスカウールホルトに向かう途中で、(ii)に出会い、暦をもらう. その際に、(ii)が「マリアの息子キリストがトロルの面倒も見てくれていたのであれば、キリストの誕生日を忘れないのに[39]」と伝える.	人公は(i)の助言をもとに、教会に逃げ込む) (iii) (ii)が主人公のもとへ訪れている際に、(i)に絞殺される.		
4	(i) tröllkonur (複) 女トロル(姉妹) (仲良し、互いを行き	(i)(ii) 互いの山から大声で話をしているのが見出される. 主人公	(i) 姉: Bjólfelli 妹: Búrfelli	Rangárvallasýslu の Landi に住む、百姓から採集した話. 他にも

[39] „Hefði hann Kristur Máríuson unnið eins mikið fyrir okkur tröllin eins og það segið hann hafi unnið fyrir ykkur mennia þá hefðum við ekki gleymt fæðingardeginum hans.“

	来している、川を渡る際に濡れないように 3 つの石 Tröllkonuhlaup を敷いている、斧を持っている)	Gissur á Botnum (Gissur á Lækjarbotnum) を煮て食べるために鍋を貸してほしいという会話を聞き、主人公は Klofa の教会の鐘を鳴らしてもらい、逃げ帰る．姉のトロルから逃げる際に、トロルが斧を投げてくるが、主人公の馬に刺さり、死を免れる．	*崖の名前は、Tröllkonugil	Holtum の Árbæ で、Helgason から採集されている． AT 番号該当なし *アイスランド南部のヘクラ山の大噴火 1845-1846 についての描写がなされている．
5	(i) bjargbúan 崖の主人 (魔法 tröllskapur を使える)	(i) オーラフ王が航行中に、オーラフ王の船を崖の中に引き込もうとする．	(i) 崖の中	Árni Magnússon (d.1730)が叔父 Vígfúss Jónssonn (d.1728)から聞き書き留めた話． オーラフ王 Ólafi kóngi (Tryggvasyni) は 995 年から 1000 年にノルウェーを治めていた． AT, ML 分類不可 Motif F637: Strong man holds back ship
6	(i) ein heldur stórskorin, tröll 大きな年老いた女、女トロル 「Gilitrutt」	(i) 怠け者の百姓の妻のもとにやって来て、自分のお願いを聞いてあげれば、何かをしてあげると提案し、取引をする．「自分の名前を当ててくれ」と百姓の妻に頼む．(もし当てられなかったら、連れ去られる)	(i) 岩山にある丘の中 *百姓の夫婦は、東部地方のエイーヤフェトル Eyjafjöllum に住んでいる．	Magnús Grímsson (1825-60, 牧師)が老女から採集した話． 南部地方ラウンガルヴァトラシスラに分布している話． AT500 Motif W111: Laziness

7	(i) ein stúlka 一人の少女 「Jórunn」 ⇓ versta tröll 最も邪悪なトロル	(i) 勤勉に働いているのが見出される．その後、Laxfossi(滝)の上手にある Ölfusá (川)を渡る際に、濡れないように大きな岩を川に投げ入れ飛び石 (Tröllkonuhlaup /Jóruhlaup)を作っているのが見出される． ⇓ Hengil に向かい、そこにある洞窟(後にヨーラの洞窟 Jóoruhellir と呼ばれる)に住むことを決める． ⇓ 邪悪なトロルになり、人間や動物を襲っているのが見受けられる． ⇓ ノルウェーと商売取引をしている青年が、ノルウェーを訪れた際に、ノルウェー王にトロルの始末の仕方を訪ね、その方法によって葬られる．(葬られた場所は、全島民会の場所になる)	(i) 北西部の Flóanum Sandvíkurhrepp(教区) にある農家 ⇓ Hengil の洞窟 (ヨ ー ラ の 洞 窟 Jóoruhellir)	Jóru-kleyí という名前は、Hardar のサガの中に見る頃ができる．また Landnáma によれば、Oxarará という名前は、最初の時期の定住者の一人である Ketilbjörn によってつけられたものである． AT 番号該当なし
8	(i) tröllskessa / skessa 女トロル 「クラウーラ Krára」 (最も邪悪、男好き、一緒に住むため村か	(i) Baldursheimi(地名)の羊飼い sauðamanni のヨウーン Jón をさらって自分の住処に連れて帰る姿が見受け	(i) Bláfjall の側にある Bláhvammi の洞窟 helli (険しい岩山にあり、人間がその洞窟にたどり着くのは不可能)	Gautlöndum 出身の、Jón Sigurðsson(1889 年から全島民会 Alþingi の議員)から採集した話．編者 Jón Árnason

	ら男をさらう) *人間の男が自分のものにならないと分かると、殺す.	られる. ⇓ 一緒に生活する条件として、“12 歳のサメ tóld ára gamlan hákarl”をとって来るように言われる. ⇓ 12 歳のサメがとれる、唯一の場所 Siglunesi (住処からは遠く離れた)に向かい、13 歳のサメ þrettán ára hálarl をとって来る. ⇓ サメをとっている間に、逃げ出した主人公を村まで追いかけるが、鍛冶屋に撃退され逃げ帰る.		は他にもいくつかの Kráka に関する小話(アクネドート)を紹介している. 好色な超自然的存在からの逃走はノルウェーの物語でも見られる. アイスランドのこの類話では、たいてい女トロルは教会の鐘が鳴り響くことによって阻まれる. AT 番号該当なし ML5095: Fairy Woman Pursues Man
9	(i) flagðkona 女巨人 「Loppa」(地名から) (ii) systir hennar (i)の一人姉妹 *後に、(i)が通った場所が、女トロルの原 Tröllkonuvöllur という名前がついたことから、(i)が女巨人という呼称以外にも、トロルという名でも親しまれていたことがわかる.	(i) ヨウーン Jón という成人男性がアイスランド苔を積んでいる際に、彼をさらっているのが見出される. ⇓ 姉妹が死んだ後、Jón に 12 歳の鮫 tólf ára gamlan hákall を取ってくるよう頼まれ、Siglunes まで行くが、その間に Jón が逃げ出し、Jón が Illugastða の教会で鳴らした教会の音を、Miðdegishólnum で聞	(i)(ii) 窪地にある穴の中 (Hnjóskdælinga の住民の共同牧草地 Bleiksmýrardal(谷)に流れる川の西側の山にある Loppuskál という窪地)	Benedikt Þórðarson ベネディクト・ソウルザルソン牧師(1800-82)から採集した話. 分布地域不明 AT 該当なし 物語の中で、18 世紀半ばごろ、イットルガスタージル Illugastöðum の教会に葬られた主人公 Jón の遺体が掘り起こされた. その描写の中で、móðuharðindin という語が出てくるが、これは 1743 年の

		き逃げていく. (ii) Jón を自分たちの夫にするために、尽くしている様子が見受けられる. (香油または脂肪を Jón に塗りこみ、彼を伸ばし、体を大きくする)その後、食べ物を取りに行った際に死ぬ.		東南部地方における火山噴火の後アイスランド人を苦しめた基金と伝染病流行の時期 (1744-1745) を指す語である.
10	(i) maðurinn 男 (i) に魔法をかけられ、トロルになる. (ii) skessa 女トロル (大きな図体、魔法が使える)	(i) 恐れている様子が見出される. ⇓ 女トロルに魔法をかけられているのが見出される. そしてその後、女トロルとともに去る. ⇓ 次の年、去年と同じ「苔集め」の場所に現れ、人々が信じているものを聞くと、「神 guð を信じている」と答える. ⇓ また次の年、「苔集め」の場所に現れ、人々が信じているものを聞くが何も答えない. また、男がトロルのような見た目に変わっている tröllskegur. ⇓ 3 年目、また「苔集め」の場所に現れ、人々が	(i) ― 主人公が毎年、訪れる「苔集め」の場所 grassafjalli (ii) ―	牧師 Skúli Gíslason (1825-1888) が、Einari Bjarnasyni から採集した話. 原書にある注記は Páli Ólafssyni によるものである. ”Trunt” という語にはアイスランド語においても英語においても特に意味はない. AT 番号該当なし

		信じているものを聞くと、「山のトロル![40]」と答える．また、男の見た目は、完全に大きく、恐ろしいトロル tröll になっている． (ii)氷河 jökulgnípu の上に座っているのが見出される．その後、男に魔法をかける．		
11	(i) stór skessa / tröll 女トロル (一番背の高い人間よりもはるかに大きい図体) (ii) skessa / tröll 女トロル ((i)のトロルよりも若い)	(i) 主人公をさらい、洞窟へ連れていく姿が見受けられる． ⇓ その後、主人公に自分の食事に「9 歳のサメ níu ára gamlan hákarl」が欲しいと言われ取りに行く．しかし、その間に主人公に逃げられる． (ii) 洞窟の中に座っているのが見出される． (i)と交代で主人公を見張っているが、(i)がサメを取りに行っているときに、釣りに出かけて、主人公に逃げられる．	(i)(ii) helli	Njarðvík で Jóns が記録した話. AT 番号該当なし
12	(i) tröll (Andarímur というバラードを好んでいる、人間の妻がいる)	(i) 難破した乗組員たちが雨をしのぐために洞窟で歌を楽しんでいる際に、乗組員たちに曲のリクエスト	(i) helli 洞窟 (登場人物たちが、難破してたどり着いた場所にある)	牧師 Skúli Gíslason (1825-1888) が記録した話. 北アイスランドに分布している話.

[40] „trunt, trunt og tröllin í fjöllunum“

	*乗組員たちが洞窟の中で一夜過ごした後、地元の人に、村の娘が魔法で誘惑され、トロルと一緒に暮らしているということを聞く. *また、一人の乗組員が朝目を覚まさなかったため、「トロルの手によって仲間が殺されるのならば、自分たちの手で殺そう」と話をしている場面がある.	をする. その後、妻が満足していないからと、もう一曲別の歌をリクエストする.		通常の昔話で見られるタブーの一つ、超自然的存在からもらった食事をとる、というモティーフがみられるが、この話では逆のタブーが見られる. AT 番号該当なし ML5095: Food from the Fairies
13	(i) tröllskessan / skessa / tröllkonunaut 女トロル、女巨人 (大きな図体、体が光っている、夫とは死別、二人の子供 tvö börn がいる、魚がたくさん捕れる不思議な釣り針 önglar を持っている、金銀財宝を持っている) *主人公ヨウーンと女トロルの関係は親密 kærleikum であるという描写が 2 回ある.	(i) (主人公のヨウーン Jón が国の南部へ漁にでるため向かっていると、悪天候にあい、女トロルの洞窟の中で雨宿りをし、トロルの子供たちに魚を与える)そこへ、女トロルが沢山の鱒を持って洞窟へ帰ってくるのが見出される. その際に、「私の洞窟で、人間の臭いがする[41]」と言いながら入ってくる. ⇓ 子供たちによくしてくれたお礼に、最大限のもてなしと、寮に出	i) 崖にある洞窟の中 *ベッドなどもある (北部地方に住む主人公が、漁で盛んな Vestmannaeyjum に向かう際にある、長い坂から見える崖. *ほかにも Eyjunum や Landeyjunum といった地名が出てくる.	Magnús Grímsson (1825-60, 牧師)が農夫から採集した話. 南部地方ビスクフストゥングルに分布している話. AT 番号該当なし

[41] „Mannaþefur í helli mínum.“

		る際の助言を与え、釣り針を渡す. ⇓ 冬の間にトロルの子供たちは死んでしまい、漁から帰ってきたヨウーンに、自分がヨウーンの夢に出てきたらすぐに洞窟へ駆けつけ、埋葬してほしいと頼む[42]. ⇓ 女トロルが夢に出てきたため、洞窟に駆け付けたヨウーンに最期を見届けてもらい埋葬してもらっている様子が見受けられる.		
14	(i) nátttröll 夜のトロル 「Kári」(?) *毎年クリスマスイブの夜に、見張りのために農場の屋敷に残っている住民をさらったりしている. *主人公が、「Kári」と呼びかけているが、トロルが名前を名乗っている様子は物語内には見られない.	(i) クリスマスイブの夜 jólanóttina に、主人公の屋敷の窓の外に立ち、主人公に話しかける. ⇓ 主人公と言葉の掛け合いを朝まで行ったため、日光に当たり石化してしまう. (そのため、クリスマスの朝、農道に大きな岩 steinn mikill が突然現	i)―	Magnús Grímsson (1825-60, 牧師) が Rangæarþingi の老女から採集した話. 南部地方ビスクフストゥングルに分布している話. AT 番号該当なし

[42] „Ég á nú ekki langt eftir og ætla ég að biðja þig að koma hingað það allra fljótasta ef þig dreymir mig; því ég ætla að biðja þig að dysja mig hjá karlinum mínum og börnunum okkar.“‘ 「あたしはもう長くはない。もしおおまえがあたしの夢をみたら、できるだけ早くここへ来てほしい。うちの夫と子供たちのそばにあたしを埋めることを頼みたいからさ」

		れる)		
15	(i) nátttröll tvö 二人のトロル 「Karl」じじ 「Kerling」ばば (年老いている、牝牛を一頭飼っている)	(i) 二人が牝牛を引いて Hegranesi に沿って Skagafjörð (フィヨルド) を歩いている際に、日光に当たって岩になってしまう. (そのため、ドラウング島 Drangey の外側と内側にある断崖を「Karl」と「Kerling」と呼び、そこを通る際には断崖に声をかけるのが古くからの習慣となっており、守護霊にたいする古い信仰の一つである. 司教が島を清めてからも残っている習慣である、と語られている)	i) ヘグラネス Hegranesi	地域住民から採集した話. Skagfirðinga および Húnvetninga に分布している話. AT 番号該当なし
16	(i) tröll の夫婦 夫 「Bergþór」 ii) 妻 「Hrefna」 iii) tröll 「Hítar」(女) *Sbr. Ármann の物語では、Bergþór の母親は Hlaðgerður とう名前であり、Hlöðkufelli という山に住んでいると語られている.	(i)アイスランドがキリスト教化される以前に、iii)・ヒートが全国のトロルを集め、宴を催し、それに参加するのが見出される. 宴で力比べを行い優勝するが、人間相手に暴力を振るうことはなかった. アイスランドがキリスト教へと改宗した後、特にキリスト教に嫌悪感を示さなかったベルクソールは、以前 Biskupstungum の	i) Bláfelli にある洞窟の中 (ベルクソールが死ぬと、洞窟は消失する) ii) Bláfelli の洞窟から、Hvíta にある Hlöðkufelli 山の下に家を建て移り住んだ. iii) Hundahellir という洞窟	Múla の Egli Pálssyni という男性が、Biskupstungum に住む老女から聞いた話. 物語内で語られる、ベルクソールが崖に貯蔵庫としてあけたとされる穴は、実際に存在しており、貯蔵庫として使用されている. AT 番号該当なし

		Berggstöðum で知り合った、Haukadal に住む農場主に自分を教会の鐘の音が聞こえる場所に埋葬してほしいと頼み、亡くなった後は教会の傍に埋葬された. ii) 夫のベルクソールとは異なり、キリスト教に嫌悪感を抱いたため、Hvíta に一人で移り住むのが見出される. 夫とは Hvítárvatn で釣りをする際に顔を合わせていた. iii)国中のトロルを集め、宴を開いているのが見出される.		
17	(i) nátttröll (女) 夜のトロル *物語の冒頭で、アイスランドに住む全ての超自然的存在は、キリスト教の上陸に、および教会建設に憤慨した、と語っている.	(i) 自分の住んでいる山に教会 Þingeyrakirkju が建設されたため、重傷を負う. そしてそれに憤慨し、教会に石を投げる.	(i) Vatnsdalsfjalli(山)の上	編者 Jón Árnason が、Húnavatnssýsla、Þingin の老女から採集し、記録した話. この語り手は、教会にトロルが投げた石に関する伝説を、他に 2 つ語っている. AT/ML 該当番号なし
18	i) tröllkona 女トロル ii) aðra tröllkonu / grannkonu 別の女トロル (大きな図体)	i) ノルウェーからアイスランドに歩いて渡ろうとした. ii) 隣に住む(i)トロルにノルウェーとアイスランドへの旅の話を聞き、自分も試すが	i)ii) ノルウェー	スクーリ・ギスラソン牧師 Skúli Gíslasson(1825－88)から採集した話. 分布地域不明 AT 番号該当なし

		両国の間にある深い澪álarにはまり死んでしまう様子が見られる. ⇓ その後、女トロルの死体は Rauðasandi に流れ着く.		
19	(i) Grýla グリーラ (巨人の一種)	(i) グリーラはスノッリのエッダに女トロルとともに登場するが、トロル tröll の様に名を栄えさせることができなかったと語られている.	(i) ―	Sigurði málara Guðmundssyni から採集した話. AT 番号該当なし
20	i) konan í Málmey マウルム島の女主人 (主人公 Jón の妻、額に肉色をした十字の印、腫れて黒い顔、トロルのような容貌 tröllslegasta)	i) 主人公がマウルム島に住み始めてから 21 年目のクリスマスイブに、失踪する. ⇓ ヨウーンがフェットルのハウルヴダウン牧師 Hálfdáns prests í Felli とともに馬に乗り、オウーラフスフィヤルザルムーリ Ólafsfjarðarmúla の北にある大きく険しい崖の岩の中から、二人の黒衣の女 tvær konur bláklæddar に連れられ出てくるのが見出される. その際に、女主人の額には肉色をした十字の印が刻まれているが、それは洗礼	i) スカーガフィヨルド Skagafirði のマウルム島 Málmey (島の上に 20 年以上住めないという呪いが掛かっているという信仰があった) ⇓ オウーラフスフィヤルザルムーリ Ólafsfjarðarmúla の北側の崖の岩の中 (他の山とは異なり赤く、大きな穴が存在する) *現在その場所は、ハウルウダウンの岩戸 Hálfdámarhurð と呼ばれている.	Gautlöndum の ヨウーン・シーグルズソン Jón Sigurðsson (1829-89、農民・アルシンギ議員)から提供された話. 分布地域不明 AT 該当なし Motif B181: Horse with magic speed runs over land and sea

		の十字架の印であり、彼女が前世からもっていたものであると牧師が説明する. ⇓ 主人公ヨウーンが妻を連れて帰らないと決めたため、また岩の中に閉じ込められる.		
21	(i) þrjá menn 3 人の男 (人間の男よりもトロルに似ている tröllum en mennskum mönnum) *魔法にかかってトロルの様な容姿をしているが、実際は美しい男たちである. しかし、魔法が解ける前に、2 回彼らを“トロル”に例えている. 一回目は、醜い容姿、二回目はぐでんぐでんに酔っぱらいひどい振る舞いをしている様子にたいして“トロル”という語を使用している.	(i) ―	(i) ― *主人公 Sigríður はエイーヤフィヨルド Eyjafirði のメズルフェットル Möðrufelli の出身である.	1859 年 11 月 23 日に北部地方ケウーパウングル Kaupangr で、ビョルグ・アウトナドウッティル Björg Árnadóttir(1792?-1871、物語に精しい女性) から採集した話. AT 番号該当なし
22	(i) karl og kerlingu og sex pilta 齢をとった男と女と 6 人の若者 (人肉食、金銀財宝を持っている)	(i) 主人公が村の羊を探している際に会った羊飼いの男が、以前案内してくれた大きな羊小舎で、元気なく座っているのが見出される.	(i) 羊小舎 Sauðahús mikið (激しい崖を下り、川沿いに歩いて行くとある小舎) *主人公は、東アイス	北部地方ミルカウ Myrká で、ガーマリイェル・ソルレイフィソン 牧師 Gamalíel Þorleifsson(1729-1836) から採集した話. AT 該当なし

	*主人公 Ketilríður が放牧地から失踪した羊を探しに行こうとすると、それに反対した主人公の父親 Grímur が「トロルか妖怪化強盗かが荒野に巣くっていて、待ち構えている」“Kann vera að tröll, vættir eður stigamenn haldi sig í óbyggðunum と注意する. *羊飼い Þorsteinn は、主人公にとって助力者となる犬を連れている.	⇓ 主人公を殺そうと試みたが、主人公の戦略が勝ち、殺され焼かれた.	ランド Austurlandi のスーズル＝ムーラシスラ Suður-Múlasýslu のある谷に住んでいる.	Motif P710: Nations, different nationalities, foreigneres
23	(i) tröllskessa/ tröllkonu 女トロル eina konu 女(人間) (人間の姿に変身できる、魔法が使える、 (ii) tröllkonu 女トロル eitt stúlkubarn 一人の少女 (i)の娘 (意地が悪い、大きな図体、醜い、人間の姿がとれる) (iii) einn ljótur þursi 醜い巨人 (醜い爪) (iv) en dvergurinn 小人	(i) (人間の姿で)絹織りの小さな天幕のなかで黄金を被せた椅子に座り、美しいハープの歌を挽いている姿が見出される. ⇓ 毎日ひと樽の肉を食べている際に、人間の姿から醜い女トロルの姿に戻るようすが見出される. ⇓ 王様によって、肉の樽が積んであった船にあった火薬に火をつけられ、船とともに女トロルは燃え殺される. (ii) (人間の姿で)(i)の	(i)(ii) ある陸地 (王様の新しい妃を探すための航海の途中で難破し、たどり着く陸 land) (iii) ガラスの館 glersalur の近く (崖の下) (iv) 岩の中	ボルガルフィヨルド Borgarfírði からの稿本から採用した話. 南部地方ルンダルレイーキャダールル Lundarreykjadal に分布している話. AT403A+510 AT403: The wishes AT510: Cinderella and Cap o‘ Rushes

		側にいるのが見出される. ⇓ 主人公である王女になりすまし、王子と同行していたさいに、鳥のおしゃべりによって王子に自分の正体を知られ、王子が取り出した棒物差しを肩にあてられ魔法を解かれる. ⇓ 王子によって、殺され塩漬けにされる(丸樽12 本) (iii) 館のまわりに巻いてある鉄製の鎖を引っ張り、館を海の中に引きずり込んでいるのが見出される. ⇓ 羊飼いと(iv)の小人に崖から落とされ殺される. (iv) 羊飼いが自分の子どもに金の指輪を与えてくれたので、そのお礼をしに現れる.		
24	(i) verta tröll (女) 悪い女トロル 「ブラウーヴェル Blávör」 (人間の姿をしているときは美しい女性の姿をしている、傲慢な	(i) (美しい人間の姿で)優雅にハープを上手に弾いているのが見出される. 最後は、民衆を食べて国を滅ぼそうとしているのがばれ、人々に石で打	(i) 大きな 洞穴 helli 辺り一帯に崖のある一つの無人の岩礁 eyðisker eitt líted med hömrum allt í kring にある洞穴 / 無人島 eyðieyland	Gautlöndum の ヨウーン・シーグルズソン Jón Sigurðsson (1829-89、農民・アルシンギ議員)から提供された話. 分布地域不明.

	性格、恐ろしい顔、人肉食、妖術が使える、島の支配者) (ii) 「レウーヴェイ Laufey」 (人間だがトロルの娘の役をさせられている、美しい若い娘の姿をしている)	って殺し、それから赤々と燃える焔で焼かれる. (ii) (i)の足台のわきに座り、歌っている姿が見出される.	*この島を支配し、多くのトロルと一緒に住んでいた. *途中からギリシャも舞台の一部として出てくる	AT870B
25	(i) Goðrún (女) 「ゴズルン」/ tröllshaminn トロルの姿(ものすごく図体が大きく、いやらしい姿) (ii) Rauður (男) 「ラウズ」/ tröllshaminn (i)の弟 (i)(ii)は悪事がばれるまで、人間の姿 (iii) skessan 女巨人/ Surtla 「スルトラ」 (i)の妹 Goðrún systir sín (鍋のかかっている網を、首の周りに巻いている、歩く際にドシンドシンと大きな音がする、金銀財宝を持っている)	(i)(ii) 人間の姿で、立派な身なりをして、王に丁寧にあいさつをする. (iii) 羊の肉と人間の肉を煮ている. (i)(ii) 最期には、暴れ馬につながれ、手足がばらばらに引き裂かれ死ぬ.	(i) ― (ii) ― (iii) helli stóran 大きな洞穴(ブラウランド島 Blálandseyjar の絶壁の上にある洞穴. 側洞 afhellinum ある)	Jón Árnason が、Húsfrú Þorvaldsdótteur(1812-1876、編集者の妻)から採集した話. Reykjavík ブラウランド島 Blálandseyjar とは、青い島ないし黒い島のいで、エチオピアまたはアフリカ全体を指す言い方であるが、ここでは遠く離れた無人島のことを指す. 継母話の一種、アイスランドでは9話採録されている. グリム童話集十五番の「ヘンゼルとグレーテル」にもみられるモティーフだが、この話はアイスランドの風土色が濃い. しかし、女妖怪の目が見えない点、無人島からのたき火による信号を認めたのが父の船であるという時間と場所の一致など、メ

				ルヒェンとしての普遍的性質を備えている．物語の終結部で、(i)(ii)は、悪事がばれると、妖怪の正体を現したが、それはメルヒェンの普遍的テーマである仮象と実在の二重性が潜んでいる． AT327A
26	(i) tröllskessa 女トロル (大きい、人間の男と結婚しようとしている、変身することができる、人間のときは美しい娘の姿) (ii) dvergur 小人 / kona dvergsins 小人の妻たち (iii) þríhöfðaður þussi 三つの頭の巨人 (i)の兄 bróðir minn (ii)助力者	(i) 途方もないドタン、バタン、という音を立てて主人公を探し回る． (最終的に、主人公が張った罠にかかり死ぬ) (ii) 主人公 Helga が小人の子どもが持っていた桶の中に黄金の指輪を入れてやると、主人公のもとへお礼を言いにやって来る． (iii) (i)に頼まれ馬肉と人間のいっぱいはいった大鍋を持ってくる．(最期は、一羽の鳥に三つの頭を引き裂かれる)	(i) jarðhús 地中の家 helli 洞穴 (ii) steini miklum 大きな岩山の中 (岩が開き、中に入れる) (iii) ―	Jón Árnason が、南西アイスランド Kalastaður 出身の農夫で村長の男性 Þorvarður Ólafsson(1829-1872) から採集した話．この語り手は、かなりの数の昔話や伝説を狩った多． アイスランドでは3類話が記録されている． 主人公の苦境に際して、代わって返事をする小道具として錐が登場するが、これらのモティーフはヨーロッパ大陸にないものである． AT706
27	(i) tröllkona 女トロル (石のボート steinnömkkvi を持っている、魔法が使える*、醜く恐ろしい容姿、大食い、人間の姿をと	(i) 石のボートに乗って、人間の船に近寄って来る．また、王妃の服をはぎ取り、その服を着て王妃になりすます． 最後に、自らの正体が	(i) rétt undir borginni* 町の真下(地下) (ii) undirheimum (地下) *bústaður risans væri rétt undir borginni....	Jón Árnason の手書きによる話． Reykjavík この話に典型的に見られるように、昔話は、老いた世代のものが去ろうとし、次の世

	る) (ii) þríhöfðaður 頭の三つある巨人 (i)の兄 bróður *女トロルは、あくびの仕方によって自らの姿形(容姿)を変えることができる.「わたしは小さなあくびをすると、小さくて可愛い娘になる. 半分あくびをすると半分巨人になる. いっぱいあくびをすると一人前の女巨人のようになる.」“Þegar ég geispa lítinn geispa á er ég lítil og nett jómfrú; þegar ég geispa hálfan geispa þá er ég sem hálftröll; þegar ég geispa heilan geispa þá er ég sem altröll“	主人公である王子にばれた後は、首にふくろをかぶせられ、死ぬまで石打ちの刑に処させれ、それからあら馬どもに手足をくくらされ、八つ裂きにされた. (ii) 王妃の部屋の床から、肉のいっぱい入った桶を持ってやって来る. 最後は、王子が王妃の鎖を切ったため(トロルが反対側に繋がれていた)、地下に落ち頭蓋骨を割って死ぬ.	(i)(ii)の世界が、人間の世界の真下に広がっているため、トロルが地上から下の世界に落ちた際には、轟きが響き、町の家々が倒壊しそうなほどの揺れ、震えが起きた.	代が一人前になろうとする段階から始まることが多い. 従って、若い主人公は人生を構築するためのパートナーを探す、あるいは後継者足り得る視覚を示すべく出発するという構成をとる. 欠如しているものを充足しようとするわけで、ここに、構造主義の「欠如とその充足」という機能が成立する. 話型としては、この話は「真の妻とにせの妻」の一類話として考えられる. グリム童話集の 135 番「白い花嫁と黒い花嫁に」に対応する. AT403A
28	(i) risa ógurlegan / jötunn 図体のでかい巨人 (石のボート steinnökkvi を持っている) (ii) risann (i)の年老いた妻 (iii) en fjögur flögð svafu 四人のトロルたち(家族) skessa / tröllkonan (母	(i)(ii) — (iii) 火のそばでいびきをかいて寝ている. (iv) 主人公シーグルズルが(iv)の子どもの桶の中に黄金の指輪を与えたので、そのお礼にやって来る. (v) ある城の広間の高席に座っている.	(i) — (ii) — (iii) helli 険しい崖のなかにある洞穴 (洞穴には側洞 afhellinum もある) (iv) — (v) hallar 城	1864 年に、東アイスランド Brennistaðir 出身の Sigmundur Matthiasson Long (1841-1924) が記録した話. アイスランドの語り手は「彼らのこうかいについては、…するまで別段何の話ものない」という決まり文句で、話のテンポを落と

	親) / Heillia-Sámur「サム」(父親), afturgenginn「サム」の幽霊 (金銀財宝を持っている) (iv) dvergur 小人 (v) verstu berserkir 性悪のベルゼルケル(サガに登場する狂暴な戦士) (妖怪のような tröllakegir 出で立ち)			さずに語り進む傾向がある. この決まり文句により、途中の現実的な、細かいことに陥るのを防いでいる. AT328B
29	(i) tröllkerlingu 女トロル (妃に姿を変え美しい女の姿をとっている、意地が悪い) (ii) risi einn mjög göldróttur 非常に魔法にたけた巨人 (金銀財宝を持っている、人を別の生き物に変身させることができる) (i)は(ii)の妹 (iii) tröllum	(i) 黄金の椅子に座って黄金のテーブルに向い、黄金のチェス版で遊んでいる姿が見出される. (ii)「おれの洞穴に人間のにおいがする[43]」と言いながら洞穴に入って来る. (iii) (ii)の結婚式に招待されるが、火の嵐に巻き込まれて、(ii)とともに死ぬ.	(i) skógarrjóðri 森の中の空き地 (主人公の国とは異なる国にある) (ii) helli 洞窟 (三重の垣で取り囲まれた要害の洞穴) (iii) ―	北アイスランド Hraun 出身の農夫 Guðmundur Davíðsson (1866-1942) が、Þufar 出身、Bakki の農夫(後に Reykjavík に定住)Jón Björnsson(1873-1959) から記録した話. この話はアイスランドにしかなく、アイスランドでは9類話が記録されている. アイスランドでは、人間の通常の世界のものでない牛は、鼻の前にふくろをさげている、と伝えられているため、この話ではそのモティーフが使われている. 巨人の命は地

[43] „Fussum svei, fussum svei! Mannaþefur í helli mínum.“

				中の雄牛が鼻の前にぶら下げている袋の中の卵のなかにある、とされている．これはいわゆる体外の命のモティーフで、ヨーロッパに広く分布している． AT302B
30	(i) jötunn / risa 巨人(男) (図体がでかく、鼻水が足の指まで垂れ下がっている、ひどい鼾をかく、tröllskessa に魔法をかけられ醜くおそろしい巨人の姿に変えられた．risahamur 巨人の皮を羽織っている美しい王子「ハルブルダン Halfdan」)	(i) 騒音とドシン、ドシンという音を立てて部屋に入ってくる．	(i) stórum skála 川沿いにあるとても大きい家	東アイスランド Brennistaðir 出身の Sigmundur Matthiasson Long(1841-1924) が記録した話で、語り手は、東アイスランド Hvannstóður 出身の Þuríður Magnúsdóttir (1801-1876). この話は、アイスランドの代表的なもので、アイスランドで7類話が記録されている． 1862 年 4 月 18 日 AT934E
31	(i) tröllskessa / tröllkona (図体がでかい．人間の姿をとっているときは、みるも美しい女、長い髪．子供の姿をとっているときは、可愛い女の子．) (ii) drotting / stórvaxinni tröllkona / tröllskessa (i)のトロルが妃となった国とは別の小さ	(i) 森で美しい女の姿で黄金の竪琴 gullhörpu を奏でている． (ii) 森で押し目をした幼い子供の姿をして現れる． ⇓ ドシン、ドシンと足を踏みしめ、一軒の家のところまで、肉をもらいにやってくる．	(i) ― (ii) ― (どちらのトロルも skóg 森に出現する)	語り手不明 アイスランドにしかみられない話で、アイスランド国内でも3類話しか記録されていない． AT308 Motif S30: Cruel step-relative, especially stepmothers

	な国で王女に成りすましている. (大きな図体、かわいらしい女の子の姿)	⇓ 城に火をつけようとしていると、本来の姿が王にばれ、最終的に頭に袋をかぶせられ、燃え上がる薪の山の上で焼き殺される.		
32	(i) tvær skessur zwei Trollweiber / nátttröll (日光を浴びると石になる)	(i) 洞穴の前に立っている / 主人公を追いかける際には、大股で飛びながら駆け出す. ⇓ 主人公を追いかけている際に、太陽が海の方から上がり始め、その光にあたり、叫び声をあげながら石になって死ぬ.	(i) stórum helli 大きな洞穴 / afhelli 側洞	東アイスランド Desjarmýri 後に Hallormsstaður に住んでいた牧師 Sigurður Gunnarsson(1812-1878)が記録した話. 呪的逃走型は世界的に広い分布を持っているが、この話のように、たいていは火、水、山が障害物を形成している. 夜と昼は全く別の世界であることが見受けられる. 1812~1878 年頃 AT313G Motif L100: Unpromising hero (heroine)
33	(i) 人間の姿をした女 (ii)の妹 (青い服 bláklædda、緑の服 grænklædd、赤い服 rauðklædd を着ている) (ii) tólf tröllskessur ófrynilegar	(i) 主人公とチェス tefla を指す. ⇓ 主人公にチェスで負けると、助言を与える. (ii) ものすごい物音とともにやってくる. そ	(i) hönum 丘 (ii) helli 洞穴 (森の中にある洞穴. afhelli 側洞ある)	Páll Pálsson が Árkvörn で、1862-63 年または 1865 年に、おそらく語り手 Guðriður Eyjólfsdóttir(1811-1878)から採集した話. チェスは北欧およびアイスランドで早く

	12 人の女巨人 skessurnar 女トロルたち (卵に自分たちの命を保管している、人間の娘をさらっている)	して「人間のにおいがする[44]」と言っている姿が見受けられる.		から行われており、ヴァイキングの時代には重要な意味を持っていた. 現在でも、アイスランドで好まれている. AT556B Motif N0: Wagers and gambling
34	(i) tröll / tröllkall 「コル Kolur」 (邪悪、性悪、大きな図体) *(ii)の魔法によってトロルの皮 tröllshamur を羽織っている美しい王子) (ii) tröllskessa	(i) 洞穴が震えるほどの大きな足音を響かせ、ひと束の獲物の鳥を持って洞穴に入って来て、「洞穴の中が人間くせえぞ[45]」と言う. (ii) ドシン、ドシンと音を立てて部屋に入って来る. (最期は、主人公に焼き殺される)	(i) helli 洞穴 高い山である Nípufjalli(ニプフィヤル山)の洞穴 (ii) bæjargilinu (宮廷のそばの)峡谷	南西アイスランド Arkvörn 出身の Páll Pálsson(1853-1876)が、語り手 Guðriður Eyjólfsdóttir(1811-1878)から採集した話. 記録時期は、1863~1864 年の冬. この話は、「幸運の女神を探す旅」として知られ、世界的に広い分布を持っている話型の類話の一つ. アイスランドでは少なくとも七話記録されている. このタイプの特徴は、主人公が神のところへ自分のことで質問に行く途中、ABC の三人から質問を委託され、帰途には、CBA の順で返答を伝えていくという、水平的転回の構成にある. この話では、質問に答

[44] „....., en samt finnst mér mannaþefur.“
[45] „Mannaþefur í hellir mínum“

				える役割は、妖怪が担っているが、日本をはじめ他の国の類話では、神がその役割を担っている. AT460A Motif J1150: Detection of thruth
35	(i) tröllskessa / tröllkona / tröll 女トロル (人間の娘をさらう、息子がいる、金銀財宝を持っている) (ii) tröllaukinn (i)の息子 (側洞にある小さい箱の中に、卵の中に命を保管している) *飲むと恋人のことを忘れてしまうビール öl というモティーフが出てくる.	(i) 主人公の恋人が出した、全財産を見せてくれるなら結婚してやるという条件を飲んでいるのが見出される. (ii) ―	(i) helli 洞穴 (洞穴には側洞 afhelli もある) (ii) ―	北西アイスランド Gufundalur 出身の牧師 Guðmundur Gísli Sigurðsson(1846-1944) が、北アイスランド Víðivellir 出身の Guðbjörg Einarsdóttir (1846-1944) から採集した話. この話は、アイスランドで広く分布している話型だが、少しずつ内容が異なる. 卵が槌で割られたら妖怪が死ぬというのは、魂が本人の体外に保管されているというモティーフであるが、これはヨーロッパに広く見られる重要なモティーフである. その場所で飲食をすると、前のことを忘れ、その場所に拘束されるというモティーフも古く、かつ広く分布している. AT425

36	(i) Gýgur / skessa 女巨人 (斧を持っている、娘がいる、十二の長持ちを持っている、聴く人を眠らせることができるハープを持っている、金銀財宝を持っている) (ii) dóttur (i)の娘 「クヴェラ Hveðra」 (iii) fjölda tröllla 大勢のトロル/ tvíö og þríhöfðaðir þussar 頭がふたつ、三つもある巨人たち (醜い)	(i) 主人公の部屋にやってきて、主人公と黄金のチェス盤 gulltafl をつかみ、一切のものを、自分の袋の中に投げ込み、山へと走り去る. (ii) (i)が客人を呼ぶために、家を空けている間、主人公の見張りをするよう頼まれる. ⇓ 主人公にだまされ、首を切り落とされ、ばらばらにされ、料理される. (ii) (i)に連れられて洞穴にやって来る. ⇓ (i)とともに眠っている間に、主人公によって焼き殺される.	(i)(ii) helli 洞穴 (afhelli 側洞がある) (ii) ―	東アイスランド Desjarmýri 後に Hallormsstaður に住んでいた牧師 Sigurður Gunnarsson(1812-1878)が記録した話. この話はスカンジナビア全体に渡って広く分布しており、アイスランドでは4類話が記録されている. この話に登場する「黄金の歯」という犬の名は、元来、北欧神話のハイムダル神の別名で知られている. アイスランド人のチェス好きが表れている. アイスランドの昔話では、代わりに返事をする錐がよく登場するが、一説では、錐が骨で作られたため、人間の代わりを務められると考えられてきたと言われている. AT327C Motif D1610: Magic speaking object is requested to answer for owner
37	(i) tröllmann (大きな鉄の鍵を持った、灰色の毛むくじゃらの恐ろしく大きな手、金銀財宝を持って	(i) 大地がビリビリ震えるほどの物音をたて、王女の寝ている上の窓を破る. (ii) 草原で遊んでい	(i)(ii)(iii) helli 洞穴 (おそろしく高い崖にある岩の洞穴) / milli skálans(洗濯物が干してある大きな家)	出自不明の話. アイスランドで特に好まれる話. アイスランドで6類話が記録されている.

	いる、恐ろしい容姿、年老いている) (ii) trölldrengir / tröllstrákur トロルの子どもたち (iii) mjög stór tröllkona ものすごく大きな女トロル (手に大きな杖 stóran vönd を持っている、年老いている)	る. (iii) 主人公の一人が、トロルの家の窓から砂を投げ入れると、恐ろしい雷のような音が響いたのち、家から出てくる.	*王の城から遠い場所にある.	主人公が七人でなく、六人であることに注目するべきであり、また後に登場する王にも六人の娘があったという. 王の娘が毎年、当時歳のときに一人ずつ取られるというモティーフは、日本の「猿神退治」、ヨーロッパの「竜退治」に類似している. そこではいずれも、若い男がひとりで退治するのだが、終結部で、妖怪を切り殺した後、その洞窟で多くの宝を見つけたと語っており、日本の「桃太郎」が最後に“鬼が島”の宝を持ち帰るのも、これと同じモティーフである. AT653

Tales from Húsafell　　アイスランド　7 話

【出典】
Herdís Jónasdóttir : Tales from Húsafell, Iceland (1966-1967)

Reimund Kvideland, Henning K. Sehmsdorf, *All the World's Reward: Folktales Told by Five Scandinavian Storytellers*, University of Washington Press, 1999 (ヘルディス・ヨウナスドッティル「フーサフェトルの昔話」、レイムン・クヴィーデラン、ヘンニング・K・セームスドルフ監修、『5 人の語り手による　北欧の昔話』[1999]、川越ゆり訳、古今社、2002 年).

Tales from Húsafell[1]に収録されているアイスランドの昔話 13 話のうちトロルが登場する 7 話を分析。また、今回扱う昔話は、すべて 1966-1967 年に語り手ヘルディス・ヨウナスドッティル Herdís Jónasdóttir (1890-1972)から採取されたものである。題にある「フーサフェトル Húsafell」はアイスランドの地名．題名につけている数字は、原書番号による。

87. Hlini, the King's Son
王の息子、フリーニ
88. Sigurður, Ingibörg, and Króknefja
シグルズル、インギビョルグ、クロウクネヴィヤ
89. Hringur and the Dog Snati-Snati
フリングル王子とイヌのスナーティ＝スナーティ
90. The Tale of the Dog Móri
イヌのモウリの話
91. Fetching the Fire
3 姉妹が火を取ってくる話
92. Mjaðveig
ミャズヴェイグ
96. Líneik and Laufey
リーネイクとレイフエイ

[1] 「フーサフェトルの昔話」に収録されている昔話は、すべて保存されていたテープを文字(英文)に起こしたものである。そのため、原書は英語文献である。

(a)名称と外形：「」内は名前、それ以外は表記されている呼称．( )内は外形.
(b),(c),に関して特に記載がない場合は、— と表記する.
また、注記の欄には、註において特徴的な内容は要約し記載した.

番号	(a)名称と外形	(b)出現の仕方の特徴	(c)住居	注記
87	(i) two troll women 2 人の女トロル/ 若いトロル，年寄りのトロル 敵対者 ⇒王子に求婚する、白鳥を飼っている、ルーン文字を使っている	(i)ドシン、ドシンという足音とともに洞窟にやってくる.	(i) cave 洞窟	ドイツやハンガリー、セルビア、クロアチアで記録されている救出の昔話をアイスランド独特の形式で語ったもの. AT317A 主人公：Signý(F)
88	(i) beautiful woman 美しい女 名前：Blue Nose (troll) (ii) large troll woman 大きな女トロル (かぎ鼻、盲目) (i)の妹 敵対者 ⇒(i)は主人公たちの父親(王さま)と再婚、(ii)は長男 Sigurður に求婚し、その結婚式の御馳走として、次男 : Ingibörg を出そうと計画している	(i) ハープをかきならし、金の櫛で髪の毛をすいている. (ii) 椅子に座り、しきりに「王様の子ども(主人公たち)はいつ来るのだろう」とつぶやいている.	(i) 無人島らしき島 deserted island (ii) (長い間海を漂った先にある)小さな家	(ドイツの昔話「ヘンゼルとグレーテル」の類話．アジアやヨーロッパの広い地域に分布しているモティーフである．) AT327
89	(i) beautiful woman 美しい女, (ii) terrinly big giant 恐ろしく大きな巨人 (年寄り) (iii) old woman 巨人の女房 (年老いている、太っている) (iv) four trolls 4 人のトロル /女トロル，息子のトロル，娘のトロル, troll man 夫のトロル(largest) (i) 敵対者 ⇒王子 Hringur を樽に押し込めて海に落とす. (i),(iii) 助力者	(i) 椅子に座って、金の櫛で髪をけずっている. (ii) 主人公 Hringur を小さな子どものように抱きかかえる. (iii) — (iv) 暖炉の前でぐうぐう寝ている.	(i) — (ii)(iii) cave 洞穴 (iv) large cave (高い山の上の大きな洞穴)	この話の、巨人が妻のなぐさみに人間や小人を連れ帰るというモティーフは、北欧やドイツ、ロシア、ルーマニアなどで、移動伝説として広く分布している. AT328 主人公：Hringur 助力者：Snati-Snati ⇒犬の姿をしているが、女トロルに魔法をかけられた王子(名前は Hringur)

	⇒子どもがいないため、王子をわが子のように可愛がり育てる．また、自分たちの先が長くないことを悟り、王子に犬(実は王子)を与える．王子に一年後に自分たちを埋葬に来るよう約束させる． (iv) 敵対者 ⇒女トロルは金のマント、金の指輪、金のチェスを持っている． ＊超自然的存在でないが、人間の悪者として Rauður という大臣が出てくる．			
90	(i) troll women 2 人の女トロル (王子の継母と連れの娘、人間の姿) 敵対者 ⇒王子 Sigurður に魔法をかけ、娘と結婚させようと計画していた．	(i) ―	(i) ―	この話型はヨーロッパや近東、インド、アメリカなど広く分布している． AT425 王子の名前：Sigurður ⇒女トロルに魔法にかけられ犬の姿をしていた．主人公の間に設けた子ども 3 人を差し出すことで魔法が解ける．金のチェス、金の指輪、鏡を持っている．
91	(i) troll woman 女トロル 敵対者でも助力者でもない ⇒悪い行いをした長女と次女には罰を、善い行いをした三女には褒美を与える．	(i) 主人公の姉が洞穴の暖炉から燃えている石炭を取ろうとすると現れる．	(i) large cave 大きな洞穴	家族に継子のように扱われている末娘が求婚者に真の価値を認められる話で、子の話型は世界的に広く分布している． AT480 長女：Ása 次女：Signý 三女(主人公)：Helga

92	(i) troll women トロルの親子(女) (ii) woman 女 (iii) three-headed giant (ii)の弟 3 つ頭の巨人 (図体のでかい巨人) (iv) dwarves ドワーフの親子 (i)~(iii)敵対者 ⇒(i)(ii)は継母、継娘として城にやってきて、王女 Mjaðveig を城から追いやる．(i)が王子によって殺された後、(ii)が王女 Mjaðveig に成りすまし城に入る．その後正体がばれて殺される．(iii)は王女 Mjaðveig をガラスの館に閉じ込めている． (iv)助力者 ⇒廷臣がドワーフの子供に金の指輪をあげると、親のドワーフがお礼に王女 Mjaðveig を助けるのを手伝ってくれる．	(i) ― (ii) 主人公が脱衣所にいると現れて、「お前の服を私に着せてくれ」と言ってくる． (iii) 海の中に立ち鎖をにぎっている． (iv) ―	(i) ― (ii) ― (iii) house of glass ガラスの館(海の中から現れる) (iv) stone 岩の中	死んだ母親が主人公の超自然的な援助者になる、昔話の典型的な特徴がみられる話. AT510 王様の名前：Máni 王女の名前：Mjaðveig Mánadóttir
96	(i) 女トロル (継母、人間の姿) 敵対者 ⇒継母として城にやってきて、王女 Líneik をひどくいじめる．そのため王子 Sigurður と王女 Líneik は城を離れる．最終的に、王子 Sigurður に城から追い出される．	(i) ―	(i) ―	「塚に閉じ込められた王女さま」(AT870)のアイスランドの類話である． AT870B 王子の名前：Sigurður 王女の名前：Líneik 継娘の名前：Laufey ⇒小さいころに女トロルにさらわれたある国の王女、王子 Sigurður と結婚する

<u>**Flateyjarbók Vol. I**</u>　　アイスランド　**5** 話

【出典】

William A. Craigie, *Scandinavian Folk-lore – Illustrations of the traditional beliefs of the Northern peoples* [1896], Biblio Bazaar, Amazon Japan, 2009, (Reprinted).

Scandinavian Folk-lore に収められている、Flateyjarbók, Vol. I, Christianania, 1860 から取り上げた話.

I. The old gods

1) Thorgerd Hördabrúd (pp.32-35)

II. Trolls and giants

2)The trolls in Heidar-skog (pp.40-44)

3)Dofri (pp.72-74)

4)The giant on Saudey (pp.74-77)

5)Earl Hakon‘s Revenge (pp.350-351)

(a)名称と外形 :「」内は名前、それ以外は表記されている呼称. ( )内は外形.
(b),(c),に関して特に記載がない場合は、— と表記する.
また、注記の欄には、註において特徴的な内容を要約し記載した. “*“以下は粉川による註.

番号	(a)名称と外形	(b)出現の仕方の特徴	(c)住居	注記
1	(i)「Thorgerd Hördabrúd」 女トロル (素晴らしい洋服を着ている、天候を操作できる) (ii)「Irpa」 (i)の妹 *舞台はノルウェーだが、主人公の一人 Sigmund はフェロー諸島に帰ろうとしている.	(i) Sigmund と Earl Hakon が、一番信頼をおける者として(i)を探しており、将来有望な 7 歳の男の子 Erling を生贄としてもらう代わりに、協力すると約束する. ⇓ ヨウームのヴァイキングとの戦いで、ノルウェーの Hakon の船に同乗し、妹とともに協力し、ヴァイキングとの戦いを勝利で納める. (ii) 姉の Thorgerd ともに、戦いに挑む.	(i) 美しい屋敷 (金と銀で飾られており、木の柵で囲まれた森の中にある家)	Thorgerd の本当の家名は不確かである. Horda-brúd はおそらく「Hördar の花嫁」(あるいは「Horda-land の男たち」)という意味になるのだろうが、この名前は、同様に Hörga-brúd (hörgr は、犠牲の石塚という意味)、Hólga brúd(架空の王 Holgi から)と記される. Jómsvikings との盛大な戦いは、994 年におきた. Thorgerd と Irpa の聖堂はニャルズのサガ Njáls Saga で次のように言及されていうる.「夜中に、Hrapp は Earl(Hákon) と Gudbrand に属する聖堂に出かける. 彼は(十分成人した男とほぼ同じ体の大きさを持つ)Thorgerd がそこに腰かけているのを見た. 彼女は大きな指輪を手に持っており、そして頭にスカーフを巻いていた…」

2	(i) three troll-women ①一番大きな図体、灰色の熊の様な毛でおおわれている、剣を持っている、人間の血で染めたような色の肌着を着ている、鼾が大きい、色黒、頑強な体づき. 「Skjaldvor」 ②③若い、毛むくじゃら、剣を持っている (ii) a tall man 「Ironshield」 (火花が飛び散るかと思うほどに光っている抜き身の剣を持っている.) *話の冒頭部で、ノルウェーのオーラフ王 1 世のもとに、トロルがヘダル森にたむろし、人々の通行の邪魔をしている、と語られている.	(i) ヘダルの森で、大きな建物から走り出てくる. (ii)男の子(息子)を二人連れ、女トロルに続いて出てくる. ⇓ (i)(ii)は王の使いたち約 60 人を切り倒す. *最終的に、(i)(ii)は登場人物の一人である Thorstein と戦い、殺される. そして女トロルの首を切り落とし、トロルたちを薪の上にのせ、火をかけて残らず灰にする. *女トロルとの戦いで毒気を吸い込んだ Thorstein は、その後体調不良に長い間苦しむことになったと、終結部で語られている.	(i) a great building (ヘダルの森の中にある)	登場人物の一人 Ironshield (鉄の盾)が言う「偉い奴らがやって来るような気がして、目がさえてしまった」という語は、魂の放浪という信仰を現している. この信仰は、伝説 saga の中にたびたび出てくる.
3	(i) troll / huge giant 「ドーフリ Dofri」 (恐ろしく陰気な容姿、大きな図体)	(i) ハルフダン黒王 King Halfdan the Black (Halvdan Svarte) の宝物庫から物を盗む際に、罠にはまる. 憤慨した黒王に、飲まず食わずのまま一生過ごせと命じられる. ⇓ その後、黒王の息子ハラルド(後のハラルド	(i) a large cave	この話は、ヘイムスクリングラ Heimskringla (Saga Hálfdanar Svarta) の中で見られる話は大きく異なっている. *舞台はノルウェー

		美髪王)に助けてもらう. ⇓ 自分を助けたことで、黒王に家を追い出されたハラルドを自分の住処に招き、5 年間一緒に暮らし、友情を深める. その際に、彼が王になるまで髪と爪を切るなと言い、また戦いの際には協力すると約束する. (*ハラルドはトロルと一緒に暮らすことで、強く、大きくなった)		
4	(i) a great troll 「Brusi」 (人食い、大きい、恐ろしい容姿、猫を仕えさせている、金銀財宝を持っている、妹がいる)	(i) 人々に死の予言をされた人間に負けることはないと思われていたが、アイスランド人の Orm によって殺され、ばらばらにされる.	(i) cave (ノルウェーの North Mæri にある島にある洞窟)	最初のパートは、少しばかり圧縮されており、また最後の段落は単にオリジナルの語りの要約である. Ingimund の物語は、魔女の予言と比較されている.
5	(i)「Thorgerd Hördabrúd」 女トロル (素晴らしい洋服を着ている、魔術が使える) (ii)「Irpa」 (i)の妹 (魔術が使える)	(i)(ii) Thorgerd に運命を全て託した Earl Hakon とともに Thorleif への復讐のためにアイスランドへ向かう.	(i)(ii)― (既に主人公 Earl Hakon とは友好関係を結んでいる状態で、共に行動しているため、住居は不明である. しかし Nr.1 の話を参照すると、彼らはノルウェーの森の屋敷に暮らしている)	Thorgerd の家名は、この話では彼女の夫の Horgi からとられたと考えられる. 魔法をかけた使者などにおける信仰は、現代のアイスランドの民間伝承において非常に浸透している.

Märchen aus Island　　アイスランド　2 話

【出典】

Kurt Schier (ed.) , *Märchen aus Island*, Eugen Diederichs Verlag, Köln, 1983.

(小澤俊夫編、『世界の民話 32 アイスランド』[1983]、谷口幸男(抄)訳、1985 年．)

Märchen aus Island に収録されている昔話 54 話のうち Troll が登場する 17 話を分析．邦題は谷口訳を記載．題名につけている数字は、原書番号による．

1. Thorstein Lacher　(Sagan af Þorsteini glott)

・笑い上戸ソルステイトン

2. Der Pelzjunge　(Sagan af loðna stráknum)

・毛皮を着た若者

資料 2：MI (アイスランド)

(a)名称と外形：「」内は名前、それ以外は表記されている呼称. ( )内は外形.
(b),(c),収集地・年代に関して特に記載がない場合は、— と表記する.
収集地・年代については、原書、翻訳書の巻末に記載されている註を参照した.
また、註において特徴的な内容は要約し( )内に記載した.

原書番号	(a)名称と外形	(b)出現の仕方の特徴	(c)住居	収集地・年代
1	(i) großes Riesenweib / großes Riesin / alte Riesenweib 年寄りの女巨人/ Lederhose「皮ズボン」 (ii) Riesin / Lederhaube「皮ずきん」 (iii) Riesin / Lederstrumpf「皮靴下」(Lederhaube より図体が大きい) (iv) zwölf Riesen (v) Troll (Königin) (真っ白い衣装、黄金のような髪、白い手、空色の瞳)	(i),(ii),(iii)ドシン、ドシンという物音をたてながら、洞穴に入ってくる. (i),(ii),(iii) (iv)に襲われそうになった主人公を助ける際には、主人公のもとへ大股で飛んでやってくる. (v) ハープを奏でている.	(i) großen Höhle 大きな洞穴 (ii) großen Höhle (iii) großen Höhle (iv) Berg 山 (v) kleines weißes Haus auf freiem Feld bei einem shömem See 美しい湖畔の、開けた野原の上にある一軒の白い家	1920~1930 年頃、南アイスランド西部 Móeiðarhvoll で、農夫の妻の Ástriður Thorarensen から採集し、記録した話. この語り手は、子どもの頃農婦からしばしばこの話を聞いたと話している. 物語中で、主人公のソルステイトンが女巨人の好意を獲得したのは、「もてなしに報いた」ことである、という点は昔話の普遍的価値観と言える. 終結部は、グリム童話集 9 番「十二人の兄弟」と同じ性質を持つものである. この話は、アイスランドで広く分布している話型である. AT556C
2	(i) großer häßlicher Riese 図体のでかい醜い巨人(膝までとどく長いひ	(i) — (ii) —	(i) großen Höhle 大きな洞穴 (ii) Nebenhöle (i)の洞穴のもっと奥に	Einar Ólafur Sveinsson 昔話集に収められている、Steinunn Bjarnason

	げ) (ii) drei dreiköpfige Thursen 三つ頭のある三人の巨人 / Trolle		ある側洞	の記録による話. この話は「熊息子」とよばれる対応の話で、スカンジナビア、その他ヨーロッパの各地域に広く分布している話型であるが、アイスランドでは、あまり類話がみられない. この話に登場する、怪鳥は、ヨーロッパの昔話にしばしば登場する. またその特徴は、肉を大食し、しまいに肉が足りなくなって、乗っている主人公が自分の足の肉を切って与えるというものである. AT301

1 谷口訳：(i)(ii)(iii)女巨人、(iv)十二人の巨人、(v)妖怪

2 谷口訳：(i)Riese, (ii)Thursen 巨人、(ii)Trolle 怪物